

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 日本言語地図 第5集：別冊 日本言語地図解説： 各図の説明 5

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001555">https://doi.org/10.15084/00001555</a>

# 日 本 言 語 地 図 解 説

— 各図の説明 5 —

国 立 国 語 研 究 所

1972

## ま え が き

本集に収めた各分布地図は、各調査項目に関する地理的な言語差の展望をおもな目的としている。したがって、この説明でも、各分布地図を理解するための作図の基準、凡例の補足的説明、地図の注目点、その他の参考事項などを簡単に述べた。

各項目を調査した際に使った質問文(および絵)は、各分布地図の左下の欄に示してあるので、原則として説明文中では触れない。実際の調査に際して使った調査票には、各質問について、被調査者に示す質問文のほかに、注意すべき点を補注の形式で加えたものがあった。これは、第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』103ページ以下に、調査票全文として示してある。

説明の中で、語形を表わす場合、とくに音声の詳細を示す必要のあるもののほかは、凡例にかかげた大文字のローマ字表記を使った。また、それらの語形のいくつかを同類と認めて一括して示す場合は、カタカナで表記した。

資料の整理、地図の編集一般に関する概略的な解説は、第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』31ページ以下に示した。詳しい解説は、第6集をもって『日本言語地図』が完結する際に、まとめる予定である。

既刊の第1集は音声および形容詞、第2集は動詞に関する項目を、そして、第3集からは、名詞に関する項目をとりあげてきた。この第5集では、動物・植物に関する項目をとりあげている。第6集では、自然現象・日時などの項目をとりあげる予定である。

なお、各分布地図をいっそう深く理解するためには、見出し語形の各地点での具体的な内容や、調査者・被調査者などが各語形に加えた注記等を記録した『日本言語地図資料』、ないしは原資料(ともに国立国語研究所に保存してある)を参照することが必要となろう。また、語の歴史を推定するに当たっては、各種文献とのつき合わせも必要となろうが、この点については、今回多く触れることができなかった。いくつかの項目についての徹底的な言語地理学的解釈は、機会を改めて公表したいものと思う。さらに、全分布地図を展望した上での総合的研究も、今後に期待される。

この解説執筆を分担したのは、第1研究部長の野元菊雄、および地方言語研究室の徳川宗賢・本堂寛・佐藤亮一・高田誠である。

1972年3月

## 「日本言語地図」第5集編集・作図・資料整理の関係者

国立国語研究所第一研究部長\*

野元菊雄

国立国語研究所方言語研究室

徳川宗賢(室長)      本堂寛      佐藤亮一      高田誠

W・A・グロータース(非常勤)      白沢宏枝(研究補助員)      中野文子(同)

山田千枝子(同)

このほか、研究所以外の方々にも協力していただいた。仕事の内容や量はそれぞれ違うが、以下  
列記して(五十音順)感謝の意を表する。

井上史雄      井村克子      五条啓三      斎藤(旧姓稲葉)洋子

鶴田豊子      稗田玲子      湊(旧姓芥川)豊子      吉田信子

渡辺(旧姓北原)佐嘉恵      (以上9名)

---

\*1971年2月19日から同年3月30日まで、および、1971年9月17日から同年12月16日まで、野元菊雄が  
海外出張していたため、その期間第三研究部長斎賀秀夫および第四研究部長林四郎が事務代理となっていた。



# 目 次

はじめに .....	1
201. ろま(馬) .....	2
202. おうま(牡馬) .....	3
203. めうま(牝馬) .....	7
204. こうま(子馬) .....	9
205. たてがみ(鬣) .....	14
206. ろし(牛) .....	18
207. おうし(牡牛) .....	21
208. めうし(牝牛) .....	23
209. こうし(子牛) .....	25
210. もうもう(牛の鳴き声) .....	30
211. もぐら(土竜・鼯鼠) .....	33
212. ふくろう(梟) .....	35
213. せきれい(鶺鴒) .....	40
214. すずめ(雀) .....	47
215. とさか(雞冠) .....	50
216. さかな(魚) .....	54
217. うろこ(鱗) .....	56
218. かえる(蛙) .....	59
219. ひきがえる(蟱・蟾蜍)—その1 .....	61
220. ひきがえる(蟱・蟾蜍)—その2 .....	61
221. おたまじゃくし(蝌蚪) .....	66
222. おたまじゃくし(蝌蚪)—カエル類の詳細図 .....	66
223. おたまじゃくし(蝌蚪)—ヒキ・ワクドなどの類の詳細図 .....	66
224. とかげ(蜥蜴) .....	72
225. かなへび(金蛇) .....	72
226. へび(蛇) .....	83
227. へび(蛇)—へび類の音声詳細図 .....	83
228. まむし(蝮) .....	87
229. かまきり(螳螂)—一般的な名称 .....	91
230. かまきり(螳螂)—特殊な名称 .....	91

231. とんぼ(蜻蛉) .....	97
232. はえ(蠅) .....	98
233. くも(蜘蛛) .....	99
234. くものす(蜘蛛の巣) .....	102
235. くものいと(蜘蛛の糸) .....	102
236. かたつむり(蝸牛)—その1 .....	105
237. かたつむり(蝸牛)—その2 .....	105
238. かたつむり(蝸牛)—その3 .....	105
239. なめくじ(蛞蝓) .....	116
240. すみれ(堇) .....	120
241. たんぽぽ(蒲公英) .....	122
242. どくだみ(戴菜) .....	124
243. すぎな(杉菜) .....	127
244. つくし(土筆) .....	133
245. きのこと(茸・蕈) .....	137
246. コケの意味—第105, 131, 217, 245図の総合図 .....	140
247. まつかさ(松毬) .....	141
248. たけ(竹) .....	144
249. とげ(裂片)—指にささる木や竹の細片— .....	145
250. とげ(刺・棘)—いばら・さんしょうなどのとげ— .....	145

## は じ め に

- ▶この『日本言語地図』第5集を見るにあたっては、まず本地図集巻頭の〈概説〉や、本『解説』の〈まえがき〉が参考になる。調査の方法などについて、さらに詳しく知りたい場合は、第1集付載の別冊『日本言語地図解説—方法—』を見なければならない。
- ▶各図凡例の見出しにおいて、〈概説〉に示したものの以外で使う特殊な表記については、第3集付載の別冊『解説』の〈はじめに〉を見られたい。
- ▶ある調査地点から2個（以上）の回答が得られた場合は、地図に2個（以上）の符号を並べて、∩印でくくって示した。このことは〈概説〉で示したとおりである。ただし、その2個以上の回答のうち一つが標準語形と一致し、しかもその語形に〈新しい言い方である・上品な表現・共通語的な言い方・まれにしか使わない〉などの注記がある場合は、その語形を地図から削った。この手続きを本解説の中で〈併用処理〉と言うことがある。これは、〈標準語形も上品な表現としてなら使う〉といった回答は、この種の報告のなかった地点でも、実はありうる、しかも全国的にありうると考えたためである。そのような回答が現実どこで得られたかは、国立国語研究所に保存されている『日本言語地図資料』に記録してある。
- ▶ある調査地点から2個（以上）の回答が得られた場合、地図に2個（以上）の符号を並べて、∩印でくくって示したことについては、前項で説明した。ただし本集の219図・220図、229図・230図においては、ひとつの調査項目に対して、複数の地図が作られる場合がある。これらの場合、特定調査地点において2個（以上）の回答が得られたとしても、それが1枚の地図上に並んで印刷されるとは限らず、あたかも併用ではないかのように、たとえば219図と220図とに別々に印刷される場合がありうる。このような場合、ある地図上の答えが他の地図上の答えと併用の形で回答されたものであることを示すために、特殊な表示法が採用されているので、注意されたい。すなわち、当該回答が他図に併用の相棒を持っていることを示すために、符号の下に∩印をつけた。このことは、ある地点において2個（以上）の符号が∩印でくくられている場合も同様で

あって、この場合も、他図に、それとは別に、同時に得られた併用の回答があることを示している。

- ▶221図～223図のおたまじゃくし、236図～238図のかたつむりの場合も、たしかにひとつの調査項目に対して複数の地図が作られている。しかし、この場合は前項と異なり、221図と236図がそれぞれ全体の概略図でもあることから、∩印は使わずにすませている。
- ▶凡例に「その他」と示したものは、その地点での回答が個別的で、地理的な意味を持たないと考えたものである。その内容は『日本言語地図資料』に記録してある。なお、ある調査地点から2個の回答が得られ、一方が「その他」に繰り入れられるべき回答であった場合は、地図には1個の符号しか示さず、原則として「その他」を示す符号を省略した。2個（以上）の符号を∩印でくくって示す場合も、その中に「その他」を示す符号が含まれることは原則としてない。この場合の地図に示さなかった回答も、もちろん『日本言語地図資料』には記録してある。
- ▶解説の中で具体的な地点番号を示す場合、以下に示す左欄があった場合は右欄のように読み替えていただきたい。できるだけ正したつもりであるが、カード上の誤記がそのまま残っている場合がありうる。

誤	正
5558.08	5558.09
6389.32	6389.22
6389.66	6389.56
6434.62	6434.52
6539.50	6539.60
6613.87	6613.97
7303.28	7303.38
1148.57	1148.59
2068.28	2068.08
2095.62	2095.60

## 201. うま(馬)

この地図は比較的単純であって、語種もすくない。そこで、わずかな語形の違いや音声の変種を、ある程度詳しく示した。なお、この項目に関連して、地図下欄に掲げた質問文のほかに「このあたりでは[ウマ]を飼っていますか」の質問を用意し、その回答を報告するよう求めているが、その結果は特に地図に搭載してはいない。しかし、202図～204図で「調査していない」の符号が記してある地点の分布から、馬の飼育の有無についてのおおよその状況を知ることができるので、詳しくは202図の解説(4ページ左欄以下)を参照されたい。また、本図では＜併用処理＞は行なわなかった。

分布を大観すると、東北の一部や琉球などを除いて全国の大部分はUMAおよびNMA[mma~m:ma]で占められていることがわかる。UMAの内容は大部分が[uma][uma]であるが、別に[ŷuma]1233.61, 1242.26, [wuma]6408.72, [uma-]0246.97, 0257.12, 0257.43も含めた。NMA[mma~m:ma]は、[mma], [ᵐma], [m:ma], [mːma]などをまとめたものであるが、このうち[m:ma]は鹿児島に、[mːma]は愛知に集中する。そのほか、三重の計7地点に見られる[ũma]もこの見出しに含めた。

UMAおよびNMA[mma~m:ma]は、意外にそれぞれの領域をもって地図上に現われるが、具体的な発話では、両者の中間的な音声や、音声のゆれがかなりあるのではないとも思われる。たとえば、三重の[ũma]的な発音は、そのほかの地域でも起こりうるかもしれない。

NMA[ŷmma~ŷm:ma](沖縄南部と八重山), NMA-N[ŷmmaN](八重山の2095.60), MA[ŷma](奄美), MAA[ŷma:] (沖縄)は、語頭に[ŷm]をもつ語形を分出したものである。これらの[ŷmma~][ŷma~]は本土の[uma~][mma~]などに対応するものと考えられる。

MAおよびMAK(K)Oは青森から岩手にかけて集中するほか、MAの方は、岐阜、島根などに併用として比較的多く見られる。なお、~K(K)Oの語形は岩手で盛んである。MAAは沖縄の5地点のほか、青森2782.67, 石川4589.83, 4599.31, 千葉6700.48, 6711.16に見られる。分布から見ればMAおよびMAAは比較的古そうであるが、MA(内容は[ma]のほか[maŷ]3702.81)は[mma]など、沖縄のMAA(内容は[ma:]の

ほか[ma-]6711.16を含む)は[ŷmma:]などから、それぞれ生まれた可能性もある。なお、MAと他の語形との地点のうち、MAに「古」の注記もしくは、MA以外の語形に「新」「共」「上」の注記が見られた地点が、5312.98, 5623.42, 6411.66, 6413.10, 6413.43の計5地点あった。逆に、6412.91では[uma]と[ma]のうち[uma]を「古」としている。また、202図「おうま」・203図「めうま」に見られるOTOKOMA・ONAGOMA・ONAGOMAKKO・DAMAなど~MA(KKO)の分布と本図のMA(KKO)の分布とはそれぞれの地点についてはずれも見られるが、大まかには一致している。ただし、203図のDAMAは、本図でMAの見られない九州北部に大量に分布し、また、~NMA, ~MAの両方を含みうるONMA(202図)・MENMA(203図)が本図でMAの見られない地域に分布するが、これらについては203図の解説を参照されたい。また、202図のKOMAの領域は本図の~MAよりはるかに広いが、これについても202図の解説で触れるところがある。

OMAは青森東部から岩手北東にかけてと島根から鳥取にかけての地域に分布する。これらの地域は共通語の/u/が/o/に統合されていると言われる。なお、2783.06, 3705.42は[oma]と[mma]との併用地点であるが、いずれも[oma]に「古」の注記があった。また6420.58はオマとウマの併用地点であり、オマに「古」の注記があった。

ONMAの内容は[omma]であり、OMAの領域中に点在(2795.01, 3714.27, 6402.53, 6410.77, 6412.12)するほか、岡山の真鍋島(6474.83)に見られる。このうち2795.01は[omma]と[mma]との併用地点であるが、[omma]の方に「古」の注記があった。また、6410.77, 6412.12ではオンマとオマが併用されているが、このうちオンマの方に「幼」「子」の注記があった。幼児語としてのオンマは他の地域にも求めうるはずであるが、オマの領域中に存在する上記2地点のオンマと、ウマ・ンマの領域中に存在しうるオンマとは性格が異なるものかもしれない。なお本図では「幼」「子」「見」などの注記のある語形もすべて採用してあるが、それらの語形、地点はそのつど記すことにする。

UNMAの内容は[umma]であり、群馬・長野・岐阜、三宅島、広島、五島の各地に点在する。また、UNMA-ME(内容は[ummame])が八丈島に見られる。これらは三宅・八丈のものを除いて、いずれも[uma]と

[mma] との境界付近に分布しており、興味をそえられる。[umma] のような音声は [u] から [ma] へのわたりとして各地でより広く現われうるようにも思われるが、上の分布に見られるように、やはり一定の地域的条件下に現われるのかもしれないからである。また、先に、[uma] と [mma] とがそれぞれの領域をもつことが「意外」であると述べたが、それが単なる偶然ではないことを、逆に、この [umma] の分布が暗示しているのかもしれない。

UMAME・NMAE・UNMAE のような語尾に ME をもつ語形は茨城、八丈島、石川に見られる。この～ME は、202 図「おうま」・203 図「めうま」・204 図「こうま」・206 図「うし」・207 図「おうし」・208 図「めうし」・209 図「こうし」・211 図「もぐら」・212 図「ふくろう」・218 図「かえる」・226 図「へび」・228 図「まむし」・232 図「はえ」・233 図「くも」など、またその他の動物類の地図にも各種の語形の構成要素として現われているので参照されたい。

NUUMA は琉球の宮古に集中する。202 図「おうま」・203 図「めうま」・204 図「こうま」を見ると、この地域には、それぞれ、BIKINUUMA・MIINUUMA・FFANUUMA などが分布するが、あるいは、当初は、それぞれ、BIKI/NU/UMA, MII/NU/UMA/, FFA/NU/UMA として生まれたもの（その場合 NU は格助詞の「の」にあたるものと考える）が、後に、BIKI/NUUMA, MII/NUUMA, FFA/NUUMA と意識された結果、NUUMA が生まれたのかもしれない。

凡例の ORO 以下は全国に散在する孤立的な語形であるが、このうち、DADA 以下の語形は、いずれも「子」「幼」「児」などの注記があったものである。したがって「幼児語」を（も）積極的に採録する調査ならば、さらに多くの地点に現われうるものと思われる。DAADAA 3757.09 には「御するときの掛け声」とあったが、HINHIN 5666.22, 6446.43 以外は、元来は、この種のものであろう。ORO 8300.25 にも「オロオロと馬を呼ぶ声より」との注記があった。ただし、6452.17 の DANMA, 8333.03, 8343.97 の DADA, さらに上記の DAADAA は、203 図「めうま」における茶を与えたダウマ類の領域内に分布するから、上記語形の DA の部分はダウマのダとも相互に、何らかの関係があるのかもしれない。

「無回答」の地点は、1715.53, 3750.43, 7258.64, 7383.98,

7417.22, 7659.53, 1271.05 の計 7 地点であるが、このうち、3750.43, 7417.22, 1271.05 では「馬を飼っていない」との報告があり、7383.98 では「昔はいたが今はいない」とある。それ以外の地点では馬の飼育に関する報告がないが、7258.64 では「おうま」「めうま」「こうま」の各図が「調査していない」（これについては 202 図の解説で述べる）であり、7659.53 では付近の 3 地点が「飼っていない」とあるから、両地点とも馬を飼っていない可能性が強い。ただし八丈でも 7659.62 では「昔、1, 2 頭いた」と報告があった。北海道の 1715.53 ではこの項目のカードが白紙であるので「無回答」と認めたが、この地点は「おうま」「めうま」「こうま」とも語形の報告があり、北海道では 1742.24 の地点を除いて「馬を飼っていない」と報告した地点はないから、これは報告（記入）もれかもしれない。なお、1271.05 ではカードに「NR」とあり、注記に「観念的に知っている。馬は、[ɥmma] という」とあったが、この [ɥmma] は、理解語と認めて採用しなかった。本図に登載した語形のほかに、2782.67 では「若馬」を [makko], 6367.09 では「運搬用の馬」をコンダウマと呼び、6565.17 では「恐らく乗馬の意味で [dʒo : meŋ] を用いる」とあったが、これらは馬の総称ではないと認めて採用しなかった。

## 202. おうま(牡馬)

本図は、203 図「めうま」・207 図「おうし」・208 図「めうし」と相互に関連するところが大きいので、地図・解説ともに参照されたい。また、204 図「こうま」とも一部の語形について関連があり、さらに、201 図「うま」とは「ウマ」部分、136 図「おとこ」とは「男」「雄」部分の表現について、それぞれ関連する。なお、以上の各図と関連する語形については符号の与えかたに一定の配慮をし、とくに、「牝馬」「牝牛」「牝牛」の各図とは、語類の分けかた、凡例における見出しの順序についても統一をはかっている。本図では＜併用処理＞は行なわなかった。

「牡馬」「牝馬」「牝牛」「牝牛」の図を通じての語類の分けかたについての原則を述べると、まず、主として動物の性別を表わす、オ(メ)・オン(メン)・オンタ(メンタ)・オス(メス)などを含む語形に緑を与えて凡例の最初に並べ、つぎに、136 図「おとこ」・137 図「おんな」・138 図「おんな(単称)」を参考にして、主として人間の性別を（も）表わすと考えられる要素を含む語形に橙もしくは紺

を与えて凡例の緑の類の次に並べた。そのうち、136図、137図で全国的に広く分布するオトコ（オンナ・オナゴ）などを含む語形には橙を与え、そのほかの、136図、137図、138図で比較的狭い領域のオノコゴ・イキガア・ビキ・ヤロオ（メロ・メラ・メナ・ニョオボ・アマ・ビイ）などを含む語形には紺を与えてある。

201図「うま」では [uma] [mma] [ʔmma] [ma] [ʔma] [ma:] [ʔma:] などをそれぞれ分出したが、「牡馬」「牝馬」「子馬」の図における～ウマについては、それらある程度まとめて示した。すなわち、[uma] [ʔma] [mma] [ʔmma] などはこれらをまとめて **UMA** とし、[ma] と [ʔma] などは **MA**, [ma:] と [ʔma:] などは **MAA** と表示した。ただし、[omma] [oʔmma] は、オ+ンマ、オン+マのいずれであるか判断することが困難なので、これらを **ONMA** として分出し、また [komma] [koʔma] [ko~ma] [kōma] などは「子馬」の図における同じ語形との関連があるので、これらをまとめて **KONMA** として分出した。

つぎに、202図～204図および207図～210図で、凡例の末尾に「調査していない」(210図では「未調査」)と表示した地点について述べる。201図「うま」および206図「うし」では、地図の下欄に掲げた質問文のほかに、関連して「このあたりでは[ウマ]を飼っていますか」あるいは「このあたりでは[ウシ]を飼っていますか」の質問を行ない、馬を飼っていない地点では、「牡馬」「牝馬」「子馬」の項目を、牛を飼っていない地点では「牝牛」「牝牛」「子牛」「牛の鳴き声」の項目を調査しなくてよいことになっている。したがって各図で「調査していない(未調査)」の地点をたどれば、馬もしくは牛を飼っていない地域の概略を知ることができることになる。しかしながら、次に述べるような事情から、いちいちの地点については、「調査していない(未調査)」の地点が、馬・牛を実際に飼育していないことを反映するものかどうかははっきりしない場合があることに注意しなければならない。

まず、馬または牛を飼っていないと答えたために、指示にしたがってそれ以下の項目を調査しなかった場合、それぞれの項目の報告カードへの記入のしかたについて特に指示を与えていないことに起因する問題がある。すなわち調査者によって記入のしかたがまちまちのため、「調査せず」などと記入してある場合は問題ないが、「NR」とあるもの、白紙のもの、斜線を引いてあるものなどについては、それが調査はしたが「無回答」なのか

「調査していない」のか、いずれに該当するものであるか判然としない場合が多かった。もっとも、馬・牛の飼育の有無に関する調査結果はカードに記入して報告することを求めている。したがって「飼っていない」と報告した地点の「NR」「白紙」「斜線」などは「調査していない」にあたるものと判断してよさそうに一見思われるが、実際には飼育の有無に関する報告が無かった地点（その中には「牛」の項目が1962年度以降一部地域で調査打ち切りになったため、牛の飼育の有無に関する情報が得られなかった地点が含まれる）がかなりあり、また、報告があっても「昔はいた」「ほとんどいない」「1、2匹いる」などの付加的報告のある地点では、調査者が結局「飼っている」と判定したのか「飼っていない」と判定したのかははっきりしない。つまり、以下の関連項目を調査したかどうか、はっきりしない場合が多かった。さらに「飼っていない」と報告した地点でも、関連項目の全部あるいは一部を調査してその回答を報告している場合があり、その場合の語形もそれぞれの地図に登載することにしたが、それに関連して、そのような地点で、「NR」「白紙」「斜線」の項目がある場合、それがたしかに「調査していない」なのか、それとも調査はしたが「無回答」なのか、いずれにあたるものかが実際には判然としないことが問題になる。

そこで、202図～204図、207図～210図では、諸般の事情を考慮して、次に記すような原則でこの問題を処理し、基本的には、「調査していない(質問していない)」と「質問はしたが語形を得られなかった」(すなわち「無回答」)とをできるだけ分離するようにつとめた。その原則を次の表に示しておく。

飼育の有無 記入の手掛り	関連項目のすべてに 回答語形なし		関連項目の一部に 回答語形あり	
	NR など	白紙・斜線 など	NR など	白紙・斜線 など
飼っていない	調査していない	調査していない	無回答	調査していない
不明	調査していない	調査していない	無回答	無回答
飼っている	無回答	無回答	無回答	無回答

「飼っている」と答えた地点では、とうぜん関連項目について質問しているはずであるから、その場合の「NR」「白紙」「斜線」は「無回答」を意味するものと考えてよい。「飼っていない」と答えた地点でも、関連項目の一部に語形が記入してある場合には、そのほかの項目についても一応質問している可能性が大きいと考えて、その地点の「NR」は「無回答」と認めた。そのような地点では、「白

紙「斜線」なども「NR」の場合と同様に「無回答」とすべきであったかもしれないが、このケースは牛の関係項目に多く、特に、牛を「飼っていない」地点で「牛の鳴き声」の項目だけに語形があり、そのほかの項目（牡牛・牝牛・子牛）は「白紙」または「斜線」の地点が多かったので、それらの地点では「牛の鳴き声」についてのみ特にサービスとして調査を行ない、そのほかの項目については質問していない場合があるのではないかと考えて、これらの「白紙」「斜線」を「調査していない」とした。しかし、牛を「飼っていない」地点で、「牡牛」「牝牛」「子牛」については「無回答」で、「牛の鳴き声」についてのみ回答が得られた場合があるかもしれない。

「飼っていない」と答えた地点で関連項目のすべてが「NR」「白紙」「斜線」などの場合には、それらの項目について質問していない可能性が大きいと考えて、それらを「調査していない」と認めた。しかし、「飼っていない」地点であるがゆえに、どの項目についても、質問したにもかかわらず語形が得られなかった場合も、もちろんありうるが、ここでは一定の原則で処理せざるを得なかった。

以上に述べたように、「飼っている」という情報は、それだけで「NR」「白紙」「斜線」を「無回答」と規定する根拠となりうるが、「飼っていない」という情報だけでは「NR」「白紙」「斜線」の性格を厳密には規定しえないわけであるから、その点で「飼っていない」の地点と「飼育の有無不明」の地点とはこれらの処理に関する条件は同質のものである。したがって「飼育の有無不明」の地点では、それぞれのケースについて、「飼っていない」地点に準じた処理原則を適用した。

以上、「調査していない(未調査)」と表示した地点の性格について述べたが、これらの地点でほぼ馬または牛を飼っていないことが確実だとすると、「牡馬」「牝馬」「子馬」または「牡牛」「牝牛」「子牛」「牛の鳴き声」の各図における「調査していない(未調査)」の分布から、馬を飼っていない地点は概して西日本に多く、牛を飼っていない地点についてはほとんど地域性がないことがわかる。

さて、本図を大観すると、赤を与えたコマ類と橙を与えたオトコ類が国の東西に分かれて分布し、緑を与えた類が関東から中国・四国にかけての地域のほか、北海道と琉球列島北部にみられる、ということになる。

橙を与えたオトコ類は、136図「おとこ」に見られる分布の一部が本図に現われているわけであるが、文献の上では、「をとこ」が古くから人間について用いられている

ようであるから、それが全国に広がる過程で動物の（特に、牛・馬の）雄をも呼ぶようになったものと思われる。その背景には、古くはおそらく全国的に性に関する表現が人間と動物との区別なく「を」「め」であったという事情が影響している。しかし、逆に、「をとこ」の語形が生まれた当初は、それが人間・動物（少なくとも人間と牛・馬）のいずれにも用いられて全国に広がり、文献時代にはいって両者の呼称が分離しはじめたのかもしれない。なお、136図「おとこ」と対照すると、奄美の一部および宮古・先島などでも、「男」と「牡馬」「牡牛」とを区別せずインガ・ビキなどと呼ぶことがわかる（インガ・ビキなどと古語との関係については136図の解説で触れている）。

なお、「牡馬」「牝馬」「牡牛」「牝牛」の図を通じて、橙の類および緑の類の分布傾向は大まかには一致していると見られるから、両類の歴史的性格も上記の各図に通ずるものであると考える。

「牡馬」「牝馬」「牡牛」の各図では、緑を与えた類が、琉球に分布するものを除くと本州中央部にまとまって分布する傾向が見られる。このことから、緑の類は一見新しそうにも見えるが、「牝牛」の図を見ると、東北や九州南部にも緑の類のほかに、紺を与えたメラ～・メナ～の語形がまとまって分布しており、おそらく、古語「を」「め」は琉球の一部などを除いて、多くの地域でオトコ・オンナ・オナゴなどに席をゆずって衰弱し、後に、中央などでは動物一般の雌雄を表わす特定語形（オ～・オン～・オス～、メ～・メン～・メス～など）として息を吹きかえたのではないかとと思われる。

ただし、次に述べるように、「牛」「馬」以外の他の動物については、人間と動物との性に関する表現が分離している地域が、より広い範囲で存在する可能性もあることに注意したい。

牛・馬関係の各図をみると、コマ(牡馬)、ダウマ・ゾオヤク(牝馬)、コッテ(牡牛)、オナメ(牝牛)など、性に関する一般称（オ～・メ～、オトコ～・オンナ～・オナゴ～など）を含まない特定称(オナメについては「牝牛」の解説で述べる)が分布する地域には、概して緑の類が見られない特徴が認められる。これは、あるいは、性に関する一般称と特定称が併存する場合には、特定称のほうを採りやすいことを意味するのかもしれない。それでは、なぜ、中央などで緑の類が復活したのか。これについてははっきりしたことはわからないが、あるいは、緑の

類は衰弱する過程で文章語的性格をもちつつ話しことばの世界から遠ざかり、後に、オン～・メン～、オス～・メス～、その他の語形を生みながら再び話しことばの世界に復帰したのかもしれない。また、緑の類は話しことばの世界から完全に消えたとは限らず、牛・馬などのように特定称をもたない他の動物の雌雄に関する表現としては、生き続けた可能性もある。つまり、現在緑の類が分布していない地域でも、牛・馬以外の動物については、それを用いていることがありうる。この点については、調査してみなければわからないが、おおいにありうることだと考えられる。では、そのような地域で、牛・馬について、なぜ橙の類が現われて緑の類が現われないのであろうか。牛・馬のように生活に密着した家畜類には、オトコ～・オンナ～・オナゴ～のような橙の類の呼称を用いやすいという事情があるのかもしれない、と考えてみた。

緑を与えた類は、西日本では ONMA・ON'UMA・ONTA などオン(～)の語形が多いのに対し、関東などでは OUMA・OSUUMA などオ～・オス(～)の語形が多い、ONMAの語形(内容は大部分が[omma])は、それだけではオ～・オン～のいずれを含むものとすべきか判別できないが、OUMAの語形(内容はすべて[ouma])および 207 図「おうし」における ON(～)の語形が周囲に分布するかどうかという点から、関東のものはオ～であり、西日本のものにはオ～・オン～の両方が含まれるとみなされる。以上、各地の ONMA について述べたが、同様のことは「牡馬」の図における MENMA についてもあてはまる。

赤を与えたコマの類は東西に分かれて分布しているが、これらはかつては連続していたと考えられる。ただし、次に記すような事情から、はたして中央に「牡馬」の意味でコマが分布した時代があったかどうかについては一考を要する。

赤の類は多くの地域で橙の類と分布が錯綜している。このことは、両者にはなんらかの意味的な違いがありうるのではないかと、いうことを疑わせる。この点に関する注記としては、KOMA に、5529.77 で「めでたい馬」、5620.32 で「若い男馬」とあっただけであるが、参考になろう。なお、204 図解説(11 ページ左欄)参照。

「こま」は一般に「駒」と書き、三省堂『時代別国語大辞典・上代編』に「もとは子馬のことを言ったが、転じて馬一般に用いる。ウマとコマとの間に意味の差はほとんどな

かったらしく、また、コマが歌語としての位置を獲得するにも至っていなかった」とあるが、馬の一般称としてのコマは 201 図「うま」にはまったく見られない。現代標準語としては、歌語または複合語として用いられるだけである。おそらく現在各地に分布するコマは、注記にも見られるように「若い牡馬」「若くて立派な牡馬」の意味が強いのではないかと思われるが、この点については各地で調査してみる必要がある。203 図「めうま」を見ると、本図のコマの領域内にダウマ・ダマ・ゾオヤクなどが分布しているから、雑役用の牡馬を「駄馬」「雑役」と呼び、それに対して乗馬(軍馬)用の若い牡馬を「こま」と呼んだのではないかと思われ、そうであれば「こま」が「子馬」から「牡馬」の意味に転じた理由も説明できる。なお、204 図「こうま」にもコマの語形が見られるが、「子馬」の図との関連については 204 図の解説で触れる。

紺を与えた語形のうち GANZYO 以下の語形について述べると、まず、GANZYO から ZYENZYOMA までが岩手・秋田などにまとまった領域をもつ。これらには「種馬」と注記のあるものが多かった。ガンジヨの由来については辞書類に「岩崇」が「馬の特にすぐれて強健なもの」の意として登録されている。「頑丈」なども思い浮かぶが「頑」の音はグワンであり、本図のガンジヨ類の GAN～部分の内容に[gwan]的な音声は皆無である。「岩」(本字「巖」)の音はガンである。ただし、『全国方言辞典』には「がんじょ」の見出しで「牡馬」の意のほかに「②瘦せ馬。青森」と、また「がんじょー」の見出しで「老馬。岩手・宮城」とあり、この説明と「強健な馬」とは意味がくいちがう。「強健な馬」から「牡馬」に、「牡馬」からさらに「瘦せ馬」「老馬」に意味が変化したのかもしれないが、その間の事情についてははっきりせずなお検討を要する。なお、「瘦せている者」の意味で『全国方言辞典』に各種の語形が登載されているので参照されたい。

CICIUMA ([tsĩdzĩmma] 3782.98, [tsĩtsĩmma] 3731.61, [tʃĩdzĩmma] 5752.94, [tʃĩtĩnma] 4780.64 をまとめたもの)と CUCIMA ([tsũdzĩma] 3740.33, 3771.29)は「父馬」ではないかと思われ、したがって [tsũdzĩma] も CICIUMA と表示してもよかったが、同じ調査者が [tsĩdzĩ] と [tsũdzĩ] の両様に表記しているので、その区別を見出しに反映させておいた。なお、4780.64 と 5752.94 のものには「種馬」との注記があった。

TANEUMA から KINKIRI までは多くは併用として現われるもので「種馬」「去勢馬」などの注記があるものが大部分である。したがってこれらは牡馬の一般称で



はないから本図から削除してもよかったが、他に「種馬」と注記のあるガンジョなどを採用してあり、また、注記のない単用のタネウマなども少数ながら見られるので、これらも一応登載することにした。

BO から BOOMA までは「牡」の字音に基づくと思われる語形であり、206 図「うし」などに見られる BO・BOO とはおおむね無関係であろうと考えられるが、207 図「おうし」にはボ～が比較的多く見られ、それらについては、「牛」の BO・BOO との関係も考慮する必要があるかもしれない。さらには本図のボ～の中にも「牛」の BO・BOO の影響を間接的に受けているものがまったく無いとは言えない。本図の BO～は全国に点在するが、その中に畜産業者の専門語であるという注記のあるものがいくつかあった。なお「牝」の HIN 参照。

HIN から KOTTE までは、主として本図以外の牛・馬関係の図に現われる語形である。このうち HIN・HINBA は「牝～」関係の図に、DAMA・DABA は「牝馬」の図に、KOTTE は「牡牛」の図に、DADA は「馬」の図にそれぞれ見られる。これらの語形が分布する地点は、馬関係の図(KOTTE については牛関係の図)における「調査していない」あるいは「無回答」の地点におおむね隣接する傾向が認められるから、おそらく、それらの地域では馬の飼育が盛んではないために一種の混乱が起こったものであろう。それぞれの地域で馬を飼育していても、被調査者個人がそれに縁遠い職業である場合などには、このような混乱が起こりうる。なお、SEN 5676.84, SENBA 6376.68, 6394.78, 7351.68 は HIN～との関係を考慮して符号を与えたが、「牝馬」「牝牛」の図に SEN～の語形が見られない点にやや問題がある。騊馬(去勢馬)かもしれない。しかし、「牝馬」の図で石川に HENBA が HINBA と隣接して見られ、また「牝馬」「牝牛」の図に SIN～が各地に散在することから、HINBA>SINBA>SENBA の変化もありうると思われる。DADA 7363.12 は「牝馬」の図でも同地点に現われる(同図の解説参照)。

最後に、UMA・UNMA・UMAME の各語形および「無回答」の性格について説明しよう。

202 図「おうま」、203 図「めうま」を通じて、報告された各地点のカードの中には、単に「NR」とあるもののほかに、「NR—区別しない」「区別せずウマと言う」などや、単に「ウマ」などと記入してあるものもあった。このうち、「区別せずウマと言う」とあるものや、単に「ウマ」と

あるものについては、A:「馬」「牡馬」「牝馬」が同一語形(ウマなど)のもの、B:「牡馬」に特称(たとえばオトコウマ)があり、「馬」と「牝馬」とが同一語形もしくは「牝馬」に「NR」とあるもの、C:「牝馬」に特称(たとえばダウマ)があり、「馬」と「牡馬」とが同一語形もしくは「牡馬」に「NR」とあるもの、D:「馬」「牡馬」「牝馬」に共通語形が見られるが、そのほかに「牡馬」もしくは「牝馬」あるいは「牡馬」「牝馬」の両方に併用として特称が含まれているもの(たとえば「馬」—ウマ、「牡馬」—ウマ・オン、「牝馬」—ウマ・メン)、以上4つのタイプが見られた。そこで、「牡馬」「牝馬」の図を通じて、Aのタイプのものは「NR」「NR—区別しない」などと同じ性格のものと認めてこれを「無回答」に含め、B・C・Dの地点におけるウマなどの語形は、これを UMA(UNMA・UMAME の地点もある)として地図に登載することにした。BやCのタイプの地点には、たとえば「家で飼うのはふつう牡だからンマと言えは牡馬を指す」6485.30とか、「ただウマと言えは牝のこと」5682.34などの注記のあるものが見られるから、注記のない地点のものについても、おおむね同様の事情によるのではないと思われる。なお、先に述べたように、「馬」の図ではウマとンマなどを UMA と NMA として分出してあるが「牡馬」「牝馬」の図では両者をまとめて UMA としてあるから注意してほしい。Dのタイプのものは、もともとA的なところに新たに特称が生まれた場合と、もともとB・C的なものがあるんらかの事情でA的な要素を付加した場合との両方がありうるが、どちらかと言えば前者の場合が多いと思われる。なお、以上の原則は、「牡牛」(207図)、「牝牛」(208図)の項目にも適用してある。

### 203. めうま(牝馬)

本図は、137 図「おんな」・138 図「おんな(卑称)」・201 図「うま」・202 図「おうま」・207 図「おうし」・208 図「めうし」などと関連するところがあるので、相互に参照されたい。「牡馬」「牝馬」「牡牛」「牝牛」の各図を通じての、語類の分けかた、凡例における見出しの順序、～UMA 部分の内容、「調査していない」についての説明は、202 図「おうま」の解説の冒頭に記した。なお本図では<併用処理>は行っていない。

本図における緑を与えた類と橙を与えた類との歴史的関係は、「牡馬」「牡牛」「牝牛」の図における両類の歴史的

関係に並行していると考えられる。その内容は 202 図「おうま」の解説を参照されたい。

緑の類の分布は、本図と「牡馬」の図とがほぼ対応しているが、北海道と関東で MENMA が「牡馬」の図における両地の ONMA よりかなり多いことが目立ち、また、宮古・八重山における分布は両図に相違が見られる。宮古・八重山には「女」(137 図)「牝馬」「牝牛」の図を通じて MII~ が分布しているが、これは、あるいは古く中央で人間の「女」も動物の「雌」も「め」と呼んでいたものの残存かもしれない。奄美・沖縄の大部分では人間・オナゴ類、牝馬・メ〜類であるが、奄美の 5 地点と沖縄の 1 地点では両者を区別せずオナゴ類と呼ぶことがわかる。古くは琉球全域が宮古・八重山と同じ体系(人間・動物ともメ〜類)であったところにオナゴ類の語形が侵入した結果、奄美・沖縄の大部分では人間(の女)と動物(の雌)とに区別が生じ、一部では人間(の女)・動物(の雌)のいずれにもオナゴ類を採用したのであろうか。

なお、緑の類のうち MEUMA に対する MENMA の語形の性格については 202 図「おうま」の解説で ONMA の語形とあわせて述べたので参照されたい。

橙を与えた類のうち ONNA(~), ONAGO(~) などの分布は 137 図「おんな」におけるそれらの語形の分布にはほぼ対応している。

紺を与えた語形のうち、MEROUMA, MEEROU-MA, MEEROUAME や、NYOOUBOUMA(能登に 4 地点)・NYOOBOMA 4589.83, NYOUBAUMA 5472.31 も「女」の図における分布の一部が本図に現われているわけである。AMAUMA 6700.48, AMAUMAME 5566.95, AMAKOUMA 5792.78 も、137 図でそれぞれの地点に AMA・AMAKKO が見られる。なお、アマの語形は 137 図よりも 138 図「おんな(卑称)」に多く見られるものである。また、MENAGO 3770.49, MENAUMA 4751.42 は MERO との関係を考えて緑の類からはずしてあるが、これらは「牝牛」の図で山形や九州南部に多く分布するものである。BIUMA 5568.57, BINTA 5568.57, BII 6631.60 は 138 図「おんな(卑称)」で岐阜などに見られる BINTA-A, BII, BI などと関連させて、符号の形と凡例における位置を決めた。また、ZYABEUMA 3648.28 は、138 図で秋田西南に見られる ZYABE と関係がある。

赤を与えたゾオヤク類および茶を与えたダウマ類は、中央を他の類によって分断されているという点で共通の

分布傾向を示している。分布からみて東西のゾオヤク類およびダウマ類はかつては連続していたものとも考えられるが、ゾオヤク類の方は、おもに東日本に勢力があり、西日本に分布するものは各地に新しく輸入された可能性もあるから、東西のゾオヤク類が連続していたことには問題がある。ダウマ類の方は分布からみて、最も古いものである可能性が強く、琉球などを除いてかつてはほぼ全国を覆っていたのではないかと思われる。なお、ゾオヤクは「雑役」、ダウマは「駄馬」にもとづくと考えられるが、両者は命名の発想が類似しており、また両類の分布は各地で隣接しているから、両類は歴史的に密接な関係にあるものであろう。字音語に由来すると思われるこれらの語形が古いということは、何を意味するのであろうか。なお、ゾオヤク類・ダウマ類と「牡馬」の図に見られるコマとの関係について、202 図「おうま」の解説で述べているので参照されたい。

また、各地に分布するゾオヤク類には「古」「希」の注記のあるものや、「主として馬喰が使う」「馬喰から聞き覚えた」とあるものが多かった。これはこの類の語が衰弱しつつあることを示すものかもしれないが、ゾオヤク類は全国的にみて専用地域が少なく、多くは他の類と分布が錯綜しているから、あるいは、ゾオヤクはもともと一種の職業語の色彩が濃いものかもしれない。もっとも、「牡馬」の図におけるコマのように、意味内容に歴史的変化があったとすれば、他の表現と分布が錯綜しうる。

茶を与えたダウマ類の中では DAUMA ([dauma] [damma]などをまとめたもの)と DAMA が大部分であり、両者はそれぞれの領域をもつが、本図における DAMA と 201 図「うま」における MA とを比較すると、青森などでは両者の分布がほぼ一致しているが、九州北部の DAMA の領域には「馬」の図で MA が見られないことがわかる。九州北部ではダマをダ+マと意識する度合いが弱いかもしれないが、単独ではウマ・ソマと言っているも複合語の~マに「馬」を意識することも当然ありうる。三省堂『時代別国語大辞典・上代編』に「複合語の中にはマが多く用いられる」とあるが、本図における DAMA などの分布もその現われであろうか。

ダウマ類の中で DANO 8343.97, 8353.68 は、隣接する DANOUMA 8343.97 から UMA が脱落して生まれた、すなわち、DANOUMA > DANO と変化したことも考えられ、おもしろい。これと類似のケースの可能性のあるものとして 201 図「うま」で宮古に見られる

NUUMA があるので、同図の解説を参照されたい。  
TAUMA 5463.73 (内容はタンマ)、DAA 7471.33、  
DADA 7363.12 はダウマ類とすることには問題がある  
が、分布および語形の類似からここに含めておいた。73  
63.12 の DADA は「子」の注記があったもので、しかも  
「牡馬」の図にも同じ地点に DADA が見られるから、  
これは、むしろ 201 図「うま」に見られる DADA と同  
じ性格と見てよかった。したがって、この DADA は  
本図や 202 図から削除しても良かったが、「牡馬」「牝馬」  
「牡牛」「牝牛」の各図を通じて適用した UMA の語形に關  
する処理原則(202 図の解説末尾を参照)に準じてこれを  
「牡馬」「牝馬」の図に登載しておいた。DAA も DADA  
と同様に幼児語的性格のものではないかと思われる。な  
お、本来は「馬」を意味する 幼児語と 思われる DAA・  
DADA が本図のダウマ地域に現われるのは、ひとつに  
は、同音音節[da]を共有するからであろう。

紺を与えた語形のうち、HAADA から HADAU-  
MA までは岩手・秋田に分布する。これらには「母馬」  
「子持ち馬」であるとの注記が多かった。「牝馬」よりも限  
定された意味内容の語と言える。『全国方言辞典』には「は  
だ」の見出しで「鳥獣の親。青森・岩手県九戸郡・秋田  
県鹿角郡・山形県村山地方」とある。この説明による  
と「牡」についても使いそうでもあるが、「牡馬」「牡牛」の  
図にはハダ類は見られない。『山形県方言辞典』には「ハダ」  
の見出しで「(鳥獣の)親。(仔に対していう。)  
—この雛をハダの所に返してやれ—」とある。ハダ類  
はダウマ類の領域内に分布するから、「母駄ウマ」からハ  
アダウマさらにハダが生まれたのであろうかと思われる。  
一方、ハダ類の語と「母ぢや人」との関係も興味  
があるが、はっきりしたことはわからない。方言でも「は  
はじゃびと」「はじゃひと」「はじゃしと」の語は西日本各  
地に分布するようである。西日本の「ははじゃ」の「じゃ」  
が指定の助動詞であるとすれば、それに対する東日本の  
形は「ははだ」であるから、それからハダが生まれる  
可能性もある。なお、26 図「しかくい」を参照すること  
によって、SIKAKUDA(HAKO)の現われる地域が  
わかる。

HODA は宮崎の 3 地点に見られる。これと HADA  
とは母音の一つ違うだけであるが、両者は分布がかげ離  
れており、関係の有無は不明である。BODAUMA 72  
74.57 は HODA との関係を考えて符号を与えたが両者  
の分布も離れている。ただ両者とも分布からみて、ダウ

マ類となんらかの関係がありそうである。

KAKEDA 3767.22 は内容がカゲダとあったもので  
あるが、ダウマ類との関係を考慮してこの見出しとした。  
あるいは「荷を掛ける駄馬」であろうか。

HIN から SINBA までは「牝」の字音に基づくと考え  
られる語形である。北海道および中国から九州にかけ  
て HINBA が目立つほか各地に散在するが、中国・九  
州のものも含めてヒン類の語には「新」の注記のあるも  
のや「業者が使う」というものが多かった。「牡馬」の  
図におけるボ～の分布と比較すると本図のヒン～の方が  
ずっと多いが、あるいは酪農の普及と間接的な関係がある  
かもしれない。

BO 6412.48 は「牡馬」の「牡」との混同で現われた  
ものであろう。202 図に HIN が現われること参照。

最後の UMA の語形および「無回答」の性格について  
は、202 図「おうま」の解説の末尾に一括して述べたの  
で参照されたい。

## 204. こうま(子馬)

本図は、201 図「うま」・202 図「おうま」・209 図「こ  
うし」などと関連するところが大きいので相互に参照され  
たい。とくに本図と「こうし」の図とは、そこに見られ  
る語形または語形に含まれる形態素に共通するものが多い  
ので、それらには同形の符号を与えるようにつとめた。  
語類の分けかた、凡例における見出し語形の順序につ  
いても、両図を一貫した原則で処理した。

この項目は、地図左下に掲げた質問文によって調査し  
たわけであるが、地域によっては、質問文の意味内容と  
一致する語形がないために、それよりもやや広い、もし  
くはやや狭い意味の語形が現われる場合のあることに注  
意しなければならない。本図で紺を与えた、KOUMA  
から NUUMAGAMA までのコウマ類は、おおむね、  
質問文よりも広い意味内容をもつ語形であると思われ  
る。したがって、本図でトオザイ類しか分布しない地域  
にも、質問の内容を少し変えて「ことし生まれたばかり」  
という限定を与えなければ、コウマ類の語形がより多く  
現われる可能性がある。

また、「1 歳の馬はトオザイ、2 年めの馬はニサイ、  
3 年めはサンサイ」などと答えた地点が見られた。その  
場合は 1 歳馬の呼称のみ地図に採り、他は削除した。ま  
た、総称のほかに「牡の子馬」「牝の子馬」の表現が報告さ

れた地点についても総称のみ採用したが、「牡の子馬」「牝の子馬」の表現のみで総称がない地点は、両者を併用として地図に搭載した。

なお、「ことし生まれたばかりの子馬」「1年目のもの」などの注記のある語形と「子馬一般」「漠然と言う時」などの注記のある語形(もしくは何も注記のない語形)とを併記してある地点は、前者のみを採用し後者を削除したが、削除した語形およびその地点は次のとおりである。

KOUMA	5638.54
KONMA	4732.86, 4733.91, 4763.62, 5597.78, 5613.53, 5628.23, 6711.60, 7363.12, 7376.62
KOKKONMA	4734.20, 4734.56
UMANKO	7363.12, 7376.68, 7377.72, 8305.76
UMAKKO	4734.56, 4742.43, 4742.95, 4752.27
KOKKOMAKKO	4714.22, 4715.33

注記の全くない多語形併用は、そのすべてを地図に搭載してあるが、その中に上記の性格のものが含まれている可能性がある。

本図では、KOUMA および KONMA の語形に＜併用処理の原則＞を適用した。ただし、後に述べるように、東北などの KONMA の中には KOUMA の変種ではなく KOMA の変種であるものが含まれているかもしれない。念のため、＜併用処理の原則＞を適用して本図から削除した KOUMA および KONMA の地点を次に掲げておく。

KOUMA	5653.08, 5684.26, 6526.04, 6539.12, 6600.97, 7346.54
KONMA	4687.01, 5605.70, 5614.24, 5621.43, 5636.74, 5646.71, 5652.37, 5666.18, 6610.00, 6711.60

現実には、東北6県に「共」「新」「上」「希」などの注記のある KOUMA, KONMA は見られなかった。

本図における語類の分けかたについて述べると、まず、コウマとの複合語形およびそれらの変種(凡例の KOUMA から HWAANUUMA まで)、さらに、コウマと意味的につながりのある KODOMOUA から NUUMAGAMA までに紺を与えて凡例の最初に排列し、次に赤を与えたトオザイ・トオネン類を、最後に上記以外の語形に紺を与えて凡例の末尾に並べた。なお、

本図では〔～uma〕と〔～mma〕・〔～<sup>m</sup>ma〕とを原則として区別せず、これらをまとめて～UMA と表示したが、〔(～)komma(～)〕〔(～)ko<sup>m</sup>ma(～)〕のみは、〔koma〕との関係を考慮して、これを(～)KONMA(～)——KONMA のほか、KONMANKO, KOK(K)ONMA, CINKONMA を含む——として分出した。

コウマ類(KOUMA から HWAANUUMA まで)の語形についてその分布を見ると、全国の大半は KOUMA, KONMA, UMANOKO などと占められるが、北海道や東北から新潟にかけての地域などには KOK(K)ONMA, UMAK(K)O など、九州には UMANOKO が比較的多く、琉球には, KWA(A), GWA(A), KUU, FFA, VVA, HWAA, HHWA などを含む語形が分布する。琉球におけるこれらの形態素は、本土の「こ」と類似の機能をもつ接辞と考えられる。なお、22 図「ちいさい」を見ると、琉球に、KUU～や、後に述べる GUMA～の語形が分布するので参照されたい。

コウマ類のうち、KOK(K)ONMA は KOKKONMA と KOKONMA とをまとめたものであるが、その内容は前者が大部分であった。KOK(K)OMAK(K)O は、KOKOMAKO, KOKOMAKKO, KOKKOMAKO, KOKKOMAKKO をまとめたものである。また、UMANK(W)A(A) は UMANKA, UMANKAA, UMANKWAA を、KWAAMA-K(K)WA(A)は、KWAAMAKKWA と、KWAA-MAKWAA を、MAANUK(K)WA(A)は、MAANUKKWA と MAANUKWAA を、MANK(W)-A(A)は MANKA, MANKWA, MANKAAを、それぞれまとめたものである。なお、それぞれの見出し語形に含まれる音声の変種の具体的内容、およびその分布地点について知るためには、『日本言語地図資料』によらなければならない。

次に、本図に見られる KOMA と「おうま」の図に見られる KOMA との関係について述べよう。「おうま」の解説で述べたように、「こま(駒)」は本来は「子馬」の意味であったという説がある。したがって、本図に見られる KOMA がその説の裏づけとなるような分布を示しているかどうかという点が問題になるが、本図の KOMA は、さしたる領域をもたずに全国に散在し、しかも KONMA の領域内に分布する傾向が認められる。このことから、これらの KOMA はむしろ KONMA から各地で生まれたものであって、「おうま」

の図に見られる KOMA とは無関係の場合も多からう。もっとも、KONMA が KOMA に変化する背景に、「おうま」の意味での KOMA が、類音牽引を起こさせる材料として存在することは、否定できない。但し具体的には「おうま」の図と本図とを対照すると、本図で KOMA の地点は「おうま」の図では KOMA 以外の語形の場合が多い。各地域ごとに詳細に検討し、さらに付近を詳しく調査すれば、KOMA と KONMA との関係についての種々の事情が判明すると思われる。なお、本図の KOMA(〜)の中には、後に述べる 4703.18, 6413.76, 6423.75 の KOMAK(K)O, KOMAGO のように「牡の子馬」を指すと注記のある語形が含まれることに注意してほしい。注記のない KOMA(〜)の中にもこれに準ずる性格のものが含まれている可能性がある。次に記す地点では「おうま」と「こうま」が同語形になっている。すなわち、本図と「おうま」の図とを対照すると、6412.91, 6517.70 では両図に KOMA が見られ、4714.68, 4762.99, 8341.12 では両図とも KONMA である。また、4735.37 では「こうま」が KOUMA, 「おうま」が KONMA と OTOKOUMA (内容は [odogomma]), 4723.58 では「こうま」が KOUMA と KONMA, 「おうま」が KONMA である。4725.92 では「こうま」が KOUMA, 「おうま」が KONMAUMA (内容は [kōmamma]) であるが、その KOUMA の注記に、「はっきりしたウであった。牡馬とまぎらわしくなるのを避けたのか」とあった。なお、「おうま」と「こうま」が一見同語形の地点で、アクセントによる区別があるのかどうかは、はっきりしない。

「おうま」の図を見ると、赤のコマ類と橙のオトコウマ類は各地で分布が錯綜しているが、これは、コンマとコマとが語形、意味ともに近接するために、「おうま」の意味分野ではコマをきらってオトコウマを採ろうとするものかもしれない。「おうま」の図を見ると九州南部ではコマの専用地域が広いが、これは、「こうま」の図ではこの地域に UMANKO が分布することと関係があるだろうか。また、「おうま」の図の KOMA と「こうま」の図の赤の類(トオザイ・トオネンなど)とは分布が似ており、この事実から、コマとコンマとの語形の類似から「こうま」の方でもコンマをきらって赤の類に逃げた、赤の類を好んだという解釈が可能かもしれない。

KODOMOUMA から NUUMAGAMA までは、「こどものうま」「小さいうま」およびそれに準ずる表現の語形を並べたものである。八重山に見られる UMANU-

UTAMA, UMANUAGAMI の UTAMA, AGAMI は、いずれも「こども」の意である。沖縄の GU-MAUMAGWAA の GUMA は、「小さいもの」を意味する。琉球先島の NUUMAGAMA の GAMA も GUMA とつながりがある。なお、201 図「うま」ではこの地に NUUMA が分布する。CINKONMA, CINKOMA は、能登に、CINKO に隣接して見られる。22 図「ちいさい」を見ると、この地域に CIKOI が分布する。能登と富山に見られる CIUMANOKO も、やや疑問もあるが、CI を「小」と認めて符号を与えた。宮城の CYAKKEUMA 4725.68 も、22 図では、同地点は CYAKOI である。

赤を与えたトオザイ類は、「当歳」もしくは「当年」にもとづく語形およびその変種をまとめたものである。このような年齢とかかわりをもつ表現が広く分布する理由のひとつは、馬や牛の年齢が飼育や売買の際にとくに問題にされるためではないかと思われる。本図を見ると、東西にわかれて分布する赤の類のうち、西日本のものにはほとんど専用地域が見られない。これは、東日本と西日本における馬の飼育に関する歴史の違いを反映しているのかもしれない。したがって、東西の赤の類はかつて連続していたと一応考えられるものの、東と西では赤の類の分布密度に違いが見られるから、両地域では赤の類の用法や意味範囲に違いがあるのかもしれない、ということになる。すなわち、東日本ではトオザイ類が子馬の一般称として広く、日常語として用いられるのに対し、西日本におけるこの類は限定された意味内容をもつものであり、また、馬の売買などの時に主として用いられる一種の専門語としての性格が強いものかもしれない。また、東西の赤の類がかつては連続していたとは言っても、それは中央で赤の類がコウマ類よりも古いことを必ずしも意味せず、両者は、上記のように、やや性格の異なる語として併存していた可能性もある。

赤の類における符号の与えかたの原則(例外もある)について述べると、まず、トオザイ、トオゼエなど～Z～の語形には小刀形の符号を与え、トオサイなど～S～の語形には水滴形の符号を、トオダイ、トオデエなど～D～の語形には小刀形の大符号を、ドザイ、ドゼエの語頭が～D～の語形には長方形の大符号を、トオナイ、トオネエ、トオネンのような～N～の語形には二等辺三角形を、それぞれ与えた。また、トオザイ、トオサイ、トオダイ、トオナイ、トオザイッコ、トオザイゴのよう

な～AI の語形にはべた符号または先端をぬいてある半ぬき符号を、トオゼエ、トオデエ、トオネエ、トオゼエッコ、トオゼエゴのような～E(E)の語形にはぬき符号または底部をぬいてある半ぬき符号を、トオザイッコ、トオザイゴ、トオゼエッコ、トオゼエゴのような～KO、～GO の語形には半ぬき符号を、それぞれ与えることを原則とした。なお、この原則は 209 図「こうし」における赤の類にも適用してある。

以上に記した各種の語形はその分布が錯綜しているが、比較的まとまった領域をもつものについて述べると、～N～の語形が、北海道、東北中央部、福島から北関東や中部にかけて、さらに九州などに集中する傾向が見られる。このうち、北海道と東北には TO(O)NEK(K)O が、北関東と中部には TO(O)NEK(K)O および TO(O)NE(E) が、九州には TO(O)NEGO が比較的多い。なお、～AI と～E(E)との分布については全国的に～E(E)の方が優勢であるが、これは、もっぱら～AI が分布すると考えられる本州中央部に赤の類が見られないためでもある。AI と E(E) の分布については、28 図「あかい(赤い)」などと比較されたい。

～KO と～GO については、～GO は大部分が西日本に分布し、東日本ではおおむね～KO であることが注目される。ただし、赤の類以外の語形も含めて、東北など語中語尾の k が有声化する地域の [～ko] [～go] は、すべて KO に含めてあるので注意してほしい(もっとも、東北でも大部分は [～ko] であって [～ko] [～go] は非常に少ない)。

また、赤の類の語形には、かなり多くの音声の変種が見られたので、これらを大はばにまとめざるをえなかった。たとえば、TO(O)ZAIK(K)O などの ZAI の部分には、[dzai] [zai] などのほか、[zae] [zæ] [ʒai] [ʒæ] [ˈdʒæ] [ˈdʒæ] [ndzæ]などを、TO(O)ZE(E)K(K)O などの ZE(E)の部分には、[dze] [dʒæ] [dʒa] [zæ] [ze:] [dʒa:] [zæ] [ʒæ] [ndze] [ndʒe]などを含めてある。これらの内容についての詳細は『日本言語地図資料』によらなければならない。また、TO(O)ZAI は TOOZAI と TOZAI とをまとめたものであるが、その内容は、前者がほとんどであった。なお、TO(O)ZAIK(K)O は、TOOZAIKKO, TOOZAIKO, TOZAIKKO, TOZAIKO を、TO(O)ZE(E) は、TOOZEE, TOOZE, TOZEE, TOZE を、TO(O)ZE(E)K(K)O は、TOOZEEKKO, TOZEEKKO,

TOOZEKKO, TOZEKKO, TOOZEEKO, TOZEEKO, TOOZEKO, TOZEKO を、TO(O)ZE(E)GO は、TOOZEEGO, TOZEEGO, TOZEGO を、TO(O)NE(E) は、TOONE (大部分), TOONEE, TONE を、TO(O)NEK(K)O は、TOONEKKO, TONEKKO, TOONEKO, TONEKO を、それぞれまとめたものである。これらの内容の詳細についても『日本言語地図資料』によらなければならない。

凡例の TOODAI から TOODEKKO までの～D～の語形は、広島から大分にかけての計 6 地点に見られるほか、千葉南部の 6730.33 に飛地がある。10 図「カゼ(風)の -ZE の音」を見ると、この地域に～de が分布する(千葉には 10 図で～de がないが、伊豆には見られる)。語頭が D の DOZAI は北海道の 2722.67 に、同じく DOOZEE は大分の 7326.41 に見られる。大分の DOOZEE は、隣接する TO(O)ZE(E)と TOO-DEE との一種の混交形であろうか。

TO(O)NAI 2608.90, 2750.44, 7322.21, TONNAIKO 1743.70 の AI の部分は、TO(O)NE(E)などが、TO(O)ZAI などの影響で回帰したものと思われる。一種の「誤った回帰」と言えよう。

凡例の TO(O)NE(E) から TOONEMAKKO まででは TOONEN(当年)の変化形と考えられるが、TOONEN が TO(O)NE(E)に変化する背景には TO(O)ZE(E)などの存在があろう。トオネ類とトオザイ類とは、分布状況から、相互に関係するものであることを思わせる。ただし、NEN を含む TOONEN 5579.42, 7450.44, TO(O)NENKO 6710.55, 6720.67, 6721.33, 8373.43, TOONENGO 6339.86, 6441.55, UMANOTOONENGO 6433.97 の語形は TO(O)-ZAI にくらべてかなり少なく、しかも、それらの～N-EN(～)は、いずれも辺地に分布する点が注目される。この事実が、トオザイ(当歳)類とトオネン(当年)類との歴史的関係をどう反映するものという点については、なお、検討を要する。

また、地域によっては問題もある(とくに北海道・青森など)ので明言はできないが、東日本における分布を見ると、～Z～の語形が、各地域で、都市を中心として分布する傾向が見られ、～Z～の類が～N～の類よりも新しい勢力のように見える。

KONDOONE 5672.67・5682.37 はコノトオネから生まれた語形であろうか。KOONE 5609.26, KOONE-

KKO 5648.13 は, TOONE, TOONEKKO と KO~ の語形との混交形であろう。

紺を与えた語形のうち, SYOSAI 5676.28, ISSE 3740.29, ISSEKO 2649.79, 3727.81, ISEMA 3689.75, KOTOSIGO 6409.35, HACUGO 6657.96 は, それぞれ「初歳」「一歳」「今年」「はつ(初)」にもとづくと考えられる。青森の4地点に見られる MAREMAK-(K)O は「生まれ～」であろうが, この種の語形は, 「こうし」の図により多く現われる。

KO 6553.22, 7417.79, KOKKO 1816.52, 3753.85, 3783.58, 4704.96, 6657.54, KODOMO 5770.11, 5781.22, KOZO 5791.23 は, 場面によっては, 「馬」部分を加えずにこのように表現しても良いという程度のものであろう。したがって, これらの語形は, 実際には, 上記以外の地点でも広く使われているものと思われる。

IGAGO 6545.19 は, 『全国方言辞典』によれば, 「赤ん坊」の意味で「いが」などが三重県その他に分布しており, これと関係があろう。HECI 5611.74 は, 「こうし」の図で広島などに見られる BE(E)C(C)I, BEC-(C)IKO や福井の BE(E)C(C)YA などとの関係を考えて符号を与えたが, さらに「幼児」などの意味で山口に見られる「へち」(『全国方言辞典』による)との関連も考慮しなければならない。

HORO から ORONKO までは, 九州各地, 山口, 愛媛のほか, HURUHURUMAGWA が奄美 0228.96 に, ORONKO が新潟 4665.87 にも見られる。奄美のものは HURU が本土の HORO にあたるものとして符号を与えた。ホロ, オロの由来は明確でないが, 『全国方言辞典』によれば, 土佐や鹿児島で子馬を呼び寄せるときに「おろおろ」と言い, また, 201 図「うま」で天草に ORO が見られることが参考になる。また, 『全国方言辞典』によれば, 馬の愛称としての「ほろ」が愛媛県大三島にある。

能登 5507.20 の CYORONKO は付近に見られる CIUMANOKO などと同様に「小さいオロンコ」ではないかと思われる。もしそうならば新潟の ORONKO につながるものと考えられる。新潟に見られる ONOKO 4675.65, OODOKO 4647.69 は, 分布から見てあるいは ORONKO などとも関係があるかもしれない。但し OODOKO については, 『全国方言辞典』によれば, 北陸などに「末子」の意味の「おとご」「おとっこ」が分布しており, これとの関係も考えられる。なお 136 図「おとこ」

を見ると, 石川に ONOKO が見られるが, この語と本図に見られる ONOKO との関係も考えてみるべきかもしれない。

OBANAGO 7354.23, TONKO 4782.96, 5721.27, 5731.13, TONKOME 5731.13, ZYAKI 5720.71 の由来ははっきりしないが, ZYAKI は, あるいは「牝馬」(203 図参照)の意味のゾオヤクと関係があるかもしれない(203 図ではゾオヤク類の中に, 地域は違うが ZYAKU の語形も見える。ただし, 本図の ZYAKI には, 「牝の子馬」であるとの注記はなかった)。TONKO, TONKOME は「こうし」の解説で触れる。

BIKKO から KOBICCYO までは長野・岐阜・静岡・愛知の県境に集中する。『全国方言辞典』には, この地域のビッコは「牝の子馬」として登録されているが, 不思議なことに, 本図では, 別に総称があるため削除した語形を含めて, 「牝の子馬」であるという注記のあるビッコは全く見られなかった。なお「牝」との関連では, 「めうま」「めうし」の図, さらに 138 図「おんな」(卑称)で, 本図のビッコに隣接して BII などが見られるので参照されたい。

また, 「こうし」の図を見ると, 本図の BIKKO の近くに BEKO が広がっており, BEKO と BIKKO との関連についても考慮する必要がある。本図の 6621.34 の BIKKO には「小さいものこと」との注記があったが, これは, 『全国方言辞典』に「べっこい」の見出しで「小さい。滋賀県甲賀郡・三重県阿山郡」とあることと関係があると思われる(ただし 22 図「ちいさい」には, この地域にベッコイに類する語形はない)。なお, 「こうし」のベコと「小さい」の意のベッコイとの関係については「こうし」の解説でも解れる。

BEKKO 以下は, 本図以外の馬, 牛関係の図に多く現われる語形である。このうち, BEKKO から HYOONOKO までは, 主に, 「うし」または「こうし」の図に現われる。

BEKKO 3783.08, BEKKONAMAKKO 3774.44 は, 22 図「ちいさい」でこの地域に分布する BAKKOI, BAKKO(DA) と関係があると思われる。なお, 各図を対照すると, 3783.08 では「うし」を BEG[g]O, 「こうし」を KOK(K)OBEKO, 「こうま」を BEKKO と呼ぶことがわかる。

BEBENKO 6420.34, 7380.74, BEBEGO 7289.31, KOBO 6548.82, KONBOO 6631.69, 6643.16, UMA-

NOKONBOO 6633.89, YOKO 6425.41, HYOONO-KO 6420.60 については「こうし」の解説を参照されたい。このうち、6631.69, 6633.89, 6420.60 のものを除いて、他の地点では「こうま」と「こうし」とが同一呼称である(もしくは、「こうま」と「こうし」に同一の呼称が含まれる)。これは KO, KODOMO などに準ずる性格のもの(それよりも意味が限定されるが)で、必要に応じて6633.89のように、UMANOKONBO, USINOKONBO などと言いつけるのであろう。

DADANKO 8343.97 は「古」「児」の注記があったもので、「うま」の図に見られる幼児語的性格の DADA に対応するものである。

DAUMAKKO 4703.18, DAGO(鳥取と隠岐に計5地点), MENKO 4653.02, ZOYAKU 5692.53, HINBA 8306.42, HINKO 6444.25 は主として「めうま」の図と関連するもので、このうち、4703.18, 6413.76, 6423.75 のものは、「牝の子馬」と「牡の子馬」の併用であるが、他に総称がないのでこれを採用したものである。その他の地点のものも、おそらく「牝の子馬」としての性格が強いものではないかと思われる。

「無回答」および「調査していない」については、202 図「おうま」の解説で一括して述べたので参照されたい。

## 205. たてがみ(鬣)

獅子にもあるが、ここでは馬のたてがみを尋ねた。馬を飼育していない地域については202 図「おうま」の解説を参照されたい。なお、この調査項目は後期計画で調査を打ち切った所があるので、調査地点は2400よりやや少ない。また、この調査項目は回答を得にくかったためか、無回答が全国で約80か所ほどあった。なお、＜併用処理の原則＞を適用したのは TATEGAMI である。ほかに、7356.98 では [tatʃegami] を併用処理した。また特に、顔にかかる毛(両耳の間の毛)をさす表現は地図上に示さないことを原則とした。

諸表現の分布を大観すると、橙の符号で示したタテガミ類が全国的に分布するほか、各種の表現がどちらかという、辺境の地に分布している、ということになる。

以下、各見出しごとに注目すべき点を、1 地点にしか存在しない見出しはその地点を示す。

TATEGAMI の中には [tategami, tatenami] のほか、[tategamī, tadeгами, tadenami] などを含む

(以下これに準ずる)、そのほか、[tatega·mī] 7390.70, [tatek(g)ami] 7367.25, [tatejami] 6603.52, [tatengami] 6495.82, 6495.88, 6496.56, 6496.72, [tategam] 6267.68, 6267.84, 6296.27, 7246.45, 7372.03, 7380.26, 8300.25, 8313.84, [tatenam] 7266.60, [tategaĩ] 7340.27, などを含む。

TE の部分が [de] となる地域、GA の部分が [ŋa] となる地域はほぼ常識通りであるが、[tadegami] が秋田に色濃く、岩手にやや多く、北海道・青森・宮城・山形にも見られる点は、やや注目してよい。

TATEGAN は鹿児島、五島に見られるが、中に 8361.31 の [tatenan] がある。

TEUGGAN は 8360.39 のみ。

TAC(Y)EGAMI は 7335.34, 7344.30, 7375.96, 737.27, 8305.76 であるが、[tatʃegami, tatʃegami, tatʃegami, tatʃegami] など、さまざまである。

TACYEGAN は 8362.81 のみで、内容は [tatʃen-an]。

TATENAMI は 5699.42 のみ。

TAKEGAMI は 5687.32 と 7382.58 であるが、後者は [takegam]。

TACUGAMI には 3747.91 の [tadzükami] を含む。

G の部分には [g] も [ŋ] もある。

TACIGE には 1223.91 の [tatigi:] を含む。

TACUGE は 5547.25 のみ。

TACIGARAN は 2072.20 のみ。『八重山語彙』には「カラシ」(髪(与那))とある。

SIDA (NOKE~NKE) には、[ʃida, ʃiⁿda, ʃida, ʃida, siⁿda] のほか、[ʃita] 4761.07, [ʃira] 4675.45 を含む。NOKE~NKE を従えるのは 4648.42, 4667.76, 4676.39, 4686.96, 4687.37, 5606.83 の6地点だったので、別見出しを立てなかった。4686.96 は [ʃiranke]。

HIDA は 4771.58 のみ。[(mmano)ɕida] とあった。

HWIDA は [Φɕiⁿda, Φɕiⁿda]。4609.25 と 4619.23 のみ。

SUDA [süda, süⁿda] を内容とするが、SIDA と区別しないでもよかったかもしれない。この点は SUDAGAMI などと同じ。4677.65 は [mmano-süⁿda] であった。

SUNAGAMI は 4751.42 のみ。

SIDAGE は [ʃidage] のほか [sɪdage] がかなり多い。



SUDAGE は 4713.60 のみ。

SIDAK(K)E は SIDAGE と区別する必要はなかったかもしれない。[ʃidake, sɪdake, sɪdake] が多いが、4658.42, 4696.82, 4732.86, 4784.41, 5608.51 の [ʃidakke, ʃidakke, sɪdakke] など、4723.58, 4735.37 の [sɪdakke] のほか 5628.23 の [ʃitakke] を含む。

SUDAK(K)E は SUDAGE ひいては SIDAGE と区別しなくてもよかったかもしれない。[sɪdake] などのほか、4734.56, 4742.95, 4743.95, 4752.27, 4753.52, 4753.76 の [sɪdake, sɪdake] を含む。

TARAGAMI は 6506.55 のみ。

DAREGAMI は 6575.40 のみ。

SIDAREGAMI は 4761.57 のみ。

SIDARIGE は 5629.98 のみ。

SIDARE は 4628.28 のみ。

KONE(NKE) は鹿児島に多い [mmanʔkone] を含む。

KOONE(NKE) に含まれる [mmanʔko:ne] は 7363.59 のみ。7326.69 は [kʷo:ne]。

KOOGI は 7259.98 のみ。内容は [ko:ge]。

KOHONE は 7333.29 のみ。

KOGONE は 6366.24 のみ。内容は [kogone]。

KOME は 8331.98 のみ。

KOOME は 7302.87 のみ。

KONI は 8351.65 のみ。

CICIGONE のうち 8312.33 は [tʃitʃigone], 8302.91 は [tʃigone]。

ERI(NOKE) 6536.32, 7432.44, 7460.23 は [eri]。  
[erinoke] は 5633.96 のみ。

ERIGAMI は [erigami, erinami] のほか、5656.62 の [irigami], 6451.83 の [erugami], 6495.88 の [eringami] を含む。

ERIKAMI は西日本だけである。特に ERIGAMI と区別しなくともよかった。

ERIGE は [erige, erige] のほか、6430.26 の [irige], 5665.11 の [irege] を含む。

ERIKE は 5641.73 のみ。

RINNOKE は 4598.33 のみ。

TORIGAMI は 3776.97 の [torugami] を含む。

TORIGOMI は 3722.97 のみ。

TORIGE は 4745.27 のみ。

SOKUBINOKEE は 6439.17 のみ。

BONNOKONOKE は 2791.88 のみ。説明的表現かもしれない。[bonnoko-no-ke] と表記されている。

KUBITANOKAMI は 3790.27 のみ。

KUBIKE には 3714.96, 3764.86 の [kumpike], 4704.96 の [kupike], 4713.02 の [kūpikke] を含む。

KAMI(NOKE) の内容は [kami] と [kaminoke] とであるが、ほぼ等量である。

KAMIGI のうち [kamigi] は 0246.48 のみで、他の 0256.76, 2068.08, 2151.11, 2151.64 は [kamgi]

HANGI の中には 0228.96 の [ʔma:hanggi] を含む。

KANGIRI は 2074.69 のみ。

HANGYUU は 1242.22 のみ。

HA(N)ZI の内容は 0294.66, 1231.72 の [handʒi], 0249.17, 0340.00 の [hadʒi]。

HAZISUZI は 0340.00 のみ。

KANZ(Y)U のうち [kanzu] は 1261.16 のみ。また、1241.05 は [ʔuikʰanʒu], 1251.73 は [kufikandʒu] という。

KANZYUU は 1241.49 のみ。

KANZYUI は 1231.88 のみ。

KANIN は 2076.98 のみ。

KANNE(E) のうち 2076.99 は [kanne:], 2086.03 は [kanne]。

KANTAA は 2095.60 のみ。

OKAAMI は 8229.96 のみ。

OKAGAMI は 6607.18 のみ。

E(N)GAMI のうち [enʔami] は 3716.58 のみ。別に 3715.59 の [inami], 3717.90 の [unami] を含む。

UNAGAMI は 6424.20 のみ。

MUNAGAMI は 7427.71 のみ。

NOGAMI(NOKE) のうち [nogaminoke] は 5614.62 のみ。

INAGE は 6446.43 のみ。

UNOKE は 7356.98 のみ。

INABIKE は 6389.56 のみ。111 図「まゆげ」をみると、この地点ではまゆげを MAHIGE という。

INABIKE の -BIKE は HIGE にあたるかもしれない。

MAEGAMI には 0256.08 の [mēgam] を含む。

MAEOSAGE は 5508.16 のみ。内容は [maeoʃane]。

MAEDACI は 7370.41 のみ。内容は [me:datʃi]。

SAGE は 7239.90 のみ。

SAGEGAMI のうち 8301.19 のものは[sagega:mi]。

SAGEKEBA は、5698.30 のみ。

SEE は 4706.53 のみ。内容は[seæ]。

SYENOKAMI は 5595.20 のみ。

SEGAMI は 6485.30 のみ。

SIGE は 5585.09 のみ。

SUGE は 5682.34 のみ。

ZAEKE ~ ZEEKE(E) の内容は次のとおり。

4715.98 は [dzae:ke], 4716.20 は [dzeæ:ke:] ,

4716.72 は [dze:ke]。

ZEEKKE は 4715.33 のみ。内容は[dze:kke]。

CIKARAGAMI は 6389.59 のみ。

CIKARAGE は 7318.04 のみ。

CIKARAHEGE は 6480.91 のみ。-HEGE の部分はヒゲにあたるであろう。なお、INABIKE の項参照。

CIKEGAN は 8362.34 のみ。

KANMURI は 6632.15 のみ。

KANMUGI は 2151.51 のみ。

HAMUI は 2085.69 のみ。

KANBURIGE は 4695.87 のみ。

CUKASA は 6525.30 のみ。

CYOOZIGAMI は 9315.55 のみ。

HUSA は 4700.37 のみ。

KASIRAGE は 8394.01 のみ。

NAGAGE は 6657.96 のみ。

NAMIKE は 1738.19 のみ。

SAKAGE は 4685.72 のみ。

SISIGE は 6427.93 のみ。

SYEGUNKE は 8315.42 のみ。

TABUSA は 6697.39 のみ。

TAZUNAGAMI は 6485.30 のみ。

YOKOGAMI は 2791.80 のみ。

次に、本図には反映させることはできなかった、注目すべき注記を抜萃する。地点番号順にならべる。

3702.81 kami<?...適答でないかもしれない>。

3722.90 torigami<耳のあたりのはmægami>。

3747.45 kubike<額の部分に垂れているのは, tategami>。

3782.38 kamike<首の毛>, tategami<頭上の毛>。

3796.06 tadejami, torigami<額に下っている方>。

4675.45 jira<額に下っている毛は me:nofira>。

4694.95 kaminoke<?>。

4744.10 tategami, [suidane]。

4773.15 jidake<下がる毛だから「齒朶毛」と言う>。

4780.60 jida<多>, torijami。

5574.84 ke<多>, tatenami<馬の専門家が使う>。

5599.41 tatenami, kubinoke<他>。<他>だから kubinoke は省略してもよかった。

5604.28 kaminoke<kaburage というのを祖父が使うのを聞いたことがある>。

5604.52 tategami<なにか古い言い方があったが、思い出せない>。

5620.80 NR<昔はたてがみにしないで、切りあげていた>。

5625.91 kaminoke [kaburi を馬喰などが使うのをきいたことがある]。

5667.41 jida<これは横の毛で、前の毛は tategami>。

5677.60 tateje<?>。

5685.37 jerige<一般>, jida<馬喰>。

5686.15 jida<お獅子のたてがみも jida>。

5689.10 jidare<?>。

5699.89 erije<?>, tatenami。

5742.32 jidane(馬は飼っていない)。

5760.57 jida(誘導による答)。

5780.57 tadenami, jida(誘導による答)。

6287.71 tatenami<新><対州馬にはふさふさしたたてがみはない>。

6424.89 NR<湯原町種では inagami という>。

6447.39 tateje<馬もいないし、聞く程度>。

6455.31 inagami, tategami<むかしの駄馬は力のはいるように、首の立たぬようにしてあった。たてがみを切り揃えて立派だった。のばすと inagami だ>。

6485.30 tategami, segami<古>, tazunagami<たてがみの下の方の部分。それを握って乗ると痛いので馬はあばれない>。

6491.49 tategami<?>(海岸部の大浜部落では erikami と言う)。

6518.87 erigami, tategami<特に立っているもの>。

6525.30 tsukasa<?>。

- 6541.27, maenjami<普通>, tatenjami<おこって立てると>。  
 6563.84 tatenjami<馬はいない>。  
 6607.18 okanjami<?>。  
 6626.30 erinjami<今>, fida。  
 7239.90 sage<?>。  
 7340.24 maegami<首のところを ko:ne という>。  
 7340.74 tategami<ko:ne は馬の背のことだ>。  
 7352.61 ko:ne<?首のつけ根の所をも言うかもしれない>。  
 7356.98 unoke(?)。  
 7361.17 ko:ne<tategami は馬の耳の前の毛>。  
 7363.12 tategami<ko:ne は馬の背中のこと>。  
 7368.32 tategami (馬はいない)。  
 7373.92 ko:ne<やや古, やや希>, tategami, <額の毛は maegami>。  
 7373.99 tategami<ko:ne とは背中の 筋をいう>。  
 7374.15 ko:ne, <額の毛は tategami>。  
 7374.75 ko:ne<夕立が馬のコオネを振り別けるといことばを聞くから, コオネは馬の背中になるはずであるが, 当地ではたてがみをコオネと言う>。  
 7381.97 tategami<額の毛はカムリゲ, またはカムルゲ>。  
 7401.18 jibukami<多>, erikami。  
 8301.19 sagegami<?>, kubuge<?首毛>。  
 8303.84 taregami<首の筋の部分 kōne とする>。  
 0238.55 tategami<新>。  
 0340.00 hadzi (後頭部をいうのが原義)。  
 1251.73 kufikandzu<首の毛>, me:kandzu<顔にたれたもの>。  
 1271.05 NR<hanzu は観念語>。

以上の引用の中で, 5620.80, 6455.81, 6518.87, 6541.27 などのものを参照すれば, タテガミとは, 元来, 「たてがみ」に何らか手を加え, 毛を立てた状態の表現だったかもしれないことを想像させる。

そうだとすれば, 自然の状態を示す表現は別にあった(あるいはカミなどと言った)ものと思われる。しかし, 現在は, 一般にすでに命名の起原は忘れられたのであろう, 注記もなく淡々と使われている地点が多い。このタテガミは東北地方北部や九州西岸や琉球列島にも達しているが, どちらかというと近畿地方を中心として勢力が強く, 「たてがみ」を示す一般名として定着したのは,

そう古くないもののように見える。もっとも, 文献に見える(自動詞的な)タチガミが古く, それは自然の姿のものをさしていたが, (他動詞的な)タテガミとなり人工的な姿のものをさすようになった, などとも考えられ, はっきりしたことはいずれにせよわからない。

タテガミ類の領域を囲むように分布するのは, 長野を中心とする東部地域と四国西岸を中心にもられる空のエリ(ガミ)の類であるが, それぞれの地域での発生も考えられ, これがもっとも古い表現であるとするのはむずかしい。もっとも, 中国地方でこのエリ(ガミ)の類と混在している紺のイナガミ, ウナガミの類は, 四国東南部, 熊本に関連する表現をもち, 和名抄に「うながみ」が見えるところから, 古いものの残存とも思われる。岩手北部や千葉にある紺で示した E(N)GAMI もこれと関連がありそうであるが, この類を古いものとするれば, すくなくとも西日本のエリ(ガミ)は, イナガミ, ウナガミの類の翻訳形(語原解釈による新しい形)と考えることができ, 古い表現の間接的残存ということが可能となる。

東南北半から関東にかけて分布する緑のシダ〜シダガミの類は, 神奈川西部の分布をみることによって, 古くはさらに広く分布していた(東京付近もそうであった)と考えられるが, 日本語全体の中に, どう位置づけるべきかはっきりしない。注記には, 羊歯(歯染)との関係を述べるものがあつたが, 案外関連があるのかもしれない。草の類の中のシダレ(〜)類は, すでに述べたように, 各1地点である。なお, SIDA〜と SUDA〜との関係については, 後者が, 宮城と山形のそれぞれの県内で西部にまとまった領域を持っていて注目されるが, 深い意味については, 明らかでない。

赤の符号で示したものは, 注記で示したように, 7340.24, 7340.74, 7352.61, 7363.12, 7373.99, 7374.75, 8303.84 など, 元来は, 「たてがみ」の生える所ないしは馬の背をさすことばだったかもしれない。かなり広い領域を持つが, まず, 領域が連続していることが注目される。日本語の歴史の中での位置づけは, シダ同様あきらかでない。

東北地方北部や福島にみられる茶で示したトリガミ類は, この地域での発生であろうか。福島に飛地らしきもののあることから, シダ類より古いもののようにもみえるが, その出現地がシダ類の中心であり, 残存ではなく, なにかこの表現の使用場面がシダ類と違って, なにかの刺激によって顕現したもののよう考えられ

る。この付近で、トリガミとはどういう意味かと尋ねてみれば、意味用法や、語の発生についてもうすこし手掛りになる情報を得られるかもしれない。

以下、紺の類について考える。

フリガミ、フリゲが西関東から中部地方東半にかけてかなり多く分布する。首の両側にふりわけになっていることと関係があるのか、よくわからない。エリガミの類と領域がほぼ重複する理由も不明である。

クビ〜類の中には、無回答に準ずる、その場での説明的な回答が含まれているかもしれない。カミ(〜)類にも同じような性質のものがあるかもしれない。

琉球列島にみられるものは、みな相互に関係があろうが、ここで特に注目すべき点は、本集 215 図の「とさか」との関連である。符号の関係を考えず、語形のまとめかたについても一貫していないので、地図だけをたよりにする比較では不十分なので、以下原資料にあたって「とさか」と「たてがみ」に同語形のあらわれる地点と、その語形を示す。

kamgi 2151.11.

kangi 1242.26, 1270.26, 2140.49, 2141.71, 2150.06, 2151.20, 2151.67(ただしこの地点「とさか」をkagamともいう)。

hanggi 1242.72.

kandʒi~k'andʒi 1211.69, 1221.47, 1241.96, 1250.59, 1251.04, 1260.78, 1260.87, 1261.01, 1261.32, 1261.70, 1261.80, 1270.29, 1271.20.

kandʒu~k'andʒu~kandʒu~kandzu 1241.05(ただしこの地点「たてがみ」は t'uik'andʒu—t'ui は取る、つかむの意), 1251.73 (ただしこの地点「たてがみ」は kujikandʒu—額にかかるとは me:kandʒu), 1251.98, 1261.16.

handʒu 1271.05 (ただしこの地点「たてがみ」は観念語)。

happi 2067.52, 2076.97 (ただし両地点「とさか」は kanpi: )。

kapiŋ 2076.98.

kanne: 2076.99.

kanta: 2095.60.

この地点の分布を概観すると、かなり広範囲ではあるが、215 図「とさか」の図の解説で示したように、この地域での「とさか」を示す古表現としてはカガミ類が考えられることから、「とさか」「たてがみ」の同一語化は、この

地域での新しい現象と考えられる。ただし、さらに深い研究が望まれることは、いうまでもない。

## 206. うし(牛)

大部分がウシおよびベコ、またはそれらの変種であって語種が少ない。そこで、音声の変種のうち、ウシのシにあたる部分が[si]のもの、シにあたる部分の母音に中舌の[i]が見られるものや、ベコのコの子音が有聲化しているものを分出した。なお、単に SI として音声内容を表示していないものは、内容の大部分が[ji]であるが、そのほかに、[ji], [j], [ɿ]なども含めてある。半長の[ji:]などもここに含めた。したがって、厳密な意味での詳細な内容は、やはり『日本言語地図資料』をみなければならない。また、ウシ類には紺を与え、それ以外の語形には茶を与えた。茶を与えた語形には、210 図「もうもう」(牛の鳴き声)の図に見られる諸語形との関連を考慮せねばならないものが多い。また、本図は、207 図「おうし」・208 図「めうし」・209 図「こうし」の各図とも相互に関連をもつ。

本図では、＜併用処理＞は行なわなかった。

ウシ類は、関東・新潟から琉球まで広く分布するほか、北海道・東北でも、多くは茶を与えた類との併用として現われる。なお、ウシ類と他の類とが併用の地域では、能登や鹿児島のもも含めて、ウシ類の語形に「新」、またはウシ類以外の語形に「古」の注記のある点が非常に多かった。

ウシ類の中で、USĪ[sī~süt], USĪ[ji], OSĪ[sī~süt], OSĪ[ji]などのような中舌の[i]は、東北各地から関東の北東にかけてのほか、北陸、出雲、琉球の先島にややまとまりが見られる。USĪ[usi]は、北海道南部、秋田から山形にかけて、富山・石川のほか、京都 6553.47, 鹿児島 8360.39, 8361.31, 沖縄 1156.89 の各地に点在し、OSĪ[si]は鳥取 6413.76 に、USĪ[si]-BOO は富山 5547.96 に見られる。

USII は琉球の 0294.93, 1242.00 に、UUSI は石川 5555.09, 佐賀 7239.24, 五島 7246.82, 7266.34, 熊本、屋久島 9312.42, 奄美の各地に見られる。なお、UUSI は[u:ji]と[u'ji]とをまとめたのである。

OSĪ, OSĪ[si], OSĪ[sī~süt], OSĪ[ji]のような語頭がオの語形は、島根(隠岐を含む)から鳥取にかけて集中するほか、山形 4628.61 から新潟 4638.43 にかけて

分布する。「うま」の図の OMA と比較できる。

UHI は五島に集中するほか、宮崎 8313.88 に見られる。また、UCI は与那国 2072.20 に、HUSI[sɪ] は八重山 2076.25 に、HUSII は沖縄 1231.88 にそれぞれ見られる。

USIME, USI[sɪ]ME のようなメのつく語形は、八丈に集中するほか、茨城 5741.66, 5762.41, 千葉 5792.02, 滋賀 6544.69, 石川 5566.95 に分布し、これと関係のある BEEG[g]OME が茨城 5732.73 にある。なお、～メの語形は各種の動物類の図に見られるので参照されたい。

USIBOO から USINBEE までは、ウシと茶を与えた各種の語形とが複合したと考えられる語形であるが、これらについては、茶を与えた語形についての説明の中で述べる。

茶を与えた語形の中では BEKO または BEG[g]O がもっとも多く、それらは北海道と東北に集中する。ただし、それはこの地図に関するものであって、209 図「こうし」を見ると、西日本各地に BEKO, BEEKO などが集中的に分布する。西日本の「こうし」を意味するベコと東北などの「うし」を意味するベコとの歴史的関係については、ここでは、次の 3 つの考えかたを示しておきたい。

1 つは、中央では「こうし」の意味として生まれたベコが東北に伝播する際に「うし」の意味に変わったとする考えかたである。この場合、東北では、最初は「こうし」の意味でベコを受け入れ、それに指小辞「こ」を加えてベコッコ(この種の語形は「こうし」の図で東北に広く分布する)と呼んだが、次の段階で、そのベコッコのコを「子」と意識した結果、「うし」を意味するベコが生まれたのかと考えてみる。もっとも、東北で指小辞「こ」が分布する地域は、現在では東北北部が主である(151 図「おかね」における ZYENKO, ZYENIKO の語形に見られる～KO の分布などが参考になろう)から、東北の中でも地域によってベコの成立に関する背景が異なることが考えられ、種々の事情が錯綜する中で、現在の「うし」の図に見られるような統一を生んだものと思われる。

2 つめは、中央で生まれたものは「うし」の意味でのベコであったが、後に、西日本ではベコのコを「子」と意識した結果、ベコが「こうし」の意味に変化したとする考えかたである。その場合、中央日本で最初にベコが生まれたときのコは接尾辞(たとえば、「かけっこ」「あいこーじゃんけんのときの一」などの)であったと考えたいが、関

西で接尾辞「こ」がどのような意味分野に現われるか不明である(現在西日本のベコを用いる地域でベコのコを「子」とは意識していない場合もかなりあるらしい)。この考えかたに従えば、本図における、東北のベコや石川に見られるベッコなどは、中央から伝播したものの残存として説明できる。

3 つめは、古くは全国的にベエなどが「うし」または「こうし」の称として分布しており、各地で独自にベエにコ(それが「子」を意味するものであったかどうかは地域により異なり、また、先に述べたように、同じ地域でも時期的に変化することもありうる)を加えることによって、ベエコ、ベコが生まれたとする考えかたである。この考えかたに従えば、東北などのベコと西日本のベコとは、かならずしも、かつて連続していたと考えなくともよいことになる。

本図には、210 図「もうもう」(牛の鳴き声)に見られる各種の語形の一部分が現われているから、牛の鳴き声(の表現)と牛をあらわす表現とがつながりをもちうることは確かである。「こうし」の図にも、同様のことが認められる。もっとも、本図の BEE から MENMEN までの牛の鳴き声そのものをあらわすと思われる語形については、多くの地点で「子」(幼児語)の注記がつけられていることに注意しなければならない。この点については、牛の鳴き声そのものをあらわすと思われる語形は古くは「うし」または「こうし」をあらわす表現として広く用いられたが、それがあまりに擬声語的でありすぎるために一般称としては好まれず、幼児語などの世界に沈下し、一般称としては、コ、チーBE(E)C(C)I など、ターBEBETA などなどの接辞的要素を加えることによって安定した語形となって広がったと考えることもできる。

一方、「うし」または「こうし」をあらわす表現と牛の鳴き声(をあらわす表現)との関連については、「うし」および「こうし」の図の茶符号の類には BE(E), BO(O) を含む語形が大部分を占めるのに対し、210 図「もうもう」で B～の語形が少ないのはなぜかという点が問題となる。この点について判断する材料がないが、牛以外の動物(たとえば山羊など)の鳴き声を全国的に調査してみれば、何か手がかりが得られるかもしれない。

また、210 図で MEE を含む語形(MEE, MEEE, MEEN など)は西日本では主として「子牛の鳴き声」として分布するのにに対し、東北では大部分が「牛の鳴き声」

として分布している。この事実と、BE(E)を含む語形が西日本では主として「こうし」の図に、東北では「うし」の図に見られることが対応しており、注目される。「うし」と「こうし」との鳴き声(の表現)の区別と、「うし」「こうし」をあらわす表現とが相互に関連することを示すものであろう。

なお、ベコの語形は「小さい」の意味の「べっこい」などとも関係があると思われるが、これについては209図「こうし」および204図「こうま」の解説を参照されたい。

以上、BEKO, BEG[g]Oを中心として述べたが、そのほかのベコの語形としては、BEKKOが石川の3地点のほか、青森 3702.81 にみられ、BEEKO, BEE-G[g]Oが東北から茨城にかけてのBEKO, BEG[g]Oの領域内に、BEG[g]OKOが岩手 3784.24, 4704.45と秋田 3770.62 に、BEEG[g]OMEが茨城 5732.73に、それぞれ見られる。

BAKKO, BOKKO, DEKKOはすべて能登に集中する。なお、BOKKOは、鳴き声BOOの語形(210図でも同地域に見られる)とも関係があろうか。BAKKOはBEKKOとBOKKOとの交渉によって生まれたとも考えられるが、BAKKOは「おうし」「めうし」の図にも見られる語形で、しかも、「おうし」の図では石川のほか隠岐にも分布するから、本図のBAKKOは他の地域から伝播したもので、むしろBOKKOがBEKKOとBAKKOとの交渉による語形かもしれない。なお、BAKKOについては「おうし」の解説でも触れる。DEKKOは207図「おうし」でも同地域(地点はずれてはいる)に見られるものであるが、これについても「おうし」の解説で述べる。

BEEからMENMENまでは210図「もうもう」に見られる語形およびその組み合わせによると認めた語形である。以下に、一定の領域をもつものについては分布地域を、それ以外の語形については地点番号を掲げておく。

BEE 6520.03, 6521.03, 8316.20, BEBO 5623.27, 8352.40, BEBOO 5613.48, BEEBO 5623.35, BENBO 3689.75, 3699.25, BEEBOO 5632.28, 5633.45, BEBU(宮崎南部から鹿児島にかけて), BO 4694.95, 5604.28, BOO(長野北部から佐渡にかけてのほか、群馬 5636.74, 長野 5684.26, 愛知 6548.02, 6568.09, 兵庫 6447.08, 愛媛 7404.12), NENBOO 5761.91, BABA 6414.25, MO 6524.01, MOO(茨城、岐阜、静

岡、滋賀、兵庫、和歌山、島根、福岡の各地に点在), MOOMO 5680.34, 5791.68, 6356.98, MOOMOO 4654.52, 4663.49, 6448.61, 6506.86, 7659.31, MOOKO 6402.94, NMOO 6494.08, MON 6357.38, MONON(奈良、島根のほか、徳島 7406.53), MONMO 6410.77, MONMON 6357.38, MEE 4689.62, MEN 5635.48, MENMEN 4675.45。

このうち、BO, BOOおよび~BO, ~BOOの語形は新潟と愛知を結ぶ本州中部に比較的多いが、これは、210図「もうもう」におけるBOO, BOOBOOの分布とある程度一致する。(~)BOOは[bo:]と[bɔ:]とをまとめたものであるが、このうち[(~)bɔ:]は新潟に見られる。また、MOOMOOにも[mɔ:mɔ:]4654.52が含まれる。なお、[~ɔ:]の分布については210図の解説を参照されたい。また、BO, BOOは207図「おうし」にも多く見られるが、これとの関連については207図の解説で述べる。

BEBO, BEBOO, BEEBO, BEEBOOは長野北部から新潟にかけて見られるほか、鹿児島にもBEBOがある。長野付近のものは、BOOとBEE(210図でその地域に分布する)との複合形であろう。鹿児島のBEBOはBEBUの領域の端に位置する。このBEBUもBEEとBOOとの複合によって生まれた(九州では合音[bo:]は[bu:]になりうる)のかもしれないが、210図をも含めて九州にBOOは見られず、また、210図における(~)UUの語形は、九州では熊本に1地点UUが見られるだけであるから、あるいは、このBEBUは、他の地域のBEBO, BEEBOOなどとは性格が異なるものかもしれない。ただし、209図「こうし」では、五島にBEEBOO、甕島にKOB(O)が見られる。なお、BEBUには「昔」「古」の注記のあるものが4地点、「子」の注記が3地点、「希」「多」がそれぞれ1地点ずつあった。

NENBOOは茨城の5761.91に見られるが、ウシネンボオは群馬と茨城に数地点ずつ分布する。群馬ではUSINENBOOにMENが隣接し、また210図でMEENが群馬にも分布するから、あるいは(ウシ)メンボオから(ウシ)ネンボオが生まれたのかもしれない。

NYUUは岐阜の6507.13に、OSEは徳島の7406.53に見られる。OSEには「成牛を言う」と注記があったが、『全国方言辞典』で「おせ」の見出しで「成人。おとな。肥後菊池郡(俗言考)・中国・四国・九州」とあるから、

これと関係があろう(「おせ」(大兄)は『広辞苑』にも「年長者」の意として登録されている)。

## 207. おうし(牡牛)

本図は、202 図「おうま」、203 図「めうま」、206 図「うし」、208 図「めうし」、209 図「こうし」、210 図「もうもう」(牛の鳴き声)、さらに、136 図「おとこ」などに関連するところが大きいので相互に参照されたい。本図では OUSI の語形に＜併用処理の原則＞を適用したが、「新」「共」「希」「上」などの注記により本図から削除した OUSI は、1859.84, 1942.03, 5617.85, 5644.74, 5657.73, 5687.32, 5696.54, 6507.72, 6610.77, 6641.97 の計 10 地点のものにすぎない。

緑を与えた類および橙を与えた類、さらに紺を与えた IKIGAAUSI から YAROOBEKO までの語形についての語類の分けかたの原則、凡例における見出しの位置の決めかた、また、それらの語類相互の歴史的関係については、202 図「おうま」の解説で一括して述べたので参照されたい。ここでは、赤を与えた KOTOI 以下の語形について述べる。

赤を与えたコトイ類は、西日本の大部分の地域を占めるほか、東日本各地に小領域をもつ。「ことひ」は上代から文献にも現われる語形で、「牯」(『新撰字鏡』)、「特牛」などの字があてられている。三省堂『時代別国語大辞典・上代編』には、「語源を許多負・許多物負などの縮約とする説もあるが、殊=負の縮約とする説の方がまさっている」とある。『和名抄』に「特牛 俗語云古止比 頭大牛也」とあるように、「頭の大きい雄牛で、荷物運搬などに使われるもの」を指していたようであり、本図にも、「角の大きながっしりした恐ろしそうな牛」6476.92, 「大きい恐ろしいようなものだけにいう」6496.56, 「頑固な牛」6577.13, 「おすウシのうち、大きな肩のいかった荷を引く牛をいう」6580.66 などの注記のあるものが、かなりあった(逆に、「おすの牛をすべていう。特に力の強い牛とは限らない」6553.99 の注記もある)。

分布からは、かつて東日本全域でコトイ類が用いられたようにも見えるが、それは、もちろん、各地方でこの種の牛自体を飼育していたかどうかということと関係がある(この種の牛を飼育していなくとも、「牡牛」の一般称としてコトイ類が伝播する場合もある)。

コトイ類の中で比較的勢力の大きい語形については、

KOTTOI が近畿の一部から中国・四国などにかけて、KOTE・KOTEE が主として東日本各地、KOTTE・KOTTEE が近畿、中国の東部から愛媛、さらに九州にかけて、KOCII・KOTII・KOCI・KOTI・KOCCHII・KOTTII・KOCCHI・KOTTI など～IIの語形が大分から宮崎にかけてなどに、KOCU・KOCU・KOCUUU などが上記の～IIの領域内に、それぞれ分布する。また、本土の KO に対応するとみられる、語頭が KU・HU の語形が奄美・沖縄に集中し、語頭が G の語形は石川から福井・岐阜・長野などにかけて比較的多く見られるほか、兵庫南部から四国東部にかけて、熊本南部、鹿児島南部などにまとまった分布が見られる。KOTTE・KOTTEE など～E(E)の語形の領域は、その広さからみて、OI が規則的に EE になる地域と必ずしも対応しないものと思われる。24 図「ほそい」における HOSE・HOSEE の分布を参考にすると、中国東部から近畿北西にかけての地域では、HOSE と KOTTE, HOSEE と KOTTEE の分布が一致する傾向がみられるから、その地域で KOTTOI から KOTTEE・KOTTE が生まれ、OI が EE にならない地域では、そのうちの KOTTE の方が好まれて勢力を得たのであろう。東日本各地の KOTE・KOTEE が分布する地域では、24 図でその一部に HOSE・HOSEE が見られる。

KOCI・KOTI・KOCCHII・KOTTII などには、それぞれ、[kotʃi]・[koti]・[kottʃi:]・[kotti:]などのほかに、[kotsʷi]・[kotʷi]・[kottsʷi:]・[kottʷi:]などの内容のものを含めてある。これらの唇音化された [tsʷi], [tʷi]は、KOCCHII・KOTTII などの[~tsui], [~tui]とも近い関係にあると思われるが、九州北東部で OI が規則的に UI になるかどうかは不明であり、むしろ、この[~ui]は、KOTTOI などの[~oi]が、一度[~i:]になり、それが誤って[~ui]に回帰したものとも考えうる。能登の2地点に見られる DEKKO は周囲に分布する GOTTE との関係を考えて赤の類に含めたが、206 図「うし」を見ると、能登の先端に DEKKO (206 図では茶を与えてある)が見られ、その周囲に BEKKO が分布するから、本図の DEKKO はあるいは、BEKKO などから生まれた語形で、GOTTE とは無関係かもしれない。なお、『全国方言辞典』に「でっこ」の見出しで「①人形。石川県鳳至郡・香川県手島。②でっち。丁稚。加賀(俚言増補)・岐阜県海津

郡。③牡牛。石川県珠州郡」とあり、DEKKO が後に述べる DECCI と関係があることを思わせる。

次に、紺を与えた語形のうち、BAK(K)O 以下について述べよう。バッコは「うし」「おうし」「めうし」の各図に現われるもので、本来はどのような意味であったかはっきりしない。本図では BAK(K)O は石川と隠岐に見られるが、どちらの地域のものにも「大きい牡牛」「大きいもの」という注記のあるものが多く、したがって、コトイ類と意味が近接することが注目される。「めうし」の図における BAKKO には注記のあるものがないが、これとの関係が考えられる BABE, BABO (いずれも隠岐)の注記に、やはり「大きい牝牛」あるいは、単に、「大」とある。本図で隠岐に BAKURA が見られるが、『大日本国語辞典』に「ばくろうま(博労馬)の見出しで「博労が飼育したる馬。疲労し易しといふ」とあるから、バッコはバクラとともに「ばくろう」の語となんらかの関係をもつのかもしれない。ただし、「うま」「おうま」「めうま」「こうま」のいずれの図にも、バクラ、バッコの語形が見られない。

CIUZI から TETEBEKO までは、「父」にもとづくと思われる語形である。CIUZI は島根に、CICIUSI 以下は東北各地に分布するが、これらには「種牛」と注記のあるものが多かった。なお、202 図「おうま」でも東北に CICIUMA, CUCIMA が見られる。島根の CIUZI は孤立しているが、これにも「父牛?」との注記があった。

DECCI・DECCIUSI は岐阜北部に見られるが、『全国方言辞典』によると、「でっち」は「男の子」の意味で岐阜ほか西日本各地に分布しており、これとの関係が考えられる。なお、136 図「おとこ」にも DECCII の語形が岐阜北部に見られるので参照されたい。

DO は宮城の 4735.42 に見られる。あるいは、滋賀の 6544.26 に見られる DOKOTTE の DO と関係があるのかもしれない。DOKOTTE の DO は「ど阿呆」「どたま(頭。101 図参照)などの「ど」と同様、卑称の接頭辞であろう。長崎(平戸島)の 3 地点に見られる GORO は、それと併用で見られる KOTTEGORO の後部分が分離したものであろう。なお、「こうし」の図にも、USIK(K)ORO および KORO の語形がある。

HEETAME は八丈に ZOKKUME と併用で現われる。この地点の注記に、前者は「役牛」、後者は「闘牛用」とあった。

MEEOO(福井)は鳴き声にもとづく語形かと思われるが、「めうま」「めうし」の図でこの地域に隣接して見られる MERO~, MEERO~ に多少とも関係があるのかもしれない。

愛媛の 3 地点に見られる OMOZI, OMOOZI は、オモ+ウジと思われる(なお、ウジの語形については「こうし」の解説で触れる)。この語形は「めうし」の図にも見られるが、『全国方言辞典』に「おも」の見出しで「子牛をひいている親牛。山口県豊浦郡」とあるのが参考になる。この語は上代の文献に見られる「母」を意味する「おも」とも関係があるのかもしれず、もしそうであればオモウシは本来は「母牛」の意味であったものが、一部の地域で「親牛」または「牝牛」の意味に変化したことになる。さらに、OMO~ の近くに見られる KATOUSI は「めうし」の図に、より多く見られるものであるが、もし KATOUSI が隣接する KOTTOI, KOTTE と関係があるとすれば、あるいは、この地域では、本来「おうし」はカトウシ、「めうし」(または母牛)はオモウシであったものが、なんらかの事情で一部の地域で意味が逆になったもののかもしれない。なお、『総合日本民俗語彙』に「オモウシ」の見出しで「愛媛県北宇和郡御横村で、牛を並べて使役場合、右の端に使う牛をオモウシという。中心となる牛の意である。左端をカタという」とある。オモウシの語におけるオモ(母)とオモ(主)との関係が想像されると同時に、この「カタ」と KATOUSI との関係が考慮される。

OTONABEKO は福島に、SIBO は伊豆に見られ、ZOK(K)U, ZOKKUME は八丈に集中する。SIBO には「種牛」との注記があった。これはウシボのウが脱落したものであろうか。あるいは「種牝」の字音と関係があろうか。ZOK(K)U, ZOKKUME の由来は不明である。「めうま」の図に見られるゾオヤクとは無関係であろう。なお、「闘牛用」と注記のあるものが見られることは、すでに述べた。また、ZOKU は「こうし」の図にも見られるものであり、その解説を参照されたい。

KAKEUSI から USINOTANABO までは、「種牛」であることを直接的に表現している語形である。このうち、KAKE~ の語形は、三宅島に集中するほか、静岡、東京、埼玉に見られる、KATEUSI(伊豆)の注記にも「kateru は交尾させるの意」とあった。福井にみられる TANAUSI, USINOTANABO のタナはタネの変種と考えて符号を与えた。KINKIRI から TAMATORI までは「去勢牛」の称である。



BO から BOOYUU までは、語頭に BO, BOO をもつ語形である。これらは、「おうま」の図に見られる BO(～), BOO(～) の語形と同じく、「牡」の字音と関連するものが多いはずであるが、「おうま」の図よりも本図の方が BO(～), BOO(～) の分布する地点が多く、また、本州中央付近に BO, BOO が比較的多いという点で、本図と「うし」および「もうもう」(牛の鳴き声)の図とは分布傾向が類似する(ただし、新潟の 5611.74 を除いて、「うし」を意味する BO, BOO と「おうし」を意味する BO, BOO とが重なる地点はない)から、本図の BO(～), BOO(～) の中には、「うし」および「もうもう」の図に見られる BO, BOO と関係をもつものもあると思われる。ただし、鳴き声の BOO が牛をあらわす表現になったとすれば、その際に、それが「牛の総称」「牡牛」のいずれの意味で先に用いられたかについては、なお検討を要する。

KATOUSI から GANZYOBeko までは、他の図に多く見られる語形である。このうち、KATOUSI, ONAMI, ONNAME は、「めうし」の図に現われる。KATOUSI については先に述べた。ONAMI(愛媛 7400.11), ONNAME(京都 6500.88)は、それぞれの地点で、「めうし」の図では、MENAMI 7400.11, MENNAME 6500.88 であるから、これは、ONAMI の O を「牡」のオ、ONNAME の ON を「牡」のオンと解釈して、新たに MENAMI, MENNAME を造語したことがわかる。GANZYUO～の語形は「おうま」の図に広く分布する。YUUGYUU(岐阜)は「雄牛」の音読による語形かもしれない。

USI, BEKO, BEEKO の各語形の性格、および、それらと「無回答」との関連については 202 図「おうま」の解説の末尾部分(UMA, UNMA, UAME の各語形と「無回答」の性格について述べてある)を参照されたい。また、「調査していない」の性格についても、202 図の解説の冒頭に一括して述べた。

## 208. めうし(牝牛)

本図は、202 図「おうま」、203 図「めうま」、206 図「うし」、207 図「おうし」、209 図「こうし」、210 図「もうもう」(牛の鳴き声)、さらに、137 図「おんな」、138 図「おんな」(卑称)などと関連するところが大きいので相互に参照されたい。本図では MEUSI の語形に＜併用処理

の原則＞を適用し、「新」「共」「希」などの注記のある計 11 地点 0840.33, 1942.03, 4672.19, 5617.85, 5696.68, 6507.72, 6508.36, 7237.67, 7312.69, 7357.31, 7504.27 の MEUSI を削除した。

凡例の ME から BINTAUSI までの語形についての、語類の分けかたの原則、凡例における見出しの順序、それらの語類相互の歴史的関係については、202 図「おうま」の解説で一括して述べたので参照されたい。ここでは、緑を与えた類のうち、他の馬・牛関係の緑の類には全く、あるいは例外的にしか現われない本図独特の語形についてのみ触れる。

MEOZI から MYOOZIUSI までは、紀伊半島南部と佐渡とに集中する。MYOOZI は隣接する MEUZI の EU が YOO になって生まれた語形と考えられる。MYOOZIUSI の語形は、もはや MYOOZI の末尾を「うし」とは意識していないことの現われであろう。なお、209 図「こうし」に見られる KOUSI, KOOZI などの分布と比較されたい。～UZI, ～OZI については 209 図の解説で述べる。

MEOUSI(福岡 7351.09)は隣接する MEN'USI, MEUSI などの変化した形であろうか。

META は「めうま」の図にも見られるが、本図では、特に九州西南に集中している。

MEKKAIBEKO から MENKA までは東北北東部に集中する。これらは語頭の ME を「牝」「女」の「め」と解して緑の類に含めたが、別の考えかたがあるかもしれない。『全国方言辞典』を見ると、「めうし」以外の意味の「めっか」「めっかい」が全国各地に分布しており、参考になる。なお、220 図「ひきがえる—その2」で東北北西部に MOKKE, MOKKESI, USIMOKKE などが分布しており、本図との関係が考慮される。

MERA から MENABEKO までは MERO との関連が考えられる語形である。この MERA～, MENA～の語形は「めうま」の図よりも本図に主として見られるものである。本図では、山形には MENA～が、九州南部には、おもに MERA～が分布する。137 図「おんな」では上のいずれの地域にも MERO, MEROO が見られないが、138 図「おんな」(卑称)では MERO, MEROO が全国に散在するから、北陸の一部などを除いてもっぱら卑称として全国に分布するメロオが、地域的に、語形変化を伴いつつ「めうし」などの意味にも用いられるようになったものと思われる。

BII から BINTAUSI までは岐阜北部に集中する。これらは「めうま」の図に見られる同類語形とともに、138 図「おんな」(卑称)でこの地域に分布する BII などと関連するものである。なお、本図の BII, BINTA には、「卑称」の注記のほか、「牛に限らず一般にめすの動物について言う」との注記が多かった。

次に、赤を与えた各種の語形について述べよう。赤の類はオナメを中心に、それとつながりがあると認めた語形をまとめたものである。ただし赤の類は、橙を与えたオンナ～、オナゴ～の類と関係があり、そのため両者は符号の形を似せてある。また、MENNAME, MEN-AMI, MIUNAN の 3 語形は、語頭部分に注目して緑を与え、後部分について符号の形を与えて、赤の類の中の、それぞれの関連語形の隣に配置した。なお、ME-NNAME (京都 6500.88), MENAMI (愛媛 7400.11) についてはこれらが ONNAME, ONAMI から変化して生じたものと考えられることを、「おうし」の解説で述べたので参照されたい。MIUNAN (琉球の宮古)は隣接する UNAN と MIUSI との混交形であろう。

赤の類の中では、ONAME, ONAMI, UNAME, UNAMI, UNO, UNOO が大部分を占めるが、べた符号を与えた～ME の語形は、ぬき符号を与えた～MI の語形をとりまく形で分布しているから、～ME は～MI よりも古そうである。

ONAME は 137 図「おんな」に見られるオナゴのオナ(<オミナ)とウマメ、ウシメのような動物の呼称やアイツメなど人間の卑称に見られる接尾辞～メとが結合したものではないかと思われるが、「うま」「うし」の図については、～メの語形が西日本にはほとんど見られない点に問題がある。しかし、馬、牛以外の動物の呼称や人間の卑称などの接尾辞としては、西日本でもメを用いることがありえよう。本集における種々の動物に関する地図を参照されたい。もっとも、接尾辞としての～メの由来は不明であり、あるいは、これと「牝」「女」を意味する「め」との関係も考慮すべきかもしれない。その場合、三省堂『時代別国語大辞典・上代編』に、「妻妾」の意としての「をむなめ」「をなめ」の古い用例が引かれていることが参考になる。『全国方言辞典』によれば、東北に「めかけ」の意でオナメが分布するが、これも上の文献例と関係があらう。202 図「おうま」の解説で述べたこととも関連するが、古語「め」が衰弱する過程で卑称的な位置に沈下することも考えられる。

また、赤の類が人間の女をあらわす表現と接尾辞～メとの結合形であるとするれば、それが動物一般の牝を意味せず、もっぱら「牝牛」の特称として用いられているのはなぜかという点が問題になるが、これは、「めうし」には、たとえば「めうま」に見られるようなダウマ、ゾオヤクなどの特定称(オトコ～・オナゴ～、オス～・メス～……などを一般称とした場合の)がないために、本来は一般的性格をもつはずのオナメなどが「めうし」の特定称としての性格を濃くしたのかもしれない。

赤の類は西日本のほか東日本各地にも見られるが、この分布から見て、東西の赤の類はかつては連続していたものと思われる。しかし、牛そのものの伝播経路が不明であるので、はっきりしたことは言えない。東日本各地のものはその領域の狭さから見て、各地に飛火的に輸入された可能性もある。

ONAME と UNAME の新古は分布からは判然としないが、ONAME の ONA がオナゴなどのオナと関係があるとすれば、ONAME から UNAME が生まれたことになる。ONAME と UNAME は各地で隣接しているから、それぞれの地域で独自に ON-AME>UNAME の変化が起こった可能性がある。

中国西部の UNAMI は、その両側に分布する ON-AMI と UNAME との混交によって生まれたものか、あるいは、UNAMI が先に生まれ、それと ONAME との混交により ONAMI が生まれたものか、のいずれかであろう。また、九州北部の UNO, UNOO は、UNAME, UNAMI などを母体にして生まれたものではないかと思われる。

次に、紺を与えた BABE 以下の語形について述べよう。

BABE および BABO は隠岐に、BAGO は広島北部から島根にかけて、BAKKO は能登に、BAME は八丈に、BASI は中国中央部にそれぞれ見られる。このうち、八丈の BAME 以外の語形は、本図および「うし」「おうし」の図に見られる BAKKO, BAKO と BA の部分について相互に関係するものであらう。なお、BABE, BABO, BAKKO の各語形については「おうし」の解説も参照されたい。八丈の BAME は伊豆大島の UBA と関係がありそうである。BAME の ME は動物の呼称の接尾辞であらう(「うし」は八丈では USIME である)。

「乳牛」と考えられる CIUSI, CICIUSI は近畿以東

に点在し、HOOUHIT, HOOHI は五島に、KATO, KATOUSI, KATOOZI および OMOZI は四国西部に、OYAUZI は広島に、SANBEI は三重に、YEE-NAN は与論に、ZYOO は滋賀に、それぞれ見られる。このうち、HOOUHIT, HOOHI の HOO は、あるいは「母」にもとづく語形で、HWAHWA>HWAWA (HAWA)>HOO と変化したものかもしれない。KATO~と OMOZI との関係については「おうし」の解説で述べたので参照されたい。YEENAN は琉球各地に分布する赤の類との関係も考えられる。ZYOO は、『全国方言辞典』に搭載されている「娘」「女兒の自称」「女兒に呼びかける詞」「人妻」などの意の「じょー」と関係があるかもしれない。

HIN から SINGYUU までは「牝」の字音にもとづくと考えられる語形である。「めうま」の図における同類の分布と比較されたい。

NYUUGYUU (北海道 0747.70), YOOGYUU (岡山), WAGYUU (岡山) は、それぞれ、「乳牛」「洋牛」「和牛」であろう。6466.16 の YOOGYUU に「乳牛を買うようになってから言うようになった」との注記があったが、外国から輸入した乳牛を「洋牛」と呼び、それに対して在来種の乳牛を「和牛」と呼んだものと思われる。

DAUSI から HINBA までは、主として「めうま」の図にかかわりをもつ語形が、なんらかの事情で本図に現われたものである。次に、それぞれの地点における「めうし」と「めうま」の語形を対照的に示す(括弧内が「めうま」)。

DAUSI・DAKKOUSI 4712.54(DAUMA), DAMA 7382.97(DAMA), DAMAUSI 7332.97(DAUMA), HADABEKO 2795.01(DAUMA), HAADA 3766.97(HAADA)・3768.50(DAUMA), ZYOYAKU 3735.50(ZYOYAKU), HINBA 376.787(DAUMA)。

上記のうち、3735.50, 3766.97, 7382.97 では「めうま」と「めうし」を区別していないことになる。ただし、「めうま」の解説で述べたように HADA, HAADA は必ずしも「牝馬」の特称とは言えないようであるから、DAMA, ZYOYAKU, HINBA などの場合とはやや事情が異なるかもしれない。HINBA は新語であるために、意味をとり違えたものであろう。

最後に、USI, BEKO, BEKKO, BEEKO の各語形の性格、および、それらと「無回答」との関連につい

ては、202 図「おうま」の解説の末尾を参照されたい。「調査してない」の性格についても、202 図の解説の冒頭で一括して述べた。

## 209. こうし(子牛)

本図は、204 図「こうま」、206 図「うし」、210 図「もうもう」(牛の鳴き声)などと関連するところが大きいので相互に参照されたい。とくに本図と 204 図「こうま」とは、そこに見られる語形または語形に含まれる形態素に共通するものが多いので、それらには同形の符号を与えるようにつとめた。語類の分けかた、凡例における見出し語形の順序についても、両図を一貫した原則で処理した。ただし、本図で茶を与えた類の語形は、「こうま」の図にはほとんど見られないものであるが、これは、「うし」および「もうもう」(牛の鳴き声)の図に見られる同類の語形との関連で符号を与えてある。

地図左下に掲げた質問文と本図に登載した語形との関係については「こうま」の解説を参照されたい。「牝の子牛」「牝の子牛」の注記のある語形も、「こうま」の場合と同じ原則で処理した。

「子牛一般」の注記のある語形と「ことし生まれた子牛」の注記のある語形とを併記してある地点で、「こうま」の図の原則に準じて前者の語形を削除した地点は 4733.91(BEKOKKO を削除)、5659.42(KOUSI を削除)の 2 地点だけである。

また、本図では KOUSI の語形に＜併用処理の原則＞を適用したが、「新」「共」「上」「希」などの注記がある KOUSI を削除した地点は、全国で計 22 地点あった。

紺を与えた語形のうち、コウシ類(凡例の KOUSI から HWAHUSI まで)は大部分が KOUSI であるが、そのほかの比較的勢力のある語形には、北海道から東北にかけて分布する KOKKOUSI、関東およびその周辺の USIK(K)O、西日本各地の KOUZI, KOOZI, 九州東部その他の USINOKO、宮崎を中心とする USINKO、鹿児島島の UINOKO などがある。また、琉球には「こうし」の「こ」にあたる部分に各種の変種が見られる。

本図では KOUZI, KOOZI など「うし」の「し」にあたる部分が ZI の語形が広く分布するが、206 図「うし」では~ZI の語形が全く見られない(「おうし」および「め

うし」の図には、ON' UZI, OMOZI, MEUZI, MEN' UZI, MENTAUI, KATOOZI, OYAUZI などの語形に～ZI が見られるが、本図と較べて地点数は少ない。「うし」の図に UZI など～ZI の語形が見られないことから判断して、KOUZI, KOOZI などが見られる地点では、その後部分を「うし」と意識する度合いが弱いのではないと思われる。したがって KOUZI からさらに KOOZI へと変化しやすいのであろう。なお、「おうし」「めうし」「こうし」の各図を対照して～ZI の語形の現われかたを詳細に検討すれば～ZI の成立などについてより精確な判断を得ることができよう。

凡例の KODOMOUSI から INAUZI までの語形については、「こうま」の解説を参照されたい。ただし、USINYA(N)KA 0294.66 と 0294.93, AKAUSIGAMA 2150.06, INAUZI 0248.00 は、「こうま」の図と直接は関連しない。USINYA(N)KA は USINYAKA と USINYANKA をまとめたものであるが、これらは、AKAUSIGAMA とともに、「赤児」のアカと関係があるかもしれない。INAUZI は「小牛」の意味であろう。22 図「ちいさい」における INA ～の分布を参照されたい。

茶を与えた BEKO から MEMEKOZI までは、牛の鳴き声の呼称 (210 図参照) とのつながりが考えられる。BE, BO, ME などを語構成の中心とする語形を一つの類としてまとめたものである。したがって茶の類はさらにいくつかの小語類に分けることも可能であり、地図を一見してわかるように各種のグループが各地にそれぞれの領域をもって分布する。しかし、茶の類全体としても東西にそれぞれ大領域をもつことに注目したい。

BEKO から KOKKOBEEKO まではベコの類としてまとめられる。このうち、BEKO は三重とその周辺地域、兵庫から京都、徳島などにかけて、広島から島根にかけてなどに専用地域をもち、BEEKO は京都、山口、佐賀、その他、どちらかと言えば BEKO の外側に分布する傾向が見られる。北海道や東北に分布するものには BEKONOKO (北海道に多い)、BEK(K)OK(K)O, KOK(K)OBEO, KOBEO などが比較的多いが、これらは、206 図「うし」と対照するとわかるように、「うし」を意味する BEKO, BEG[g]O などに対する「こうし」をあらわす表現である。なお、BEK(K)-OK(K)O の内容は大部分が BEKOKKO または BEKOKO であるが、そのほかに BEKKOKKO が含ま

れる。KOK(K)OBEO の内容は大部分が KOKKOBEO であり、KOKOBEO は比較的少ない。また、206 図では [beko] [bego] を地域にかかわらず BEG[g]O として分出したが、本図では、東北など語中語尾の K が有声化する地域の [~ko] [~go] は茶以外の類をも含めて、すべて KO と表示してあるので注意してほしい。

ベコの語形の由来および本図に見られるベコと 206 図「うし」の図に見られるベコとの歴史的関係については 206 図の解説で述べたので参照されたい。ただし、206 図の解説では、ベコの語形の由来について、主として牛の鳴き声をあらわす表現との関連を述べたが、204 図「こうま」の解説で述べたように、「小さい」の意味で、「べっこい」が滋賀、三重に、同じく「ばっこい」「ばっこ(だ)」が東北各地に分布するから、この事実と、「うし」または「こうし」の呼称としてのベコとは相互に関係をもつものではないかとも思われる。すなわち、少なくとも西日本の「こうし」を意味するベコは「小さい」の意味の「べっこい」に由来するという見方も可能である。しかし、「べっこい」の由来そのものが不明であり、かりにベコが「べっこい」にもとづくとしても、それが単に「小さいもの」の表現にとどまらず、主として「こうし」の呼称として分布すること(「こうま」の意味の BIKKO, BEKKO との関連については「こうま」の解説を参照されたい)や、また、「こうし」の呼称として、BE を含む語形がベコの語形に連続して西日本に広く分布することの背景には、牛の鳴き声の呼称が少なからぬ影響を与えているものと思われる。

BE(E)BE(E), BENBE などの BE の反復形は中国から九州北部にかけて分布する。これらは、BE(E)-BENOKO, BENBENOKO, BE(E)BENKO, BE(E)BEK(K)O, BE(E)BE(E)GO などと各地で隣接しており、両者は歴史的に相互に密接な関係をもつものと思われる。また、これらと BEKO, BEEKO などとの関連についても考慮しなければならない。

BE(E)BE(E) の内容は大部分が BEBE または BEEBEE であるが、ほかに少数の BEBEE, BEEBE が含まれる。BE(E)BENOKO, BE(E)BENKO の内容は大部分が、それぞれ、BEBENOKO, BEBENKO である。BE(E)BEK(K)O の内容は大部分が BEBEKO で、ほかに BEBEKKO, BEEBEKO, BEEBEKKO が含まれ、BE(E)BE(E)GO

は大部分が BEBEGO であり、そのほか BEEBEEG-O が含まれる。なお、BE(E)BE(E), BE(E)BENK-O などには「生まれて6カ月までの子牛」「生まれたばかりの子牛」などの注記や、「対幼児語」との注記のあるものが見られた。また、BE(E)BE(E)には「子牛を呼び寄せる時に使う」と注記のあるものがあつた。これらの注記から判断して、BE(E)BE(E)~ の語形は子牛(とくに生まれて間もない子牛)の鳴き声と密接な関係があり、その擬声語的性格のため一部の地点では幼児語的傾向をもつものと思われる。「子牛を呼び寄せる時に使う」との注記のある語形は子牛をあらわす表現とはやや性格が異なるとも考えられるが、その意味的な境界は微妙であると思われるので一応採用しておいた。

BEE, BE(E)BE(E) などの変種と考えられる語形のうち、やや変わった、孤立的なものとしては、HEB-E, HEBENOKO, EBO がいずれも愛媛北端に、HEBENKO が、飛んで熊本 8303.47 に、BEEYAN が兵庫に、BIBI が鹿児島島の長島 8310.26 に、BEEK-AN が福岡 7320.95 にそれぞれ見られる。

なお、『全国方言辞典』によれば、「不潔」の意味の形容詞「べべか」「べべしい」が長崎、五島、壱岐、大分に分布するが、これと子牛の呼称の「べべ」とはなにか関係をもつものであろうか。

BEEBOO 7246.82, BEBOKO 3689.75, KOBEB-O 5623.27 のうち、3689.75 と 5623.27 のものは、「うし」の図でそれぞれの地点に BENBO, BEBO が見られることと対応する。7246.82(五島)のものは、「うし」および「もうもう」の図でこの地域に BO を含む語形が見られないという点で孤立しているが、本図では九州に BOI 7347.55, 7355.81, KOB(O)8229.96 のような BO を含む語形が点在し、さらに、次に述べる九州南部に集中する BEBU, BEBUNKO も BEBO とのつながりが考えられるから、本図に分布する地点以外にも、~BO 的な語形が各地でより多く用いられている可能性もある。なお、7355.81 の BOI には「呼ぶときに使う」との注記があつた。また、BOI は愛媛の BOIBONOKO 7329.57 ともつながりをもつものであろう。

九州南部の BEBUNKO は「うし」の図における BEBU にほぼ対応するものである。本図で BEBU の地点 8322.43, 8363.51 は「うし」の図では USI である。なお、「うし」の図における BEBU については、「うし」の図の解説を参照されたい。

KOBO(O), KONBO(O)は愛知から静岡にかけて集中するほか、山梨、伊豆諸島、和歌山、その他の地域に見られる。これらは「子のボ(オ)」と考えられるが、「うし」の図でこの地域に(~)BO(O)の語形は少ない。これは、あるいは、「うし」を意味する BO(O)は幼児語などの世界に沈下したためかもしれないが、接尾辞としてのボ(オ)は「うし」以外の語形にもつきうる(たとえば「アバレンボ(オ)」「ツクシンボ(オ)」など)から、それらのボ(オ)との関係についても考慮しなければならない。また、BO(O)の語形は、むしろ「おうし」の図に多いが、「おうし」の意味の BO(O)と本図の KOB(O), KONBO(O)との関連については、本図に登載したそれらの語形に「牡の子牛」と注記のあるものが含まれていないから、KOB(O), KONBO(O)は「おうし」の BO(O)よりも「うし」の BO(O)との結びつきの方が強いと判断される(ただし、6697.59 では別に総称があるため削除した語形の中に、「雄」と注記のあるコンボがあつた)。なお、6631.60 では「子馬、子山羊、子豚も、それぞれ~のコンボオと言う」と注記があつたが、本図に USI(NO)-KONBOO が見られることや、「こうま」の図に KOB-O, KONBOO, UMANOKONBOO が見られることは、そのような事情の現われであろう。ただし、~NOKOBO(O), ~NOKONBO(O)の語形は非常に少ないから、KOB(O), KONBO(O)は、大部分の地域では、主として子牛を指す語形と判断して良いのではないかと思われる。

BE(E)C(C)I から BEC(C)IKO までは、広島から島根にかけて集中するほか、福井に BE(E)C(C)YA が見られる。BE(E)C(C)I の内容は BECI または BECCI が大部分であるが、ほかに BEECI も含まれる。BE(E)C(C)YA は [be: tʃa] 5585.63 と [bettʃa] 5595.05 とをまとめたものである。この~CI, ~CYA は接尾辞的性格をもつものと思われるが、その由来や、どんな語につきうるかという点などははっきりしない。なお次に述べる~TA との関連も考えられる。

BERUNOKO 7415.01, BEROKO 7405.85, BER-AKO 7359.78 は四国に見られる。これらの前部分は「うし」にあたると思いたいところであるが、「うし」「おうし」「めうし」の図に BERU, BERO, BERA の語は見られない。ただし、『全国方言辞典』によると、山口県大島では乳児の意味で「べろ」を使うが、この「べろ」と「こうし」の BER~とはなにかつながりがありそうである。

BEBETA は山口に, BENTA, BENTANOKO は島根・鳥取県境に, BETANKO 6415.78, BEETA-NGO 6415.83 は鳥取に見られる。この～TA は「おうま」「おうし」「めうま」「めうし」の図に見られる ONTA, MENTA などの～TA と同じ性格の接尾辞ではないかと思われるが, この地域には上の各図を通じて ONTA, MENTA などの～TA の語形は非常に少ない。ただし 109 図「あご」を見ると島根・鳥取県境に AGOTA が集中し, 107 図「はほ」で同地域に HOTA, HOOTA が見られるから, この～TA は動物の呼称や人間の身体部分をあらわす表現に現われやすいものかもしれない。～CI, ～CYA との関連がありそうなことは, すでに述べた。

BABEUSI は愛媛 7420.91 に, BIYO は奄美の徳之島 0275.36, 0276.50 に, BYONKO は鹿児島 8343.97 に見られる。BYONKO はビヨノコの変化形であろうが BIYO の由来は不明である。島根の HYOONOKO と語形は似ているが分布が違い。

MOOI から MEMEKOZI までは, MOO, MEE など, 牛の鳴き声をあらわす表現と密接な関係をもつと見られる語形である。以下にそれぞれの語形が分布する地点の番号を掲げておく。210 図「もうもう」などと対照されたい。MOOI 0228.96, KONMOO 7279.93, ME 3711.98, 6473.04, 6463.73, MEME 6594.67, MEEN 6440.25, MENME 7504.27, MEEMYAA 1213.76, MEIZI 7533.11, MEENOKO 5462.57, 5463.64, 6267.16, 6277.62, MENKO 4588.98, 4589.83, 4653.02, 6425.57, 6446.05, 7417.22, 7511.66, 7513.01, MENG0 6657.96, MEEKO 7513.01, MEKOZI 7513.15, 7533.12, MEMEKOZI 7533.12。

これらの語形には牝のメ・メンなどつながりをもつものが含まれる可能性があるが, 上記のうち, 「牝の子牛」と注記のあったものは, 7511.66 の MENKO だけであった。また, 6440.25 の MEEN には「子」および「鳴き声から」の意の注記があった。なお, 紀伊半島南部には MEME, MENME, MEIZI, MENKO, ME-EKO, MEKOZI, MEMEKOZI のような ME～の語形が集中するが, 「めうし」の図を見ると, この地域に MEUZI, MEEUZI, MEOZI, MIYOZI, MYOOZI, MENKO などが見られ, 両図の関係について興味ある現象がうかがわれる。なお, 『全国方言辞典』などによると, メメが小さいものをあらわす場合がある

ようであるが, 以上示したものの中に, 関連するものが含まれているかもしれない。

赤を与えた TO(O)ZAI から TOONENGO までは, 本図よりも 204 図「こうま」に広く見られる語形である。これらの語形については 204 図の解説を参照されたい。本図と 204 図とを比較すると, 赤の類の領域の違いは, 東日本, とくに北海道で著しいようであり, これは, それらの地域では赤の類の語形は「こうし」よりも「こうま」について使う傾向が強いことを意味していると考えられる。

次に, 紺を与えた ISSAI 以下の語形(ただし, BEKO を含む語形には茶を与えたものがある)について述べよう。ISSAI 6552.88, 7435.07, ISSEE 6408.15, KOTOSIKKO 5628.23 は, 「こうま」の図に同類の語形が見られるので, その解説を参照されたい。ただし本図と「こうま」の図とで分布が異なるが, これは, この種の語形が各地で現われうること示すものであろう。

UMAREKKO から MAEKOBeko までは, いずれも「生まれ」にもとづくと考えられる語形で, これらのうち NMAREBEKOKO 以下は青森西部から秋田北部にかけて分布するが, UMAREKKO は群馬 5635.48 に, UMAREGO は島根 6430.26 にそれぞれ見られる。なお, 「こうま」の図でも青森に MAREMAK(K)O が見られるが, 本図の方が語種も多く分布も広い。また, 群馬, 島根に点在することから, この種の語形は, コウシの類やトオザイの類などとはややずれた意味内容をもつ語として, より広い地域に潜在する可能性もある。

CIBANARE 7423.80, CICIBANARE 4666.99 は「乳離れ」であろう。CIBA 7326.41 には「1歳半くらいまで」との注記があったが, 次に述べるマルハ, マルクチなどに見られる注記との関連も考慮して符号を与えておいた。

MARUHA 6552.88, MARUKUCI 6398.42, 6485.46, 7402.42 には「乳歯の生えかわり終わる生後 20 ヶ月くらいまでを言う」など, これに類する注記があった。

KO 4773.15, 7418.07, KOKKO 0896.22, 0897.91, 3783.58, 4659.01, 6657.54, KODOMO 5781.22 は「こうま」の図にも見られる語形であり, その解説を参照されたい。AKANGO 6686.75 もこれに準ずる。

KORO は栃木を除く関東各県に散在し, それに隣接して USIK(K)ORO, TOOZEKKORO など～KORO が見られ, また, TANKORO が岐阜 5588.81 に,

KOCCUGORO, UNAMEGORO が宮崎 7386.55 にある。なお、TANKORO, KOCCUGORO は「牝の子牛」、UNAMEGORO は「牝の子牛」と注記のあったものを、他に総称がないので採用したものである。～KORO, ～GORO, KORO, GORO の語形は「こりま」や「おうし」の図でも少数地点に見られるが、この種の語形は本図における勢力が、地域的には関東一円で最も強い。なお、『全国方言辞典』に「ころ」の見出しで「①仔猪 奈良。②子牛 神奈川。③豚の子 千葉。④犬の子 茨城・千葉・神奈川・長野・岐阜・三重・奈良。」(郡名は省略)とあり、この記述では「犬の子」としての分布が最も広そうに見える。

KODO 6505.58 の由来は不明である。KORO の変種である可能性もあるが、むしろ、滋賀や静岡などに見られる KOBO の変種とみた方が良いかもしれない。一方、「おうし」の図で滋賀南部に見られる DOKOTTE の DO とのつながりの有無も一応検討の対象としてあげておきたい(「おうま」の図では、宮城にも DO の語形がある)。

SUMO(O)RO 5677.85, 6639.79, SUMOORU 5688.01 には、「英語の small に由来するという説」と注記のあるもの 5688.01 や、「できたばかりの牛」と注記のあるもの 5677.85 があった。なお、5688.01 の SUMO-ORU は「牝の子牛」とあるものを採用したものである。

YOOYOO から YOKO までは岡山に集中する。HYOONOKO 6339.35, 6339.37 は YOOYOO の類と語形が似ており、一方、これは「ひよこ」の意味のヒョーナ、ヒョーナッコ(『全国方言辞典』によれば、仙台、神奈川、静岡、山梨、長野の各地に分布する)との関係も疑われるが、地域的にかけ離れている点に問題がある(なお、「ひよこ」との関係では山口に HINAUSU があることが参考になる)。HOOGO 6378.87, 6397.24 も、あるいは HYOONOKO とつながりがあるものかもしれない。

DENGO は鳥取東部に、また、KABE は島根西部付近に、それぞれ専用領域をもつ。KABE は、あるいは KOBE(E)などの変化形かもしれない。

TONKO 5731.13, 5741.30, TONKOME 5731.13 は「こりま」の図にも見えるもので、あるいは赤の類——たとえば TO(O)NEK(K)O など——との関連も考えられるが、疑問もあるので紺を与えておいた。八丈の CY-O(N)KOME は TONKOME と関連させて符号を与

えた。

ZIGO(USI) 6582.48 は孤立形であるが、これは付近に分布する KOUZI, KOOZI との関係も考えられる。しかし、あるいはよそから購入した子牛に対して自分の家で生まれた子牛を「地の子牛」として ZIGO(USI) と呼んだものかもしれない。

TOKU(GYUU) 0840.33, 0896.22, 1863.48, 4653.84, 6639.79, 6730.33 は子牛を意味する「犢」の字音(漢音トク・呉音ドク)にもとづくものと思われる。上記地点のうち 4653.84 で TOKU または TOKUGYUU とあったほかは、他の地点のものはすべて TOKU である。ただし、0840.33 の内容は [toku] であって、これは次の DOGU とも関連する。なお、TOKU には「馬喰の影響で使う」「商売で使う」と注記のあるものや、「牝の子牛」とあるもの 6639.79 が含まれている。

DOGU 5579.42 は内容が [doɕu~donu] であったもので、この [ɕ] は有声化でありうるが、[ɲ] も見られるので、この見出しとした。注記に「時により両方の発音をする。犢の音よみという」とあった。

ZOKU 6643.72 と「犢」との関係の有無ははっきりしないが、これは「おうし」の図で八丈に集中的に見られる ZOK(K)U とつながるものではないかと思われる。

KOTTOI から KATOZI までは、「おうし」または「めうし」の図に主に現われる語形(または、それに KO, GO を加えたもの)である。事実、これらは「牝の子牛」「牝の子牛」と注記があって他に総称がないために採用したものが多くのであるが、注記のない地点もかなりあった。併用の地点では、注記のない場合でも、牝または牝の子牛としての性格の強いものかもしれない。単用の場合には子牛の総称といって良いものとも言えるが、分布から見て、これらは子牛の総称について自信がないため、隣接の意味分野のものを誤って答えた可能性もある。以下にそれぞれの語形の分布する地点番号を掲げ、「牝の子牛」「牝の子牛」と注記のある地点については地点番号の後に(牝)または(牝)と記しておく。

KOTTOI 6480.41, 6516.10, 6535.90, 7417.22, KOTEE 3767.87, KOTTE(USI) 7351.68, KOTEKO 2732.39, 4720.17(牝), 4760.64, 4751.42(牝), KOTEKO-KKO 4760.64(牝), KOTTEKO 7511.66(牝), KOT-(T)E(E)GO 5472.34(牝), 6267.68, 6413.43(牝), 6413.76(牝), 7218.58(牝), 7394.14, KOC(C)IGO 7395.25, 8324.26(牝), KOCINKO 8306.42(牝), KO-

CCUGORO 7386.55(牝), KONDAI 6386.66, GOTT-  
ONOKOO 5518.20, MEK(K)AK(K)O 4703.18,  
4720.17(牝), MESU 5588.81(牝), MESUKKO  
5688.01(牝), ONANGO 5472.34(牝), 6413.76(牝),  
MERAGO 8324.26(牝), MENAKO 4751.42(牝),  
4760.64(牝), 4762.04, BIINOKO 4663.06, ONAM-  
EGO 6487.66, 7394.14, OMAMIGO 6413.43(牝),  
UNAMENKO 8306.42(牝), UNAMEGO 7395.25,  
UNAMEGORO 7386.55(牝), KATOZI 7430.80.

なお, KONDAI は「おうし」の図におけるコトイ類との関係を考えて符号を与えたが, これは, あるいはコトイ類と直接は関係がないものかもしれない。これに関して『平家物語巻八』に「木曾牛飼とはえいはで, 『やれ子牛こでい, やれこうしこでい』といひければ……」(『日本古典文学大系 35』141 ページ)とあり, 校注者の頭注に「『こでい』は健兒(こんでい)で諸官署で使われる下僕。義仲が牛飼を『子牛健兒』と勝手な名前をつけたものか。延慶本では『牛小舎人』とあることが参考になる。もし牛飼を「こうしこでい」と言う方言があったとすれば, その「こでい」がさらに子牛の意味に変化することはありうると思われる。

「その他」に含めた語形は次のとおりである。[tsunna] 4598.33, デッチコ 5569.36(牝), ピンタコ 5569.36(牝), [komma] 6698.20, [gigago] 7504.11。このうち, デッチコは「おうし」の図における DECCI と, ピンタコは「めうま」「めうし」の図や 138 図「おんな」(卑称)における B-INTA とそれぞれ関連する。

「無回答」および「調査していない」については, 202 図「めうま」の解説で一括して述べたので参照されたい。

## 210. もうもう(牛の鳴き声)

牛の鳴き声一般, および子牛の鳴き声について質問し, 子牛の鳴き声に特別な言い表わし方が認められれば, それを注記するという形で報告を求めたものである。したがって, この項目は「牛の鳴き声一般」(以下, 「牛の鳴き声」と略称する)と「子牛の鳴き声」との 2 枚の図に分けることも可能であるが, 子牛の鳴き声に特称が認められない地点がかなり多かったので, 両者を 1 枚の地図にまとめて掲載し, 子牛の鳴き声に特称が認められる地点のみそれを「子牛の鳴き声」(凡例 B)として地図上に表示することにした。したがって, 牛の鳴き声と子

牛の鳴き声とが同一形式の地点や, 牛の鳴き声のみをカードに記載し, 「子牛のは別でない」「子牛は NR」などと注記のある地点の語形は, それを「牛の鳴き声」(凡例 A)として地図上に掲載してある。1 地点に 2 つ以上の語形が併記してあって, しかも, 牛の鳴き声, 子牛の鳴き声に関する注記のない場合も, 「牛の鳴き声」(凡例 A)どうしの併用として地図上に掲載した。なお, 本図では数地点で MOO MOO・MOON などの語形について「共」「新」「希」の注記があった程度なので, <併用処理の原則>は適用しなかった。また, 「未調査」の地点については 202 図の解説に一括して触れてあるので参照されたい。

以上が本図作成の基本原則であるが, 次に, 具体的処理にあたって問題となったケースの処理原則について述べる。

まず, 牛の鳴き声として 2 つ以上の語形(たとえば MOO と MEE)が併記してあり, それに加えて子牛の鳴き声としてそのうちの一部の語形(たとえば MEE)が記してある場合には, それらの語形のすべてを「牛の鳴き声」(A)として扱った。このケースについては, 上記の MEE を「主として子牛の鳴き声について言う」と解釈して「子牛の鳴き声」(B)として扱うという考え方もあろう。しかし, 本図作成にあたっては, 「子牛の鳴き声」(B)は, それぞれの地点で「子牛の鳴き声を表わす場合のみに用い, しかも牛の鳴き声一般や成牛の鳴き声を表わす場合には用いない語形」に限定することにした。その理由は, この項目の質問形式が特殊(あいまい?)だったため, 上記のケースなどについて調査者の扱いに差があると思われるからである。

上記と類似のケースであるが, 牝牛が  $x$  語形, 牝牛および子牛が  $y$  語形の地点 (3724.36, 3736.03, 6441.55, 7307.18, 7359.78, 8341.46) では,  $x \cdot y$  とともに「牛の鳴き声」(A)として扱った。これは,  $y$  語形が子牛の鳴き声のほかに(牝の)成牛の鳴き声をも表わすから, という理由による。しかし, 上記の地点で牝牛が MOO, MOO MOO, MOON, MOON MOON のいずれか, 牝牛および子牛が MEE, MEE MEE, MEEN, MEEN MEEN のいずれかであって, 牝牛および子牛の鳴き声が牝牛の鳴き声と対立することが注目され, このことは, 牛の鳴き声一般を  $x$  語形, 子牛の鳴き声を  $y$  語形と報告した地点でも, 実は  $y$  語形が子牛の鳴き声のほかに牝牛の鳴き声を表わすのにも用いられる場



合が多いかもしれないことを予想させる。しかし、質問法・記入法の厳密さが欠けていた事情から、どうすることもできない。

次に、牛の鳴き声と子牛の鳴き声との区別ではなく、それ以外の区別として2つ以上の語形を報告した地点が若干あった。それらはすべて「牛の鳴き声」(A)の併用として扱った。それらの大部分は、牡牛の鳴き声と牝牛の鳴き声とを区別するもので、具体的には次の地点である。3725.72, 3736.58, 8334.63 (以上の地点は、牡—MOO MOO・牝—MEE MEE), 3726.25 (牡—OO OO・牝— $\tilde{E}A \tilde{E}A \tilde{E}A$ ), 6369.32 (牡—MOON・牝—MEEN), 6487.43 (牡—MOO MOO・牝—UOO UOO) (この地点は他に子牛の鳴き声として MEE MEE がある), 7374.15 (牡—MOOO・牝—MEEN)。以上にみられるように、多くの地点では牡牛の鳴き声がモオ～型、牝牛の鳴き声がメエ～型であって、この対立が各地にみられる「牛の鳴き声」と「子牛の鳴き声」との対立や、先に述べた牡牛の鳴き声と牝牛・子牛の鳴き声との対立の場合と同様の語形を採っていることが注目される。このほか 4713.02 では腹のへった時が NMOO, 発情した時が MEE, さらに、4598.33 では牛の鳴き声が MEEN, 若い牛の場合は MOON とあったが、いずれも「牛の鳴き声」(A)の併用として処理した(4598.33 の「若い牛」は「子牛」と認めなかった)。

以上にあげた例のほかにも処理にあたって問題が生じたケースがいくつかあったが、それらの具体的な内容は『日本語地図図資料』についてみられたい。

なお、3740.33 および 6686.75 の地点では無回答と「子牛の鳴き声」(B)との併用となっているが、これらは牛の鳴き声については無回答とあり、子牛の鳴き声についてのみ語形が記載されていたものである(子牛の鳴き声のみが無回答の場合はそれを地図上に登録していないことは、すでに述べた)。

次に、本図における符号の与え方の原則について述べよう。まず、色については、モオ類(凡例の MOMO から MYOOO まで)、ボオ類(BOO から BEE BOO まで)、オオ類(OO から  $\tilde{O}OOON$  まで)のように、母音部分にOを含んでいる語形には空を、メエ類(ME から INMEEN まで)、ベエ類(BEE から BOBEE BOBEE まで)のように母音部分にEを含んでいる語形には赤を、そのほかの語形には紺を与えた。ただし、BEEBOO や BOBEE BOBEE などのよ

うに O と E の両方を含んでいる語形には、後部分の母音によって色を与え、また、OWA および  $\tilde{E}A \tilde{E}A \tilde{E}A$  はそれぞれ空の類、赤の類から除外した。符号の形については、凡例の BOO から BOBEE BOBEE までのように子音 B を含む語形には線符号を、また、凡例の OO 以下のように内部に子音 M や B を含まぬ語形には分銅型・つりがね型などの符号を与えて、それら以外の、内部に子音 M を含む語形(凡例の MOMO から MYAN まで)と区別した。

さらに、「牛の鳴き声」(A)と「子牛の鳴き声」(B)との区別については、面符号の場合は A にぬき符号、B にべた符号を、線符号の場合は A に直線的符号、B にかぎ形符号を与えることによって両者を区別した。したがって、べた符号とかぎ形符号を追うことによって「子牛の鳴き声」(B)の分布を知ることができる。

次に、主な見出し語形の内容について説明しよう。

MOO, MOOO, MOOON, MEE, MEEE などのように母音の連続を含む見出し語形の内容には、それぞれ [mo:] [mo::] [mo::N] [me:] [me::] などのほかに、[mo·] [mo·:] [mo·N] [me·] [me·:] のような半長音をもつものも含めた。MOO, MOON, NMOO, NMOON, BOO などの OO の部分には、内容が [ɔ:] のもの(新潟・宮崎に多い)を、また、MEE, MEEN, BEE などの EE の部分には、内容が [e:] や [e:], [æ:] のものを含めた。なお、MII MII(6513.51)の内容は [mĩ:mĩ:] である。また、MOOO には [mo:u] (7659.31), [mo:ũ] (6630.43) を、MOO には、[mo:ʔ] (6539.12) を含めた。

MO $\tilde{O}$ , MOO $\tilde{O}$ , ME $\tilde{E}$ , MII $\tilde{I}$  など、末尾母音の鼻音化を見出しに表出したものには、[moĩ], [mo::ĩ] [meĩ] [mi::ĩ] などのほか、MO $\tilde{O}$  には [mo~], MOO $\tilde{O}$  には [mo~], MEE $\tilde{E}$  には [me~] のような、末尾母音の次に鼻音化が記されているものを含めた。なお MEGA (4619.23) の内容は [menã] である。M $\tilde{O}$ O, O $\tilde{O}$  $\tilde{O}$ O, (3702.81) のような、語中の母音の鼻音化を表出したものの内容は、それぞれ、[mõ:], [õ::ĩ:] であり、また、MO $\tilde{O}$ N (6568.09), MOO $\tilde{O}$ N (6559.22), MEE $\tilde{E}$ N (8373.43) の内容は、それぞれ、[mo·vN], [mo·vN], [me·vN] である。 $\tilde{O}$ O,  $\tilde{O}$ OOON (4676.39),  $\tilde{U}$ U,  $\tilde{U}$ MOO など、語頭の母音の鼻音化を表出したものの内容は、それぞれ、[õ:~], [õ::~N], [ũ:], [ũmo:] であり、 $\tilde{U}$ I (3649.58),  $\tilde{U}$ UN (4685.88) の内容は、それぞれ [ũĩ], [ũ::N] である。

MOON, UMOON, MEN(3750.28), MEEN, ON(4648.42)など末尾音節をNと表出したもののN部分の内容は[m](7332.52), [n][ŋ][N]などのほか, [mo:n:] [umo:n:] [mæn:] [oN:] のような, 末尾鼻音が長音のものを含めた。ただし, [m:mo:] [m::mo:] [m:mo:n] [m:bo:] [m:po:] や [m:] [m:] [N:N:] のように, 語頭の鼻音が長音のものや, 語形全体が長い鼻音のものは, それぞれ, NNMOO, NNNMOO, NNMOON, NNBOO, NNPOO, や NN, NNN, NN NN のように, それを見出しに表出した。

[ʔmmo:] [ʔmmu:] [ʔme:] [ʔmbo:] [ʔmbu:] などのように声門閉鎖音に先立たれる語形は, それらを分出せずそれぞれ, NMOO, NMUUU, MEE, NBOO, NBUU に含めた。なお, これら声門閉鎖音に先立たれる語形は五島の [ʔme:] (7246.82) 以外はすべて沖縄本島以南の琉球諸島に見られる。

そのほか, OO は [o:] と [wo:] を, UU は [u:] と [wu:] をまとめたものであり, [wONwON] (8344.71) の見出しは ON ON とした。同様の観点からモウオ (6517.65) は MOO に, [mʷo:N] (6575.40) は MOON に含めた。ただし, ウオーウオーおよびウオーウオーは UOO UOO として分出したが, これらも, あるいは [wo: wo:] 的なものであるかもしれない。ĒA ĒA ĒA (3726.25) の内容は, エッア エッア エッアであり, 「エは鼻に抜く」との注記があったので, この見出しとした。

この項目では「牛(および子牛)の鳴き声をどう言い表わすか」すなわち, 牛・子牛の鳴き声を表現する言語形式を求めているのであるが, 地点によっては, 鳴き声そのものを, もの真似的に発声してみせた場合があるかもしれない。実際にはこの区別はあいまいの場合が多いと考えられ, ĒA ĒA ĒA は, あるいは, もの真似そのものの例と言えるかもしれない。

さて, 全国を大観すると, 最も目立つ地域差は, 空のモオ類・ボオ類・オオ類—以下, (〜)OO 類と称する—と, 赤のメエ類・ベエ類—以下, (〜)EE 類と称する—との対立である。すなわち空の(〜)OO 類は, ほぼ全国に分布しているが, 宮城・山形以北の東北や山梨などでは希薄であり, それに対して赤の(〜)EE 類は, 上記の地域と, 主として琉球を除く近畿以西の西日本に見られる。ただし, 東北各地や山梨の(〜)EE 類は主として「牛の鳴き声」(A)として分布しているのに対し, 西日本のそれは, 大部分が「子牛の鳴き声」(B)である。すなわ

ち, 東日本では「牛の鳴き声」(A)と「子牛の鳴き声」(B)とを区別しない地点が大部分であるのに対し, 琉球などを除く西日本各地では両者を区別する地点が多い。

(〜)OO 類と(〜)EE 類との新古はどうであろうか。本図において, 言語地理学的解釈の一般原則が適用できるとすれば, (〜)OO 類は中心地である京阪や江戸を含む地域に広がり, (〜)EE 類は国の両端や辺地に分布する傾向が認められることから, (〜)EE 類が古く, (〜)OO 類が新しいという解釈が成り立つ。ただし本図から「子牛の鳴き声」(B)として分布する語形を排除し, 「牛の鳴き声」(A)のみについてみれば, 西日本の(〜)EE 類の大部分は消去されるわけであるから, (〜)EE 類が必ずしも周囲分布をなしているわけではないが, この点については, 古くは「牛の鳴き声」(A)が全国的に(〜)EE 類であったところに新たに(〜)OO 類が広がった結果, 西日本各地では(〜)EE 類が「子牛の鳴き声」(B)の位置に移動したという推定が可能である。この推定は, 古くは「牛の鳴き声」と「子牛の鳴き声」とを区別していなかったという考え方に立っているが, 岩手北東部や伊豆諸島などには西日本各地と同様に両者を区別する地点が集中的にみられ, このことは両者を区別する体系の方が古いことを意味するのではないかという疑問を起こさせる。もしそうであるとすれば, 古くは全国的に「牛の鳴き声」は(〜)OO 類, 「子牛の鳴き声」は(〜)EE 類であったものが, 何等かの事情で両者の区別を失い, 関東・中部などでは両者とも(〜)OO 類に, 山梨・宮城・山形・秋田などの多くの地点では両者とも(〜)EE 類になったのであろうか。しかしながら, 後者の推定については, 両者の区別が失われるための理由づけが困難であり, 現段階では前者の推定の方が蓋然性が高そうに思われる。なお, 本図の解釈をより真実に近づけるためには, 他の動物(羊・山羊など)の鳴き声との関連についても考究する必要がある。

また, 本図は擬声語の分布図であるという点に特色があり, この場合に, 言語地理学的解釈の一般原則が適用できるか否かも問題になろう。意味と形式との結合が恣意的であり, それにもかかわらず一定の地理的分布が認められるところに「解釈」の根拠があるとするれば, 擬声語にあっては, その対象の固有の音(声)をいわば模倣するわけであり, 形式選択の恣意性について, かなりの程度に制約を受けるであろうと思われる。したがって, 同一形式が相互に離れて分布している場合に, 両者がそれぞ

れの地域で独自に生まれた可能性が他に比して圧倒的に強いことに注意しなければならない。

次に(～)OO類・(～)EE類の中で、比較的まとまった分布を示す語類についてその分布地域の概略を記しておこう。まず、MOON, MOON MOON, MEEN, MEEN MEEN など語末がNの語形が千葉南部、静岡、奈良、中国西部から四国北部や九州北部にかけてなどの地域に集中している。また、NMOO, NMOO NMOO, NMOON, NMEE, NMEE NMEE, NMEEN, NMEEN NMEEN など語頭がNの語形が、四国の東寄りの地域や福岡北部などになりにまとまって分布している。さらに、語頭がBの語形では、BOO, BOO BOO, BEE などが新潟西部から長野北部にかけて、BEEN, BEEN BEEN などが山梨にややまとまった分布を見せているほか、東北各地や九州の一部などにも点々とみられ、NBOO, NBUU などのNB～の語形が八重山に集中している。

(～)OO類・(～)EE類以外の語形については、MUU, MUU MUU, NMUU, NMUU NMUU, NBUU, NBUU NBUU などの母音がUのものが琉球各地、特に、奄美と宮古に集中している。これらは、本土のMOO, NMOOなどに音韻的に対応するものと考えられ、擬声語の場合にも、それぞれの地域の音韻上の特色を反映していることが注目される。ただし、沖縄本島では、大部分がMOO, NMOOなどの(～)OO類であり、奄美の(～)UU類と対立した分布を示している。これは、牛が伝来した時期の相違によるものかもしれない(質問番号218では、それぞれの土地における牛の飼育の有無について質問することになっているが、その結果によると、奄美ではすべての地点で「飼育」とあるのに対し、沖縄本島ではこの点に関する報告が少なく、報告のある地点では飼育数が少ないという地点が多かった)が、先に述べたように[mɔ:]など開音[o:]のものが開合の区別の認められる新潟と宮崎に集中的に見られるところから、沖縄本島などの(～)OO類は、これらの開音の系統を引くという推測も可能である。ただし九州の開合の区別は、一般に[o:]と[u:]との対立であると言われているから、宮崎の[o:]の性格については、なお検討を要する。宮古および八重山には(～)OO類と(～)UU類との両方があり、そのほか琉球のみに分布する語形としては、MAA, MAA MAA が奄美と八重山に見られる。母音がUのものは本土にもMUU(3760.33),

BUU BUU(5566.95)のほか、UU, ŪU, UU UU, ŪU ŪU, ŪUU, UUN, ŪUN, ŪI の語形が各地に分布し、特に石川・富山両県にはUU, ŪU, UU UUが集中する。

なお、本図と206図「うし」との関係については、206図の解説で触れた。

## 211. もぐら(土竜・鼯鼠)

この図を見る場合、おおまかに言ってつぎの2つの観点が考えられる。ひとつは語頭に注目して、モグラ、モグラモチ、ムクロ等のような、語頭にMを持つ類であるか、オゴロ、オゴロモチ等のような語頭に母音が立つ類であるかという観点である。もうひとつの観点は、モグラ、ムクロに対するモグラモチ、ムクロモチ、オゴロ、ウグロに対するオゴロモチ、ウグロモチのように、語末にMOCIを持つかどうかという観点である。このような観点からこの図を見ると、MOCIを持たない類と、MOCIを持つ類との分布はあまりはっきりした対立を示さない。とくに、国の中央部では複雑に入り組んでいて、あまりはっきりとした分布は見せていない。これに対して、語頭がMか母音かという別は明らかな対立を見せている。したがってこの図では、語頭のMの有無に重点をおき、MOCIの有無は二次的なものと考えそれぞれの色を与えた。

なお、各類を通じての語形内部の音声的な特徴を、符号の形で示した。例えば、第1音節がMUあるいはUとなるものには三角形の符号を与え、あるいは、第2音節の子音にはおもにGとKとの2つが見られるが、Kとなるものには、シッポ付きの符号を与え、さらに、第3音節がRAとなるものには、ぬき符号を与え、ROとなるものはべた符号で示した、などである。なお、語末のMOCIにはさまざまな音声変種が認められたが、ここではすべてMOCIで示した。

茶で示したもののうち、MOGURAからMORAUまでは、語頭がMで、語末にMOCIを持たない類である。MOKURAMEからMOKURONEZUMIまでと、MOGURIPEからCUCIMOGURIまでも、上の基準に準ずるものとしてこの類に含めた。これらの類は、大きく分けて3地域に分布を持つ。大まかに言えば、関東を中心としたMOGURAなど、九州西半に分布するMOGURA, MOKURAなど、中国東半、近畿北辺、

北陸、新潟にはほぼ連続した分布を見せる **MOKURO**, **MONGORO**, **MUKURO** などである。

標準語の「もぐら」は、これらのうちの関東のモグラの分布を背景として生まれたものであろう。九州西半のモグラは、分布の広さ、密度から考えて、標準語の「もぐら」が最近になって侵入し広がったものとは考えにくい。かなり古くからこの地域にあったものであろう。したがって、両地域のモグラはかなり古いものの残存であり、かつては両方のモグラの分布は連続していたと考えられる。

中国東半、近畿北部、北陸に分布する茶の類の内容は **MOKURO**, **MUKURO** が中心となっている。**MO-KURO** は山陰、隠岐、北陸にかなり分布が見られるほか、岡山南部、近畿北部にも点々と見られ、佐渡の北端を北限としている。**MUKURO** は、岡山東部から近畿北部にかけての地域と、佐渡に分布する。なお、橙で示した **MOCI** を持つ類の中にも、**MOKURO**, **MUKURO** という形を持つものがあり、茶の **MOKURO**, **MUKURO** の分布と入り混って分布する点に注目する必要がある。これら、モクロ、ムクロの分布領域は、東日本と九州に広く分布するモグラ、モグラモチの内側にあることから、モグラよりは新しい広がりのものであると言いきることができよう。ただし、福島、千葉にあるムグロ、モグロについてはなお疑問が残る。福島のは新潟のものと同様連続するものか、千葉のは海路西からもたらされたものか、あるいは、モグラに圧倒された結果の残存か、決めたいところである。

凡例で、**MOMORA** から **MŌRA** までは語形の上に類似が認められる。第2音節に **M** が現われる点、あるいはそれから派生して、**M** が消えて、単なる鼻母音となっている点である。これらの特徴を持つものは、茶で示したものの中には少なく、東北地方に数地点と、長野・山梨に数地点見られるだけであるが、むしろ橙で示したものの中に、**MOMORAMOCI**, **MONMORAMOCI** として東北地方に広い分布を示している。また、緑、あるいは草で示したものの中にも、**OMORA**, **OMORAMOCI** などが見られ、岐阜・長野南部に分布が見られる。

橙で示したものは、語頭に **M** で、語末に **MOCI** を持つ類を中心としている。さらに、**MOKKURAM-USSI** から **MOGURAOZI** までは、上に準ずるものと考えて橙を与えた。橙の類は北陸から東北地方にかけ

て広い領域を占めるほか、千葉から愛知にかけての海岸部、近畿北部、山口、鹿児島西半などに多少まとまった分布が見られる。その他の地方にも点々と見られる。その主なる語形は **MOGURAMOCI** である。近畿北部から北陸にかけては、**MOKURAMOCI**, **MOKU-ROMOCI**, **MUKUROMOCI** などが分布する。上でもふれたように、これら橙で示した類の語形は、**MOCI** 部分を除けば、茶の類の語形と同じものが少なくなく、分布も錯綜している点が注目される。

緑で示したものは、語頭が母音で語末に **MOCI** を持たない類である。これに対して、語末に **MOCI** を持つ類を草で示した。これら2類の分布は、さきの茶、橙の分布よりさらに入り交り、互の関係が密なので、分布の説明その他を合わせて行なうことにする。これらの類は、岐阜・長野南部・静岡西部から、近畿北部と中国東半とを除く山口・九州東半までの地域に連続した分布領域を持つ。茶と橙で示した語頭に **M** を持つ類の分布を分断する形で広がっていることから、母音で始まる類の方が語頭に **M** を持つ類よりは歴史的には新しい広がりであると言えよう。これらのうち、おもなものの分布を凡例の順にみると、まず、**OGURA(MOCI)** は、岐阜・愛知と九州東半とに比較的多く分布している。この類の中では古いものであろう。**OGORO(MOCI)**, **ONGORO(MOCI)** は近畿を中心に四国全土に広く分布することから、これらの諸語形のうち最新の語形のように考えられる。**UGURO(MOCI)** は分布が分かれる。まず、三重に見られる10数地点、次に広島を中心とする広い分布、さらに、徳島、高知の数地点である。上のオゴロの外側にあり、オゴロより少し古い時代に広がったものと言えよう。**IGURA(MOCI)**, **INGORO(MOCI)** 等、語頭の母音が、**I** ないし **YU**, **E** のものを一類として共通する符号を与えた。緑、草類の分布の東端である静岡西部、愛知、三重にひとつの広がりを持ち、一方、本州西端の山口、島根西部にひとつの広がりを持つ。この分布からは、上のオグラとならんで、これらの語頭に母音を持つ類の中では、最も古いもののひとつであると言いきることができる。ただし、オグラなどの語頭の **O** あるいは **U** が、**I** へ変わり、イグラが生じることが、それぞれの地域で独自におこりうる。この可能性も全く否定することはできない。

紺で示したものにはいろいろなものが含まれるが、全国的な解釈にかかわるものは見られない。青森に見られ

るジネには「種類がちがう」という注のあるものも見られる。琉球、三宅を除く伊豆七島、瀬戸内海などには無回答が多い。これらの地域には「もぐら」は棲息していないのであろうか。

以上、分布のあらましと、分布から考えられるそれぞれの歴史的な関係を、大まかに述べてきたが、なお、問題として残るのが、近畿を中心とした、茶・橙類と緑・草類との分布の解釈である。図全体から見れば、母音で始まる類の分布は連続していて、語頭にMを持つ類の分布の内側にあり、M類よりは新しいということが言えるが、近畿を中心とした分布だけを見ると、なお、どちらとも決めがたいところがある。しかし、京都・大阪などが、緑類の領域内であることから、一応緑が新しいという立場をとっておく。

中央語の文献による「もぐら」に関する語史の研究には、前田富祺「モグラの語史」上・中（『日本文学ノート』4号、昭和44年2月、同5号、昭和45年3月）がある。これによると、「……すでに10世紀には、ムグロモチ、ウゴロモチのふたつが対立していた」（上2ページ）という。これらを地図上でみると、ムグロモチは近畿北部に4地点、ウゴロモチは奈良南部に1地点それぞれみられるだけである。すなわち、文献でたどれる最古のものが、近畿周辺にしか見られないということになる。上でいうムグロモチは「牟久呂持」と記されたものである。これをムクロモチと清音で読むと分布領域は広がるが、なお、かなり狭い範囲内の地域であることには変わらない。このほか、前田の論文には、時代を追っていくつかの語形が挙げられているが、問題とされている語形のほとんどが、この図では、近畿周辺に分布するものに限られる。とくに、この図で最も古いと考えられるモグラ、あるいはモグラモチは、近世になって、それもかなり遅く、ようやく現われるということは注目していい。文献に現われる諸表現が、日本語全体の流れの中でごく限られた一部しか示さないのではないかという疑問が生ずるが、これ以上のことについては、前田氏などのさらに詳しい調査を待つほかない。ただし、これまで見たかぎり、すくなくとも、この図においては、文献による語史の研究と言語地理学による語史の研究とが、うまくかみ合っていないと言わざるを得ない。

## 212. ふくろう(梟)

「ふくろう」と「みみずく」とは同じふくろう科の鳥ながら、形態には多少の違いがあるものらしい。この項目の質問にも、「みみずくなどと区別する」という注意がされている（『日本言語地図解説一方法』参照）。しかしながら、一般の人々にとって、夜行性のこの鳥の形態の多少の差異は、さほどの関心事ではないらしい。いま鳴いている鳥が何であるかは仏法僧の例からいっても、わかりにくいこと当然であり、この鳥の名が、その物を見ての命名か、鳴き声の主としての命名かはっきりしない点がある。この項目は「ふくろう」の名を求め「みみずく」の名を排除したつもりであるが、「みみずく」「ふくろう」の語形上の違いについて触れた回答は、わずかしは見られなかった。したがって、この図の作成にあたっては、この点にはあまり考慮を払わず、回答されたものを区別せずに扱った。したがって、動物学上の「みみずく」を指す語形が混在している可能性もないわけではない。また一方、「みみずく」「ふくろう」以外にも、この種の鳥をあらわす表現を、意外に詳しく区別している地方があるのかもしれない。それらの点についても図上には反映されていない。そのへんの事情の詳細については『日本言語地図資料』として記録してあるので参照されたい。

作図にあたっては、語形の変種が非常に多いことから、音声の変種を大幅にまとめて示した。詳細については『日本言語地図資料』に記録してあるから、参照されたい。見出し語形を示すのに、括弧を多用した。このあとそれぞれのところでその内容を示しておこう。

フクロ・フクロオ類およびそれに類するものを、赤の符号で示した。東北中部から新潟・長野・北陸・近畿・中国東部にかけて連続した分布を示すほか、北海道にも広い分布が見られる。その他の地方にはあまり多くは見られないが、関東には他の類の語と混在して分布する。HUKUROO は標準語として登録されているが、近畿にはほとんど見られない。関東にも、他との併用で分布するだけで、専用地域は少ない。むしろ福島・長野などに専用地域がある。ただし、HUKUROOを含めてフクロオ類を考えれば、分布の形から見て近畿を中心に広がった最も新しい広がりを見ることができよう。HUKUROO と HUKUROO との区別は、コオヒとコオヒイの差に準ずるのかもしれない。この HUKUROO は、

東北から新潟にかけての地域、および近畿・中国東半に見られる。HUKURYO(O)は新潟西部、長野北部に9地点見られる。このうち、HUKURYOOは、5631.751地点である。HO(O)KURO(O)としたものは、北海道、新潟、関東、近畿周辺、中国に計33地点に見られる。ほとんどはHOKUROであるが、5685.02、6472.68にはHOOKURO、5732.13、6667.81にはHOKUROOがある。HUKUROKU、HUKUROKO、HOKUROKUの3語形の構成には共通した特徴が認められる。分布も北海道、秋田に数地点離れて見られ、大阪の数地点もやや離れているほかは、石川南部・福井・滋賀北半にまとまった領域を持っている。秋田のものは近畿北部のものが海路運ばれたものであろうか。大阪南部のものと近畿北部のものととはもとはつながっていたのであろうか。なお、これら末尾の第4音節コ、クは、単に、フクロ等にコ、クが付いたとも考えられるが、『和名抄』などに見られる「布久呂不」の「呂不」が長音化シロオとなるか、さらに、口と短くなる以前、「不」が単独の音節を形成していた時代に、その一変種として生じたものという考え方も可能である。その背景には「福祿寿」などという語も介在していたかもしれない。一考を要しよう。HUUROOMOMA、MOMAは福岡、大分、鹿児島に計6地点見られる。HUUROOとフクロオとの関連を考えてここに置いたが、緑で示したものに多く含まれるホロ、フル等の要素との関連も考えられよう。HUKURODORI以下しばらくは、後部分にドリが付加されるものが続く。ドリを持つものは、北陸にHUKURODORIがかなりまとまって分布するほか、あまりまとまった分布は示さない。HUKURODORIMEは石川白峰に見られる。赤の類以外にもドリを後部分に持つものがある。括弧をもって示したものは、その見出しに含まれる語形にドリを持つものと持たないものが混在しているものである。なお、ドリと示したなかには、トリ、トイ等の音声的変種が含まれるものもある。さらに、その見出しに含まれる語形中ごくわずかにしかドリを持つものが見られない場合は、見出しにドリは示さないことがある。注意。詳細は『日本言語地図資料』参照。HUKURADORIは青森に、HUKURASUZUMEは神奈川にある。214図の「すずめ」には、神奈川と愛知にフクラ、フクラスズメが見られるが、これとの関連は不明である。何か、類音牽引が働いたのかもしれない。HO(O)KUBODORIと、OKUBODORIは宮崎北

部に9地点見られる(133図「ほくろ」の地図にHOKUBOが現われるが、宮崎ではない)。HOOKUBODORIとなるのは7385.84だけである。OKUNBOは上のOKUBODORIと形の上で類似する。愛知・静岡に計3地点見られる。UNBODORIは長崎に1地点見られる。これらは、語形上、あるいは、分布上からも、相互に関連は見られるが、九州のものと、静岡のものととの歴史的関係は不明である。これら4つは、HO(O)KUBODORIにフクロオと類似が見られるので一応フクロオ類として赤で示した。YOHUKUROは鹿児島に、YOBOKUROは千葉に見られる。YOHUKUROは付近のYOSIKURO(SI)と、YOBOKUROはYOGO(O)などとYOの部分で関連があろうか。

緑を与えた類はツクという要素を中心に一類としたものである。スク、スコ、スケ等、かなり広い範囲のものも、ここではツク類として認めた。この類のおもな分布領域は、関東、東海、紀伊半島南部、四国、中国西半および琉球と、赤のフクロオ類をとりかこむような形を呈している。フクロオ類が広がる前は、国の中央部でも使われていたものと考えられる。『和名抄』には「木菟」に「都久或美美都久」とあり、「梟」に「布久呂不」とある。「みみずく」と「ふくろう」は名称として区別されていたようで、ツクは「みみずく」の方に用いられていたらしい。しかし、『類聚名義抄』では、ツク、フクロフは必ずしも明瞭に区別されて用いられていないようである。つまり、古い文献の時代にも、「みみずく」と「ふくろう」の区別は、それほど明確ではなかったのではないかと考えられる。古い文献時代のそのような状態と、現在の分布でツクが古く、フクロオが新しいという先後関係を示することとの間の歴史的経過については、さらに詳しい考察を加えることが望ましい。その前段階として、「みみずく」その他をも調査してみる必要のあることは、いうまでもない。

HURUCUKUからHOOKUCIDORIまでは、フル、ホロ、ホオ等の前部分と、ツク、ツケ等(スク、スケではなく)とが結び付いたものとして、ひとつのまとまりと認めた。HURUCUKUが中心的な語形である。おもに紀伊半島南部、四国、中国西南半を中心に領域を持ち、関東周辺、屋久にも点在する。HO(O)CUK(K)O(O)は、6606.35のHOOCUKKOと5696.54のHOCUKOOとの2語形を合わせて示したものである。HOOSUKEDORIからDARASUKOまでは、いくつかの観点を

合わせてひとつのまとまりとした。ホロ、ボロ、ゴロ、ノロ、トロなど、一連の類似した前部分を持つこと、後部分がスコ、スケ、スク等の類似点を持つことを基本とし、それに類似するさまざまなものをも含めてここに置いた。スコ、スケを含まないものは、緑の符号は与えなかったが、前部分に注目して類似の形をした符号を与え、緑類の間に置いた。関東周辺から東海地方にかけての太平洋岸には、ホロスケ、ゴロスケを中心に、ホロ、ボロ、ゴロを持つものがとくに多く見られる。広島に BORO-KICI、佐賀に HOROSUKE、福岡に GOROSUKE-SEEZEE、大分に BOROKITEHOOKOO が飛びはなれて見られる。静岡東部・山梨の GOROC(C)YO-(O)、GOROCCI(I)は、GOROSUKE を神奈川、伊豆半島南端、静岡西部に分断する形で分布し、GOROSUKE より新しい広がりと言えよう。GOROC(C)-YO(O)としたものは、GOROCCYOO 6645.37、GOROCYOO 6635.36 を除いて GOROCCYOO である。GOROCCI(I)のうち、GOROCCII は 6614.04 だけである。BOOZUKKO は群馬、山梨に 3 地点見られる。「坊主」も連想されるが、ズクとの関連を考えこの類に入れた。BOOSUKA 6616.22、BOSUKASU 6645.62 も、BOOZUKKO と類似していることと、分布も近いことからここに置いた。GOROKUTO は、鳥取西部、岡山北西端に計 11 地点見られる。関東、東海あたりの一群との歴史的関係は不明である。GOROSUKO-TOOKOO から GOROTTOHOOKOO までは九州北半に 4 地点、茨城に 1 地点見られる。末尾の TOOKOO、HOOZOO、HOOKOO 等は、鳴き声を模したものであろう。HOOKOO からは「奉公」が想起され、それにまつわる言い伝え、昔話・民謡などがこれらの地方では聞かれるにちがいない。本集には載せなかったが、質問番号 225 で、「この鳥(ふくろう)の鳴き声を言い表わすのに何と言いますか」という質問をした。その回答のなかには、鳴き声と同時に、それにまつわる「話(ことば)」が記されているものが少なくない。また、柳田国男は、『野鳥雑記』のなかで、ふくろうに関して、その鳴き声にまつわるさまざまな「話(ことば)」をとりあげている。傾聴すべきであろう。NOROSUKE(HOHO)から NECUKEHOOHOO までは、前部分にノロ、ノリ等、N で始まるものを持つことに共通点を認めた。上で述べたゴロ等と音の配列に近似性を認め、似た形の符号を与えた。東北北部に多く見られるほか、山形南部にもまとま

りを持ち、新潟南部、長野、島根西部にも各 1 地点ずつ見られる。ノロスケがもっとも多く見られる。NOROSUKE(HOHO)としたもののうち、ほとんどが NOROSUKE であり、NOROSUKEHOHO となるのは 3761.74 の 1 地点だけである。NORICUKE から NECUKEHOOHOO までは、ツケ、ツキを含み、先に述べたスケ、スコを含むという観点からは外れるが、ノロ、ノリとの関連でここに置いた。これらも「割付け干せ」などという「話(ことば)」を想起させるもので、ここに見られる一連の変種も、それをもとにして派生したものと考えてよからう。TOROSUKO から DARA-SUKO まではノロと音声的に近いトロ、テレなどを前部分に持つものである。青森、岩手、茨城、栃木、静岡、福岡に計 15 地点見られる。

ZUKU から CUKUME までは関東、伊豆諸島にかなりの分布が見られ、北海道、鹿児島東南部にも数地点見られる。『和名抄』などの「都久」の直接の子孫かどうかはべつとして、八丈などにあることからかなり古いものと考えられようか。CIKOO から SUUCYUKKWA までは、屋久、口永良部の 2 地点以外、すべて琉球列島に見られるものである。ツクにあたると思われる要素の後に、さらに音節の加えられている語形がほとんどである。それらをどう解釈するかは今後検討を加える必要があろう。CIK(K)UHU(U)のうち、CIKUHUU となるものは 1233.61、CIKKUHU は 1232.75 の各 1 地点で、あとはみな CIKUHUU である。CIK(K)O-(O)HO は、CIKOHOO 0246.97、CIKOOHOO 0257.43、CIKKOHOO 1223.91、1242.26 をまとめたもの、SIKO-(O)HO(O) は、SIKOOHOO 1242.22、SIKOHOO 1242.72 をまとめたものである。CUUKUIRORI は大分に見られる。

NEKODORI には橙の符号を与えた。九州を中心に広い地域に分布が見られるほか、茨城、北陸、岐阜、兵庫、隠岐、愛媛、山口にも見られる。ネコドリという命名の発想には、いろいろあろう。鳴き声を模したことも考えられる。もし、ピンと耳を立てた「猫」の顔付によるとしたら、むしろ「みみずく」のことを示すものと考えられる。「ふくろう」には耳がないとされているからである。この現象は単なる誤解ではあるまい。先に述べた「みみずく」と「ふくろう」の区別の有無ということ、あるいは、ツクとフクロオの歴史的関係などと無関係ではないと考えられる。検討すべきであろう。山口に 2 地点見られる

NEKOCUKU は、フルックなどのツクとネコドリとの混交によって生じたものであろう。ツクを中心に考えて緑で示し、符号の形はネコドリと同じにした。NIKACIKUKU 以下 MYAACIKO(O)HO まではすべて琉球列島に見られるものである。NIKACIKUKU はネコドリのネコとの関連を考えた。MYANCIKKU 以下のものの前部分、MYAN, MYAA, MAYAA 等は、「猫」にあたる語と考えられる。後部分は、上で述べたように、ツク類の語と考えられるから、つまり、山口のネコツクと同類ということになる。符号はツク類に注目して緑を与え、ネコドリと似た形のものとした。ただし、喜界の MAYAAKU は、KUU の部分に問題があるので、紺で示した。この類のかっこつきの見出しのうち、MYAACUKO は 0256.76, MYAACIKU-BU は 0246.48, MYAACIKOOHO は 0257.12 であった。TA(K)ACIKUHU は宮古に見られる。このうち TAACIKUHU は 2150.07, 2150.17 の 2 地点である。上のものと語形の上で直接のつながりは見られないが、一応ここに置いた。

MIMIZUKU から MI(N)ZUKU までは、ミミズク類としてひとつにまとめられる。道南、佐渡、関東、岐阜、瀬戸内海沿岸地域にやや多く見られるほか、全国的に点々と見られる。MI(N)ZUKU 中、MINZUKU は 6621.94, 6677.70 の 2 地点である。与那国の MINKUKU の KUKU がツク類かどうか確かではないが、周囲の分布から緑の類と認めてここに置いた。MONCUIKIDORI は熊本天草に見られる。「紋付」と関係があるかどうか不明だが、CUKI という部分に注目し、ツク類に入れた。YO(O)ZUKU, YOCUKU, YO(O)-ZOKU はひとつのまとまりと考えられる。島根を中心に広い領域を持ち、山口、大分にも数地点見られる。YOOZUKU は 6348.77, 6431.41 の 2 地点、YOOZOKU は 6403.60, 6413.10, 6413.43 の 3 地点である。これらのヨは「夜」と関連があろうか。YOSIKODORI から YOSUPPO までは語頭の YO に注目してここにならべた。上のヨズクとの関連も考えた。九州南半に見られる (YOHUKURO・YOBUKURO については既述)。YOSIKA(DORI) 中の YOSIKA は 8305.76, 8306.42, 8313.88, 8332.84, 8333.03, 8334.63, YOSIKURO(SI) 中の YOSIKUROSU となる地点は 8362.34 である。YOSITOKAPPO は五島に 3 地点、KAP(P)O(O)DORI は九州北半に 7 地点見られる。

これらのうち、7303.17 は KAPOODORI, 7376.62, 7395.88 は KAPPODORI, 7350.96 は KAPPONDO-RI, 7352.38, 7353.51 は KOPPODORI, 7268.87 は KOPPOODORI である。7256.64 の YOHITORI は YOSITOKAPPO とつながりがある。YOSUPPO は 8304.66 にある。HIKOROKU は愛媛と鹿児島に 2 地点見られる。人の名のようにであるが、HIKO の部分に、ツク類との関連を考えてここに置いた。すでに述べた HUKUROKU などとは、分布が離れている。DESIKOSI は、愛媛、大分に計 7 地点見られる。語中の SIKO に注目して緑を与えた。KESIKO(O)(DORI) は種子に見られる。KESIKO 8393.69, 8394.01, KESIKOO 9313.55, KESIKODORI 9303.88 をまとめたものである。これも SIKO 部分に注目して一応緑で示した。

おもに紺の符号で示した O(O)H(H)O(O) 以下には、さまざまな類が含まれる。類別は、やや主観的な印象によるものがあり、それぞれの類の間に、はっきりとした語形の違いの見られないものも少なくない。O(O)H(H)O(O) から PONPONDORI までは、鳴き声を模した擬声語のようなものを集めた。O(O)H(H)O(O) は青森・岩手に広く分布する。3715.51 の OOHOO, 2795.01, 3743.49, 3745.98 の OOHOO, 3754.13, 3755.32, 3763.17 の OHOO 以外はすべて OHO である。NOHO, MOHO, MOHODORI も上のオホとの類似を考えてここに置いた。分布はオホに隣接した青森西半、秋田北部である。DEHO, OOTO は岩手に見られる。TETEP(P)OPPO(O) は山形、宮城に 7 地点見られる。TETEPPOPPPOO は 4711.42, 4722.40, 4741.43, TETEPPOPPPO は 4721.36, 4740.26, 4763.11, TETEPPOPOO は 4711.82, である。なお、本集 241 図「たんぼぼ」に、岩手を中心にテデッポッポが広く見られる。この図のものとどう関係があるか不明である。見出し語形の示し方が両図で異なるので、比較する場合注意を要する。新潟に見られる DOTEPPPO は上のものと形が類似する。HO(O)HO(O), HO(O)HO(O)DORI は、関東と九州中西部とにやや多く見られるほか、全国に点在する。どちらも、HOHHOO となるものももっとも多いが、HOHHOO が 1156.89 に、HOHHODORI が 7382.93 に、HOHO が 3742.82, 3752.47, 4629.43, 4711.42 に、HOHODORI が 6439.77, 7279.65, 8325.77, 8345.18 に、HOHHODORI が 5760.24 にそれぞれ見られる。HOIHODORI 以下 PONPONDORI ま



での見られる地域をまとめて述べると、福島西端、関東、新潟西部、静岡西部、名古屋付近、三重、兵庫・大阪・奈良・和歌山にかけての地域、高知、九州西南半などである。これらのうち、BOOHO は 5608.51, HOPPOODORI は 6587.42 である。POOP(P)OOD(D)-ORI としたものは 5677.28 の POOPPOODDORI と、5667.24, 5761.91, 5771.42 の POOPOODORI を含む。POPO(O)DORI のうち POPPOODORI となる地点は、7249.95 と 7380.74 である。

つぎに一類と認めたものは、鹿児島 の TOK(K)O(O)(DORI), TOK(K)WO(DOI), 佐賀の DOOKO(O)(DORI) など、トッコ(オ), ドオコ(オ)などの要素に注目して集めたものである。凡例の TOPPODORI から DOOHO(DORI)までを、この類に含めた。みな九州に見られるものである。TOPPODORI は長崎北部と宮崎西部に計 4 地点見られる。トッコ(オ)や上のポップなどとの音の類似を考えてここに置いた。CYOPPOGASUKE 8303.84 は、SUKE の部分があることから緑を与えた。TOK(K)O(O)(DORI) は TOKKO 8322.68, 8332.59, 8334.63, 8342.51, 8343.74, 8352.29, 8354.14, 8363.64, 8372.47, TOKKODORI 8310.87, 8320.59, 8324.83, 8344.71, 8353.68, 8362.85, TOKKOO 8363.51, TOKODORI 7372.03 をまとめたものである。TOK(K)WO(DOI) としたものは、8351.07 の TOKWO と、8320.98, 8362.81 の TOKKWODOI とのほかは、すべて TOKKWODORI である。KONOCIKITOKKO (鹿児島 2), KONOSUKEDOKKO (鹿児島 2), KANECUKEDOOKOO (佐賀 7) は、それぞれ, CIKI, SUKE, CUKE に注目して緑の符号を与えた。DOOKO(O)(DORI) は、7248.99, 7340.27, 7340.50, 7340.74, 7350.21 で DOOKOO とするほか、みな DOOKODORI である。DOOHO(DORI) は 7370.16 で DOOHODORI, 7350.96 で DOOHO と DOOHODORI との併用であった。KOOKOO から KUUKUUME までは、語形の上でひとつのまとまりと認められる。これらの現われる地域を見ると八丈、岡山西部、山口、大分、壱岐、鹿児島、沖縄渡嘉敷である。まとまった分布とは言えない。KOOZUUDOOKOO から MOSUPPE までは、コオズウ、コ(オ)ゾ(オ)などという要素を持つものに注目して一類と認めた。兵庫中部の KOZYORO 以外は、すべて九州に集中する。KOZYORO は語形の上からこれ

らの類に含めたが、分布からは別物と考えるべきかもしれない。KO(O)ZO(O)(DORI) としたもののうちわけを示すと、KOZODORI 7382.97, KOOZO 7311.68, 7312.83, 7313.68, 7332.46, KOO ZODORI 7375.30, 7375.37, 7382.01, KOZOODORI 7303.29, 7326.69, 7336.28, KOOZOODORI 7352.97, 7353.51, 7362.42, 7363.12, 7363.85, 7373.56, 7373.92, 7373.99, 7382.58, 7383.98, 7384.16, 7392.33, 7392.45, 7393.62, 8301.19, 8303.84 であり、のこりは KOOZOO である。7373.99 では KOOZOO と KOOZOODORI とが併用されている。KO(O)ZU(U)(DORI) のうちわけをしめすと、KOZU 8325.03, 8335.05, 8335.11, 8335.83, 8345.74, 8364.33, KOZUDORI 7382.97, 8306.04, 8311.59, 8314.52, 8315.46, 8324.26, 8334.25, 8345.10, 8354.29, 8355.23, 8355.62, KOZUUDORI 7386.55, 8335.48, KOOZU 7322.79, 7322.81, 7332.52, 7333.29, 7333.51, 7342.10, 7342.12, 7342.72, 7343.76, 7344.45, 7344.99, 7346.58, 7353.03, 7355.22, 7355.48, 7355.81, 8345.18, 8345.24, KOOZUDORI 7248.15, 7351.09, 7374.75, 7390.75, KOOZUU 7331.41, 7333.75, 7334.44, 7334.78, 7335.34, 7335.93, 7343.14, 7343.17, 7344.30, 7345.43, 7353.19, 7357.31, KOOZUUDORI 7330.77, 7366.14 である。7352.61 では KOOZU と KOOZUUDORI とが併用されている。7370.41 の DOOZUDORI はコオズウとさきのドオコオ類との混交かと考え、ここに置いた。KASUPPE 8315.42 は、近くの KOSUPPODORI 7395.63 とつながりがあるろう。MOSUPE 8305.40 は KASUPPE とのつながりでここに置いた。

KOORYATULI 以下は、相互関係もはっきりせず、また一方、これまでのものとの関係もはっきりしないものが大部分である。千葉の BUUTAROO, BUBUTAROO は、赤の HUKUTAROO の近くにある。何かつながりがあるろうか。YOHEE から OTOKU(DORI) までは、人の名に似ているという点で共通点があるろうか。GO(O)HEE(DORI), GOHEEZUKU が関東北部にややまとまって見られる点以外には 6459.29 の YOHEE, 6487.43, 6487.66 の OTOKU(DORI) とまとまった分布らしいものは見られない(OTOKU(DORI) とすでに述べた TOK(K)O(O)(DORI) とは、地域的にも離れている)。7390.26 の YOGOEHACCYODON は、「夜声八丁殿」と解釈されようが、語形の上で YOGO(O) との類似を認めここに置いた。なお、

GO(O)HEE(DORI) 中では GOHEE が 5658.54, 5669.12, GOOHEE が 5658.89 のほか、みな GOH-EEDORI であった。YOGO(O)のうち YOGOO は 6721.31 の 1 地点であった。OTOKU(DORI)中、6487.66 は OTOKUDORI, 6487.43 は OTOKU と OTOKUDORI の併用。YOTAKA は青森・秋田、佐渡、茨城、長野・岐阜、鳥取・岡山、徳島、山口、熊本・宮崎・鹿児島(甕)の各地に計 22 地点見られる。MONZI-TAKA は 2782.16 に 1 地点見られる。6506.03 の BANDORI は、この地方でも用いられる「蓑」を意味する「ばんどり」とつながりがあるろうか。また、214 図「すずめ」の図にも、バンドリという語が見られるので参照されたい。これらが、はたしてこの鳥の名として適切な回答かどうかは、はっきりしない。以下、のこりのものを凡例の順にその位置を示しておく。KOOYATULĪ, KUUYATULĪ はともに宮古、EBO, IBURO は千葉、BOISA は八重山、YOTORI は香川、MOZU は岐阜、GENZI は静岡、MAMEMAKIDORI は神奈川、MUGIURASI は香川、SIMOYOBİ, YU-UME はともに対馬、GAZYANKWEE は沖縄粟国に、それぞれ見られる。SYAKEBI は山形に見られる。古語の「さけ」とつながりがあるろうか。

これら紺で示したものは東北部と九州とに特に多く分布する。これらを、本州・四国に広く分布するツク類・フクロオ類より古いものと考えたいところであるが、琉球のツク類の分布を考えると、九州の紺は新しい発生とも考えられる。全国で「みみずく」「ふくろう」の区別をするのか、するとすれば、「みみずく」を何と言うか、それらについての文献の資料、あるいは、鳴き声の写しかた、それにまつわるもろもろの「話(ことば)」などを合わせて考えて、さらに詳しい考察を加えるべきであろう。

### 213. せきれい(鶺鴒)

「せきれい」には「せぐろせきれい」「きせきれい」など分類学上いくつかの種類があるようであるが、この調査では、それらをまとめた総称を求め、種類の別のあるものについてはそのつど注記をすることにしてあった。地点によってはその注記の見られるものもあったが、とくに地域性は見られなかったので、作図にあたってはそれらの別にはとくに注意を払わなかった。詳しくは『日本言語地図資料』として記録してある。

調べてみると「せきれい」を表わす方言形は非常に多く、作図にあたって音声的な変種などはかなり大幅にまとめ、見出しの表記にあたって括弧も多用せざるをえなかった。それらの内容について、重要と思われるものは解説中にふれるが、詳細にわたっては『日本言語地図資料』を参照しなければならない。

赤の符号を与えたものはセキレエの類である。他の類と比べて、語形の変種が比較的少ないと言えよう。比較的まとまって分布する地域は、北海道、東北地方の太平洋岸、関東、中部、東海、四国、九州東岸である。北陸、近畿、中国にもやや多い。東北地方の北部、および、日本海側、九州西半には少なく、琉球には見られない。この類のうち SEKIRE(E)(KO)がもっとも多く、とくに関東には広い領域を持っている。SEKIREEKO となるのは 3787.50 の 1 地点のみである。SEKIRE となるものは東北地方に比較的多い。末尾母音が「e」と広がるものは見られなかった。中心となるものは SEKIREE である。末尾母音部分がエの長音となるものとエイとなるものがあり、エイとなるものは西日本に比較的多かった。SEKIREN(KO), SEKIRIN, SIKIRIN(KO), SYOKIREN, SYO(O)KIRIN は、末尾音節がレエではなく、レン、リンと撥音の現われる点で特徴がある。岩手南部、神奈川西部・静岡東部、岐阜・長野・静岡愛知県境付近、近畿南部、中国山地、四国南半の各地にそれぞれまとまった領域を占めて分布する。そのうち SEKIRENKO は岩手・宮城の 7 地点全部である。SIKIRINKO となるものは 3765.28 にある。SYOOKIRIN は 6414.25 に見られる。

他の赤符号の語形の分布する地域を示すと、SEEKIREKO は岩手にあり、SEKIRI(I) は北海道・東北・関東、富山・長野・静岡、大分・宮崎に、SEKISEE は新潟、岐阜・三重・滋賀、大阪・兵庫、島根・山口にそれぞれ見られる。SEKIZUI は東京に 1 地点ある。SEKINME は茨城に 1 地点ある。SIKIRE(E) は宮城・福島に計 12 地点見られる。うち、4762.44, 4771.98, 4793.41 では SIKIRE である。SIKIRI も福島に見られる。SEKI~としたものは、2722.67 の SEKICII と、6595.32 の SEKIDORI のふたつである。SUZURINKO は岩手に 1 地点見られる。近くに分布するカワズメ等のスズメと SUZU の部分が共通する。

セキレエは「鶺鴒」の字音にもとづくものと考えられよう。セキリンなど、末尾に撥音の現われるものの発生に

ついてはどうであろうか。「鶺鴒」にはリンという字音もあるようで、あるいは、セキリンはそちらの字音を用いた語かもしれない。あるいは「淵底」をエンテンとする現象(『かたこと』による)、あるいは「葬礼」をソオレンと言う現象などとの何かつながりがあるだろうか。一考を要しよう。また、「せきれい」には、「鶺鴒」という表記もあるらしい。ショキレン、ショキリンなどは、あるいは、この表記と何らかの関係があるかもしれない。セキレン、セキリン等、末尾に撥音を持つものの分布を見ると、概して近畿周辺に分散して分布し、広く広がるセキレエ等よりは内側にあると言えよう。セキレエよりは新しい広がりであろうか。いずれにしても、赤のセキレエ類は、分布領域としては東北南部から九州東海岸までの地域にしか分布せず、かなり新しい広がりということができよう。

緑で示した類は、イシタタキ、およびそれに類するものである。道南、山形から新潟・福島県境付近にかけて、北陸西部、四国北半、九州の大方の各地域にそれぞれまとまった領域をもって分布するほか、各地に点々とした分布が見られる。中心的な語形は ISITATAKI-(DORI) である。ISITATAKIDORI となるのは 6494.55, 7257.94, 7266.09 の3地点である。ITTA-TAKI は宮崎・鹿児島に計8地点見られる。ISITAT は 8331.17, 8334.25 の2地点である。TAT の部分は直接タタキにあたる形ではないが分布からは関連があると考えられる。IISITA は五島に1地点見られる。ITATTA は鹿児島に1地点見られる。いずれも語形としてはイシタタキからやや違いが、分布からはイシタタキと関係があるものと考えられる。SIT(T)ATAKI は群馬、新潟、佐賀、熊本に計11地点見られる。SIT-ATAKI となるものは5674.06 の1地点である。なお ISITATAKITAROBEE 中に関連するものがある。これらは空で示したシリとの関連が考えられるかもしれない。後で述べる茶で示す類との類似も考えられよう。SICCYACYANGI は甌に1地点見られる。古語に「みそさぎい」のことを「ささぎ」と言ったようであるが、何か関係があるだろうか。HITTATAKI は 8322.68 に、HINTATAT は 8342.69 にある。8335.83 の KAWAI-SITATAKI は KAWA の部分に注目して橙で示し、イシタタキと同形の符号を与えた。福岡・佐賀・熊本・鹿児島に見られる ISITATAKITAROBEE はいくつかの

変種を含む。うちわけを示すと 7353.03 の ISITATAKITAROBEE, 7239.24 の ISITATAKITARONBO, 8343.74 の ISITATATNOTAROZOYO, 8351.65 の ITTATAINOTAROZE, 8332.84 の SITTATATNOTAROBEE, 7352.14 の SITATAKITAROZE, 8361.28 の SITATAKETAROZOYO, 8351.07 の SITATATNOTAROZOYO, 8300.80 の SITATAKITANONZOYO である。鹿児島にのみ計11地点見られる HITATAKITARAZOYO もさまざまな変種を含む。内容を示すと、8248.18 の HITATAKITARAZOYO, 8342.35 の HITATATNOTOROZO, 8352.29 の HITATATNOTOROZOYO, 8353.68 の HITATANNOTOROZI, 8332.59 の HITATATNOTAROBEE, 8364.33 の HITATTATNOTARONBO, 8341.94 の HITANTANNOTAROBEE, 8344.71 の HITOTONTAROBEE, 8350.68 の HITATAINOCYANOZOYO, 8229.96 の HITATAKITA-NKEZYOO, 8342.51 の HITANTARO の各語形である。ISIP(P)ATAKI としたものは岩手・宮城、新潟・長野に計6地点見られる。ISIKAKEZOROBEE は 8362.34 の ISIKAKEZOROBEE と 8362.85 の ISIKAKECYONONZO とである。ISIKANZI は福井にある。ISIISI は高知にある。どちらもイシの部分に注目して一応ここに置いた。MIZUTATAKI は、5574.42, 6542.58, 7343.76 の計3地点にある。タタキの部分に注目した。

これら緑で示した類は、赤のセキレエの外側に広い領域を持ち、また、その他の地域にも分断されて分布するので、セキレエより古いものと言うことができよう。

草で示した類は、「くなく」に由来すると考えられる形を含むもの、およびそれに関連したものを一類としたものである。青森・秋田・岩手・山形・新潟・長野の連続した地域、および、琉球にかなり広い分布領域があり、近畿にも数地点見られる。東日本では緑の類の近くに分布し、西日本では琉球に見られ、九州の緑類より外側に分布すると言えよう。したがって、歴史的には緑の類に近いところに位置するであろうか。古い文献にはクナギという語を直接含む鶺鴒をあらわす表現は見られないようであるが、「学柱」・「嫁教鳥」などと命名の発想が通じている点で、これらとの関連が考えられる。また、「ニハクナブリ」のクナとの関連も考えられよう。これらの点から、草の類は、古い文献に現われる諸語形にかなり近

いものと言うことができようか。ISIKUNAGI は新潟・長野に多く見られ、山梨、京都・兵庫にも見られる。ECIGUNE は 5622.48 にある。USIKUNAGI は長野に 3 地点見られる。USI はイシの音変種であろうか、あるいは、「牛」との縁があろうか。USINAGE-KKO は長野北部に、上の USIKUNAGI にはさまれて 2 地点見られる。この地域で「くなく」の元来の意味が通用しているとすれば、「牛くなぎ」といういささかあからさまな語形を避けようとして作られた語形かもしれない。SIK(K)UNAGI(KO)は岩手・秋田・山形・新潟・長野に分布する。4639.69 は SUCCYONAGI だったが、ここに含めた。SUK(K)UNAGIDORI は、秋田に 2 地点見られる。SIKURAGEDORI(KO)は青森に 8 地点見られる。上の SUK(K)UNAGIDORI との類似からここに置いた。うち、3701.70 は SIKORADORI であったがここに含めた。これらの前部分シ(ッ)は、空で示したシリとの関係も考えられよう。また、セキレエ、ショクレエなどのセキ、ショク部分とこれらのシ(ッ)との間の関係も、無視すべきではないかもしれない。HIK(K)UNGI(DORIKO)は岩手・秋田・山形・新潟に多く見られる。SYOKUNAGI は 4695.87, 4696.82 に、C(Y)UKUNAGI は 4685.88, 4702.10 に、ISINAGI(DORI)は 5624.05, 5624.85 にそれぞれ見られる。SUKU~ と示したものは 3741.57 の SUKURENKO, 3762.42 の SUKUNAGURI, 4638.43 の SIKURANAGI をまとめたものである。SIIHUNAGYA(DULĪ)以下の 5 語形はみな琉球に見られるものである。多くの変種をまとめたので、以下そのうちわけを示しておく。SIIHUNAGYA 2151.64, 2151.67, SIINUHUNAGI 2151.20, SIIHUNAGI-DULĪ 2151.51 をまとめて SIIHUNAGYA(DULĪ)とした。SII はシリにあたるものであろうか。ZIIHUNAGYA 2150.06, ZIIHUNAYAA 2076.97, ZU-UHUNAYAA 2076.96, BUUHUNYAA 2074.69, ZIGUZYUUKUNAGAA 1242.26, ZIGUYADURI 2095.60, KAZIHUNAZIMACYA 2150.17 を、かりに ZYUUHUNA(G)YA(A)(DORI)として示した。ZYUUNAGA(A)(DUI)は ZYUUNAGADUI 1232.75 と ZUMUNAGADUI 1231.72, ZYUUNAGAA 1148.59 の 3 語形をまとめたものである。ZYUU は「尾」にあたるものと考えられる。TAAKUNAZYA(A)としたものには TAAKUNYAGYA

0275.36, TAAHUNAZYAA 1251.98, TAAHUNAGA 0248.00, TAAHUNAGYA 0246.97, 0257.43, TAPUNAGYA 0228.96, TAAHUNYAA 2067.52, TANBUSIHWONAGYAA 0237.84 が含まれる。ABUSIKUNAGYA の ABUSI は「畔」にあたる形であろう(第 4 集 187 図「あぜ」参照)。TAAKUNAZYA(A)に含めた TANBUSIHWONAGYAA の中にも ABUSI が含まれている。

空を与えた類は、シリフリ、オフリのように、「尻」「尾」等にあたる語形をその中に含むもの、および、それに類する一連のものである。静岡、北陸、近畿にやや多く見られる以外、まとまった分布領域を持たず、各地に点在する。SIRITATAKI, SIRITATAKITARO-ZYOO, SIRITAKA はともに九州に見られる。OP-PATATAKI は 4609.54, KECUTATAKI は 5574.42 に各 1 地点見られる。SIRIHURI(DORI)は千葉、神奈川・山梨・静岡・愛知、北陸、近畿に散在する。このうち 6563.84 は KANAYANOSIRIHURI であった。SIRIHURIOMACU は大阪・和歌山に集中し、千葉にも 1 地点見られる。千葉のものは SIRIHURIOMAN であった。OSANSIRIHURI は静岡に 5 地点、新潟西端に 1 地点見られる。OSANPEGOPEGO は茨城に 1 地点、OSAN は富山、岐阜、静岡に計 4 地点、それぞれ見られる。OMICU, OMACU, etc. として示したものは、7440.72, 7450.20 の OMICU, 7501.72 の OMACU, 7430.80 の OMICI, 6628.64 の OMIY-O, 6609.05 の ONACU, 6617.75 の OHARU, 6516.10 の OTAKA, 6639.43 の OICI, 7339.27 の OTAMI をまとめたものである。以上の SIRIHURIOMACU から OMICU, OMACU, etc. までは、いずれも女性の名とおぼしき語形をその中に含む。河原で尻を振るこの鳥の動作を若い女性に見立てたのであろうか。あるいは、「せきれい」の鳴き声を、水辺で洗い物などする若い女たちのおしゃべりに見立てたものかもしれない。昔の人のあけすけで、おおらかな笑顔がそこにある。SIRI~ として示したものは、5595.05 の SIRIBINKO, 5605.70, 5615.28 の SIRIBEKU, 6267.16 の SIRIKO-GIDORI, 6418.13 の SIRIBUKKURI, 7356.06 の SIRICUKI の 5 語形をまとめたものである。いずれも尻を振る動作に注目して生まれた語形と思われる。KECUHURI(DORI)は 1731.89, 6563.43, 6564.33, 6574.06 にある。GESUHURI は能登に 4 地点見られ

る。KECUHURIOMACU は 5699.42 の KECU-  
URIONACU と 6533.89 の KECUHURIOMAN をま  
とめたもので、上の SIRIHURIOMACU 等と、命名  
の発想は同じである。見出しも上のものと合わせて OM-  
ACU とした。(KECUHURI)TANKORO は 5539.43  
の 1 地点にしかない。6481.15 の IDOHURISUZUME  
は、橙で示したスズメを含む類との関連から、同形の矢  
印の符号を与えた。IDO は、「尻」にあたるものであろう。  
SIPPOHURI は 5625.32, 5625.91, 5633.96 にある。  
うち 5625.32 のものは SIPPORI であった。O(O)HU-  
RI(DORI) は石川、滋賀、愛知、奈良に計 5 地点見ら  
れる。うち 5566.51 のものは OHURI であった。6591.81  
には OHURIOMACU がある。SIRIHURIOMA-  
CU のすぐとなりである。OHURIMIKO(N)CYO は  
7511.93 の OHURIMIKONCYO, 7521.16 の OHU-  
REMIKOCYO のふたつをまとめたものである。語中  
の MIKO は「巫女」にあたるものであろうか。紺で示し  
たオイセドリ、ダイジングウサンドリなどと発想の点で  
関連がありそうである。すぐ北に分布するシリフリオマ  
ツとも何らかの縁があろうか。ISENOO(O)HURI は  
滋賀に 2 地点見られる。すぐ南に見られる橙で示したオ  
イセノミズクミなどとともに、「伊勢」を共有して関連が  
ある。ONBOHURI, ONBOHYOKOHYOKO は岐  
阜南部・愛知・三重に見られる。ONBOHYOKOHY-  
OKO 以下は、フリという要素を含まないが、「尾」ある  
いはそれを振る動作を表わす語を含むという観点からこ  
こに入れたものである。HIKOHKODORI は対馬、香  
川・徳島に計 3 地点見られる。うち香川のものは PY-  
OKOPYODORI であった。OPINPIYODORI は  
静岡に 1 地点見られる。PENPEN(DORI) は青  
森・岩手・宮城、新潟、山梨に計 5 地点見られる。PI-  
KKONDORI は佐賀に 1 地点見られる。OBIKO(D-  
ORI) は京都・大阪・兵庫に計 8 地点見られる。うち、  
6543.52 では OBEKO であり、6571.63 では OMEK-  
ODORI であった。「尾」あるいはそれを振る動作を表  
わすとしたが、なかには鳴き声と関連のあるものもある  
かもしれない。ZYUU~としたものはみな琉球に見ら  
れるものである。1231.88 の ZYUUMUKUMUKU-  
U, 1233.61 の ZYUUBITABITA, 1241.05 の ZY-  
UUBITABITAA, 1260.78, 1261.80 の ZYUUMI-  
TAMIITAA, 1261.16 の ZYUUMINAMINAA,  
1261.32 の ZYUUHWHENHWHENUU, 1270.29 の

NAGAZUUGANTAA, 1271.20 の ISIZYUHHW-  
AA, 2076.98 の ZYUHHURYAA, 2076.99 の ZY-  
UHHURUTURU, 2140.96 の ZUUBABUVVAS-  
YA をまとめたもので、みな「尾」にあたると考えられ  
る ZYUU, ZUU を含むものである。NAGAZYU-  
UGANTAA は、草の ZYUUNAGA(A)(DUI) との  
関係を考えるべきであろう。KOYUSURI は 6591.57,  
6592.35 の 2 地点である。ユスリは「揺り動かす」の意味  
であろうか。NENNEN'YOBORI は東京にある。  
青森に 1 地点見られる DONZAGE には被調査者の注  
として「尾をドンザゲル(つきあげる)から」とあったので  
ここに置いた。ONAGADORI は香川にある。OPP-  
AGECCYO, ABURAGECCYO は 3699.55 で併用  
されている。OPPA は「尾」を意味すると認めここに置  
いた。CIBIMUKAMUKAA は沖縄本島に見られ  
る。CIBI を「尻」にあたる形と考えてここに置いた。  
NNICUBIHATUTI は与那国に見られる。これも語  
中の CUBI に注目してここに置いた。

茶の符号を与えた類は、チン、チイなど鳴き声を模した  
擬声語と思われる形を中にも含むもの、および、それに類  
すると考えられるものをまとめて一類としたものである。  
長野・山梨・静岡東部にかけての地域、近畿南部、瀬  
戸内海沿岸部から九州東海岸にかけての地域、などにや  
や多く見られるほか、全国に点在する。なお、質問番号  
227 で「せきれいの鳴き声をどう言い表わすか」を質問  
した。当然考えあわせるべきものであるが本集には載  
せなかった。詳しくは『日本語地図資料』を参照されたい。  
CI(N)DORI は岐阜、奈良・和歌山、愛媛に、  
計 9 地点見られる。うち、CIDORI となるものは、  
7338.48, 7502.89, 7513.01, 7513.43, 7523.30 であ  
った(7313.01 は CINDORI との併用)。CIC(C)IN-  
(DORI)としたものは青森、群馬、東京・千葉、長野・  
静岡、三重、和歌山、兵庫、四国、大分・熊本に見られ  
る。このうち、6484.43 では CICINKODORI, 6488.48  
では CICINKONKOO, 6656.31 では CICINPEERO,  
7382.93 では CICINTAO であった。HIC(C)ICIN は  
群馬、宮崎・鹿児島に計 3 地点見られる。HICICINTA-  
ROBE は 8354.14 に見られ、すぐ西のインタタキタロ  
ベエなどとの関連が見られる。HISSI は宮崎に 2 地点、  
KISI は 8304.66 に、SICICIN は 6594.67 にそれぞれ  
見られる。SISINBIKI, ONIBIKI は奈良・大阪に見  
られる。空で示したオビコのビコと関係があろうか。

IC(C)I(N)CIN としたものは 7349.86 の ICICIN と 8341.12 の ICCINCIN のふたつである。CICIIDO は 7351.09 に見られる。CINCIN(DORI)は青森・岩手、福島、千葉、山梨・静岡、岐阜・三重、香川・愛媛・高知、大分・熊本・宮崎・鹿児島に点々と分布する。SENCINDORI は山口に、SENNENDORI は島根にそれぞれ見られる。CINCINKARA は青森・岩手、栃木、岐阜に計5地点見られる。(CIN)CIRO(RIN)として示したものは、7338.55, 7400.15, 7513.15, 7522.94 の CINCIRO, 6476.17, 6665.25, 7533.11 の CINCIRORIN, 6490.30 の CIRORIN, 7503.48 の CINCIGO をまとめたものである。CINCIKU(RO)(DORI)は 7521.79, 7523.74, 7533.11 の CINCIKURO, 6633.27 の CINCIKU, 7471.33 の CINCIKUDORI をまとめたものである。KAMACINCIKU, CINCYOBACI はそれぞれ三重に、CINGOICI は広島に、CIKIN は静岡に、CIKICINDORI は愛知に、CUKUNCUKUN は秋田にそれぞれ見られる。HI(N)KOCI は兵庫・岡山、山口、徳島、福岡、宮崎・熊本・鹿児島に見られる。このうち、7408.25 では HIKOCI, 6465.07, 7324.24, 7331.27, 7394.60, 7396.16, 8315.46, 8315.89, 8325.03, 8325.56, 8325.77, 8335.48, 8344.11 では HINKACI であった。KINKOCU は 7381.97 にある。HINKUTAKUTA, KITAKITA は千葉に、KIKKATA は茨城に、HEKKATA は群馬にそれぞれ見られる。HIKACCAN は徳島に、HIGACCIN は長崎に、TAMACIN は広島にそれぞれ見られる。CYOCCYO は静岡に、CYONGAME は宮崎に、CYOICYOIDORI は北海道にそれぞれ見られる。TINCYUT は奄美に見られる。SINCIKARA は青森に見られる。付近に分布する CINCINKARA と関連があろう。(BI)CIBICIN は 7523.27 の BICIBICIN, 7523.05 の CIBICIN, 7514.21 の BICIZIN をまとめたものである。KINKIN(DORI)は北海道に4地点見られる。これらは鳴き声と関連があろうとしたが、中には尾を振る擬態語と考えられているものが含まれているかもしれない。

橙で示した類は、カワラスズメ、カワチドリ、ハマチドリなどのように、「せきれい」の棲息する場所、あるいは、よく見かけられる場所に関する表現を語中に含むものをまとめて一類としたものである。ただし、草のタアクナギアのように別な観点からこの類に含めなかったものもある。この類(ほかその後に示すもの)の中には、

あるいは別の鳥をあらわす名が、なにかの誤解によって混入したのではないかと思われるものが、すくなくない。たしかに、その疑いの持たれるものがある一方、あとで述べるように、分布上から、あるいは他の鳥の名の分布と比較して、たしかに「せきれい」をあらわすと考えられるものも多い。

さて、この類は、東北部、北陸、近畿西部から中国にかけて分布し、他の地方にも点在する。四国、九州、琉球などには比較的少ない。分布からはいくつかの地域に分断されているので、少なくとも、セキレエ類よりは古そうに見えるが、緑、草の類との歴史関係はよくわからない。西日本では、緑、草の類よりは内側にあるが、東北地方では必ずしもそうではないからである。ただ、東北地方の日本海岸では北側にあるからすぐさま古いとも言えないところがあって、この図の草と橙の関係も、橙が草より後から海路運ばれたということも考えうる。ただ、橙の類の性格がカワラ、カワ等を語中に持つということであり、語の構成としては二次的な要素に着目しているので、語史全体から見ると、この類は二次的なものと言えるかもしれない。KAWARASUZUME(KO)は道南・東北部と中国に広く分布するほか、北陸、近畿にも点在する。末尾に KO の付くのは 3730.39 の1地点だけである。KAARA(DORI)は岩手、福島、大阪に計4地点見られる。このうち福島のもは SIROKKAARA であった。KAWASUZUME は、上のカワラスズメとほぼ同じ地域に分布するほか、佐渡、栃木、愛知などにも見られる。IDESUZUME は 6494.08 に見られる。KAWADORI(KO)は青森、長野・岐阜、島根、対馬に計6地点見られる。KANASUZUME(KO)は、東北部に多く見られる。KANA の部分は直接「水辺」を表わすものではないかもしれないが、分布が近いこと、カワと語形が似ていることなどから橙の類に含め、ここに置いた。KAWAGARASU は北海道、東北、中部、近畿、広島、鹿児島に計13地点点在する。KAWASEMI は岩手・宮城、茨城・埼玉、富山・石川、京都・大阪・和歌山、広島・山口、愛媛に計25地点見られる。カワセミについては、のちに述べるショオビンなどとともに「翡翠」との関係を検討しなければなるまい。KAWAHIBARI は福岡に、KAWACIDORI は岩手に、KAWACUBAME は青森にそれぞれ見られる。KAWARAHIIWA は北海道、山陰に、計5地点ある。KAWARASEKIREN, KAWASEKIREE

は長野、兵庫、高知に見られる。カワラセキレンは3地点ともセキレンとの併用である。セキレエにさらにカワラ、カワを付加しなければならない理由は不明である。「せきれい」の種類(下位分類)に関することであろうか。KAWARADAYUU は広島に2地点見られる。KAWANOOTAYAN は淡路に1地点見られる。オタヤンは『全国方言辞典』によれば、「おたふく、おかめ」としてこの地域で用いられるようである。KAWARASYO-(O)BIN は京都・兵庫に計9地点見られる。SYOOBE(N)DORI は兵庫北部を中心とした分布のほかに徳島にも1地点見られる。カワ、カワラという要素を持たないので紺で示したが、上のカワラシヨオビンとの関係からここに置いた。前部分はいずれも SYOOBEN, SYONBEN, SYONBE であった。「小便」という意識があるのだろうか。SYO(O)BIN は茨城、長野・岐阜、京都・兵庫、高知に計13地点見られる。上のシヨオベンドリと同様紺を与えてここに置いた。これら語頭のシヨは、赤のシヨキレエなどのシヨと何かつながりがあるだろうか。BINCYOO は埼玉にある。OS(Y)O(O)-DEN は栃木・群馬に4地点見られる。いずれも上のシヨオビンとは無縁かもしれない語形に多少共通な点を認めここに置いた。SYO(O)NI(I) は広島・山口に計9地点見られる。広戸惇『中国地方五県言語地図』(昭和40年、風間書房刊)によれば、シヨニは「翡翠」の意味で広く中国地方に分布する。この213図ではシヨオビンドリは兵庫北部に小領域を持つが、上記の地図では「かわせみ」の意味ですぐ西となりの鳥取にシヨオビンが分布し、両者の間で興味ある関係があることを思わせる。ただ、上記の地図では兵庫北部がどうなっているかはわからない。今後の課題であろう。SONA は福島に1地点見られる。(KAARA)SYOOT(O) から KAARA-PINPIN までは兵庫・鳥取・岡山に見られる。(KAARA)SYOOT(O)のうち、6454.24では KAARASYOOT(O), 6444.62, 6444.89, 6453.59 では KAARAZYOOTOO, であった。6453.59 ではただの SYOOTO も見られた。上記広戸惇の地図では「はおじろ」の地図にシヨオト(オ)が広く見られる。考慮すべき課題である。KAARASINBE のうち、6425.57 では KAARASINPO であった。KAWARACYOPPIN のうち、6520.50では KAARAHEPPIN であった。KAWARAHASIRI は秋田、新潟、高知に計4地点見られる。KAWARAKE は山口にある。KAWAKUMA

は青森・岩手に計5地点見られる。うち 2763.22 では KAWAKUMO, 3724.96, 3733.18 では KAKUMA であった。KAWARAGICCYO は山形に1地点見られる。すぐ北にある空で示したオッパゲッチョやアブラゲッチョとつながりがあるろう。KAWARANOOISI は滋賀に1地点見られる。付近に見られる、空で示したイセノオオフリなどとの関連も考えられる。岩手に見られる、KAARACU(N)(CU)(N)としたものは、3776.97のKAARACUN, 3753.88のKARACUNCUN, 3726.21のKARACUCCU, 3726.25のKAARACUCU, 3763.17のKARACUCUをまとめたものである。KAWAZYUNZYUN は広島に1地点見られる。このふたつは、茶で示した類との関連が考えられよう。(KAWA)SIGE は、3757.59のKAASIGE, 3746.41のKAASUGI, 4609.68のSIGEをまとめたものである。KAWA~として示したものは3766.97のKAACIGIRI, 7415.85, 7426.61のKAASANZAI, 8351.41のKAWACISI, 8373.08のKAWAZYECCHI, 0276.50のKOOSAGYAをまとめたものである。

以上は橙のうち、カワラ、カワを含むものであったが、以下はそれ以外の水辺に関するさまざまな語形を含むものである。ABUSIBICYOBICYO, TANAGAKWEE は沖縄本島に見られる。草で示した TAAKUNAZYA, ABUSIKUNAGYA と関係があるろう。UMISUZUME は青森に、UMIDUYAAGWAA は沖縄本島に見られる。HAMASUZUME は青森に見られる。HAMACI(N)CIDORI は 5462.29, 5462.57, 5612.22のHAMACIDORI, 5472.31のHAMAICIDORI, 5472.34のHAMAECIDORI, 5471.59のHAMAECIDORI・AMAECIDORIの併用, 6586.27のHAMACINDORIをまとめたものである。HAMACINCI(DORI)は6677.70のHAMACINCIDORI, 6577.86のHAMACINCIN, 7400.11のHAMACINCIRO, 6731.03のHAMANOCICIKURINをまとめたものである。HAMACUBAME は、秋田男鹿に見られる。ISOKACCYO は対馬に1地点見られる。このイソは後に述べるイセと何らかの関係があるかもしれない。IWACUBAME は2784.63に1地点見られる。IWA~としたものは、2774.59のIWADORI, 6403.60のEWANOSENDOのふたつである。MIZUKUMI-(DORI)としたものは6523.06のMIZUKUMIと、655

3.47 の MIZUKUMI・MIZUKUMIDORI の併用、6553.99, 6554.88, 6576.56 の MIZUKUMIDORI, 6585.49 の SIOKUMI をまとめたものである。OISEN-OMIZUKUMI として示したものは、6544.69 の OISENOMIZUKUMI, 6576.93 の OTERANOMIZUKUMI, 6586.32 の TERANOSIOKUMI のみつつをまとめたものである。上のミズクミドリとともに、尾を振る動作を「水汲み」と見たてたものであろうか。オイセ、あるいは、テラの部分は、他のイセノオオフリ、オイセドリ等と関連があろう。MIZUDORI は福井、三重、岡山、愛媛に計4地点見られる。うち岡山のものは MIZODORI であった。MIZUSEMI は 6575.40 に見られる。上のカワセミとの関連が考えられよう。

MISOSAZAE 以下の紺を与えたものの中には、さまざまなものが含まれる。MISOSAZAE は兵庫・鳥取に3地点見られる。うち 6428.91 のものは MISOSANZAI であった。上の KAWA~のうちの、高知に見られる KAASANZAI とのつながりが考えられようか。(MISO)SAICIN は 5557.42 の MISOSAICIN と、5557.48 の SAICIN のふたつをまとめたものである。MISO~としたものは 3735.50 の MISOPASAMI, 3797.32 の MISOKOGORI, 5612.22 の MISOTTORI, 7383.83 の MISOCCYO とをまとめて示したものである。ZAKKOTORI(SANZO) は 3772.32 の ZAKKOTORISANZO と 3764.86 の ZAKKOTORI のふたつである。IOTORI は広島に1地点見られる。INKODORI は 7218.09 と 7425.82 とに見られる。YASIKIDORI は宮崎に見られる。HOTOKEDORI から MIKOCCHOY までの各語には、ある共通点が認められないだろうか。これまでも出てきた、イセ~(テラ~を含む)とともに、ホトケ、オンタケサン、スイジン、ダイジングウ、イセ、ミコシ、ミコッチョというようにならべてみると、何かしら宗教的なおいがしてくるのである。「せきれい」にまつわる「話」を調べると興味あるさまざまな問題が生じてくると思われる。HOTOKEDORI は鹿児島に、HOTOKENHITAKI は大分に、ONTAKESAN は千葉に、SUIZINDORI は長野に、DAI ZINGUSANDORI は佐賀にそれぞれ見られる。(O)ISEDORI は奈良、徳島・愛媛に計11地点見られる。このうち、6593.30, 7503.11 では ISEDORI であった。ISODORI は 7329.39 にある (ISOKACCYO についてはすでに述べ

た)。イソは「磯」と考えることもでき、橙とすべきかもしれないが、近くに多く見られるオイセドリのイセとの関係を考えここに置いた。OSIEDORI は 6581.36, 7313.68, 7412.26, 7417.72 に見られる。古く「まなばしら」とあるように、まぐわいのみちを「教える」鳥という意味であらうが、一方、イセとの関係も考えられる。OISE と OSIE とは音がよく似ている。「教え」どりが先にあって「お伊勢」と結びついたのか、あるいは、その反対かは判然としないが、両者が互に関係していることは認めてもよからう。7382.97 の HITONOMICI もオシエドリと同じ発想のものであろう。MIKOSI, MIKOCCHOY はともに和歌山に見られる。「神興」「巫女」に関係ありと見たがどうであらう (OHURIMIKO (N) CYO については、すでに述べた)。MUGIMAKI-(DORI) は千葉を中心に栃木、神奈川、伊豆諸島に領域が認められるほか、琉球先島にも MUNMAKIDURU の形で1地点見られる。MUGICUKIDORI は 6618.51 に見られる。MUGUCCYO は 5669.12 に、TANEMAKIDORI は 5792.02 に、CUBAMAKIDORI は 7303.17 に、KIADASUZUME は 5614.68 に各1地点ずつみられる。SIZYUUKARA は新潟、島根に計4地点見られる。KOZYUUKARA は 6359.38 に1地点見られる。GARASINUSYUU は八重山に見られる。GARASI は「鳥」であらう。SYUU は「父」であらうか。IWASIKAKI は対馬に見られる。IWA-SIKAKI と切ると橙となるところであるが、ここでは IWASI-KAKI と一応切ってみた。5538.88 の SANMAINOHONEHIRAI も上のオンタケサン等の類と同じく、宗教的なにおいのするものと通じる点が見られる。TARO(O)BE(E) は、7332.97 の TAROOBEE と 8353.63, 8363.64 の TAROBE をまとめたものである。緑で示したイシタタキタロベエなどとの関連が考えられる。SIROBEE としたものは 7504.64 の SIROBEE, 6552.88 の SIRONCYO のふたつである。YONOKICI は 4676.60 に、KANDUYAA は 1261.70 に見られる。広島に見られる橙のカワラダユウと関連があらうか。TULIGAMA は琉球宮古(多良間島)に見られる。

その他として示したものの内容を、挙げておこう。GYUGYU 2755.76, NASURODORI 3755.32, KAMAYANOTORI 5463.64, OCYAGANOKAKA 5594.02, HAZIRO 5679.86, KUINA 5678.86, SE-



TTOO 5683.77, SYOKUDORI 6447.84 (赤のショクレンなどと関係があるか), KANKODORI 6477.02, ZYUUZU 6526.45, ENDANOTORI 6533.36, HAITORI 6603.82, MONDORI 7303.17, NAGASYEDORI 7346.58, MANUHUUGYA 1241.49, ITTIKU 1271.05, MACISITAA 2086.03, ISAUDULI 2141.71, SHICINAKIDULI 2151.11.

無回答にも地域性が認められる。とくに、新潟、関東中央部、北陸、近畿から中国にかけての瀬戸内海沿岸に多い。「見かけない」という注記がかなり見られた。棲息しないのであろうか。広島などの無回答の地域を上記の広島県の地図で見ると、「せぐろせきれい」の図にシジュウカラが、「しじゅうから」の図にホオジロが、「ほおじろ」の図にショウト(オ)がそれぞれ見られた。この地域での、これらの小鳥に関する名称について、語彙構造の上で興味ある現象があるようである。さらに検討が必要であらう。

## 214. すずめ(雀)

ここでは種類による異称もできるだけ地図に示した。それについての詳しい情報、併用地点での使いわけについては、『日本言語地図資料』を見られたい。

奄美・沖縄を除くと全国ほとんどどこでも SUZUME または～SUZUME で通用するようである。この類をすべて緑で示した。赤で示した ITAKURA および KURA の類は、沖縄本島以南をはじめ、四国中央山地、紀伊半島南部、銚子付近に分布し、この類が SUZUME の類より古いことを一見思わせる。その他の類で目立った分布を示すものは千葉の NOKIBA の類、富山の BANDORI の類、奄美諸島等の YUMUNDURI の類である。

SUZUME については、全国に広く分布する語形であり問題はない。SUZU～は「小さい」意という説もあるが、この鳥の鳴き声の擬声語からきていると見るのがいいであろう。～ME はカモメ、ツバメなど鳥の名にもあらわれるものである。なお、広くウシメ、ウマメなどと動物によく～ME がつく地方がある(茨城など)。これとも関係があるかもしれない(201 図、206 図など参照)。SUZUMI が 3730.43 (秋田)、3745.62 (岩手)、5527.61 (石川)、5558.67 (岐阜)、6698.61 (八丈島)にあらわれる。はじめの2地点は E と I とのいわゆる混同に

よってあらわれた可能性があるが、他は敏達紀十四年のスズメの別称スズミ、『和名抄』などにのっているスズメの異称スズミと関係があるかもしれない。これらは今すべて SUZUME の中に入れてある。

SUZUYUME は九州中央部、福島西北部、北海道などに見られるが、鳥取、秋田の SUSUME、鹿児島島の SUHIME とともに SUZUME から変化したものであろう。CUZUME も同じと見てよからうが、八丈島に独特の形をとって分布し、SIYUME、SYU(U)ME が五島に分布しているのが注目される。SYU(U)ME のうち、SYUME は 7275.84 である。

SUZUNEME はスズメのメが鳥や動物としての意味を語原的に持っていたことが忘れられたのち、動物に～ME をつけることの多い茨城で SUZUMEME ができ、同音異化によって今の形となったものではあるまいか。SUZUNME などの形が前にあり、それが発展したとも考えうる。SUZUMECCYO(埼玉)の～CYO は鳴き声を示すところから出たとも考えられるが、またこれは動物などをあらわす語の後部分によくあらわれるものである。

IESUZUME 以下は～SUZUME の類で、雀のうちのある種類について答えた可能性が高い。しかし、SUZUME が、雀より広い意味だった可能性もある。

IESUZUME は「家雀」であろう。ESUZUME も同じと思われるが、前者が高知、後者が神奈川なので、独立にあらわれたものであろうか。HEESUZUME (岩手)は「塙雀」、DOOSUZUME (千葉)は「堂雀」、NOKISUZUME (岩手、愛媛、老岐)は「軒雀」、NOKIBASUZUME (千葉)は「軒端雀」であろう。次の NOKIWASUZUME (富山)、NUGIBASUZUME (茨城)は NOKIBASUZUME の変種としてよからう。なお～SUZUME でない NOKIBA、NUKIBA は千葉に分布し、この中では、むしろ変種と考えられる NUKIBA の方が地点の数は多い。

以上が(一軒の)家を中心とした命名であるのに対して、家の集合した所を主とした命名によるものに次の SATOSUZUME (岩手)「里雀」、MURASUZUME (青森、京都)「村雀」、KAITOSUZUME (和歌山)がある。KAITO～は「垣内」で、村内の小部落を意味することが多い。MURA～はあるいは「群～」の意味であるかもしれない。

KADOSUZUME から YAMASUZUME まで

は、この鳥が多くいる所についての、その他の命名によるものである。KADOSUZUME は高知に1地点ある。196図によると、この地点では「前庭——仕事場」の意味で KADO という語は使っていないが、近くには使う地域があるから、あるいはこの KADO はその意味かもしれない。NIWASUZUME「庭雀」は千葉にあり、静岡の NIWASU もその略であろう。NOSUZUME は「野雀」で静岡と壱岐に、HAMASUZUME は「浜雀」で高知に、YAMASUZUME は「山雀」で岩手に見られる。

MASUZUME はイワシに対するマイワシのように、SUZUME がスズメの類、あるいは広く小鳥一般の称と解される所で、本来の雀を指すために命名されたものであろう。これは、この省略形と考えられる MASUZU や、発想を同じくすると考えられる HONSUZUME とともに、関東の東部南部のほか、岩手の三陸海岸、石川に、ある地域を持った分布が見られる。家の屋根に巣くったのが MASUZUME で、田などにて作物を荒らすのが SUZUME だとしている 5742.32, 5752.32 のような地点もある。

AKASUZUME(岐阜)の AKA~は、色の「赤」かもしれないが、「垢」であり、きたないという意味を示すものと考えてみる。奈良の AKACCYO もこれと同じと考えてよからう。この類は BABASUZUME まである。BOROSUZUME(能登)は「檻棲雀」であろう。BOTOSUZUME(能登)も『全国方言辞典』に「ぼろ」の意味のボットが岩手・秋田、石川県鹿島郡にあるように書いてあり、鹿島郡は少しこの地点とは違いますが、やはり「檻棲」であろう。BOTASUZUME(隠岐)も『全国方言辞典』によれば「ぼろ」「ぼろ着物」の意味のボタが隠岐にある。BABASUZUME(富山)もババッチイ、バッチイなどとの関係を考えて、この位置に置いたが、『全国方言辞典』にババイロ「褐色」富山とあり、この方が関係深いかもしれない。「婆雀」ではあるまい。

INASUZUME(山形)は「稻雀」、MUGISUZUME(北海道)は「麦雀」であろう。前者のようにいついた地方の人が稲のない地方に移住して、後者のように言いかえた可能性もある。

CUGARUSUZUME(岩手)は「津軽雀」であろうが、この地点は津軽に近いが津軽そのものではない。害をなすものとして悪口をいうとき、このように隣、あるいは近くの地名をつけることが多い。

赤で示したのは、ITAKURA および KURA の類と「羽鳥」の類とである。

まず、ITAKURA は、奈良・和歌山、高知・愛媛の各県に分布している。『総合日本民俗語彙』では、中国地方の山村にも聞かれるように書いてあるが、われわれの調査では、中国地方には現われない。この『総合日本民俗語彙』や『野鳥雑記』によると、ITAKURA の ITA~は東北地方のイタコ(巫女)のイタ~と同じく詠誦することで、沖縄のユタ(巫女)という語もこれと関係があるかもしれないといい、~KURA の方は「燕」をツバクラ、「せきれい」をチンチクロ(213図参照)などというように「鳥」の意味で、したがって ITAKURA は「読む鳥」「よく囁く鳥」の意味としている。とすると奄美以南にある YUMUNDURI などと同じ意味を示すことになるが、ユタドリというような言い方は沖縄にはない。この ITAKURA は、SUZUME より古く、あるいは古くからの SUZUME の行なわれていたある一時期に中央で行なわれた可能性もある。~KURA は倉の瓦の下にいるからという地点もある(6592.30)が、語原俗解であろう。

ITAKURASUZUME(奈良、高知・愛媛各県)は、ITAKURA が本義を失いかけたので、補強されたものか、あるいは一変種を示したものであろう。ITTA-KURA(和歌山)、ITAKURO(奈良)は ITAKURA の変種である。沖縄本島の NAAGURA の NAA は「農家の前庭」の意味であろう。三重の ONAGURA の ONA~は、NAA~との類似によってここに置いたが不明である。

ZICCIKURA の ZICCI~, ZIZIGURO の ZIZI~, DOOZYUGURO の ~ZYU~, ZYACCIGUREE の ZYACCI~(以上すべて千葉)はいずれも鳴き声からきていると思われる。ZICCIKURA には、子どもにいう時との注があった。DOOZYUGURO の DOO~ は「堂」であろうか。DOOSUZUME の地点と近い。

沖縄本島は KURAA が多い。YUMUNDURI の系統より沖縄では新しいであろうか。

沖縄本島の KURADUI, KURAADUYAA は、KURA~ が「小鳥」を意味していたとすれば、その語原が忘れられてから、新しく~DUI「鳥」などをつけたものということになる。KURAAGWAA(渡嘉敷島)の ~GWAA は小さいものをあらわす接尾辞である。

KURAYUMA (沖縄本島北端) の ~YUMA については後ろにつく点に難点があるにしても、YUMUN~との関係が考えられる。KURAYAMA (1232.61), KURAAAYAMAA (1231.88) の ~YAMA (A) もはっきりしない。現在は「ヤマ(林)」と理解されているかもしれないが、KURAYUMA と同じく、YUMUN~ と関係があるかもしれない。KURAYA-MA と切り、-MA を指小辞と解することも可能かもしれない。KURAYA-MADUI (沖縄本島) は、クラ+山鳥か、上のクラヤマに鳥をつけたものであろう。

KURAYUMUDUYAA (沖縄本島) はこの地域に新しい KURA の類が侵入して、古い YUMUNDURI の系統を駆逐したとき混交によって生じたものであろう。KURAMUDUYA (沖縄本島) もこれと関係があろう。いずれも沖縄本島の KURAENCYA, KURACICYA, KURAZIKA, KURAAZICYAA のうち、KURA (A) ~ 以外の部分は、鳴き声と関係がある可能性が強い。これも沖縄本島の KURABICCYOO や KURAHUCCYA についても、KURA~ 以外の部分がはっきりしない。~CCYO, ~CCYA の部分は、鳴き声によるとも考えられるが、先に述べた動物を示す ~CYO との関係も無視できない。

黒鳥の HUNADURE の ~DURE は「鳥」として、HUNA~ は何であろうか。『八重山語彙』によると黒鳥には「鰐」の意味の [funa:] があり、これは「黒い魚」とあるとの注がある。HUNA は「黒」であろうか。しかし、KURA が HUNA~ に変わる可能性がある。

いずれも宮古諸島の HHWADURYA から FFA-DURYA までは PADULĭ (羽鳥) との関係があろうかと思われるが、「こうし」「こうま」の「こ(こら?)」にあたるものとして HHWA~, FFA~ があることから (204 図, 209 図参照), 「子鳥」の可能性も高い。また、沖縄本島の KUR~ に対応するものとして HHW~, FF~ もあることから、KURA の類と関係のある可能性も低くはない。この最後のものが、もっともいいかもしれない (宮古では暗いを ffa~ という)。YAANU-FADULĭ (多良間島) は「屋のツファ鳥」つまり「屋根の雀」であろう。FUSADURYAMACYA, SADORY-AMACYA (ともに伊良部島) の語頭も、上述のツファにあたるだろう。~CYA のところも上に述べたことと同様であろう。~DORYAMA~ は「小鳥」かもしれない。与那国島の HADUYA, 宮古の PADURA, PA-

DULĭ はいずれも「羽鳥」の変種と思われる。

NOKIBA, NUKIBA については既に述べた。NOKIBASUZUME がこの地域のはずれにある。NOKIDARE は徳島なので、他の形とは直接関係はないかもしれないが、NOKI~ はやはり「軒」であろう。

KARAYANUGUUGWAA (西表島), KAARA-YAANUTURAAMA (鳩間島), KAARAYANUTUNNAMA (石垣島) は「瓦屋根の小鳥」という意味である。GAARATUINAA (竹富島) も、「河原」よりも「瓦」であって、「瓦鳥」の意味であろう。なおググは西表島では「雞」の意味であるから、正しくは ~GUUGWAA は「小さい雞」の意味である。

NIWAKKO (千葉) は庭にいるところからきたものであろう。NIWASUZUME と地域的にも関係がある。INAMURA (和歌山) も「稻叢」で、そのいる所からきているものであろうが、ITAKURA との関係も見のがすことはできない。

HUKURA (神奈川) は羽毛をふくらませている姿からきている。HUKURASUZUME (愛知) とは地域が離れているが、同種の命名と思われる。

BANDORI から BANCUI までは、すべて一類と見てよく、全部富山に分布している。富山を中心に、北は山形、南は岐阜県大野郡南境から郡上郡まで使われる蓑の名をバンドリという (『総合日本民俗語彙』)。雀を BANDORI というのは、この蓑を着ている姿に似ているからともいうが、逆に BANDORI という名の雀に、この蓑を着た姿が似ているので、この蓑の名が生まれたという逆の方が蓋然性が高い。後ろ部分に ~DORI があるからである。蓑の名の方が雀の名よりも地域が広いが、命名の根元になった方は広がらずに、蓑の名の方が広がったと考えることも不自然ではない。~DORI が「鳥」とすると、BAN~ が問題となる。これは「羽鳥」かもしれないが、ハドリの類とは、分布がすこし離れすぎている。BANKIKU, BANKIKO, BANCUI の後ろ部分、~CIKU, ~CIKO, ~CUI は鳴き声をあらわしたものであろう。被調査者は BANKIKO, BANCUI はクソズメであるという。クソズメという語形はないが、BABASUZUME を思い起こさせる。パパにはまた「大便」の意味がある。

TORUKO (岩手) はトリコである。MASSAN (神奈川) の意味はよくわからないが、古いいかたであるという。MASUZUME と関係があるであろうか。MOK-

KOO(SUZUME)(新潟)の MOKKOO は「襦袢」の意味なので、符号を合わせた。

ZYUUCIKU から CYACCYARAA までは鳴き声を示すものである。CINCINME(茨城)の～ME については既に述べた。ここでは「子どもにいうとき他の小鳥も含めていう」とある。その他のこの類も児童語が多かる。NIWACINCIN(千葉)の NIWA～は「庭」である。CYONCYO(N)のうち CYONCYO は 6412.12(島根), CINCI(N)のうち CINCI は 6702.21(千葉), CYOCYOROO(伊平屋)や CYACCYARAA(伊是名)の～ROO や～RAA はよくわからない。クラのラの部分と関連はないだろう。

YUMUNDURI 以下 INDUYAA までは、奄美以南、沖縄本島まで分布する。前部分は「読む」にあたると思われる。「読む」は「しゃべる」という意味である。

MISYUTUNNAA から MISYUDURI まで(八重山)の MISYU～は「味噌」の意であると『八重山語集』にある。その色からきているものと思われる。「みそさざい」という鳥がいるが、その「みそ」は何であろうか。～TUNNAMA の～TUN は「鳥」, ～NAMA, ～NAA-MA は愛称をあらわす。前の語の語尾が～N, ～U のときつく。すなわち、TUNNAMA は「小鳥」の意味である。

YUNOONTUNNA(八重山)の YUNOON は、「与那国鳥」を意味する。命名心理は既述 CUGARUSUZUME と似ている。SINASITURU(宮古)の～TURU は「鳥」であろう。SINASI～は黒島でシナシキが「杵」の意味で「稲搗き」からきている(『八重山語集』)というのと関係があるかもしれない。MANCOOZI(平安座島)は不明である。

## 215. とさか(雞冠)

凡例に示した見出し語数もほどよく、分布もかなりはっきりしており、まず成功している地図と思われる。無回答も 1867.15, 4736.63(鶏がいない), 8331.98 の 3 地点のみで、そうむずかしい調査項目ではなかった。なお＜併用処理の原則＞を適用したのはトサカ(58 地点)および、＜共＞＜希＞の注記のある 5598.67 のケイカン、7361.17 のケイクンである。

日本言語地図一般の傾向としては、東日本が単純であり西日本に諸種の表現が錯綜してあらわれる地図が多いようであるが、この地図は、東日本、特に東北地方に複

雑な様相がみられて、特色がある。

国の中央に分布しているサカ・トサカ類に赤を与え、その亜種と思われるものに橙を与えた。橙の符号は、概して赤の分布している地域に接している。

エボシ、カンムリ、カブトの類には空を与えた。西日本以外では、エボシの類が東北の八戸を中心とする地域、および利根川河口にみられる。カンムリの類は対馬に多いが、瀬戸内海・愛媛西部にもある。カブトの類は、四国から九州にかけてほぼ連続してみられるだけである。

緑、茶、紺を与えたものは、いわばその他の類である。緑を与えたもののうち、三角の符号を与えたもの(KAN 以下 SAN まで)は、主として、奄美以南の琉球列島で使われているものであるが、KAN だけは東北地方、長野、高知などにもわずかに見られる。なお、沖縄の諸語形については、本集 205 図「たてがみ」と関連するところがあるので、その地図および解説を参照されたい。その他の緑(線の符号・四角の符号)は主として東北地方を中心にみられるが、八丈に TONZIN、渥美半島や淡路や佐賀に KE(E)TO(O) や KEECUU、熊本に KI-N, KINKIRA などが見出される。

茶は、茸類と関係のある表現である。本集 245 図と比較されたい。これらの中では北奥のキノコが優勢であるが、岐阜北端や熊本にもわずかに見られる。

紺を与えたもののうち、分布領域のはっきりしているのは、山形を中心とするビクの類、秋田北部と糸魚川地方と能登のモチ、千葉のナツァキ、宮城・山形及び香川を中心とするヤマ(ガタ)であろうか。宮城のイタダキ、宮崎のト(オ)にも、ややまとまった領域がみられる。岩手を中心とするケッケロコ、北秋田のキモ、宮城・山形のビレ(ソコ)、ビデソコ、高知のタブなどの分布は、ややまばらである。

以下各見出しについて、その内容に注目すべきものがあればそれに触れ、一方、全国で 1 地点にしかなかったものについてはその所在を示す。

SAKA, K が [g] のものを含む。3762.71 は [sagako], 5792.02 は [sanja]。

SYAKO 6473.65 のみ。

SYOGA 5546.34 のみ。実際の音声は [joŋa]。

TOCUSAKA 7311.68 のみ。

TOSSAKA 0873.94 では K が [k] である。5565.12 は [tossa·ka]。

- TOCCAK(K)A [tottsakka]は, 5605.70のみ。  
 Kが[g]のものを含む。
- TOCCYAKA 岩手と秋田の3地点ともKは[g]。
- TOSSAKO 6437.94のみ。
- TOSSAKI 5558.33のみ。
- TOC(C)AKE 5614.68のみ。[tottsake]と[totsake]の併用。
- TOTOSAKA 6505.58のみ。
- TOSAKA Kが[g]のものを含む。別に6586.32の[tosjaka], 6513.24の[tosakaː], 0776.88, 1793.14の[tosaja], 6657.54, 6710.02の[tosaha]を含む。
- TOZAKA 5760.24の[tozaʔa]を含む。
- TOSOKA 4687.37のみ。
- TOZUKA 6425.57のみ。
- TOSAKEE 4725.68のみ。
- CUSAKA 7302.66のみ。
- TOCU 4598.33のみ。
- TOCYO 5507.09のみ。
- KASA 6486.50のみ。
- KESA 8302.55のみ。
- KASE 4762.99の[kaʃe]を含む。
- TORIKASA 6545.19のみ。
- TOKKESA 4678.77の[tokkisa]を含む。
- TOKKESI [tokkeʃi, tokkesi, tokkesi]を含む。
- TOKKECI [tokketsi, tokketsü]を含む。
- TOKASA Kが[g]のものを含む。6556.03は[tokasa]とともに[tonasa]をも使う。
- CUKASA 6525.30のみ。
- TOKUSA 6486.07のみ。
- TOKARI 0724.95のみ。内容は[tokari]。
- TOKYAKA 3619.08のみ。
- KECYAKA [ketʃaga]を含む。
- KECC(Y)AKA [kettʃaga]とともに, 3766.47の[kettsaga]を含む。
- KECCYAKU 3733.18のみ。内容は[kettʃagü]。
- KECCYAKI 3733.22, 3733.73の[kettʃagi]を含む。
- EBO(O)SI [ebosi, ebosü, iboʃi]のほか, 7363.12の[eboʃi]を含む。
- EBUSI [ebusi]を含む。
- EBIISU 7246.82のみ。
- YOBO(O)SI [joboʃi]を含む。[joboʃi]は8229.96のみ。
- YONBOSI 6413.10のみ。内容は[jomboʃi]。
- KA(N)MURI [kammuri]は6287.71と6482.26。6277.62は[kammuri]とともに[kamuri]とも言う。6267.84, 6286.68は[kammur]。
- KA(N)MORI [kammori]は6287.42。6267.68は[kamoʔ]。
- KABURI 7440.72のみ。内容は[niwatori no kaburi]。
- KAMURO 6296.27のみ。
- KABUTO [kabuto]のほか, [kabʰto, kaβʰto, kaputo, kaputo:]などを含む。7391.01は[kabutu], 8311.59, 8311.63, 8320.98は[kahʰto], 7258.64は[tori no kabuto], 7269.48は[tonno kabuto]。
- TOKIN 3740.82のみ。内容は[tokin]。
- TOKKIN [tokkin]のほか3750.28の[tokkin]を含む。
- KINTOKI 3730.39のみ。内容は[kintoki]。
- TONKE 3770.96のみ。内容は[tonkæ]。
- CUNKE 4762.44のみ。
- TONKIN 4619.29のみ。
- TONZIN 7659.53のみ。
- SYOKKIN 4684.77のみ。
- KINKIRA 7392.94のみ。
- KENKE(N) [kenken]は4704.96のみ。
- KENTO(O) 4703.18の[kento]を含む。4700.37に[kentoː], 4700.78に[kento:]がある。
- KENTAA 2095.60のみ。
- KAAN 2141.61のみ。内容は[ka:m]。
- TUNNUHAAN 2085.69のみ。
- KAGAMI 0249.17の[kakami]を含む。
- KAGAAMII 1231.88のみ。
- KAGANI 1231.72のみ。
- KAGAN [kagan]のほか, [kagam] 8地点, 0256.08の[kaga:m], 0246.97の[kakam]を含む。
- TUINUHAGAN 1213.76のみ。
- KOOMIN 2074.69のみ。
- KANAN 2072.20のみ。
- KANIN 2076.98のみ。
- KANNEE 2076.99のみ。
- KANGI [kangi] 8地点のほか, 2151.11, 2151.51は[kamgi]。

HANGI 1242.72 のみ。  
 HANZYU 1271.05 のみ。  
 KANZU 1261.16 のみ。  
 KE(E)TO(O) [kerto:, kerto] のほか, 7340.50, 7350.21 の [keito:], 6479.95, 7249.95 の [keito] や, 東北地方にかなりたくさん見られる [ke:do, kedo], 3724.36, 3725.72, 3733.88 の [kedo:] を含む。  
 KEECUU 7330.77 のみ。  
 KETOKI~KE(E)TOGI 内容は [ketogĩ, kēdoki, kedogi] のほか [kedonj, ke:donj] を含む。  
 KETOKE~KE(E)TOGE 内容は [kedoge, ke:doqe] のほか, [kedone, ke:done, ke:done, kitone] である。諸形とも各1地点である。  
 KIDONI 3765.28 のみ。  
 KABUTONABA 7383.98 のみ。  
 NABA 7394.60 のみ。  
 KINOKO [kinogo, kinoko, k<sup>s</sup>inogo] を含む。  
 TOSAKANOKINOKO 1731.89 のみ。内容は [tosaganokinogo]。  
 KIKURAGE [kikurane, kigurane] のほか 3689.75 の [kīgūrage] を含む。  
 KIKU 3751.81 のみ。内容は [kīgū]。  
 KOKERA 5557.85 のみ。  
 BE(E)RA [bera] は 5549.55 のみ。  
 BERABERA 5574.68 のみ。  
 BERO 5566.95 のみ。  
 BETTOO 5615.20 のみ。内容は [betto:]。  
 BIDENKO 4734.20 のみ。  
 BIKO 4623.61 のみ。内容は [bigo]。  
 BIKU [biku, bīku, bigu, bīgu] のほか, 4731.59 の [bikku], 4760.98 の [bēku] を含む。  
 BIRE(NKO) [bire] のほか, 4760.54 の [birē], 4725.01 の [birenko] を含む。  
 BIRI 4730.96 のみ。  
 BIROO 5604.65 のみ。内容は [biro:]。  
 CIRIMEN 7393.62 のみ。  
 GIBISI 8372.87 のみ。  
 HANA(KO) [hana] は 7349.07, [hanako] は 3780.65。  
 ITADAKI 4 地点とも語頭は [e], K は [g]。  
 KANOKO 6447.84 のみ。  
 KEKEKOO 3753.85 のみ。

KEK(K)ERO(KO) 3704.42 の [kekero], 3745.98, 3764.92 の [kekkeko], 3745.62 の [kekkeroko] のほか, 3761.22 の [kækæro], 3763.17 の [kekkeroko] を含む。

KESIBA 7356.70 のみ。

KIMO KI の部分は全部 [kĩ か ksĩ]。

MO(O)CI CI の部分は [tʃi, tsĩ, tsũ] のほか [dzĩ, dzũ]。5527.15 は [mo:tʃĩ], 3732.73 は [torĩmodzĩ]。

NACCAE [nattsae] のほか [nattsai, nattʃe:]。

次項と関連させ NACCAI とすべきだった。

SAZU 3735.50 のみ。

SEKIREE 6720.67 のみ。213 図の内容との混乱は、併用だし、いちおう考えにくい。

TAACIKYAGE 0228.96 のみ。内容は [ta:tʃikja-gē]。

TANZYEN 4672.19 のみ。

TOGE 5577.06 のみ。内容は [toqe]。

TONBO 7266.34 のみ。

YAMA(KO) [jamako] は 3760.58 のみ。

次に、回答として地図上には反映していないが、参考となる注記を抜萃する。新古などの注記については、トサカ類対他類のもの(トサカ類が新しい)、トサカ類内部のもの(トサカに近いほど新しい)は、割愛した。

3699.55 キクラゲ(茸の名一黒く形が似ている一の転用)。

3746.09 トツツァカ<低血圧の薬>。

3752.53 ケドゲ[ケドは鶏頭]。

3763.17 ケッケクロコ<子>。

4619.29 カン<今>。

4663.49 ケン[小木町宿根木ではタンゼン一頭に飾る模様のある美しいきれ一という]。

4734.20 ビデング<希>。

4742.95 イタダキ<古>。

5508.19 モチ[語原は餅]。

5615.20 ベッタォォ<ベッタォォタテルというのは、昔の女の子が髪にリボンのようなものを飾ったことからきた>。

5661.34 カン<鳥屋と話す時など>。

5696.68 トサカ<他にサカということばも聞く。これは飼育する人たちが主として言う>。

5698.91 サカ<最近養鶏の人が使っちゃれたことば>。

- 5792.02 エボシ<多>, サガ<正確には 切れ目をいう>。  
 6403.62 トサカ(この町は神話の伝え通り, 鶏を飼わないのでトサカのことよく分からない)。  
 6417.72 ヨボシ<多>。  
 6423.75 ヨボシ<多>, サカ<上>。  
 6470.11 ヨボシ<寝小便の葉>。  
 6482.26 カンムリ<古>。  
 7334.44 ヨボシ<古>。  
 7356.70 カブト<雄のもの>, ケシバ<雌のものー総称はない>。  
 7372.92 カブト<希, 古?>。  
 7374.75 カブト<エボシは若者が希に使うかもしれぬ>。  
 7383.98 カブト<希>。  
 7393.62 チリメン<鶏頭(の花)をチリメンバナという>。  
 7394.60 カブト<やや古, やや上>。  
 7422.26 カン<子どもも使う>。  
 8302.55 ケサ<やや古・希>。  
 8315.46 ト<多>, エボシ<新というほどでもない, 中年も使う>。  
 0294.66 カガニ[カガミの転]。  
 0294.93 カガニ<カガミの訛>。

なお, 質問文にはなかったが, 鶏のあご(くちばしの下)にたれているものについて特に注記した報告を一覧する。

2782.67 不明, 3639.49 sītamodzū, 3702.81 とさかと同じく kinoko, 3746.09 taΦwtaΦw, 3772.73 sagariki-nogo, 3780.65 tabūko, 4609.68 kuraŋe, 4619.63 とさかと同じく bigw, 4629.43 とさかと同じく bigw, ただしとさかを uwabigw, これを fitabigw といって区別することもある, 4659.50 bigw, 4713.02 不明, 4731.42 とさかと同じく bire, 4740.26 とさかと同じく bigw, 4741.92 bigw, 5507.20 montji, 5623.27 kintf-akw <?>, 5689.34 dare, 5712.70 jodareŋake, 5751.60 tare, 5782.79 jītare, 6485.30 tabw, 6610.77 jodokake, 6701.46 人によってとさかを tosaka, これを saŋa と言う, 7361.82 bire, 7659.40 mi:mi, 2151.64 daru。

全国を大観することによって, トサカの類が国の中央勢力を背景にし, 文獻的には古い(天武紀, 和名抄),

全国に勢力を及ぼしていないでいることがわかる。宮城や北九州などのトサカは標準語の侵入と見られる。三陸のトツツカもこの地域の特殊性から, 新しい侵入のように思われる。

トサカ類の中では, 関東東部と, 岡山南岸から徳島にかけて分布するサカが古いものではなかろうか。富山・岐阜, 兵庫を中心とするトツサカ, 石川, 三重・奈良を中心とするトリサカなどは, そう古くなさそうであるが, いかがであろうか。

橙類の中で, カサ, トカサ, トリカサ, トツカサなどは, サカ, トサカ, トリサカ, トツサカなどの音位転倒と考えられる。福島西部のトッケシなどの由来はよくわからないが, なにかこの地域での語原解釈があるのであろう。北部につながる宮城西部のケ(エ)ト(オ)などのケとの関係があるかもしれない。岩手北部のケッチャカなどは, トツツカとケトキ〜ケ(エ)トギとの混交とみてよからう。

エボシ類とカンムリ類とカブト類との相互関係はどうであろうか。カンムリ類は地点もかぎられ, 他の類からの翻訳ではなかろうかと思われる。エボシ類とカブト類については, (1)エボシ類のほうには青森や千葉に飛地がある。(2)西日本では巨視的にみてカブト類のほう地域が連続している。(3)やや微視的にみて四国西岸, 大分, 五島などにエボシ類の点在分布がみられることから, エボシ類のほう古いものと考えことにする。併用の場合の注記からは, 利用できる材料がない。

文献ではこのエボシにあたる表現は(烏帽子そのものについても)サカなどより新しい時代に現われるようであるが, 言語地図からはどちらかという, エボシ類のほう古そうに見える。青森東部や利根川河口付近のエボシはその地域の特殊性から西日本のものの飛火と考えることもできようが, 中国地方ではエボシ類が古そうに見えるからである。

秋田, 新潟, 熊本などに散在するトキン〜キンの類もかなり古そうに思われるが, 各地での発生ということも考えられなくはない。

琉球列島に分布する諸語形の中では, カガミが古いかもしれない。八重山の鳩間と東北, 長野, 高知のカンの相互関係はわからない。

ケ(エ)ト(オ)以下のものは東北地方以外にもないことはないが, 鶏頭という表記を背景にしていようから, その分布を残存とすることはできない。岩手南部から宮城

北部にかけてのセント・ケンなどは、その北と南をケ(エ)ト(オ)類にはさまれているから、多分新しいものであろう。

紺で示したもののうち、領域が何箇所かにみられるものはモ(オ)チとヤマの類であるが、このうち、モ(オ)チは、古く能登以北の日本海岸に力を持った表現と考えてよからう。ヤマの類は、いくつかの表現の衝突する地域でのそれぞれの発生ではなからうか。宮城・山形北部と香川との間をむすんで、古くは広く分布していたものとすることはむずかしそうである。

## 216. さかな(魚)

この項目は後期調査にあたって新しく加えたものであるため、地点数が少ない。本図は、下欄に示した3つの質問文をもとにして作った。語形を求めるなどなぞ式質問のほか、語形を与えてその用法を求めるS式質問を加えているので、「魚」を意味する語の分布以外に、サカナとウオのそれぞれの用法の違いをも地図に示してある。以下すべての魚を含んだ名称を<総称>、用法の違いによる名称を<個別称>ということにする。個別称は、「海魚」「川魚」「生きている魚」「店頭の魚、料理した魚」「小魚」「特定魚」「標準語的」の7種に分ける。

実際の回答から得られた語のあらわれ方を用法によって類別すると、(1)サカナまたはウオのうちどちらかの語が総称として用いられ、それ以外の語はまったく用いられない、(2)一方の語が総称として用いられ、他の一方の語が個別称として用いられる、(3)総称として用いられる語がなく、サカナまたはウオの一方の語が、ある用法を示す個別称として用いられ、もう一方の語が別の用法を示す個別称として用いられる、(4)サカナまたはウオが総称または個別称として用いられ、サカナまたはウオ以外の語がさらに個別称として用いられる、の4種となる。

254の質問文は「魚」の総称を求めているので、その回答としては総称をあらわす語が得られるか、もしくは、別々の個別称をあらわす2つ、又はそれ以上の数の語があいまって総称的な用法を示すことになるか、のいずれかのはずである。また、255、256の質問文では、サカナおよびウオの2語をあらかじめ与えておいて、その用法の違いを求めている。実際の254の質問の回答では、語としてはサカナとウオが中心となり、それに、用法によっ

てジャコなどが多少あらわれるという程度であった。これらのことから、地図上には総称をあらわす語、または総称がないために対立する個別称となって総称のかわりをなすサカナおよびウオを第一に地図上にあらわし、この2語以外については、それが総称にかわる要素(対立する個別称)となり得る場合に限って地図上に採用した。そのために、たとえば、0894.61では、総称としてのSAKANAがあるので<小魚>としてのZYAKOは地図に採っていない。また、6385.10では、<海魚>としてSAKANAを、<川魚>としてUOがあるので—この2語で総称にあたるので—、<小魚>としてのZYAKOを採っていない。これに対して6419.69では、<海魚>としてSAKANA、<川魚>としてZYAKOという状態なので—このZYAKOとSAKANAが組になって総称のかわりをなしていると考えられるので—このZYAKOを地図に採用している。全体を通してサカナまたはウオ以外の語が総称に用いられる地点は全くないし、総称にかわる要素としての個別称にはジャコが現われるだけである。そのほか、地図に載せなかった語は、主として幼児語に用いられるaka(4781.48), taitai, bi: bi:, d3id3i, gokko, bo:, bo: bo, toto, buwa, dodo, dotto, dzadza, mo, ɛjo(4791.12), ɔɔjo(4791.61), oejo(4792.80), jo: jo(4793.41), eppo, tjitfi, kiʔkiʔ, bebe, bu:wa:, bo:3o, bottʃo, bi:ko, memme: などである。

以上の基本原則にしたがって、凡例に示すように、サカナとウオの2語に、ジャコを加え、個別称がなく総称のみのものに1つの符号を与えるほか、総称と個別称の組み合わせだったもの、または総称がなく個別称のみが2語組み合わせだったもの、それぞれに1つの符号を与える方式をとることにした。他の地図が1語形1符号であるのとはかなり違うので、注意されたい。符号については、総称をあらわす語ごとに色を分け、サカナに赤を、ウオ類に緑を与えた。また、総称がなく個別称のみの組み合わせに紺を与えた。

SAKANAは、[sakana sagana, saɣana, saɣana, saɣana, sa<sup>a</sup>ana, θakana]などすべての変種を含めた。UOは[uo, uro, juwo, juo, juo, uwo, ũo, u<sup>w</sup>o, ju<sup>w</sup>o, u<sup>b</sup>o, ju<sup>w</sup>o, ju: o]などを内容としたもの、IOは[io, iwo, i<sup>w</sup>o, jo:, jw:, ɪo:, eo, jo:, jo, jio, ɪ<sup>w</sup>o, ji<sup>w</sup>o, ijo, i<sup>j</sup>o, iɔo, e<sup>w</sup>o, iome, io]などを、IYUは[ju:, eɯ, ʔiju, iju, iju, ʔju, ʔju:,



2ju:]などを, IRUは[iru], IZUは[izɪ, izu, ɪzu, ɪsu, ɪgu]をそれぞれ内容としている。このうち, UO, IO, IYU, IRUを1類にまとめてウオ類とすることができる。また, ZYAKOは[dʒako, zakko, dzakko]などを, その内容としている。ただ255, 256の質問項目が, サカナまたはウオという語形を与えてその用法を聞くというものであるので, 調査者の積極的な表記がない限り, その地点における正確な語形をつかむことはできない。したがって地図に示した語形は, 3つの質問項目, こくに255, 256という一種の限定を持ったものから得られた範囲のものである。

赤の正方形べた符号を与えた「総称」のSAKANAである地域は, 九州中南部および琉球を除いてほぼ全国にわたって分布している。それに対して, 緑の正方形べた符号を与えた「総称」がウオの類は, 主として西日本, それに伊豆諸島に分布している。「総称」がウオの類は「総称」SAKANAとの併用としてあらわれる場合が多いが, これは, 254の質問項目で語形としてウオ類が出た時, 256の質問で標準語として使われている語形SAKANAを質問文中で与えるので, いずれの語も「総称」として使うという結果が各地であらわれることになったのであろう。赤の平行四辺形符号を与えた「総称」がSAKANAで「標準語的」がUO, IO, IYUである地点は全国に点在しているし, 反対に緑の平行四辺形符号を与えた「総称」がUO, IO, IYUで「標準語的」がSAKANAであるものは, 九州中南部地域にまとまって分布しているほか, 各地域にも点在している。赤の釣鐘形符号を与えた「総称」がSAKANAで「海魚」がIOの地点は6484.43(香川)1地点のみであり, 緑の釣鐘形符号を与えた「総称」がIO, IYUで「海魚」がSAKANAの地点も5645.27(群馬), 0248.00(奄美)の2地点と, 同じく少ない。赤の三角形符号を与えた「総称」がSAKANAで「川魚」がUO, IOは, 関東以西に41地点点在しているのに対して, 「総称」がウオ類で「川魚」がSAKANAの地点は全くない。赤の紡錘形を与えた「総称」がSAKANAで「生きている魚」がUO, IOは, 4743.61(宮城), 4760.54(山形), 5628.70(栃木), 5652.81(長野), 5663.64(長野)5682.34(長野), 6523.54(滋賀), 6577.86(三重), 7361.17(熊本), 7417.22(徳島), 7503.48(三重)の11地点あるのに対して, 「総称」がウオ類で「生きている魚」がSAKANAの地点は全くない。「総称」がSAKANAで「店頭の魚・料理した魚」がウオの類の地点が全くないのに対して, 緑

の分銅形の符号を与えた「総称」がUO, IO, IYUで「店頭の魚・料理した魚」がSAKANAは, 佐渡, 八丈にそれぞれ1地点と岐阜から沖縄までの47地点とに点在している。赤の銀杏葉形を与えた「総称」がSAKANAで「小魚」がUO, IOは, 5606.83(新潟), 6545.19(三重)の2地点であり, 「総称」がウオ類で「小魚」がSAKANAの地点は全くない。赤の円形符号を与えた「総称」がSAKANAで「特定魚」がUO, IO, IYUである16地点について「特定魚」の内容を示すと, 次のようである。3760.93<鮭>, 4619.29<鮭>, 4637.20<鮭>, 4638.22<鮭>, 4647.69<鮭>, 4648.04<鮭>, 4666.42<鮭>, 4668.27<鮭>, 4676.67<鮭>, 4685.10<なま鮭>, 4710.18<鮭>, 4710.55<鮭>, 5741.30<鮭>, 5751.60<鮭>, 6286.68<ぶり>, 6534.37<鮎の雌で卵をもっているもの>。新潟・山形にほぼまとまりをもって分布しており, しかも「鮭」を意味する場合が多い。それに対して「総称」がウオ類で「特定魚」がSAKANAの地点は全くない。なお, 「海魚」がSAKANAで「特定魚」がIOの地点(4695.33)は1地点であるが「特定魚」の内容は<鮭>である。

紺を与えた「総称」をもたず個別称のみの組み合わせの地点を見ると, 菱形符号の「海魚」がSAKANAで「川魚」がUO, IO, IYUは, 東北から九州まで34地点に点在している。それに対して, 蝶々形符号の「海魚」がUO, IOで「川魚」がSAKANAの地点は, 6366.16(山口), 6373.84(山口), 8311.41(鹿児島)の3地点のみである。小刀形符号の「海魚」がSAKANAで「生きている魚」がUOは2774.59(青森), 6441.71(広島)の2地点のみであり, 「海魚」がウオ類で「生きている魚」がSAKANAの地点は全くない。「生きている魚」がSAKANAで「店頭の魚・料理した魚」がウオ類は全くないが, その逆のリボン形符号の「生きている魚」がUO, IOで「店頭の魚・料理した魚」がSAKANAは岐阜から九州までの28地点に点在している。また「川魚」がSAKANAで「店頭の魚・料理した魚」がウオ類となる地点は全くみられず, 長方形符号の「川魚」がUO, IOで「店頭の魚・料理した魚」がSAKANAである地点も5587.74(岐阜), 5631.26(長野), 7385.84(宮崎)の3地点のみである。なお, ZYAKOについてみると, 菱形ぬき符号の「海魚」がSAKANAで「川魚」がZYAKOの地点が3754.76(岩手), 3763.17(岩手), 3774.44(岩手), 4701.14(山形), 4722.40(山形), 4741.43(山形), 5613.33

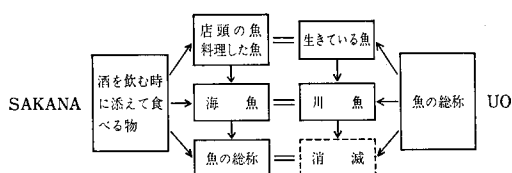
(新潟), 6419.69(兵庫), 6439.61(兵庫), 6447.39(兵庫), 6522.79(京都), 6532.93(京都)の12地点であり, リボン形ぬき符号の「生きている魚」が ZYAKO で「店頭の魚・料理した魚」が SAKANA の地点は, 6520.50(兵庫)の1地点である。

以上みた分布状態をおおまかにまとめてみると, 全国的に総称としての SAKANA が広く分布しているが, ウオ類も八丈, 九州中南部および琉球をはじめ西日本にかなり広い分布がみられることがわかる。個別称では, SAKANA を「海魚」とする地点が全国に点在し, また, 「店頭の魚・料理した魚」とする地点が主として西日本に点在している。ウオ類についてみると, 「川魚」とする地点が主として西日本に点在し, 「生きている魚」も多少みられ, 「特定魚」とする地点が地域的にまとまった分布をみせている。

一般によく知られているように, 文献をたどることによって, ウオは「魚類の総称」であったのに対して, サカナは「酒(さか)菜(な)の義, 酒を飲むに添えて食ふ肉・菜類」(『大日本国語辞典』)であったと考えられる。これと符節をあわせるように, 次に列記する地点では, SAKANA を「魚」の意味にも使うが, 「酒菜」または「料理したものすべて」の意味にもついている。4653.02, 6552.90, 6553.22, 6572.29, 7238.12, 7238.40, 7238.82, 7239.82, 7239.90, 7246.45, 7248.49, 7257.94, 7258.82, 7258.89, 7259.93, 7266.09, 7266.60, 7266.92, 7268.87, 7279.93, 7289.31, 7323.02, 7323.17, 7330.77。また, 次の各地点では SAKANA を「酒菜」の意味にしか使っていない。7229.50, 7237.67, 7309.37。

このような本来のサカナの意味が, 「魚」の総称の意味に使われるようになる変化過程を, 全国に点在している SAKANA の個別称「店頭の魚・料理した魚」・「海魚」が示していそうである。と同時に, このサカナの意味変化に対応して, ウオ類も「生きている魚」・「川魚」の意味に転用される地点が主として西日本に点在し, また全国的に「総称」としての勢力を失いつつある状態を地図にみることができそうである。このことを図示すると次のようになる。

また, 「鮭」を意味するウオについて, 『聞書秘伝』(寛政7年写)に, 「うをとばかりおし出して申し候は, 鮭の事也。」とあるので, あるいは地域的にもっと広範囲の基盤があったのかもしれない。なお付言すれば現在, SAKANA が勢力を伸ばし, UO などの類が後退しつつ



あるひとつの理由として, U+O という2母音の組み合わせという不安定な発音の性格も挙げることができるかと考えられる。

## 217. うろこ(鱗)

「うろこ」の図に現われる語形には, 『日本言語地図』第3集105図「ふけ」, 同じく131図「あか」, また本集245図「きのこ」に共通して現われる語形が多い。合わせて参照されたい。またそれらの諸語形のうち, コケ類については, 別に, 本集246図として総合地図「コケの意味」を作った。同時に参照されたい。

全国を大観してまず目につくのは, 赤で示したウロコあるいはそれに近いと考えられる一連の語形と, 緑で示したコケ, コケラの類との, 飛騨山脈を境として大きく対立する分布である。ウロコ等の類は飛騨山脈から西へ琉球先島まで連続した分布領域を持ち, 佐渡, 東北北部, 北海道にも分布する。コケの類は, それ以外の東日本に, 広い領域を持つ。

凡例で UROKO から HIRE までは, 赤一色で示した。これらをウロコ類としてひとつにまとめてしまうことは, 多少, 問題かもしれない。ただし, ウロコ, イリキなどを見ると, ほとんどが, U, I という高い母音あるいは, それに類する音で始まっている点, 第2音節の子音に R を持つものが多いという点, 第3音節の子音が K となるものが多いという点などの共通点があげられ, これらを大きくひとまとめにすることはまず承認されると思われる。イラ, エラ, ヘラ, ヒレなどは, 「えら」「ひれ」との関連も考えられ, 問題があるが, 語形の上からこれらの類に一応含めた。

この赤の類をさらに小さな類に分けると, まず UROKO から YUIKO までが一類とされる。中心となる語形は UROKO で, 中国・四国より東をおもな領域としている。オロコは北陸, 山陰にややまとまって見られ, ウロコよりは古いものかもしれない。ウルコは四国・九州に広く見られる。音声の問題だから, 個別の変化

とも考えられるが、あるいは古いもののなごりかもしれない。これらのうち、URIKO から YUIKO までは、第2音節が下に述べるイリコ等と、共通性が強い。地理的にも、ともに九州に分布している。

IROKO 以下 IRU までを一類とみることができよう。ほとんどが九州に分布し、IRIKO, IKO が中心的な語形である。九州に6地点見られる IROKO は、古語の「伊呂古」と同形である。VIROKO はとびはなれて富山にある。[viroko] という語形で報告されたものである。形の上からイロコのそばに置いたが、この [v] はウロコのウが変化し、半母音 [w] を経て [v] となったもので、[i] も [w] が中舌化してできたものと考え、この VIROKO はウロコに近づけて考えるべきものかもしれない(ただし、富山には IRARA もある)。IKO は、IRIKO の R が弱まってできた形 IIKO からさらに変化して生じたものであろう。鹿児島東部に見られる IRAKO は、後述する IRA と関係のある形である。薨(いらか)などということばが思い出される。末尾に KO を持つことからここに置いた。入重山に見られる IZINUIRAG[g] U の IRAG[g] U も同様に後述する IRYAA, IRAG[g] I などと縁のある形であるが、末尾の G[g] U に引かれてここに置いた。IZINU は、「魚の」にあたると考えられる。なお、IG[g] O, EG[g] O のふたつは、それぞれ、薩摩半島西南部と、奄美島とに見られる。この地域は、語中の K が有聲化する傾向のみられる地域であるから、これらはイコにあたるものと考えられよう。入重山の IRU は上の類と言えるかどうか分からないが、音の対応からはイロにあたると考え、ここに置いた。

IRIKI から ICI までをひとまとめと考えた。すべて琉球に分布する。これらのうち IRIKI から IRUG[g] I までがさらに下位の小類として分けられよう。第2音節に R を保っている点が共通である。中心的な語形は IRIKI と IRIKI である。IRIKI は、IRIKI から規則的に変化して生じた形と考えられ、沖縄本島を中心に分布する。宮古の ILĪKI, ISIKI, LĪĪKI は、つぎの IIKI 等の類との中間に位置するものかもしれないが一応ここに置いた。これに対して、IIKI から ICI までは、R が完全に脱落している点で共通している。これら IRIKI から ICI までは、IRI の部分(あるいは、II, I)について、九州のイロコ、イコなどと通ずるところがあり、両者が歴史的に近い関係にあった

ことを思わせる。ただ、琉球の諸語形に共通する末尾の KI あるいは CI と本土部に多く見られる末尾の KO とは、子音がともに K ということから、何かの縁があったかと思われるが、母音を見ると、単純な対応関係にはない。考察が期待される。

IRAKI から ERA までは、第2音節に RA (あるいは RYA) を持つ点が共通している。すでに採りあげた IRAKO も関係がある。IRAKI から IRACYA まではみな、琉球にある。末尾の音節は上のイリキ等の類と共通している。CYA も、口蓋化している点で、CI に通じている。IRASA は大分の IRA の領域の周辺に見られる。IRARA は富山にある。これらの末尾音 SA, RA は他との関係が薄い、一応ここに置いた。IRARA の RA は、緑で示したコケラのラと関係があるかもしれない。IRARA とつぎの IRA との関係についても何とも言えない。IRA は大分を中心に分布する。これと、九州に多く見られる、イリコ、イコ等の類とは、語形の上ではかなり違うとも思われるが、分布から見て何らかの関係があると考えられよう。しかし、両者の歴史的先後関係については、よくわからないと言わざるを得ない。また、琉球、とくに入重山に多く見られるイラキの類と大分のイラとの関係、さらに、それらと琉球のイリキ、イイチ等との関係についてもなお考察が必要であらう。ERA は栃木、愛媛、九州とに計4地点見られる。愛媛、九州のものは、大分のイラと関係があると考えられるが、栃木の1地点が九州のものと関係があるかどうかについては断定的なことは言えない。「鰐」との関係も考える必要があらう。すくなくとも現在は「鰐」と関連するものとしての語原解釈がされていそうである。また KOKERA との関係も考えられよう。また、古くはイラ、イララは、「刺」を指す語として用いられていたらしい(『大言海』による)。後に述べるササラの例とともに、「とげ」と「うろこ」との関係をも考慮する必要がある。

HERA から HIRE までは語頭に H を持つ点で共通している。上の各類との関係は薄いかもしれないが、ERA と HERA との形の類似からここに置いた。分布は九州東半に見られる HERE, HIRE 以外、まとまったものが見られない。HERA は 117 図「した」にも現われるが、愛知のものぐらしか地理的には関係がなさそうである。長野のものは鱗 HIRA, 舌 HERA である。

緑で示したものは、コケ、コケラの類である。飛騨山

脈を境にして東日本に広く分布する。そのほか香川に数地点、佐賀唐津に1地点、北海道に数地点見られる。緑の類をさらに類別すると、凡例で KOKE から KOKI までのコケ類と、KOKERA 以下 KOIRA までのコケラ類とに分けられる。KOKEZA 以下は上の2類には必ずしも含まれないが、語形の類似から緑の符号を与えた。KOKEZA は八丈、KOSERA は岐阜、TOG-[g]ERA は栃木、OG[g]ERA は千葉に見られる。KERA は滋賀、KORE は北海道日高にそれぞれ見られる。緑類の分布領域の外にあるものは、あるいは別なものかもしれないが、一応ここに置いておいた。

コケとコケラとは、分布が交錯していて、両類のはっきりとした分布領域は見られない。したがって、コケとコケラとの間の歴史的な関係を分布から推定することはむずかしい。これら緑の類については、本集246図「コケの意味」の図で、他図に現われるコケとを比較対照して検討したので、ここではこれ以上触れないことにする。

紺で示したものには、さまざまなものが含まれる。HADA, HAZA は、紀伊半島の太平洋岸沿いの地域と静岡御前崎とに分布する。人の「膚」と関連があらうか。あるいは、先に述べたヘラ、実在はしないがヘラなどともつながりが考えられようか。SAME, SAMI は、福井、兵庫北部、長崎に計9地点見られる。『全国方言辞典』によれば、このほか鹿児島種子にもあるとあるが、この図には見られない。また、「木の皮を去って荒削りする」という意味で対馬に「さめる」、長崎平戸に「斧で材木をけずる」という意味で「さむる」がある。これらとのちに述べるコケラが、一方で「木のくず」を表わすことと並行的な関係にあるとは言えないだろうか。CU から IONCU までは九州西部に分布する。与那国の ITU は形は似ているがこの類かどうかかわからない。あるいは、赤で示した IRU(八重山)との関係も考えられよう。『全国方言辞典』によれば、「つ」のほかに「つー」という見出しがあり、九州地方では亀や蟹の甲、かさぶた、柿などのへたなど、いくつかの意味で用いられているらしい。その使用地域も、九州の西半地域でかなり錯綜しているようで、それとこの図の「うろこ」を意味するツとの関係は詳しく検討すれば興味ある問題と思われる。SOBU は隠岐に SOBUKE は広島に見られるが他との関連はよくわからない。ZENG[g]O は静岡に見られる。鹿児島の HENKO と形の上で似ているので何らかの関連があるかと思われる。HENKO は、さ

らに、赤で示した、HERE, HIRE 等に KO が付いて生まれた形という道も考えられるかもしれない。『全国方言辞典』によれば、「甲、こうら」の意味で「せんごー」という語が高知で用いられるらしい。また、愛媛中部で「いかの胴にある石灰質の甲」のことを「ぜんご」と言うという報告もある。また、「鰻の腹側にある刺に似た鱗」(『広辞苑』)としてゼンゴという語もある。上のツの場合と同じく、このゼンゴ、ヘンコの場合も「うろこ」と「甲」というふたつの意味に關係を持っているようである。SASARA は静岡西部に1地点ある。ササラは本集249図「とげ」にも現われる語形である。「とげ」の図ではさまざまな語形の変種を伴っているが、愛知東部には SASARA が数地点見られ、この図の SASARA とつながっている。さらに、「とげ」の図にはこの図の SASARA のある地点のすぐ南に、UROKO という語形が見られる。この地方では「うろこ」と「とげ」とが非常に近い關係にあるらしい。また、『全国方言辞典』によれば、和歌山西部で、「屋根ふき用の板」の意味で「ささら」があるらしい。さらに、「屋根ふき用の板」はふつう「こけら」と言われる。このことと、この図で東日本に広く分布するコケラと対比すると、「うろこ」と「屋根ふき用の板—こけら」との間にも深い關係があるようである。AKUMI は沖縄に見られる。『全国方言辞典』によれば、「みかんなどの袋にある白い筋」として喜界にあるとある。つながりを考えられないであろうか。GOZI は宮崎に見られるが、他との関連はよくわからない。

図全体を見わたして、ウロコとコケ(ラ)との關係を考えると、東日本では、ウロコが日本海沿岸を北上して行った様子がうかがわれる。佐渡や東北地方の日本海側にももとはコケ、あるいはコケラが分布していたのではないかと考えられる。関東などに点々と見られるウロコも、西からの飛火としてはいったものであろう。標準語は「うろこ」であるが、関東におけるウロコの分布は、その背景としてはかなり希薄である。京都を中心としたウロコが文章語として採用され、それが関東での地理的な分布の背景を持たないまま標準語となったものと考えられる。

佐賀唐津のコケは東からもたらされたもので、古いものの残存ではなからう。香川のコケラについては、分布の場所がまっ先に京の勢力の及びそうな地域なので、これを残存と言うことはむずかしい。高松藩は水戸の分家であることから、あるいは東からの飛火かもしれない。

この背景には、つぎに述べる「ふけ」との関係も働いていたと考えることができよう。

九州南部から琉球にかけての、ウロコ、イコ、イリキ等の分布に関しては、第3集105図「ふけ」の図を参照すべきである。作図のつごうによって符号の形は共通にできなかったが、九州南部から琉球にかけての地域に、「ふけ」「うろこ」ともに同語形で表わすという地点がかなりある。また、隠岐にも数地点同様のことが見られる。とくに琉球では八重山群島を除いてほぼ全域にこの傾向が見られる。このことは、たまたまそうなったのではなく、古い時代には、「ふけ」と「うろこ」との間に語形として区別がなかったことの残存であると考えたい。また、「ふけ」の図で高知東北部にコケラが数地点見られる。上でふれた香川のコケラと隣接していると言えよう。ここでも、「ふけ」と「うろこ」とが密接な関係にあったことが考えられる。古字書の類でも、たとえば『和名抄』では、「鱗」「雲脂」の両方に「いろこ」という和語が記されているようである。上の推定と合致すると言えよう。

また、さきのサメやコケラのところでもふれたように、「うろこ」と「木屑」との関係も考えなければならない。サメは数か所に分かれて分布するが、単なる残存形ではなく、さきの「ふけ」「うろこ」の場合と同様に、「木屑」という意味と「うろこ」という意味の接触から、各地で独自に生まれる可能性を持っていたとも考えられる。これらの語の歴史を考えるとときには、これら「うろこ」「ふけ」「木屑」「屋根ふき用の板——こけら」「瓦」「あか」「とげ」さらに「きのこ」「苔」など、一連のものを同時に考慮してはじめて、十分な解釈が得られるものであろう。

## 218. かえる(蛙)

この項目は、地図の下欄に示した質問文のように、「蛙」の総称を求めたものである。したがって、たとえば3727.81の〈総称カエル、雨蛙ビッキ〉の場合、カエルのみを地図に採用した。しかし、7342.72の〈tangakuは殿様蛙、çikiは赤蛙、bikiは雨蛙〉というように総称がなく個別称のみの場合は、すべての語形を採用し、また5676.10の〈kawazuは小さいのを言う〉のように単に大小を示す語形の場合は注記のないものとともにこの語も採用した。

なお、関連項目として219図・220図「ひきがえる」、221図・222図・223図「おたまじゃくし」があるので参

照されたい。

空の符号を与えたカエル類は、福島・新潟・長野・関東・伊豆諸島、東海・近畿・中国・四国北部など国の中央に大領域があり、北海道・東北北部にもまとまった分布がみられるほか、それ以外の地域にも点在している。語頭子音が[g]などの有声音をもって GAERU などとなる地域は、かならずしも画然とした分布領域を示してはいないが、東北から中国にかけてかなり広い地域にわたって見られる。語の後部分に ME, KO, GO, TA-MA, PE, BOO, MACI, MA, CYOO などをもつものは、茨城の KEERUME, 八丈の KAERUME, 島根の GYA(A)RIKO 以外は各地域にほとんど点在しているだけである。5676.84の GETTOO, GETTO-KU は紺符号で示した BETTO(O), BETTOME の分布に接していることから、それとの関連を考慮することができるが、6547.79の GEETA, GEETAKUTA についてはあきらかではない。

草の符号を与えたカワズ類は、中部地方に広い分布領域をもっているほか、全国に点在している。このうち、KAWAZU は新潟・長野・岐阜・静岡南部・愛知などにあらわれるほか各地に点在しているし、GYAWAZU は新潟南部から石川にかけて、まとまっている。凡例 GAEZU から GAECUGU までは、ほぼ新潟にみられるものであるが、それと接して分布をもっているカエル類ともなんらかのつながりがある。なおここで注目すべきは、他の語と併用されている地点におけるこの語類についての被調査者の意識である。併用地点が比較的多くまとまってみられる新潟・長野・愛知は、カエル類との併用がほとんどであるが、そのうち注記のあるものをまとめると次のようになる。

地域		新	潟	長	野	愛	知
カワズ類	カエル類と比べて						
	古い	5 地点		2 地点		2 地点	
	上品	2		4		3	
	標準語的 新しい	1		5		0	
その他		カエル類を「下品」とする地点1地点		カエル類を「古い」とする地点1地点、「下品」とする地点4地点		カエル類を「古い」とする地点1地点、「下品」とする地点1地点、「子供に対することば」とする地点1地点	

これで見ると新潟ではカワズ類を「古い」と理解し、長野では「標準語的・新しい」と理解するという反対のどちらの傾向がみられる。しかし3県を通じて、カワズ類を「上品」と理解するか、またはカエル類を「下品」と理解するかという共通した傾向がみられる。

緑の符号を与えたガク類は、新潟・長野、徳島、九州、沖永良部などに少数地点ずつみられるもので、このうち新潟には GYAKU が、福岡・熊本に TANGAKU, TANGYAKU がまとまっている。古文獻にみられる「ひきがえる」を意味するといわれる古語タニクとこの語類とを関連させて考えることがあるいは可能かもしれない。なお、5642.67の GYAKUTTAMA に＜ギャクギャク鳴くから＞という注があり、また、7372.27の TANGYAKU について＜鳴く時に限っていうように思う＞という注がある。参考になろう。

茶の符号を与えたゴト類は、能登のひとまとまりのほか、三重・和歌山、四国などにも分布があり、また、富山、岡山、山口、屋久島にも1地点ずつみられる。凡例 KUTTOBIKI から BIKINTO までは、和歌山、四国などヒキ類の分布に近接しているのでそれとの混交形であろう。このようにゴト類は、広い分布領域ではないが、西日本のあちこちにみられること、220図「ひきがえる—その2」では山梨などにもあることなどから、この語類の発生、分布経路などに考えるべきことの多いことを思わせる。

橙を与えたヒキ類は、東北、岐阜北半、紀伊半島、中国西南部・四国・九州・琉球など、カエル類に次いで広い分布領域をもっている。このうち、BIK(K)I などのように語頭が BI となるものが東北と九州とに大きなまとまりをもち、伊豆半島、紀伊半島、愛媛などにも小さなまとまりがみられる。これに対して、HIKI などのように語頭が HI となるものは、北海道南端、近畿南部、中国・四国などに分布している。岩手北東部の HURUDA, HURUDAKO については、ヒキ類の分布領域内にあること、また、219図「ひきがえる—その1」をみると、同じ地域の HURU を含む語形が当然ヒキ類の HUKU を含む語形の分布に連続していることから、この類に含めた。凡例 BIKITA(N) から TAKASUTOBIKI まではほとんど九州に分布しているものであるが、BIKITA(N) は岩手にも3地点(3757.09, 3767.18, 3767.87)みられる。なお、TAKATARO(O)BIKI は愛媛(7431.82)、高知(7451.22)の2地点のみにみられ、九州にはみられない

ものである。DONBIKI から DONBIKISYA までは主として岐阜中北部を中心とする地域および広島から愛媛につづく瀬戸内海地域にそれぞれひとつのまとまった分布をもっている。同じ DONBIKI などの語形が、219図「ひきがえる—その1」では、これにほぼ隣接した領域に分布して、注目される。また、主に四国に分布している ONBIKI が、本図および219図「ひきがえる—その1」の DONBIKI に連続した地域にみられるので、当然関連があると考えられる。凡例 ATABIKA から AACYABII までは、沖縄本島およびその周辺の島々に分布している。ATTARABIKYA は徳之島にみられるものであるが、これらの語の前部分の ATTARA, ATA, AACYA などについては、紺符号で示したものの中にも、通ずるものがある。すなわち、凡例の ABUTA から MAN(A)TA が先島諸島に、ATTARA, ATARO が徳之島に分布し、それらとのつながりを思わせる。

桃を与えたドンク類は、長崎から鹿児島までの主として九州西部に分布しているほか、佐賀、宮崎にもみられる。8361.31(鹿児島)の APPEDON は、次のワクド類の APPU または APPE とこのドンクとの混交形とみたが(ワクドのドさえドンクとの関係が考えられる)、後部分の DON は、あるいは人名などにつける尊敬語 ドンとも関係があらうか。ドンク類とドンビキとは、地理的に離れているが、ドンビキでさえ2領域にわかれているのであるから、関係があるかもしれない。

赤の符号を与えたワクド類は、6642.33(静岡)の BAKKURI を除いて、大分・熊本・鹿児島など桃の符号のドンク類の分布領域に接したり、またそのなかにみられ、なんらかの関連をもっていそうである。

紺の符号で示したもののうち、房総に小さなまとまりをもっている ANGO と 5658.01(栃木)の NANKO とは、語形が類似しており、また220図「ひきがえる—その2」をみるとこの2語形のそれぞれの分布領域がこの図の場合よりさらに近づく点から、関連ありとみて同形の符号を与えた。埼玉・群馬にみられる BETTO(O), BETTOME, BETTOKUSYOO について、「踵を合わせて坐る」ことを秋田でベツアグラと言ひ、「あぐらをかく」ことを佐賀でベツズワリスルと言っているのだから、「別当」と関連づけることができようか。長崎にまとまってみられる ZYOOKO(O), ONZYOOKO と鹿児島・種子島の CYOKKO, CYOKKAN との間には、何ら

かの関係があらうと考え、類似の符号を与えた。そのほか、DOBA が愛媛に、MOKKE が青森西から秋田北部にかけて、SANGENTOBI が四国東部に、それぞれまとまって分布している。無回答の2地点は、6657.96(大島)〈この島にはいない〉、2068.08(宮古)〈いない〉であるが、注のように実物が居ない地点である。なお、ほかに、回答をしながらも実物が居ないという注記をした地点として、4736.63(宮城の江ノ島)、6657.54(大島)、6667.81(利島)、6677.41(新島)、6697.39(三宅島)、6697.49(三宅島)、6698.20(三宅島)、6698.61(三宅島)、2075.22(八重山)、2085.69(八重山)がある。

以上概観したそれぞれの語類のうち、もっとも広い分布領域をもっているのがカエル類とヒキ類である。この1枚の地図だけでみれば、言語地理学の基本的な見方から東北、四国・九州、琉球など辺境に分布しているヒキ類が、それより主として中央部に分布しているカエル類より古そうだということになる。この推論の蓋然性については、関連項目の219図「ひきがえる—その1」、220図「ひきがえる—その2」と重ね合わせて、次の219図・220図の解説でふれてみたい。221図・222図・223図「おたまじゃくし」にも触れるところがある。

## 219. ひきがえる(蟷・蟾蜍)—その1

## 220. ひきがえる(蟷・蟾蜍)—その2

218図が「蛙」の総称の地図であるのに対して、219図、220図はそのうちの1種類の「ひきがえる(蟷・蟾蜍)」の名称の地図である(「ひきがえる」が「かえる」の一種と意識されているか、あるいは対立する別種のものとして意識されているか、という問題はしばらくおく)。

方言量がきわめて多いために、音声の変種をかなり大はばにまとめ2枚の地図に分けて示した。219図には語にHIKI, BIKI およびそれに類する形を含むと考えたものを、220図にはそれ以外のものを掲載した。併用語形を2枚の地図に分けて示す場合、それぞれの符号の下にアーク印をつけて同一地図中に限定される併用と区別した。218図の内容と219図、220図の内容とは相互に関連するので、符号の色・形の与え方を統一し、符号の色は、語の要素にKAERU およびそれに類する形をもつものに218図のカエル類に合わせて空を与え、語の要素にKAWAZU およびそれに類する形をもつものに

218図に合わせて草を与えた。以下 GAKU に緑を、GOTO に茶を、DONKU に桃を、WAKUDO に赤を与え、それ以外で HIKI, BIKI およびそれに類する形をもつものに橙を与えた。そして、これらに含まれないものに紺を与えた。ただ、たとえば219図、220図の見出し語形 KAERU には、218図の見出し語形 KAERU, KEERU, KAERO, GAERU, GYAARU などに含まれる変種すべてをまとめてあるため見出し語形の内容には違いがあるが、みかけ上同一の見出し語形に符号の形を合わせた。このことは、単独語形だけでなく語形の一部分としての KAERU についても、また KAWAZU, GAKU, GOTO, DONKU, WAKUDO についてもほぼ同様の原則によっている。

本項目は221図「おたまじゃくし(蝌蚪)」、222図「おたまじゃくし—カエル類の詳細図—」、223図「おたまじゃくし—ヒキ・ワクドなどの類の詳細図—」とも関連するので参照されたい。なお、HIKIGAERU に〈併用処理の原則〉を適用した。

まず、219図について述べよう。

本図に採られた HIKI, BIKI をもつものは、北海道・東北の大部分から山口、四国に至るまでと、奄美・沖縄に広く分布している。このうち空の符号を与えたものは、すでに述べた通り語の後部分に KAERU をもついわばヒキガエルの類である。この類は、福島・新潟から中国北部までのほぼ国の中央部に広い分布があるほか、北海道、青森東部にもみられる。HIKIGAERU の前部分 HIKI には、[çiki, çiki, çikkîn] などのほか [çigi, jiki, çitji] などが含まれているが、これらのうちで地域的にまとまった分布領域を示すものはあまりなく、かなり他語形と混在してみられる。HEKIGAERU には新潟南部に小さくまとまっている [hegge:ru, hege:ru] なども含めたが、いずれも同じ語形に含めた [henigaeru, hekigaero, hekige:ru] の分布に接してみられるのでこの見出し語形にまとめた。HUKUGAERU はかならずしも特定の地域にまとまって分布しておらず、HIKIGAERU と混在しながら広い地域にみられることが注目されよう。この HUKU と HIKI の歴史的関係について考える手がかりはあまりないが、HIKI の音声的あいまいさのために HEKI, HIKU, あるいは HUKI などを経て HUKU が生じたという考えがあろう。それとともに、5633.45の〈ふっくりしているから〉のような別種の蛙と形の区別をする意識、

6655.51 の〈縁起がいい、決して殺さない〉というような民間信仰の意識などが、発生の触媒になっているとも言えよう。なお 218 図では HIKI または BIKI をもつ語形が広い領域をもっているのに HUKU をもつ語形がまったくみられない点が注目される。OOHIKIG-AERU には [ohikige:ro, oçikiŋaeru, oçikiŋaero, oçikiŋaeru, oçikige:ro] など含まれているが、いずれも関東にまとまって分布しているので同じ見出し語形で示した。この頭部分の OO は「大」であると考えられる。ところが 218 図にはこの地域にヒキ類が全然みられない。これは、蛙の総称または別種の蛙について HIKI を含む語をあてた時期が過去にあり、それと区別するため OOHKIG-AERU が存立したということが想像され注目される。このことは、当然本図に橙で示した OO-HIKI, OOHKIDA についても言えることである。HIKIDAGAERU が群馬・長野・岐阜・静岡・愛知に、HUKUDAGAERU が青森東部から岩手北部にかけてみられるほか、4763.45 にも 1 地点ある。2795.01 の HUKUROGAERU, 6498.93 の HIHUKIGAERU はなんらかの民間語原が働いたのであろうか。SIISII-GAERU はわずか 1 地点(6615.02)であり語形からみてヒキガエル類に含めることに疑問もあるが、HIKIG-AERU, OOHIKI の分布に接しているのでこの類に含めた。

草の符号を与えたヒキガワズ類のうち、後部分の GAWAZU は [kawazu, kawazũ, gawazu, ɣawazũ, ŋawazu, njawazu, gjawazu, gjawa] などさまざまな変種を含んでいるが、[ge:tʃi, getsu, gaetsu, getʃi] は GAWAZU に含めた変種とは語形の上でかなり違いがあるので、見出し語形を GEECU として分出した。この類は、新潟・富山・石川・福井、愛知に少数地点ずつみられるだけで、218 図の同種のもの分布領域と重なり合いながらも、それよりかなり点位的になっている。

緑の符号を与えたヒキガク類は、3 地点にみられるだけである。このうち、HUKUGAKU は [ɸuŋgurgekkw] の 4667.76, [ɸuŋkwŋgjakw] の 4686.96 の 2 地点でいずれも 218 図でガク類が分布している地域とほぼ隣接しているが、8345.74 の GAKUTOBIKI は赤の符号で示した WAKUTOBIKI との併用なので、その類音牽引が働いて生じた異類のものとみることでもできよう。

茶の符号を与えたヒキゴト類は、富山・石川に HIKI-GOTO, HUKUGOTO が、近畿南部に HIKIGOTO, GOTOBIKI が、四国に GOTOBIKI, KUCUBIKI-I が、それぞれまとまって分布している。6424.89, 7425.27 の HIKIDO は、同じ茶の類の KUCUBIKI に接してみられることからこの類に含めたが、やや疑問がある。6375.65 の KOTTOIBIKI も語形の類似からこの類に入れたが、この類の分布からやや孤立した地点である。ただ、207 図「おうし」をみると、この地点を含めたかなり広い地域に KOTTOI が分布していて、単なる偶然の一致とは考えられず、このことはさらに発展してゴト類全体について、207 図と対比してみる必要のあることを感じさせる。

桃の符号を与えたものは、いわばドンクビキの類である。しかし、DONKUBIKI が 7340.74, 8343.97, A-OHIKIDONKU が 7266.34, 7274.57, AKUHIKIDONKU が 9322.52 と、わずかに 5 地点、いずれも九州に点在しているだけである。九州には、218 図でヒキ類が広く分布しており、また、220 図では、DONKU をもつ語がかなり分布し、さらに本図でその複合形がほとんどみられないということから、HIKI, BIKI, と DONKU とは結合度のきわめて薄弱なもの(相互に反撥しあうもの?)だ、といえそうである。

赤の符号を与えたワクドビキ類についても九州に関しては、同じように HIKI, BIKI と WAKUDO との結合度が弱いと言えそうであるが、島根・広島・山口に WAKUTOBIKI, WANBIKI があり、218 図、220 図にはワクド類がまったくみられない沖縄本島を中心に WAKUBIKI, WAKUBICI, YAKUBICI がまとまってみられる点で興味深い。

橙の符号を与えたものには、語形に HIKI, BIKI およびそれに類する形をもつさまざまなものが含まれている。全体としては、全国域に相当広く分布しているが、小地域ごとに特殊な語が比較的まとまって分布している、といえそうである。HIKI は中国に大領域をもつとともに、対馬、青森南部にも小さなまとまりがみられるし、[biki, bikki, bikkī, bit] を含む BIK(K)I は北海道南部、福島南部、九州、奄美などに少数地点ずつみられる。また、OOHIKI が関東にまとまった分布を示している。中部に分布している HIKIDA に接して岐阜・愛知に HUKUDA が分布して相互に関連があることを示しているし、岩手・宮城・秋田・山形の HUKUDA-



ROO, HUKUDABIKI, HUKUDAROBKI など、それに接してみられる HURUDA, HURUDABIKI, YAMAHURUDA, ZYAHURUDA とは、やはり相互に関連があろう。房総に小さなまとまりをもつ HUUANGO, HUUTANGO については、そのそばに HIKIGAERU, BIKITANGAERU があること、218 図でこの地域に ANGO が分布していることから、この HUU の部分については、HIKI または HUKU の K の脱落したものとしてこの類に入れた。山口に分布している NYUUDOObIKI は、「ひきがえる」の体の表面のいぼ状の皮膚と「癩病」とを関連づけた命名であらう。宮城の DOSUBIKI, 5548.24 の KASABIKI, 3771.29 の ZYANBOBIKI, 下北・岩手北部、長野南部・静岡・愛知などに分布する凡例 IBOBIKI から IMOBEEKUDA までのものなども、「ひきがえる」の皮膚の特徴に注目した語であらう。GAMA, KAMA を含む語は 220 図では全国のかかなり広い地域に分布しているが、本図の GAMABIKI, OKAMABIKI は、東北に点在するほか愛媛に 1 地点みられるだけである。OKANBIKI も愛媛にみられるので同形符号を与え、6428.76 の KANEBIKI も語形の類似から同じ符号にしたが、多少問題もあらう。6473.04 の OKUDOO(BIKI) は、「かまど」からの意味的連想による「くど」を介して生じた語とみたがどうであらうか。主として東北南部に MACUBIKI, MASUBIKI, MASUBOBIKI が分布しているが、前部分の MAC-U, MASU が何を意味するか知る手がかりはほとんどない。ただ、MASU の部分には [masũ, mafj, masĩ] が含まれていることと、山形県庄内でマシが「猿」であることとを考え合わせる必要があらう。近畿南部にまとまっている TOCYAMA(BIKI) には、[totfjamabiki, tottjamabiki, tottfjama, dottfjama, totfjiwara, totfijamabiki, totfijama] を含んでいるが、6584.90 < 柄の実を拾いにいく山にいるから >、6593.30 < totfjiwa の国から来たから >、7503.48 < 殿様ビキの意なり > などいくつかの語原意識があるようである。DONBIKI がほぼ中国に、ONBIKI がその分布に接するように兵庫・大阪から四国にかけて分布している。高知の YADOBIKI は、ONBIKI の分布に接しながら一方 220 図の YADO(MORI) の分布にも接しているので、それぞれつながりがあるらう。

次に 220 図について述べる。

凡例に示した語類の順序はほぼ 218 図に準じ、空の符号のカエル類、草のカワズ類、緑のガク類、茶のゴト類、桃のドンク類、赤のワクド類、そして、紺のその他のものとした。ただ、紺で示したもののうち、語の要素として KAERU を含まないがカエル類と関連ありと認めたもの、および 218 図にあらわれたものと全く無縁と考えたものに紺の符号を与えつつ、空の符号の類と並べて示した。また 218 図で紺の符号を与えたものと同類と考えたものは、218 図と同じく凡例の最後に示した。

KAERU には [kaeru, keairu, keæro, keiri, gjarũ, gairo, ge:ro, gero, gæro, gero, kairuko] を含んでおり計 14 地点であるが、このうち 10 地点が 218 図と同語形であり、また、2731.97 が本図で [gero], 218 図で [gero], [jiki] の併用、5671.00 が本図で [ge:ro], [gama] の併用、218 図で [ge:ro] と [dombiki] の併用、とそれぞれ同語形をもっている。3702.24 も本図で [daesakamokke], [gero] の併用、218 図で [mokke] である。したがって、13 地点で「かえる」と「ひきがえる」とが密接な関連を持つことがわかる。もう 1 地点 6557.77 は本図が [gairo], [kawazu] の併用であるのに対して 218 図は [çikigairo] である。何らかの思い違いがあるのかもしれない。凡例 DOSUGAERU から IBORA までは、219 図で DOSUBIKI などに関連して述べたように、「ひきがえる」の体の膚のきたなさを病気にみわたした名称であるが、このうちでは IBOGAERU が関東などかなり広い地域に散在している。ETTAGAERU は、6535.73 に現われる。凡例 IEMABURI から YADOKARI までは 6665.25 < 家を守ってくれる。決して殺さない >、7425.02 < 家に入ってきた時 jamori という事あり >、7427.90 < 昔は台所の水がめのところにこれが一匹ずつ居た >、7436.68 < 宿守の意であらう > などの注があるように、その生態に注目し、「家」に関連する名を与えられた語である。これらは、6665.25 の IEMABURI を除いて、四国南部にまとまって分布している。凡例 GAMAGAERU から OOGAMA までは、関東を中心に集中的に分布し、ほか、全国に散在している。GAMAGAERU, GAMA は語頭が [g] のもののみである。これに対し OKAMAGAERU, OKAMA の K の部分には [k] のほか [g] の音も含まれているが、まとまった分布領域はあまりない。なお、OKAMA の O と既述の OOHKI などの語頭との関連は不明である。

草で示したカワズ類は、219 図と同じく、地点がきわ

めて少ないので語形の内容とともに列記しておく。

KAWAZU : [dekkaigjawazu] 5539.43, [gjawazu-nodekaiŋa] 5555.58, [kawazu] 6557.77, GAMAGAWAZU : [gamagja : zu] 5539.16, METTAGAWAZU : [mettakawazū] 6548.02, GEECU : [dekkaig-ae] 5620.30, MASUGEECU : [masugettsw] 4648.04。

緑で示したガク類は奄美に GAKU。沖縄に YAMAGAKU がみられ、また、和歌山に DANGOKU がまとまって分布している。和歌山のものについて、218 図・219 図では、この地域にガク類がまったくみられないのでガク類としてよいかどうか、実ははっきりしない。

茶で示したゴト類のうち [goto, go:to, ġo:to, ġonto, goto:, gotto, gota, go:ta, gatto, ġatto, gotosaŋ] を含む GOTO は、富山・石川、山梨、近畿南部、四国などに分布し、そのほかのものもほぼ GOTO の分布に接してみられる。5518.20 の NOTTONGYAWAZU, 5585.63, 5595.05 の BOTTO (GAERU), 5594.37 の HOTTONGAERU, 6527.22 の HOTTO-KU (GAERU), 5595.20 の HOTTAI, 6505.60 の KASABOTTO も、語形の類似とともに分布が接していることによってゴト類に含めた。

桃で示したドンク類は、すべて九州に分布しているものである。このうち、DONKU が佐賀・長崎・熊本・宮崎・鹿児島にみられ、もっとも広い分布領域をもっている。WAKUDONKU が主として九州西部に、GAMADONKU, OKAMADONKU が佐賀・長崎・鹿児島に、OBADONKU, BABADONKU が宮崎に、それぞれ分布している。凡例の SYOOKEEDONKU から SIPPYADONKU までは、主として長崎に分布しているが、それに隣接してみられる紺の符号の ZYOOKO, ONZYOOKO, ONTAROOZYOOKO などと何らかの関連があらうと考え、同形の符号を与えた。

赤の符号を与えたワクド類は、ドンク類と同じ九州が分布領域のほとんどすべてであり、ドンク類とのつながりを思わせる。九州以外では、山口と 6378.05 (広島) に WAKUDO, 6632.15 (静岡) に BAKKUI, 関東の千葉・神奈川・静岡の4地点に ONBAKU (GAERU), 6626.30 (神奈川) に BAKUDO, 6636.05 (神奈川) に BAKKU, 4751.42 (山形) に DAIDOBAKKA, 4730.45, 4750.32 (いずれも山形) に DAIDOB(K)-O, 4760.98 (山形) に DADABAKO, 4760.64 (山形) に

DENDENBAKO, 4742.95 (宮城) に BAKKU がそれぞれみられる。九州では、そのほぼ全域に分布しているのが WAKUDO であり、そのほか ISIWAKUDO, ISIBAKUDO, USIWAKUDO が熊本北部に、KASAWAKUDO, KASABAKUDO, KAWAWAKUDO が熊本北部から大分にかけて、KAMAWAKUDO, KAMABAKUDO が大分に、TANNONWAKUDO, TANNONBAKUDO が大分にそれぞれまとまっている。鹿児島にまとまっている APPU, APPUTTA, GOEMON (APPU), 8335.11 (宮崎) の DAPPU は、いずれも WAKUDO の分布に接していること、鹿児島では桃の符号で示した類の中の WAKUDONKU に近接して WAPPUDONKU があることなどから、この類に含めた。

紺の符号で示したもののうち、218 図にあらわれるものと関連するものを最後にまとめて示す。

凡例 ATA から YAMAATARO までは琉球に分布するものである。このうち ATA, WAATA が沖縄に、YAMAAUDA, YAMAABUTAA が八重山に、HUNATA, KAAHUNATA, HUGAAHUNATA, HUGAA が宮古に、それぞれまとまって分布している。そのほか、徳之島に ATARA, YAMAATARO が、渡嘉敷に YAMAATA がそれぞれ1地点ずつみられる。千葉にまとまっている凡例 ANGO (GAERU) から KATTEEBOANGO までと栃木の NANKO, NANKONBO, IBONANKO は、地域がさほど離れていないことと語形が類似していることから同形の符号を与えて関連性を示しておいた。そのほか、まとまった分布をもつものとして、愛媛西部にみられる DOBA を含む語形、青森から秋田に分布領域をもつ MOKKE を含む語形などがある。

無回答は109地点、北海道、佐渡、八丈、隠岐、琉球など島部と海岸部に、概して多くみられる。これらの中には、「実物が居ない」という注をつけた地点が多かった。そのほか無回答でない地点でも、4677.65 <このものは土地には少ない>, 6547.79 の <土地が乾燥するのこのあたりにはいない> という注もあり、棲息地などに限定があるようである。これが語の分布にもなんらかの影響を与えたかもしれない。

以上、2枚の地図の分布を概観したが、これに218図を加えて3枚の地図によって、それぞれの語形の歴史を考えてみよう。すでに218図の解説でその分布からカエ

ル類より ヒキ類が歴史的に古いものであろうと推論した。219図をみると、語の要素に HIKI, BIKI をもつものの分布が218図のヒキ類だけでなくカエル類の分布領域をもおっている。つまり218図と219図を重ね合わせてみて、全国の大部分の地域がヒキ類の分布地域だということになる。ヒキ類の勢力の及ばない地域は、モッケ類の分布する東北北西部の地域とドンク類などの見られる九州西半と、ABUTA, UNATAなどの分布している先島の地域にすぎない。九州の大分から熊本にかけてのワクド類の分布地域、長崎北部のジョオコ類の地域も、「ひきがえる」の地図ではヒキ類の分布のみられない地域であるが、これについては218図で九州の大部分にヒキ類が分布していること、218図、219図いずれにおいても山口、対馬、奄美などがビキ類の分布地域であることなどによって、かつては西岸を除く九州全域をビキ類がおおっており、それが「蛙の総称」と「ひきがえる」とを区別するためにいくつかの語類があらたに生じたものと考ええる。そして、それらがやがて、ヒキ類にとってかわるようになったと考えるのである。全国的にみると、青森西部から秋田東部にかけて、218図が MOKKE であるのに対して、220図が MOKKE または ~MOKKE である。九州西岸では218図が DONKU(U), DONKO であるのに対して220図が DONKU, DONKUWA-KUDO, WAKUDONKU である。宮古諸島では218図が UNATA, MANATA などであるのに対して220図が HUNATA, HUGAAHUNATA などであり、八重山では218図が ABUTA, AUDA, OTTA(A) などであるのに対して220図が YAMAAUDA, YAMAABUTAA である。またビキ類の分布している下北では、218図が BIK(K)I であるのに対して219図が IBORABIKI, 福島西部で218図が BIK(K)I であるのに対して219図が MASUBIKI である。山口では218図が HIKI であるのに対して219図が DONBIKI, NYUUDOObIKI, 奄美では218図が BIK(K)I, BIKI であるのに対して219図が BIKI, ~BIKI である。このような分布現象が国の中央部から、もっとも離れた地域に主としてみられることから、もともと全地域に「かえる」と「ひきがえる」とを区別しない同一名称が分布していたと考えることができようか。また、219図の解説で触れたように、218図でヒキ類がまったくみられずカエル類、カワズ類が分布している関東に、219図で「大」を意味すると考えられる OO を頭部分にもつ OO-

		かえる	ひきがえる	
モッケ	→	モッケ	モッケ ~モッケ	東北北西部
	→	ビキ	モラビキ	下北
	→	ビキ	~ビキ フルダ	東北中部
	→	ビキ	マスビキ	福島西部
	→	カエル	ヒキガエル ガマガエル	東南北部・ 関東東部
	→	カエル	オオヒキ	関東
	→	ガエル	ヒキガエル フクガエル	新潟
	→	ギャワズ	ヒキガエル	北陸
	→	ゴト	フクゴト フクガエル	能登
	→	ドンビキ	(カサ)ドオ サイ	岐阜北部
	→	ガエロ カワズ	ヒキダ	中部・東海
	→	カエル	ヒキガエル フクガエル	近畿・中国 北部
ヒキ	→	ヒキ ビキ	ゴトビキ トチャマビキ	近畿南部
	→	カエル	ヒキ	中国
	→	ヒキ	ドンビキ ~ビキ	山口
	→	カエル	オンビキ	四国北部
	→	ヒキ オンビキ	~ビキ ヤドモリ	四国南部
	→	ビキ	ワクド	九州北部
	→	ジョオコ	~ジョオコ	九州北西部
	→	ワクド バクド	ワクド ~ワクド	大分
	→	ビキ	~ビキ	奄美
	→	アタビカ	ワクビチ	沖縄
ドンク	→	ドンク	ドンク ~ドンク	九州西部
	→	ウナタ アブタ	フナタ ヤマアウダ	先島

HIKIGAERU, OOHIKI, OOHIKIDA が分布しているので、「かえる」の総称としてのカエル類、カワズ類が分布する以前にこの地域にも HIKI または HIKIDA が分布していたと見られる。それと「ひきがえる」を区別するために頭部分に OO をもつものが生じ、それが219図に残存的に分布しているのであろう。このこともヒキ類が歴史に古いものであり、しかも「かえる」「ひきがえる」を明確に区別はしていなかったというひとつの証拠になろう。関東東部から福島にかけては、218図でヒキ類がまったく分布せず、219図でもヒキ類がきわめて希薄な分布しか示さない地域であるが、これは、おそらく、新しい勢力としてのガマ類に圧倒されたものであろう。なお、かなり古くから文章語的性格をもって使われていたらしいカワズ類、さほど大きな勢力ではないが主として西日本に広く分布しているゴト類、全国に点在するワクドの類などの歴史的位置づけについてはなお不明である。今まで述べたことを65頁に図示しておく。

このような考え方は、分布の上からは妥当だとしても、まだいくつかの問題がある。もともと総称のみで区別した名称がなかったという前提に立っているということ、分布の上からの歴史的関係と文献の上から見た場合の関係と必ずしも一致しないということなどで、解決すべきことが今後に残されている。

## 221. おたまじゃくし(蝌蚪)

## 222. おたまじゃくし(蝌蚪)—カエル類の詳細図

## 223. おたまじゃくし(蝌蚪)—ヒキ・ワクドなどの類の詳細図

方言量がかなり多いので、3枚の地図に分けて示した。

221図には、オタマジャクシ類と、222図、223図の語類から除いたものを掲載し、さらに、この地図1枚で、「おたまじゃくし」に関する諸表現の全体を、きわめて大まかに概観できるように、他の2枚の地図に示したものをすべてを、単純化した符号で併せ掲載した。凡例末尾を見られたい。

なお、222図には、218図「かえる」で言うカエル類、つまり語形に KAERU またはその変種をもつものを

掲載した。この222図作成にあたっては、218図と関連するところが多いので、符号の色・形の与え方に共通性をもたせることも考えられるが、1つには、使用可能な色・形に限度があること、とくに、方言量の多い219図「ひきがえる—その1」、220図「ひきがえる—その2」について、218図に合わせて符号の色・形を与えたため、同じく方言量の多い本項目の地図の見出し語形にあてる符号が十分に残っていないこと、2つには、218図と222図の作図方法に違い部分があること、などによって、独自に221図、222図、223図の中での統一した基準を設けて、符号の色・形を与えた。

なお、OTAMAZYAKUSI に＜併用処理の原則＞を適用した。

まず221図を説明する。

緑を与えたオタマ類は、語形に TAMA, DAMA をもつもの、およびそれとなんらかの関連があると考えたものである。全国のほとんどの地域に分布しているが、東北、九州中南部、琉球での分布はきわめてまばらである。このうちもっとも広い分布領域をもっているのは、現代標準語形として採られている OTAMAZYAKUSI である。北海道、関東、近畿・中国・四国に集中的に分布し、東北、九州では、まばらである一方、他の語類との併用地点が目立っている。これら併用地点の多くみられる地域には、このほか、＜新＞＜希＞＜共＞の注記があるため、＜併用処理＞した OTAMAZYAKUSI があつたり、相手語に＜古＞の注をもつ地点がかなり多く見られたりする。これと逆に、OTAMAZYAKUSI に＜古＞、あるいはその相手語に＜新＞＜希＞＜共＞などの注記をもつ地点はまったくない。このことと、本土中央部に主として分布していることを考え合わせて、これが、「おたまじゃくし」表現の中でもっとも新しく分布した語類と考えられる。福島東部、長野南部・静岡に分布している OTAMAK(K)O、静岡に小さくまとまっている OTAMACCYO(O)、関東にまとまった分布領域をもつほか各地に点在している OTAMA などは、OTAMAZYAKUSI と分布が交錯している地点も多いので、それからの派生形と考えられるが、一方、「球」をもつとして、オタマジャクシとは無関係に、各地で独自に生まれたと考えうるものもあろう。6512.09, 6591.02 の OTAGAZYAKUSI, 6521.20 の OTOKAZYAKU, 6512.09 の OTAGA の G, K 部分については、オタマジャクシのもとと考えられている「お玉杓子」が、「御多

「賀杓子」の転音だという一説にしたがえば、これこそ古形を保存している数少ない語形だともいえるが、それにしても地点がきわめて少なく、分布も OTAMAZYA-KUSI などと比較すれば、かなり限定されているので、「御多賀杓子」と関連はあろうが、非常に古いものとも思えない。5643.33, 5710.84 の OTAMAZYAKKO, 5645.89, 5665.11 の OTAMADOZYOO, 5790.64 の OTAMAKKOZYORO のそれぞれの後部分は、他の魚の名称とみられるのでそれらと関連づけた命名であろう。同様に、6534.85 TAMACICIKO の CICIKO については、『全国方言辞典』によればチチコが滋賀、徳島で「かじか」の意味だという。そうならば、同地点の TAMACIN も、それとのつながりが考えられようし、地域は離れるが長野北部の CINCIKU(DAMA), ZUZUGOTTAMA も、あるいはそれとの関連づけが可能かもしれない。また、紺符号で示した 6504.01 の BOBOCIN, 6439.17, 6544.69 の CICINKO, 6520.79, 7338.48 の CICIGO などそれらとのつながりが考えられよう。茨城に小さくまとまっている OTAMAKONPOZI, OTAMAKONBO の後部分の KONPOZI, KONBO については、『全国方言辞典』採録の、マツコブシが埼玉で「まつかさ」、ゴンボが千葉県山武郡で「蕾」、コンボが群馬で「椿」、コンボチが静岡で「どんぐり」であることと、つながりがありそうである。6497.41 の OTAMAKONGO も、地域は違いが語形の類似から、通じるものかもしれない。5781.22 の TAMAGUSI, 6527.22 の DAMAKUZI については、239 図「なめくじ」が参考になろうか。6527.44 の DAMAHYORO, 5674.54 の HYOOROKUDAMA, 6519.43 の HEEROKUDAMA は、紺符号で示した 5641.07 の HYOROHYORO とともに、擬態語と思われる。一方、「表六玉」(愚鈍な人を罵っている語)とのつながりもあろう。そのほか、5549.55, 6632.88 の KAZIYAKUSI の前部分 KAI は、「蛙」であるとも「貝」であるとも考えられる。なお、富山ではカイは「匙」である。

紺の符号で示したものにはさまざまな語種が含まれているので、語類ごとに、ほぼアルファベット順に並べて示した。AMANZYAKU, AMANBOKO, AMAKKO は、6425.57(岡山)以外、長野にまとまっている。この3語形に共通した要素 AMA の成立については、①この分布に接してみられる 5671.94 の ATAMA-

DEKKA の前部分の変種であるという見方、②沖縄に「雨の子」の意味の AMINUK(K)WAA, AMINUKA などが分布しているので、発想として同様に「雨」を考える見方、③アマンジャク、アマンシャグメが、「いら虫」「蝶の蛹」など幼虫と成虫の形の異なるものの名称として使われている地域がみられるので、同様の変態をたどる「おたまじゃくし」につけられたものとする見方などがありうるが、緑の符号の 5605.57 の ANZYOTTAMA の ANZYO が「厄僧」の意味と見えるので、この AMA も、「厄」と考えることもできそうである。138 図「おんな一卑称」には、BIKKI など「蛙」の方言形と関係の深い語形がみられ、また AMA も分布している。これは、この「おたまじゃくし」の AMA と無関係であろうか。隠岐に ATAMABUTO, ATAMABUKKO, ATAMAHUCYAGE が、7461.39(高知)に ATAMABUTO が、5671.94(長野)に ATAMADEKKA が、5679.86(茨城)に ATAMADAEZIN が、1251.27(沖縄本島)に SUBURUBUUTA が、1169.84(沖縄), 1251.98(沖縄本島)に TAACIBURAA がそれぞれみられるが、いずれも「おたまじゃくし」の頭の大きいことに注目した語形と考えられる。なお、緑の符号で示したオタマ類の OTAMA は、この「頭」の意味の ATAMA を介して生まれる可能性もありうる。そこで符号の形を共通にしてみた。凡例 BIRUGO から TAABIRUWATAKA までは、語形に BIRU またはその音変種を含むものである。ほとんど奄美・沖縄に分布しているが、そのほか BIRUGO が 7352.14 に、BIRIGO が 6576.93 にもみられる。『採訪南島語彙稿』によれば、「蛭」の意味で奄美大島に [b'iru], 徳之島に [ko:b'iru], 八重山に [pi:r'i] があるのでそれとのつながりが考えられる。なお、『全国方言辞典』には、奄美に「生まれつき身体の弱い者」のビル、ビルーが載せられており、記紀に「手足のなえた子」の意味の「ひるこ(水蛭子)」がみられる。参考になろう。静岡西部・愛知東部にまとまっている、凡例 TABERA から DEBEREK-KO や、本土の主として西の各地に点在する凡例 DE-REKODEREKO から BEBEDANGO も、BIRU, BIRI を含む語形と類似する部分を含む。なんらかのつながりがありうると考えて、符号を似せておいた。

以下、まとまった分布領域をもっているもの、あるいはなんらかの説明が可能なものについて、凡例順にふれてみる。BABAZ(Y)AKKO が富山にまとまってお

り、BABAKKO が群馬に、BABAGO が石川に、BABASUKO が茨城に1地点ずつみられる。石川の GAMAZYAKU も、地点の接している BABAZ(Y)-AKKO などとつながりがあるということで凡例も並べておいた。しかし石川県鹿島郡ではガマが「ごり(鮎)」 「どじょう(鱸)」の意味で使われるというから、それとも関連するものであろう。石川の BOBOTA, TABOBO, 島根の TAPOPPO, 福井の BOBOCIN に共通する BOBO, POPPO は「丸いもの・球」であろうか。DOORANGO が鳥取東部に、IMORIKO が佐渡南端に、KANIGORO, GANIGORO が大阪に、OKOGORO が四国西端に、GOROK(K)O が千葉などに、MEME(N)ZYAKO, MEMENZYAKU, MEME-NOKO が北陸に、OBOZUKKO, OBOROKKO, ROKO が新潟に、TAINAGO, TANAGO, TANOGO が北陸、兵庫などに、Z(Y)UUMIGA, TAA-NUIZUGAMA が宮古島に、それぞれみられる。無回答は、全部で18地点。うち、島部が15地点、沿岸沿いの地点が2地点である。島における無回答地点のうち10地点が「<実物が居ない>」という注記があるので、これら18地点ほとんどの地点では実物がいないとみてよさそうである。218図「かえる」で無回答の地点がわずかに2地点であることと矛盾するが、218図では、回答がありながら「<実物が居ない>」という注記をした地点が10地点あり、「おたまじゃくし」より「蛙」のほうが観念的であるにしても、よく知られているということなのであろう。

赤符号は、222図、223図の内容をそれぞれ1つの符号の形にまとめて示したものである。直線符号が222図にあらわれたもの、四角形符号が223図にあらわれたものにあたるが、直線符号が地域的に多少ばらつきをもちながらもほぼ全国に広く分布し、四角形符号が地域的にある程度まとまりながら分布していることがわかる。これを218図「かえる」における分布と重ね合わせてみると、たとえばカエル類の分布については、本図と異なった分布を示していることがわかり、はなはだ興味深い。この地図と218図におけるヒキ類、ワクド類などの分布事実を含めて、これらの関係については、あとでふれることにする。

222図を説明する。

この地図に掲載したものは、218図で空の符号を与えた類に通じる、カエル類である。このうちもっとも広い分布をもつものは、空の符号を与えたカエル類に、KO,

GOをもつものであるが、ここでGOと示したものには [go], [ko], [ŋo], [ŋo]を含めた。KAERU(NO)K-(K)Oが北海道、栃木、近畿・中国に分布しているほか、各地に点在している。これには [kaeruonoko, kairuonoko, kaeruonoko: kaeruko, kaeruuko, kairuko, kaeru- kko, kaeruŋko] 等の諸変種が含まれているが、地点数として [kaeruonoko] がもっとも多く次いで [kaeruuko] が多い。KAERUGO は福島西部から新潟東部にかけてと近畿、中国西部などに、それぞれ多少まとまって分布しているし、KEERU(NO)KO が兵庫北部に、KEERUGO が福島西部と岡山に、KAARU(NO)KO が山梨、島根・広島に、KAEROKKO が栃木に多少まとまってみられる。KAIRAHU, KUURUHU, KALINHU は宮古島に分布しているものであるが、221図にみられる八重山の TARAGU(U) ともあるいはつながりがある。以下ある程度の分布領域をもっているものと主なる地域を凡例順に示しておく。GAERU-(NO)KO 主として近畿、島根。GAERUGO 主として近畿、四国北部。GE(E)RU(NO)K(K)O 宮城、新潟、九州など。GE(E)RUGO 宮城、新潟。GYA(A)-RU(NO)KO 富山、福井、熊本など。7383.83のZY-ARUKOの内容は [saruko] であるが、GYA(A)RU-(NO)KO の分布に接しているので、その変種であろう。GYA(A)RUGO 富山・石川・福井・滋賀、鳥取。GAERO(NO)K(K)O 山形・新潟などの日本海側。GE(E)RO(NO)K(K)O 東北北部、新潟南部・長野西部、大分。GE(E)ROGO 東北北部・宮城。GAERAGO, GAERAGU 山形南部など。GE(E)RAGO 岩手・宮城北部・秋田東部。3724.96のZERAGO は、GE(E)RAGO, GYARAGO の分布に接しているので関連があろう。GYARAGO 岩手北部・秋田北部、富山。GEREKO 九州に点在。7372.03のZY-ARENKO の近くに GYA(A)RU(NO)KO, GE-(E)RO(NO)K(K)O, GYA(A)RENKO などがみられる。GE(E)RIKO 福岡、長崎、大分・宮崎。GEE-RIGO 新潟。7302.71のERIKO はGE(E)RIKOに接しているので符号を同じものにしたし、7279.65のE-RIGO, EGO にも関連性をもたせた。GYARIKO, ZYARIKO 九州西部など。GYARIGO 石川など。GYAA(NO)KO 富山、鳥取・島根、熊本など。GEENOKO 九州南部。GOINKO, GEG(G)O, GEKOZOYO, GOGGERA, KOGORYA 主として

九州南部。

語形に TAMA, DAMA を含むものに草の符号を与えた。221 図で緑の符号を与えたものと関係する。山形南部を中心にした地域、関東・中部、奈良北部・大阪南部などにみられる。このうち主として関東・中部に分布しているものは、凡例の KAEROTTAMA から GE-EROTTAMA, OTAMAGAERU から TAMAGE-ERO までで、221 図のオタマジクシ類の分布とほぼ重なっているのでそれとの混交形とみることもできようし、一方、凡例 GAERUKUDAMA から GAARO-KUDAMA までのみられる山形や、GAERUKUDAMA, GAEKURUDAMA, KAEKODAMA, GENGORODAMA の分布している奈良などでは、オタマジクシ類がほとんどみられないので、オタマジクシ類の領域の拡大の過程において、語形の一部とカエル類の語形とを複合させて、できたものとみることもできよう。

茶の符号を与えたものは、語の後部分に KUTO, KOTO などをもつものである。この後部分については、たとえば KUTO には [kuto] [gudo] を含め、KOCYO には [kotjo] [kodjo] [jotjo] を含めた。すなわち、無声・有声の区別をしなかったわけである。主として秋田・山形およびその周辺にかなりまとまって分布している。このまとまりをかこむように、秋田北部に GE(E)ROGO, GE(E)RAGO が、岩手に GE(E)-RAGO が、宮城に GE(E)ROGO が、山形南部に GAERAGU などがそれぞれ分布している。この分布状況から、KUTO, KOTO を接尾する形式は、周辺の諸語形に TO, CYO, TA などを複合させて成立したものだと考える。この TO, CYO, TA の性格については、山形南部などに分布する草符号の GAEROKUDAMA などの後部分の TAMA と関係があるのではないかという見方があるが、また、新潟北部にみられる GAERUMA(N)CYO, GERUMA(N)CYO などの CYO とのつながりも考える。さらに、KUTO, KOTO などを、218 図、219 図、220 図にあらわれるゴト類と関連づける見方もできる。このように、茶の符号を与えた類については、いくつかの考え方がありうるが、いまのところ、いずれを採るべきか、判断できない。

紺の符号で示したものは、語の前部分、もしくは後部分に、上記以外のさまざまな形をもつものである。GERUMA(N)CYO, GEERUMA は新潟にまとまって

おり、5602.99 に GAECCTYO が、6661.02 に GUURO-CCYO がみられる。凡例の KEERUKONBOZI から KEERUKONBO までは茨城にまとまってみられるものであるが、この後部分は、221 図の解説でもふれたように「球状のもの」の意味をもっているものであろう。この地域について、221 図と 222 図を重ね合わせてみると、OTAMAKONPOZI, OTAMAKOBO をとりかこむように、その周辺に紺の符号の KEERUKONBOZI などが分布しているので、おそらく、前部分に OTAMA をもつもののほうが、歴史的に新しいものであろう。宮城・秋田北部、兵庫に分布する凡例 GEE-RUMO(N) から GEERAMO までは、~GO の分布に接しているので、その変種とも考えられるが、GAERU(N)BO が近くにみられる地点もあるので、~BO との関連も考えられよう。岐阜、大阪にみられる GAEGORO, 6572.22 の GAERUGORO, 6552.88 の GAEGOROTA などの GORO, GOROTA を接尾するものは、ゴロが「かたまり、石ころ、どんぐり」など「球状のもの」として使われている地域が各地にみられるので、それと関係があるか。5770.11 に GENGORO, 8351.41 に GINGORO, 5770.60 に GENGURUKO, 8321.58, 8331.12, 8344.11 に GE(E)KURO, 8312.33 に GEKERE がみられる。ちなみに、『全国方言辞典』によれば、ゲンゴロが千葉で「ありじごく」、東京で「ごきあらい虫」であり、ギンゴロが鹿児島で「いな(鱷)」である。5527.94 の ZYAGERO の ZYA は、221 図にみられる、近接する地域の BABAZ(Y)AKKO とつながりがあるか。あるいは GYA などの変形だろうか。

橙の符号は、単独の KAERU およびその変種と思われるものに与えた。この類のうち青森西部から秋田・山形にかけて主として GE(E)RO が、千葉に GE(E)RO が、岐阜に主として GAERO が、和歌山南部に KAERU が、広島に GA(A)RU が、山口に KAERU が、四国南部に KAERU, GAERU, GYARU, GAERO などが、九州東部に GE(E)RO などが、香岐、宮崎南部などに GE(E)RI が、対馬に GERU が、鹿児島などに GEE が、それぞれまとまって分布している。218 図「かえる」では、これらの地域にはカエル類以外の語、具体的には、青森西部に MOKKE, 秋田・山形にかけて BIK(K)I, 房総に ANGO, 岐阜に DONBIKI, 和歌山南部に HIKI, BIK(K)I, 広島に DONBIKI, 山口に HIKI, 四国南部に BIK(K)I, DON-

BIKI, 九州東部にWAKUDO, BIKITAROO, BIK-(K)I など、老岐にBIK(K)I, 対馬にHIKI, BIK-(K)I, 鹿児島などにBIK(K)Iが、それぞれ分布している。このことから、「蛙」の意味のカエルが、主としてヒキ類が勢力を広げたあとにひろがっていく過程において、既存の語の勢力が強い地域では、「蛙」と関連ある「おたまじゃくし」のほうに入り込んでいったのではないかと、同じように、たとえば218図でヒキ類の分布している東北に、222図ではGE(E)RUGO, GE(E)ROGO, GE(E)RAGOなどが分布していることについても、カエル類が、「かえる」ではなく「おたまじゃくし」の意味に入り込んでいったのではないかと、考えることもできる。ただそのように考えるには、222図における新しい語としてのカエル類が、本土中央部および琉球以外の大部分の地域にあまりに広く分布していること、および、空の符号を与えてある後部分にGOをもつ語形と橙の符号を与えたもたない語形の分布の違いについて、説明がつけにくいなどの点が疑問として残る。ここで注目すべきことは、この橙の符号を与えた語が青森、九州東部をはじめ、ほぼ国の中央部から離れた地域にみられることである。このことから、橙の符号の語が、「おたまじゃくし」を示すもっとも古いものだとする考え方がでてくる。つまり、かなり大胆な推論になるが、もともと「おたまじゃくし」がカエルであってそれが全国に分布しており、「蛙」については、ヒキ、ビキなど、まったく別の表現が分布していたという推定である。そのあとに「蛙」に意味を転じたカエルが中央から広がっていくが、ヒキなどの勢力の強い地域では、依然として「おたまじゃくし」がカエルで「蛙」がヒキ、ビキとして残る。そして新しい「蛙」の意味のカエルが分布した地域、たとえば近畿・中国東部などでは「おたまじゃくし」をカエルゴなど後部分にコをもつ語形にしてしまう、というのである。このような考え方を採ってみても、「蛙」でヒキ、ビキの分布している東北に、橙の符号のGE(E)RUなどの分布領域と空の符号のGE(E)RUGOなどの分布領域があるのはなぜか、あるいは文献に「おたまじゃくし」がカエルであったという例がない、などという問題がいくつか残る。結局、ここでは、分布からこのような考え方が可能だという問題提起をしておくにとどめざるをえない。

223図について説明する。

凡例のKAWAZUNOKOからGACIKUTAまで

をカワズ類とする。これは218図「かえる」で草の符号を与えた類に通じるものである。KAWAZUNOKOからGAECUGUまで、およびGECI, GACIKUTAの現われる地域は、218図「かえる」におけるカワズ類の分布領域とほぼ重なっているが、凡例のGEZUNOKOからGEHINOKOまで、およびGEZIは218図でカワズ類のまったく分布していない九州南部にみられる。したがって、これら全部をカワズ類とすることには、疑問もあろう。しかし、これがカワズ類であると考ええると、カワズがすでに上代の歌などに現われていることや、すでに述べた218図でカエルの現われない地域に、222図にはカエル類が現われてくる現象と関連して、興味ある問題を提起するのではないだろうか。また、本土に分布しているもののなかでも、KAWAZUNOKOの5595.89では「蛙」が[gjaru, bikki]であり、KAWAIKOの6413.10では[gja:ruko], GYAWAZUの4588.98では[gatto], 5558.33では[dombiki], GECIの4637.68では[bikki]という非対応がみられ、問題の深さを窺わせる。ただ、九州のものは、222図の同じ地域に分布するGEENOKOなどとの語形の類似から、その面からの問題も考えねばなるまい。

GYAKUNOKO, GAGGANOKO, TANGAKUNOKOは218図で緑の符号を与えたガク類に通じるものであるが、ここでは、GYAKUNOKOが7266.09, GAGGANOKOが7266.92, TANGAKUNOKOが7342.76の、それぞれ1地点にみられるにすぎない。GAGGANOKOの7266.92では、「蛙」は[donku]であるが、本図でも218図でも、この地点に接してガク類がみられるので、これをガク類とみることは、さしつかえなからう。

GOT(T)ONOKOからDAMAGUCUまでは、218図で茶の符号を与えたゴト類に通じるものである。能登にGOT(T)ONOKO, GATTONOKOが、名古屋およびその周辺にOTAMAGOCU, OTAMAGUC(C)-U, OTAMAGUSU, OTAMAGOCURI, DAMAGUCUが、四国西部にGOT(T)ONOKO, GOTTAが、それぞれ分布している。このうち能登と四国は、218図でもゴト類の分布する地域であって重なり合うのに対して、名古屋周辺には218図にゴト類がみられない。なお、愛知ではグツは「小鯰」であるという。

凡例のHIKINOKOからHUKUまでは、218図で橙の符号を与えたヒキ類に通じるものである。北海道・東北、飛騨、近畿南部・中国・四国・九州・奄美・



沖縄における分布は、たしかに 218 図のヒキ類の分布と重なっているが、218 図でヒキ類のみられない千葉、山梨・静岡・愛知にもこの形が分布している。はなはだ興味深いのは、これは、219 図「ひきかえる」のヒキを含む語形とともに歴史的に古いものの残存とみることができようか。HIKINOKO が北海道南部、広島・山口、四国に、2, 3 地点ずつみられる。[bikkinoko, bikkinoko, bikkinoko, bikinoko, bikinoko, bikinoko, bikinoko] などの内容を含む BIK(K)IN(O)KO は、北海道・東北、近畿南部、徳島、九州などにみられ、この類のうちでもっとも広い分布を示している。BIKKINOKOKKO が岩手に 2 地点、BIKIGO, BIKKOGO が佐賀、熊本に計 3 地点みられ、BIKIN(U)KWA, BIKANUKWA は奄美にまとまっている。岩手・秋田に分布している BIKKEROGO, BIKKI(NO)GERO, BIKKERO は、222 図における GE(E)RO の分布地域に接しているので、それとの複合形とみることができようし、そのような見方からすれば福岡・佐賀、宮崎に 1 地点ずつみられる BIKKI(NO)GERO, BIKIGORO, BIKKORO, BIKKYORO も関連づけることができよう。しかし一方、「石ころ」など「球状のもの」とのつながりも考えられよう。DONBIKINOKO, DONBUKINOKO が福岡・岐阜に、DOBINCYO, DOBIKKO が山梨に、ONBIKINOKO, ONBIKICICIKO が高知にそれぞれみられる。

TABICCYO が長崎に 1 地点、BIKUCCYO は BIKU とともに山梨にまとまっている。なお、BIKU については、すでに 221 図について述べた AMA が「尾」と関連づけることができるとすれば、「比丘」ということも考えられよう。凡例の ATABICYANUKWAA から ZUUMIATADIKA までは、いずれも沖縄にみられるものである。このうち ZUUMIATADIKA は「尾の生えた蛙」の意味である。山梨北部に 1 地点と福岡・佐賀にまとまっている BIKKO, 福岡・佐賀にみられる BIGGO, 福岡に 1 地点の BINKO, 山口に 1 地点の BUNKO はいずれもヒキ類の中の後部分に KO をもつ語形の分布に近接しているので、その音変種であろう。HUKUDAGO から HUKU までは、HUGU, HUKU 単独か、それらを語中に含むと考えたものである。これらは HIKI の音変種とみて HIKI 類に含めたが、あるいは「河豚」との形状の類似から、類音牽引が働いているものもあろう。岩手に HUKUDAGO,

HURUDA(NO)KO, HURUDANOKOKKO, HURUDAGO が、秋田に HUKU が、千葉に HUGUTAN, HUUTANGEERO, HUUMAN, HUNMADO, HUUMANDOZYOO, TAHUZYOZYOO, TAHUGU, OTAHUKU, CYACCYAAHUGU が、静岡に HUGU が、愛知に HUKUDAMA, HUGUDAMA, HUGUTAIRO, OTAMAHUGU, TAHUGU, MENDARAHUGU, GEERAHUGU, HUGUCU が、三重に TAHUGU, HUGU が、鳥取に OTAHUKU が、山口に TA(A)BUKU, TABUKO, OTAHUKU が、愛媛に TA(A)BUKU が、福岡に TABUKO, OTAHUKU が、大分に GERANBUKU, GAERABUKURO, GEERABUKURO, MAMEBUKURO がそれぞれ小数地点ずつみられ、分布領域としては多少まとまりをもっているといえよう。

DONKUN(O)KO から DONKO(O)までは、218 図で桃の符号を与えたドンク類に通じるものである。ほとんど九州西部に分布しているが、DONGUCU のみは、218 図、219 図、220 図、221 図、222 図を通じてドンク類が分布していない愛知に 1 地点みられる。別種かとも考えられようが、語形の類似から凡例としてここにおいた。

WAKUDONKO から CYAPPUNOKO までは、218 図で赤の符号を与えたワクド類に通じるものである。ワクド類の分布する九州に WAKUDONKO, WAKKUNOKO, BAKUNOKO, APPUNNOKO, APPINNOKO, CYAPPUNOKO がみられるほか、静岡に BAKUDOZYOO, OBAKUDOZYOO, BAKUBAKU がみられる。

ABUTANUHWAA から UNATA までは、先島に分布するものである。あらわれる語形と地点を示すが、参考までに 218 図における同地点の「かえる」をさす語形を並べてみる。

(おたまじゃくし)		(かえる)
ABUTANUHWAA	2074.69,	abuta
AUTANUHHWA	2075.22,	auta
AUDANUHWAA	2067.52,	awuda
	2076.25,	auda
	2076.97,	auda
	2076.98,	auda
AUDANUHWAA	2076.96,	auda

UNATANUHHWA	2150.07, unata
	2150.17, unata
UNTANUHHWAGAMA	2150.06, unta
MANATANUHHWAGAMA	2151.67, manata
OTTAN	2086.03, otta
UNATA	2151.20, manata

このうち、最後の UNATA は、218 図において、近接する 2 地点にあらわれるものである。他地域における「かえる」と「おたまじゃくし」との間の名称の交流を考えると、単なる誤答ではないであろう。BETTOONOKO が埼玉西部に、BETTOMENOKO が石川に、HARADANBETTO、HARABETTO が富山に分布している。かならずしも 218 図、219 図、220 図と重なる分布ではない。52 図「あぐらをかく」に関連する表現が現われるが、それらを含めて、BETTO の分布の広さを思わせるものがある。ZYOOKONOKO が長崎に、DOBANOKO が愛媛に、MOKKENOKO が青森西部に現われ、いずれも 218 図の分布と重なる地域に分布している。

以上、分布を概観し、当然 218 図、219 図、220 図と関連させてみるべきところの多いことを示したが、大綱の見通しを述べるにとどまった。さらに 1 地点ずつのこまかい対比によって、それらの相互関係の詳細を把握することが必要であろうし、それと同時に、「蛙」とは形態、棲息場所などかなり違いがある「おたまじゃくし」の名称を、独自に、あるいは他の動物との関連でみることも必要となろう。

## 224. とかげ(蜥蜴)

## 225. かなへび(金蛇)

この 2 枚の地図は相互に関係が深いので、一括して解説する。さらに最後のところで「かまきり」との関係についても、触れるところがあるので、229 図、230 図を参照されたい。

最初に、「とかげ」および「かなへび」について、手近の百科事典から、その記述を引用する。

トカゲ 蜥蜴 爬虫類・トカゲ目・トカゲ科。日本列島に固有のトカゲの一種。南千島から大隅半島までの各地に分布し、平地の乾燥した草むらなどに多い。体長 15~20 センチ。トカラダは褐色で側面に黒褐色のしまが

ある。幼時は、頭・胴部が黒くて 5 本の明確な白っぽい条を備え、尾が全体に青いので、別種のように見える。昆虫類やクモなどをこのんで食べる。卵生で初夏のころ石の下などに白くて細長い卵を産む。尾は切れやすく、また容易に再生する。敵におそわれると、切れた尾がミミズのように動いてその目を幻惑する。トヤモリ類とヘビ類以外のトカゲ目の総称でもあるが、これは学術上の呼称ではない。この意味でのトカゲは世界で 2000 種内外を産し、約 20 科に分類される。体形や大きさはさまざまで、あしの退化したヘビ型のものも少なくない。しかし、ヘビのように左右の上顎が別々に動くことはなく、また原則としてよく発達したあしを持っている。沖縄をふくむ日本には 17 種ほどのトカゲがいるが、ふつうにみられるのはトカゲとカナヘビとの 2 種だけである。(上野俊一)

カナヘビ 金蛇 爬虫類・トカゲ目・カナヘビ科。沖縄を除く日本全土に分布する細長いトカゲの一種。ト体長 20 センチ内外。背面は褐色で、大きいうろこが六列にならぶ。からだの表面には光沢がなく、尾が長く、トカゲとは区別がつく。平地や丘陵に多い。ト別種として沖縄には全体に美しい緑色のアオカナヘビ、北海道にはからだがずんぐりした卵胎性のコモチカナヘビがいる。(上野俊一)

以上の記述から、この 2 枚の地図を作るに際しての質問文が適当であったかどうかについて、いささか疑問が生ずる。224 図については、すくなくとも青い線は不適当であり、白い線と青い尾にすべきであった。また、北海道や琉球列島についての調査には、別の配慮が必要であったに違いない。しかし、224 図を作るに際して求めたものが、成熟して色が変わるにしても、未熟期の色に特徴があること、日本に産する広義のとかげが 17 種ほどであるにしても、ふつうに見られるものが 224 図で求めた「とかげ」、225 図で求めた「かなへび」の 2 種である点から、とかげをめぐる 2 つの質問を用意したことが、まったくまちがっていたとは、現在も考えていない。生物学者のみとかげと、一般民衆の目からみたとかげとの間に、差があってしかるべきことは、いうまでもあるまい。

もっとも、以上弁解はしてみたものの、調査の現場では、さまざまな困難があったものと思われ、質問番号 012 と質問番号 013 の質問に対する各地点における回答は、いろいろであった。その反映であろう、回答の記入

には若干の混乱が認められた。そこで、原則として質問番号 012 の質問に対する回答を 224 図に、質問番号 013 の質問に対する回答を 225 図に記入はしたものの、この 2 項目に対する全回答を地点ごとに対照して、作図に際して、全国的視野のもとに、注記を頼りにして補正したことをここにおことわりしておく。この補正が完全に適正であったとする保証はないが、全体的な傾向としては正しい方向であったと信じている。

この補正に伴い、また 224・225 の両図の比較対照の便宜を考えて、なまの資料をいくつかの見出しにまとめるにあたっては、2 枚の地図を通じて、同じ原則によって、2 枚の地図にあらわれる同一の見出しに含まれる音声の変種の範囲は同一である、ということになる。2 枚の地図を通じて同一語形の見出しに同色同形の同じ符号を与えたことは、いうまでもない。

なお、224 図作図に際して＜併用処理＞したのはトカゲであり、225 図作図に際して＜併用処理＞したのはカナヘビであった。ただし、74 頁に示す実例の第 8 例のような場合、つまり結局 224=225 となる場合は、225 図についてトカゲが＜併用処理＞される。

次の諸語形の分布の概略をみることにしよう。

224 図、225 図を通じて、大局的には、分布が共通するといっていると思われる。福島を例にすれば、224 図 TOKAG[y]E, 225 図 KANAHEBI が主流であるが、このような状態は、むしろ例外である。

新潟・富山県境から伊豆半島にかけて線を引いてみると、その線以西では 225 図に 224=225 が多く、これはとかげ、かなへびを通じてこの地域が両図に差がないことを意味し、その線以东では緑、草、空などの色を与えた符号が多くみられ、224 図で、この地域にかなりみられる赤の符号をいちおう除外すれば、両図を通じて、津軽を中心に空、その南に緑、群馬から千葉にかけて草、その南西に空といったように、共通の性格が支配していることを窺わせる。そこで、ここでは両図を通じての概観をこころみる。

符号の色は、次の原則によっている。トカゲの類に赤、トッカゲの類に橙、トリカゲ類に桃、以上に通ずるもので語頭がチとなるものに茶を与えた。すでにちょっとふれたが、新潟・富山県境から伊豆半島を結ぶ線以东に主としてあらわれるもののうち、カナ～を語頭にもつものに緑、カマ～を語頭にもつものに草、カガ～・カラ～を語頭にもつものに空を与えた。これらのものは、トカ

ゲの類と混在しつつ、混在の状況は 224 図と 225 図との間に差はあるものの、両図を通じてそれぞれの領域を主張しつつ分布している。そして、その他に紺を与えた。

紺を与えたもののうち、まず、225 図の凡例冒頭にあらわれる 224 = 225 について説明する。

225 図は、「かなへび」をあらわす各地の表現を示すことを目的としているが、224 図との比較も目的としている。そこで、「とかげ」をあらわす表現を求めた 012 の質問に対する回答と、「かなへび」をあらわす表現を求めた 013 の質問に対する回答とが一致する場合、224 = 225 として示した。2 つの質問に対して両方無回答の場合も、224 = 225 とした。つまり、225 図に示されている内容は、224 = 225 を除いて、224 図との間に差のあったものだけ、ということになる。

もっとも、たとえば 012 トカゲ：013 トカゲ、カナヘビの場合、あるいは 012 トカゲ、カナヘビ：013 カナヘビのような場合は原則として 224 = 225 としなかったから、同一地点に、一方が併用（両方が併用の場合もありうる）の場合に限られるが、同一語形のあらわれるケースもあることに注意しなければならない。また、012 トカゲ：013 無回答、012 無回答：013 カナヘビのような場合、ことに前者の場合は、本来 224 = 225 であるために生じたものとも考えられるが、そしてそういうもののがかなり含まれている可能性があるが、（区別がない）といった注のある例外を除いて、224=225 としなかった。

以下、224 = 225 とすることができたかもしれないがそのまま語形を掲げたものについて、具体的に説明しよう。

第 1 例 1757.61 012 トカゲ、カナヘビ：013 カナヘビ。この場合、012 でトカゲ=カナヘビとあるのだから、結局 224 = 225 と考えられるが、一方、012 の質問の場では同じものとして答えたが、013 の質問の場になって、それはカナヘビと答えたのかもしれないと考えて 224 = 225 としなかった。

第 2 例 1745.54 012 トカゲ、カナヘビ＜古＞：013 トカゲ。これは、被調査者（または調査者）が 013 に際してカナヘビ＜古＞を略したとも考えられるが、224 = 225 としなかった。

第 3 例 3793.37 012 カナヘビ：013 カナヘビ、トカギ＜希＞。第 1 例、第 2 例の逆である。本来は区別がないのだが、くりかえし同じようなことを聞かれるので、トカギ＜希＞を補ったのかもしれない。し

かし 224 = 225 としなかった。

第4例 8345.10 012 トカギリ：013 チョカンギリ。

最初に標準語に近いものが出て、次に方言的なものが出たのかもしれない。しかしそのままとした。

第5例 7361.17 012 トカンギッ：013 トカギッ。信じにくい、そのまま出した。

一方、この地図では 224 = 225 としたが、そうすべきでなかったかもしれないものに、次のようなものがある。

第6例 6635.54 012 カアメッチョ：013 カアメッチョ<多>。カガメッチョ。第2例などと似ているが、カアメッチョとカガメッチョが通ずる語形であることから、標準的な表現を補足したものとみて、012 にカガメッチョを補い、224 = 225 とした。

第7例 5635.48 012 カマギッチョ<この絵よりやせている>、トカケ<もっと太っている>：013 カマギッチョ<トカケはひなたに出ない>。012 トカケ：013 カマギッチョと整理することも可能と思われるが、012 の回答が併用であることを保存するのが妥当と考えて、013 には注記からトカケを生かし、224 = 225 とした。

第8例 5641.13 012 カナエッチョ、トカゲ<新>：013 カナエッチョ、トカゲ。012 の注は 013 で省略されたものとみた。ついでながら、このトカゲは<併用処理>されている。

第9例 7303.61 012 トカギリ：013 トカキ<別に区別はない>。注を生かして 013 の記入に脱落があるとみた。012 が誤記、または、012 トカギリ、トカキの併用、013 も同様、と考えることもできた。

第10例 8342.69 012 タカジ：013 トカジ。記入は音声表記であり、ta と to のいずれかの誤記とみて、TAKAZI を採った。やや強引だったかもしれない。TOKAZI とすることも、もちろんできた。

この2種の生物は、すでに示した百科事典の記述にあるように、北海道、琉球列島を除く本土部全域に棲息しているようである。北海道には別種のかなへびがいるらしいが、地図には、ともかく、この質問文によって得た回答が載せてある。琉球列島にいても、同様の扱いをした。

さて、本土部にはどこにもいるはずなのであるが、北海道、沖縄を含めて、224 図についての回答の中にはこのとかげが<いない、みたことがない、まれである>といった注記のある地点が、全国で約 120 あった。同様

に、225 図のかなへびについて、これらの注記のある地点が、全国で約 140 あった。

その分布図を作ってみると、224 図については北海道東半、青森・岩手・宮城東半にとかげを<いない・希>などとする地点が集中し、秋田南半から新潟にかけてもいくらかみられる、そしてそのほかは、各地方に 1~2 地点ずつみられるといった状況があらわれる。225 図については、かなへびを<いない・希>などとする地点は、青森を除く東北地方にはむしろすくなく、関東西半、近畿西北半、そして山口・福岡にかなりまとまっている、といった状態を示す。

これらの報告がない地点でも、<あまり見かけない>ないしは<いない>場合がありうると考えられるが、しかし、すくなくともこれらの報告は、生物学にとって、新しい情報を提供することになるのかもしれない。ただし、生物学上の棲息分布の資料としては、これらいわば素人の発言は、たとえば両者の区別をしない場合、一方をいないとする、すくなくとも注意を払わないので気がつかないとする場合が考えられ、第一級のものとはなしえないことは当然であろう。

ここで、上記のとかげ、かなへびが<いない・希>とする地点は、ただちに無回答とは限らない、また、逆に、地図上で無回答となっている地点を、ただちにすべて<いない・希>という注記をもっていた、とすることはできない点を注意しておこう。

もっとも、224 図では、両者はかなり並行的な傾向を示している。225 図については、無回答の地点が<いない・希>の注をもっていたとは限らない点が目立っている。たとえば、滋賀や徳島には、無回答の地点が多いが、<いない・希>とする地点はひとつもなかった。このことは、注記のつけ方について調査者の個性のあることを示すのかもしれない。しかし、225 図については、224 = 225 と無回答との関係をも考えねばならない。224 = 225 だから 225 図については報告がなかったとも考えるからである。むしろ後者の考え方が適当なのであろうか。これも、調査者の報告のしかたの個性の反映と解釈できよう。

225 図における<いない・希>とする注記と、無回答と 224 = 225 との相互関係については、さらに深く検討する必要がある。このことが 224 図にはねかえる可能性をもつことが、そのひとつの理由である。すなわち、一例を挙げれば、秋田はとかげが<いない・希>とする

ことがすくないかわりに、その多い岩手などとくらべて、224 = 225 が多くみえる。このことは、実質的には同じなのに、たとえば、秋田では 224 ではカナヘビ、225 では 224 = 225 と報告し、岩手では 224 で無回答 <いなし・希>、225 カナヘビと報告する傾向があったかもしれないと想像されるからである。

もっとも、これは想像にすぎない。地図をみるにあたって、いちおう配慮しておく必要があることを指摘するにとどめて、これ以上深入りしないことにする。

なお、224 図、225 図通じてあらわれるヤモリ、イモリなど、他の生物を答えたのではないかと思われる回答も、「とかげ」や「かなへび」への無関心な態度を反映する点で、上記のものに準じて考えうる。誤答が混じていることも考えられる。しかし、とかげ = かなへびとする民衆の立場があるとすれば、とかげ = やもり、かなへび = やもり、あるいはとかげ = かなへび = やもりなどとすることも、それほど不自然でないのかもしれない。和名抄以来の伝統ともいえるし、これらをただちにすべて誤答などとしてすることができないことは当然である。あとで示す注の中にも、誤答でないことを支持する例がある。

次に、両図の凡例を追いつながり、もうすこし詳しくみることにしよう。

TOKAG[ŋ]E は、西日本にはあまり多くなく、兵庫、徳島・高知などにもあるが、新潟・長野・静岡以東の地域に多い。224 図の 5575.93 の [tok<sup>w</sup>ane], 5741.66 の [tokaneme], 5575.93 の [tokake] を含むほか、7405.21 の [tokaŋge] を含む。最後のものは、TOKANGE として分出してよかったものである。224 図がこの TOKAG[ŋ]E であって、225 図が KANAHEBI, KANAKIC(C)YO などという地点が多い。すでに述べた福島がその典型である。

TOKAG[g]E は、新潟・群馬、千葉にかけてみられるほか、全国に散在し、西九州にも目立っている。224 図の 6710.02, 6731.03 の [tohage] のほか、7312.69 の [tokage:] を含む。

TOKAKE は、新潟・群馬を除けば富山・岐阜・愛知以西に多く、山口西半以西や四国南半には多くない。赤の類の中では新しいもので、新潟・群馬のものは上方からの輸入であろうか。

224 図 6616.79 の TOKAG[ŋ]ECCYO は、付近に KAG[ŋ]AMIC(C)YO(O) が多く、混交形と認められる。しかし、同図 TOKAG[g]ISSYO 7275.84 や

TAKAKICCYO 7312.11 は、それでは説明できない。前者は、付近の SISIMISYOO (紺) と関係があらうか。229 図「かまきり」の地図には、この付近に KAMAKICCYO があるが、関係があらうか。

TOKAKU は、224 図では 5517.57, 225 図では 5566.95 (実際の表現はトカクメ) のみであった。224 図に北陸 3 県に集中的にみられる TOKYAKU に摂してもいいものであった。

224 図の凡例 TOKAG[ŋ]IRE から TAKAKIRO まで、225 図の凡例 TOKAG[ŋ]IRI から TOKAKIRO までは、ほとんど九州にあらわれる。例外は、224 図では TOKAG[ŋ]IRI (新潟・長野、高知、種子に点在する)、TOKANIG[g]IRI (愛媛)、TOKANG[g]YARI (島根)、TOKAKIRI (九州のほか、淡路、山口)、225 図では TOKAG[g]IRI (高知) のみである。

～RE, ～RI を語末にもつこれらの語形については、この虫の尾が切れやすい特徴と何らかの関係があらうか。それとも、224 図の 7218.09, 8343.97 に <食いつかれて 10 日で死ぬ>、7372.96 に <10 日以内に死ぬ> という注があったが、「十日ぎり」という語原解釈が正しいだろうか。この点についてはあとで触れるところがある。

すでに TAKAKICCYO 7312.11 と「かまきり」の KAMAKICCYO との関連の有無についてちょっと触れたが、以上の類のうち TOKANG[g]IRI, TOKANKIRI などは、TO の部分をはずせば、ただちにかまきりをさすことばと似てくる。224 図 7382.93 の TOKANG[g]IISU の後半部分などの性格を考えるにあたって、何か参考になる気がする。

～TOKAG[ŋ]E 以下の語形の～について説明する。224 図の～は、ほとんどが [ao] であり、そのほか [jima, doku] がわずかにあり、ほかに [abura, tonosama] が各 1 地点であった。225 図の～は、[baba, mba] と [jama] がやや多く、他は [aka, kuro, tsutji, doro, kuso, kare, cie] などであった。ほとんどが～の部分のない語形(またはごく近い語形)と同地点か、その近くにあらわれる。224 図の対象と 225 図の対象とを区別するために与えられた語形と考えられる。

橙で示したものは、224 図 3741.57 の TOKKAG[ŋ]E を除いて、長野・静岡以西にあらわれる。224 図では長野・静岡・愛知にかけて、福井・岐阜・三重・滋賀・奈良、西九州にままとまっている。225 図では、長野・静岡・愛知の地域と奈良にみられる。

224 図の～TOKKAG[ŋ] E から～TOKKNG[ŋ] O までの～部分は、やはり [ao] が多く、ほかに、[jima, kin] がある。

桃で示した 224 図の TORIKAG [ŋ] E から TORIKAG[g] I までは、すべて奈良南部から熊野灘沿岸にかけてあらわれる。225 図 6583.93 の～TORIKAG[ŋ] E の実際の内容は [jamatorikanje] であった。

この桃の類と橙の類とは、相互に何らかの関係があると思われるが、はっきりとしない。

CYOKANG[g] I, CYOKANG[g] IRI 以下の茶の類は、東南九州に集中的にみられるほか、224 図で、CYOKAG[g] IRI が 7266.92, 7380.74 に、CYOKKIRIKO が 6464.90 に、CIRIKAG[ŋ] I が 6592.10 にあらわれるだけである。後の 2 者は、この類とすべきではなかったものかもしれない。なお、224 図～CYOKAG[g] IRI 8306.42 の～の内容は、[jima] であった。

229 図「かまきり」の 8315.42 (西都市三財字水喰) に TOKAKE があらわれておどろかされる。しかし、224 図同地点は TOKANG[g] IRO (225 図で 224=225) で、付近に 224 図に CYOKANKIRI, CYOKANG(g) IRI があり、「かまきり」については、付近に KANCYORO, KANCYORAI があって相互に類似する。この状態があることから一種の混乱がおこり、標準語化するとき錯乱が生じて、かまきりを TOKAKE というような事態に至ったと解釈できよう。同様に 229 図「かまきり」の 7357.69 (津久見市大字四浦字落ノ浦) にも TOKAKIRE があらわれるが、同地のとがけは TAKAKIRE (224=225) であって、この地図にもらわれている材料からは十分にあとをたどることができないが、何か、過去に、上記の地点の場合と類似の現象が起こったことを想像させる。

緑の符号で示したものは、すでに述べたように KANA を語頭にもつものである、このうち三角符号で示したものは語尾に RO のつくもので、両図を通じて宮城・山形・福島・群馬・新潟・長野にまとまりをもち、224 図・225 図の間で多少の差がありながら、方言の地域性を考えさせる。この RO と赤で示した TOKAG[g] IRO, TOKAKIRO などの RO との関係は不明である。

224 図の KANAG[g] ICYORO から KANAKEYSYO あたりまで、225 図の KANAG[ŋ] IC(C) YORO から KANAHECCYO あたりまでのものは、KANA

の次に GI またはそれに準ずる形をもつもので、宮城を中心とする地域、および福島西南端・新潟中部から長野北部にかけてまとまり、その他としては 224 図で関東西端に KANAG[g] IC(C) YO(O) が 2 地点、5629.23 に KANAG[ŋ] ECCYO がみられる程度である。

KANANKYO は 225 図に多く、その変種とみられる KARANKYO とともに、福島東北部にかたまっている。

菱形符号を与えた KANABICCYO(O) の類は、山梨にだけあらわれる。

KANAHEBI の類は 224 図・225 図を通じての領域をみると、北奥から庄内・新潟・富山まで、福島・茨城・栃木に広く分布し、224 図では、福島をもっとも典型的な例として、TOKAG[ŋ] E などという地点と入りまじっている。KANAHEBI の類の HEBI の部分の音声の変種は、おおはばにまとめられ、[hebi, he<sup>m</sup>bi, he:bi, çebi, çembî, Φebî] などが含まれている。227 図などが参考になろう。音声変種の地点ごとのこまかい対照は、今後の問題となる。

草の符号を与えたものは KAMA を語頭にもつものである。224 図の 1867.15 の KAMEHEBI を例外として、224 図で伊豆半島南端、225 図で長野に各 1 地点あるほか、すべて関東地方にみられる。KANA の領域にとりかこまれ、KANA からの変化と考えられよう。

草の類の中には語尾に RO のつくものがすくない。224 図では 5791.23 の KAMACYORO, 5790.03 の KAMAG[ŋ] ECYORO, 印旛沼付近に 4 地点の KAMANCYORO, 5698.19 の KAMAMICCYORO, 225 図では 5641.07 の KAMAG[ŋ] ICCYORO のみである。

それに反して、KAMA に続いて GI あるいはそれに類する部分をもつものは、非常に多い。KANA の類のそれと連絡しているといえよう。

KAMANCYOO, KAMACCYO, KAMACYOCYO, KAMACIKO, KAMACYOKO などは、千葉東部に集中的にあらわれる。

225 図の KAMAG[g] I は群馬に、224 図の KAMAZI, KAMAG[g] YUU, KAMAZYUU は伊豆諸島にみられる。224 図にはこのほか KAMA に続いて Z のあらわれるものが KAMAZICCYO, KAMAZIKKO とあり、これも同じく伊豆諸島にみられる。

224 図の KAMAG[g] IRI は 5677.85, KAMAKI-

RI は 5667.81, 6629.98, 6720.67 にあらわれる。「かまきり」をトカゲというのと同様に、「とかげ」をカマキリという現象は、まことに奇妙にみえるが、これについては 81 頁末尾以下でふれる。

224 図 KAMAMUSI は 5689.34, KAMAITACI は 5677.85, KAMAHEBI は 5678.33, 5750.30 にあらわれるものであるが、これらも KAMAKIRI, KAMAG[ŋ]ICCYO, KAMAG[g]IC(C)YO(O) などとともに、229 図「かまきり」にあらわれる。

空の符号を与えたものは語頭に KAGA または KARA をもつものである。

KAGA の類のうち、語末に RO のつくものは 6701.01 のみである。それに対して、KAGA の類では、次に MI または ME の続くものが多い。224 図のみの KAG[ŋ]ABICCYO(O), KAG[g]ABICCYO は、KANABICCYO(O) と同じく山梨にみられる。225 図のみにあらわれる KAG[ŋ]AHEBI は 1706.82 である。

KARA の類の中では、224 図の G[g]ARAG[ŋ]-ICCYOO 5676.52, KARAMICCYO 5674.11 のみは関東・中部域であるが、他は東北地方(および北海道)に限ってみられるもので、同じ空が与えられているが、KAGA の類とは別種のものである。同色を与えたのは単なる便宜である。KARANKYO は KANANKYO から、KARAHEBI, KARAHEBIKO は KANAHEBI, KANAHEBIKO から変化して生じたもの(その逆もないとはいえないが)とみてよからう。224 図 KARASUHEBI 2781.34 は、KARAHEBI からさらに変化して生じたものに違いない。

KAGAMI~, KAGAME~ の類は KAMAGI~, KAMAGE~ の類に連続し、分布状態からみてそれらから変化したものと考えられる。逆の変化ももちろんありうるが、KAMA~ には KANA~ などの大きな背景がある。

残った紺の類について略説する。

HEBINOOBASAN としたものは、種々のものを含む。224 図の 4599.31, 5508.43, 225 図の 4588.98 は [hebinobando, ġibinobando] などであった。注記には 224 図 4599.31 に(バンドは雑役?), 225 図 4588.98 に(バンドは番人, 使い)とあったが、224 図で、4598.33, 4598.74, 5508.16 に [hebinoobasama] があったので、強引にここにおいた。224 図の 6449.19, 6520.50, 225

図の 6439.77 の実際の語形は、[kutjinawano (kutjinano, kutsunano) obahan] であった。また 224 図の 6633.89, 6642.58, 6643.15, 6643.16, 225 図の 6623.53 のものは、[bambahebi, bamba:he:bi] などであった。さらに 224 図の 7427.71, 7427.90 のものは [ombagutjina, obagutji] であった。中国語に蛇舅母の名があるようだが、何がしかの関係があるかもしれない。

ONBA の中にも 225 図 4599.31 の [bando] が含まれている。224 図の 7435.07 は [ombaji], 6439.17 は [obako] であった。

ONBAG[ŋ]OZE の中には、224 図 7425.02 の [ombakoze], 7433.37 の [māgoze] が含まれている。GOZE について「替女」の意識が働いていようか。

224 図の KACINUMIIPAAPAAG[g]WAA には(垣の中のおばさんの意)という注記があった。

224 図 HEBINOOISYA は 6457.51 [kutjinawanoiŋa], 7323.02 [ja:inoiŋadoN = ヤジは蛇のこと], 7323.17 [hebinooiŋa] であった。中国語に蛇医、また蛇医母という名があるようである。

HEHAKARI は 224 図の 4639.10, HIBAKARI は 225 図の 7258.64 [ġirakari], 7370.58, 7380.26 [ġibakari] で、分布がかなりはなれている。

HIKAG[ŋ]E は 224 図で 5731.67, 225 図で 7218.09。これもかなり分布がはなれている。

224 図~YAMORI の実際は 6532.93[tobbikijamori] であった。

KABECYORO も、224 図では 6464.23, 225 図で 7229.50, 7229.75, 7249.95, 7332.97, 7382.58 で分布がはなれている。

~IMORI の~の部分は 224 図 3772.32 で [oka], 225 図 3741.57 で [jama], 6591.02 で [jabu] であった。

225 図 HISAMUSI の内容は、8310.26 [tjĩtja], 8361.31 で [ġĩsamusi], 8362.34 で [jĩsamuŋi], 8373.08 で [kĩjamuŋi] であった。

HICIBU(~) の中にもいろいろなものが含まれている。224 図では 7303.17 [ġĩtibunŋo:], 7303.75 [ġĩtibun], 7420.18 [ġĩtibugusari], 225 図では 5595.89 [ĩfibuŋi], 6374.68 [ġĩtibun], 6472.58 [tjĩtibu], 6477.02 [ġĩtĩmĩŋa], 6481.90 [ġĩtĩbi], 6482.26 [ġĩtibusa], 6485.82 [ġĩtĩmuŋa], 6494.21 [ĩtibu], 6506.03 [jamaiŋĩbiŋi], 7239.41 [jĩfomuŋo],

7326.41 [jitjimmuji] であった。このうち 5595.89 には、＜土の中から出てくる。色は黒い＞（正しい答えとは思われぬ）とあった。

MAHOO 以下は琉球列島にみられるものである。224 図 AHAG[g]IZYA 以下 ZYUMA まで、225 図 IZYANZA から YAMABAG[ŋ]URA までは、雑多であるが、何か相互に関係がありそうである。224 図の BAKAG[g]IRA, CINAG[g]IRA, DINAG[g]IRA, KYOOZIRA, G[g]AZIRA, ZIRAZIRAA, 225 図の OORUG[g]AZIRA, YAMABAG[ŋ]URA の語尾の～GIRA, ～ZIRA などは、九州のトカギリ、トカギロなどの語尾と関係があるかもしれない。224 図の 0257.43 には [dina:girja] <di は尾の意味>とあった。

224 図の YADUNABBYAA 0340.00, TINNAB-URA 0237.79 の語尾は「見る者」であろう。0237.79 の注に＜天を見るの意>とあった。

ANDA～の ANDA は油と理解できるが、～部分はさまざまである。地点ごとにみな違うといってもいいほどである。詳細は『日本言語地図資料』をみる必要がある。

224 図 SYOOZIMUYAA, 225 図 SOOZIMUYAA は、224 図 ANDASYOOZIMAYAA と関係させて似た符号としたが、0247.31 の [o:simija], 0247.56 の [sodzēmura] などを含む。224 図 1261.80 の注に＜so:simuja はいもりのこと>とあった。

224 図 KAMI(NU)WARI の中にもいろいろのものがある。1242.72 の [ha:miwaja:], 1231.88 の [ha:mijn-3a:ri], 1232.29 の [hamingwarik'we:] のほか、1242.00 の [haminuk'aŋk'aŋ], 1251.04 の [makkaiwara:] も含んでいる。

KOOREEKWEE もさまざまである。224 図の 1261.01 だけが [ko:re:kwe:] で、1221.47 は [ho:rugitji-gitji], 225 図の 1242.72 は [ko:regusukwe:], 1211.69 は [Φurugusukwaja:], 1233.61 は [Φuso:kwe:] であった。

その他としたものの内容は、224 図は、2303.22 [matsune], 4665.87 [takejihebi], 4685.28 [tforotjorohebi], 5697.86 [jamakkanja:], 6296.27 [san[o:iwo] <水の中にいるのではない>, 6432.22 [tforoma], 6456.73 [katako:] <肩を越すと死ぬ>, 0249.17 ['tu:'ka:], 0276.50 [madji'kuja], 1231.72 [jamabik'u], 1271.05 [atjibitja:], 2074.69 [bo:natji], 2086.03 [mandarahabu],

2141.61 [pa:gigassa], であった。

225 図のその他は、4723.51 [jamagazu], 4762.44 [jamado3o:], 5576.96 [jamadzako], 5586.70 [jamabiji], 5628.23 [san[o:iwo] <産卵の時水にはいる一別物か。引用者注一>, 6379.68 [he:nobori] (やもりのことなるべし), 6426.04 [amo] <小さくてくいつく>, 6441.55 [kanegamisannotsukai], 6488.85 [hekko], 6516.10 [jama-tjiziku] <土の中にいる>, 6551.18 [nijiki], 6562.64 [o:bengutjina], 7249.35 [kabeto:] <ji>, 7274.57 [karamu:] <ji>, 7370.41 [çirakatji], 8229.96 [hamuko], 8342.35 [sori], 1261.16 [harunnad3iro:], 1261.70 [kan3a:fo:ma:], 1270.29 [nad3inabu:], であった。

なお、この日本語語地図では、その他として扱った語形は、他の語形と併用の場合注記化して地図上に示さないことを原則としているが、225 図の 6551.18 に限って、もし注記化すると 224=225 になってしまうので、図上に示した。

資料の説明を終わるにあたり、地図に記載されず、以上の説明の中でも引用しなかった報告に際しての注記のうち、注目すべきものを抜粋してみよう。同類のものをまとめるべきだったが、地点順に羅列する。

まず 224 図(012番の報告)について。

1739.85 <二種の区別は雌雄かもしれない>, 1743.70 イモリは自信がない, 2774.59 <kara- は河原の意>, 3724.96 <tokane ということばはある。一尺ぐらいの細く赤味のある蛇>, 3725.72 <togane, togani は, kanahebi の大きいものではないか>, 3727.81 <トガギというのは細く長いもの一蛇のことか。引用者注一を言った。食いつかれると雷が鳴らないと離さないという>, 3733.18 <kanahēbi の中に角の生えているのがある>, 3750.75 <名の区別はないが、青いのは毒があるという>, 3760.33 <名の区別はないが、金光りのするのは神様の使いという>, 3764.16 <tokane ということばはある。小さな蛇>, 3771.97 <名の区別はないが、この質問にあたるものは希でかつ毒がある>, 3772.32 <ogamori は下腹黒く尾が切れぬ—これは 225 図に出すべきものだったか。引用者注一>, 4619.23 <それにあたるものは山にいて毒がある>, 4726.80 <青いといわれるとわからない。背中が黒か茶なら tokane>, 4750.32 <togane は“トガゲは毒があるそうだ”というような文脈で使う>, 5585.09 <tokkaku は山に, tokane は田にいる>, 5611.39 <imori は自信がないが、やぶの中にいるもの>, 5620.16 [tokake]



は<赤味がかっている。ただし, kanahebi とは違う>, 5624.85<毒らしい>, 5628.23[na<sup>n</sup>nakikko]<赤黒いもの—225 図にまわすべきだったか。引用者注—>, 5636.74<tokage には 毒 がある>, 5655.97<有毒>, 5667.81[kamagittjo]<古>, [kamakiri]<新>, 5677.28(かまきりととの区別についてしばらく考えていたがわからなかったようだ), 5677.85 カマギリ(かまきりの回答と同一なので質問したら打消した—しかし地図上に採用した。引用者注—), 5698.91<毒だ—224=225であり, この224が毒なのか。区別なく毒なのか不明。引用者注—>, 6267.84<やもりをトカゲという>, 6403.60<シリボは尻尾>, 6403.62[tjit'i]は土であろう), 6424.20[zo:rikiri]<尾を草履で踏むと切れるから>, 6486.93<青いのは有毒>, 6534.85, 6573.71, 6621.94, 6625.66, 7340.24 も同じ。6557.36<青い方の尾を切って埋めると金がたまる。土色のはそういうことがない>, 6631.05[çijeyo]<別のの人に聞くとこれは川にいて吸盤があるものという>, 6677.70<青いものも大きくなると土色になる>, 7208.97<やもりのことをkatakofji, kabeko という>, 7349.07[çitjibu]<これにかまれると腐るというが, ほんとうに腐った人はない>, 7420.18(ヤモリと混同していないか念を押したが, 土の上を走り回るだけといった), 8312.75<224は雄, 225は雌>。

225 図に関する注記をみよう。

0840.33 [7~8 寸から1尺, ガンケワラ(石ころでゴツゴツした広場)や石山に居る。平地にはいない], 1743.70 イモリは自信がない, 2774.59<kara- は河原の意>, 2811.01 [?kanahebi] <赤い小さいへび>(蛇の一種とと思っているらしい), 3713.75 [jamori] <山にいる>, 3722.97 [imori] <土の中にいて黒い。イモリは agahara という>, 3725.72 (とかげの小さいものと思っているようだ), 3772.73<別に ogaimori があり, これは kanahebi より小さく尾も短いという—225にこれを出すべきだったか。引用者注—>, 4726.80 [kananittjo]<家のまわりなどにいる>, [tokage] <山などにいる>, 5604.52 [kanahembi] <このぬけがら—キヌ—を懷中にしていると, 賭け事に勝ったり金がたまったりするという>, 5620.16 [kanahebi] <青味がある—注記を参照して224 図 KANAHEBI, 225 図 TOKAKE とすべきだったろう。引用者注—>, 5677.85<224が雌, 225が雄ではないか>, 5701.25 [kanahebi] <「カナヘビカン

タロー親が死ぬとき, 袴・羽織で助けておくれ」など子どものご歌った>, 6339.44 [çitjibu] <食いつかれると七分腐るという>, 6374.68 [çitjibun] <壁にくっついている。土の上の這うのは見ない—やもりをさすときみて排除すべきだったかもしれない。引用者注—>, 同様のものに6385.10, 6396.83があった。6375.08 無回答<壁に這うのは çitjibu>, 6389.98 [çitjibu] <家の中にいるが, やもりのように吸盤はない>, 6393.41 [tokakiri] <壁をはうのは kabetto>, 6422.77 [so:rikiri] (ジョオリは草履か), 6442.35 自信がない, 6452.17<自信がない>, 6472.58 [tjitjibu] (本人は間違いないというがやもりのことだろう), 6479.26 [imora] <水の中にはいらぬ>, 6482.26 [çitjibusa] <tokage より小型。有毒>, 6482.52<çitjibusa はやもり>, 6485.82 [çitjimufa] (七分蛇の意味である), 6492.11 [çitjibu] <やもりではない。有毒>, 6494.55 [imori] <土色をして昼のうち出る>, 6506.03 [jamajibi] <薬になる>, 6562.22 [jamori] <かなへび, やもりを区別しない>, 6590.87 [imori] <かなへびと赤い腹で水中にいるいもりと区別しない>, 7218.09 [çikage] <喰いつかれると1日, “日限り”で死ぬ>, 7229.50 [kabetto] (やもりと混同しているようだ), 7229.75 [kabetto] <手足に吸盤がある—やもりを答えているときみて排除してよかった。引用者注—>, 7239.41 [jijomufu] <有毒>(該当するものかどうか不明。—7238.40の注に jijomufu はいもりのこと, 7268.87の注に jijimifo: はやもりのこととある。引用者注—), 7249.95 [kabetto] (やもりと混同している), 7309.37 [çitjibu] <家の中にいる。ただし jamori とは違う>, 7349.91<色や大きさの区別は雌雄の違いではないか>, 7382.58 [kabetto] <やもりではない>, 7404.12<色の違いは雌雄の別であろう>, 2072.20 [andatjibu] <山にいる。木にのぼる>。

以上で資料的な説明を終わり, 以下歴史的な大きな流れについての推定の概略をのべる。「とかげ」と「かまきり」についての奇妙な混乱についてもふれてみる。

2枚の地図を通覧し, 全国を, 新潟・富山県境から伊豆半島へかけての線を引くことによって, その東, その西, および琉球列島の3地域に分類できそうである。

琉球列島は, ~GIRA, ~ZIRA の部分が, 九州の~GIRI, ~GIRE などと連絡するかどうかといった細かい糸で本土と連続する以外, 独特の世界を形成している。琉球列島の中では, ~GIRA, ~ZIRA の類がもっとも

古く、ANDA～類が新しく、～KWEE の類はそれより古いものであり、KAMI(NU)WARI の類は沖縄島北部で発生し、ANDA～類に圧倒されているようにみえる。しかし、対象についての知識が不足しているので、深入りできない。

本土部西半の地域では、トカゲの類が圧倒的な勢力をもち、概して224=225の傾向が強い。この地域では本来「とかげ」と「かなへび」とを区別しなかったのであろう。

全体的にトカゲの勢力が強いが、トカゲが長野・静岡、能登北端、紀伊半島南端、出雲・隠岐、四国南半、九州西半にみられ、トカゲは新しいものとみられる。最後の母音がeでなくiのものは、南近畿・四国、山口西半から九州にかけてみられる。このeとiのどちらが古いか、分布からははっきりしない。

九州を中心にみられる語末がギリ、ギレとなるものは、切れるということか、かみつかれたら十日ぎりで死ぬということか、いずれかははっきりしないが、民間語原がその語の発達について何か関係をもっているのであろう。ただし琉球列島の諸語形との関係を考えて、まったく別の解釈も可能となろうから、強く主張することはできない。

橙で示したものの、桃で示したものの性格はわからない。各地で独自に発生したものか、あるいは、一時的に上方の中心地域で使われていたものなのか。橙と桃とは関連あるものとしてあとのほうの解釈をとりたいところであるが、九州西方のものは、まことに速くはなれている。TOKAGIRIなどとTORIKAGIなどが何らかの関係があるかどうか考えるべきことであろう。もしそうだとすれば、TOKAGIRIと通ずるものが近畿にもかなり広くある、ということになる。215図「とさか」でトリサカのあらわれる地域がこのTORIKAGEなどのあらわれる地域と接しているが、関係があるかどうかについてはさらに考えたい。

茶で示したものは、この地域での独自発生であろうか。何か特殊な音韻法則的なものがあるかもしれない。

本土部西半にみられるその他のものとしては、紺の符号を与えたもののうち、ヘビノオバサン、ゾオリキリ、アラスズメ、ヒチブについて述べればよからう。

ヘビノオバサンは、各地に点在しているが、対象が蛇に通ずるところから、各地で発生する蓋然性もある。中国語に関係のある表現があることも、この考え方の支柱

となる。その内容が雑多であることはすでに述べた。高知のONBAG[ɲ]OZEなどは分布から新しいもののように思われる。

ゾオリキリは中国中央にままとまっているほか兵庫にもあり、どこを中心に発展したものかふしぎな分布である。キリの部分が、九州のトカギリなどの後部分と関係するものとすれば問題になるが、全国的な大きな流れの中では、あまり意味がないもののように思われる。

アラスズメも、この地独自の発生であろう。

ヒチブは、主として瀬戸内海沿岸にみられる。すでに示したその内容や注記の引用でもわかるように、語形にも意味的にもいろいろのものが含まれている。やもりの地図がないために、元来やもりを意味していたと断定はできないが、隣接意味との関係がからんでいることはたしかである。狭い地域での精密な研究などが、問題を解決するに違いない。まず、『中国地方五県言語地図』63図などが参考にはなる。225図にあらわれる岐阜西部のものは、内容の説明のところでもふれたように語形もかなり違っており、別物かもしれない。

結局、本土部西半では、トカゲ類の中の大きな流れの中に、いくつかの小さな渦流がみられる、とまとめられよう。

本土部東半に目を転ずると、ここにはまったく別の世界がある。緑・草・空を与えた諸語形が、それぞれの領域を主張する一方、西日本に広く分布する赤の類も多い、といった複雑な状態である。ただし、紺は下北半島(224図)のYOCUASI(KO)、八丈のKEEBYOOM-Eぐらいであって、むしろ、西日本の場合よりすくないといえるかもしれない。

さて、東日本のトカゲ類は、ここでは、西日本からの輸入と考えることにする。理由は、かりに、元来トカゲの類が東日本にもあり、福島に代表されるように、たとえば224図と225図の内容をトカゲ：カナヘビなどといいわけていたのが、後に、両者を区別しない状態が(たとえば西日本の影響などで)おこったとしては、224=225の状態を地理的に説明しにくい、と考えたからである。

ここで述べる考え方は、東日本も、西日本と同様に224=225が本来の状態であって、トカゲという語形の侵入によって、224図、225図の内容に区別が生じたということの意味する。地図が示すようにトカゲの侵入により生じた区別では224図トカゲ：225図カナヘビ(など)となった地域が広いことになるが、地点ごとにみて

いくと、224 図カナヘビ：225 図トカゲなどのように逆に見える例もいくつかあり(225 図でトカゲなどの答えをえた地点をたどってみるといい)、これなどはトカゲの侵入の際の混乱として容易に説明できる。

もっとも、この考え方をとる場合トカゲ類の侵入経路を、地理的に明確に指摘できないことに、難点がある。くりかえし述べるが、福島を中心に 224 図トカゲ：225 図カナヘビの大領域があり(これが標準語になったとすれば珍しい)、関東南部などでは、「とかげ」と「かなへび」とを区別することがむしろすくない。

しかし、すでに述べたように、ここではトカゲ類を西日本からの輸入と考える。そのほうが、あとで述べる「とかげ」と「かまきり」の名称の交錯についても説明しやすい、と考えるからである。

西日本から侵入したトカゲは TOKAG[n]E が多い。新潟中部から群馬にかけては TOKAKE もみられるが、これらは、それと混在する TOKAG[g]E との関係が深いものであろう。富山・岐阜・愛知以西の TOKAKE が、日本海岸沿いに東進したことはあったにしても、それが三国峠あたりを越えて南進したとは、ちょっと考えにくい、どうであろうか。

東日本に TOKAG[n]E の多いことは、すでに西日本の説明のところで述べた。TOKAGE が TOKAKE にくらべて古そうだとしたことと併せて考えると、この東日本への侵入が、そんなに新しいものではないのかもしれないことを思わせる。129 図「かかと」では、東日本のカカトが西日本でカガトとなる現象がみられた。逆ではあるが、何か関係があらうか。

さて、東日本のトカゲ類が侵入者だとすると、古くは、東日本は、緑・草・空などの符号で示した諸語形によっておおわれ、「とかげ」と「かなへび」の名称は、区別されていなかった、ということになる。

諸語形の分布の概要はすでに述べた通りであるが、緑を与えた KANA を語頭にもつものが広く、草の KAMA、空の KAGA、KARA を語頭にもつものより古そうに思われる。緑の類の中では、KANAHEBI などと KANACYORO などの類が古く、KANAGICCYO などが宮城を中心にした分布からみて、新しそうに思われる。もっとも、新潟・長野あたりにかけての両者の分布は微妙である。KANAHEBI と KANACYORO などの新古関係は、よくわからない。

空の類のうち KARA を語頭にもつものは、緑の類か

らの直接の変化であろう。分布がそれを示していると思われる。

草の KAMA を語頭にもつもの、空の KAGA を語頭にもつものはどうであろうか。領域の連続という点からは草のほうが新しいと思われるが、KANAGICCYO、KAMAGICCYO、KAGAMICCYO という語形をならべてみると、KANAGICCYO を古いものとする限り、KANAGICCYO > KAMAGICCYO > KAGAMICCYO の順と考えるのが穏当であろう。KAMAGICCYO から KAGAMICCYO への変化は音位転倒で説明することになるが、それと認めるなら、この現象は各地で独自に生じうるから、空の KAGA の類の領域の分散も、説明できるように思われる。

この地域における音位転倒については、182 図「とうもろこし」、111 図「まゆげ」(102 図「つむじ」)に関連する事実がみられ、一方、86 図「(におい)かぐ」には、この地域に KAGU と KAMU との問題がみられ、比較すべきである。

結局、東日本では、KANAHEBI、KANACYORO をもっとも古い表現とし、KANAGICCYO > KAMAGICCYO > KAGAMICCYO という大きな流れがあり、その中に地域的な小変化が組みこまれるということになる。紺の類については、その地域の独立的発展と考えざるをえない。そして標準語の 224 図「とかげ」=トカゲ、225 図「かなへび」=カナヘビの発生は、東日本における古い表現カナヘビと、西日本からの侵入者トカゲとの組み合わせによって成立した、ということになる。

最後に、「とかげ」と「かまきり」をあらわす表現の、一見奇妙な交錯について述べよう。ただし、ここでは関東を中心にみられるものだけにふれることにする。九州にみられるものについては、分布の説明のところで簡単に述べたので、そこを参照されたい。

224 図・225 図と 229 (230) 図を通じてあらわれるこの現象は、概略、229 図にみられる「かまきり」をトカゲなどという事実によって、そのあらましを知ることができる。しかし、さらに凡例や地図を詳しくみることによって、KAMAGICCYO、KAGAMICCYO、KAMAMUSI、KAMAITACI などが、「かまきり」の地図と「とかげ」の地図を通じてあらわれ、また、224 図に KAMAKIRI などがあらわれることを知ることができ、問

題はさらに複雑であることがわかる。

ただし、229 図・230 図の解説で述べたように、関東における「かまきり」をあらわす表現の歴史は、イボ〜類>ハエトリ類>オガミ類の順となり、KAMAGICCYO や KAGAMICCYO などは、カマキリなどよりは古いかもしれないが、すくなくとも、もっとも古い時代からこの地に存在していた表現ではなかった、と思われることを想起する必要がある。224 図・225 図についても、KAMAGICCYO や KAGAMICCYO は、この地域においてトカゲなどよりは古いにしても、そう古いものではない。したがって、問題となる TOKAGE や KAMAKIRI や KAMAGICCYO や KAGAMICCYO がこの地域でそう古いものでないものであるから、ここでみられる混乱も、おそらく、そう古い時代におこったのではなく、いわば有史以後に発生したものであろうと推定される。

「かまきり」と「とかげ(かなへび)」とは、本来別の物である。古代人のはかりがたい心理によって、とかげ変じてかまきりとなるとか、かまきりが成長してとかげになるとかいう理解があったかもしれない。また、両者が雌雄であるとか、あるいはそれほど極端でないにしても、両者がきみのわるい生物であるといった、共通の性格をもつものであると受けとられていた、と考えることもできる。しかし、それらの状況を想定しなくとも、要するに、いわゆる同音衝突がここにおこったのである、と考えれば、すべてが理解できると思われる。かまきりととかげとが、もし同一(類似)のものであるという理解があるとすれば、むしろ同音衝突は新事態を生み出さず(同音衝突でなく同義同語として安定する)、奇妙にみえる結果、たとえば、「かまきり」をトカゲといい「とかげ」をカマギッチョといたり、「とかげ」をカマキリといい「かまきり」をハラタチゲンゴといたりする現象は、生じにくいのではないかと考えられる。

結局、別物であるかまきりもとかげもともに KAMAGICCYO あるいは KAGAMICCYO などという現象が生じた。問題はここに起因する。

なぜこのような同音衝突がおこったかについては、いま、十分に理解できない。しかし、とかげについては、KANAGICCYO > KAMAGICCYO > KAGAMICCYO の変化を想定することによって、この状態への流れがわかっている。かまきりについても、鎌をもつギッチョ(きりぎりす・ばった・はたおりむし)と考えれ

ば KAMAGICCYO は当然ありうべき語形だし、KAMAGICCYO も、その音位転倒形式として簡単に生じうる。さらにそこに類音牽引がはたらけば、同音衝突はむしろ不可避であるとさえ考えられる。この解説では採らない考えだが、とかげについて KAGAMICCYO が古くあり、KAMAGICCYO が類音牽引や音位転倒によって生じたとしても、結果は同じである。

1 地点ごとに 224 図・225 図と 229(230)図とを比較することによって、この同音衝突およびその解決の諸相をたどることができると思う。

1. かまきりととかげとが同表現をもつ状態(いわば同音衝突がいままさに起こっている状態)。たとえば 5696.13, 5762.41(後の地点は、「かまきり」の地図では KAMAG[ŋ]ICCYO となっているが、分類のしかたが「とかげ」の場合と違っているものであり、実際は [kamaŋintʃo])。
2. それ以前の状態がわずかに残っていると思われるもの。5674.59(「かまきり」は HAETORIBABAA と併用)。
3. 同音衝突の状態を、一方に標準語形を輸入することによって解消しかかっているもの。5667.08, 6635.20(「とかげ」は TOKAKE, TOKAG[ŋ]E と併用)。
4. 同音衝突の状態のまま標準語形(1語)の影響を受けたが、一方に在来語形を保存することによって、事態が解消しかかっているもの。5667.81(とかげは、KAMAG[g]ICCYO と併用)。
5. 同音衝突の状態のまま、標準語形(1語)にかわったと考えられるもの。5635.65。
6. 同音衝突のまま新形を採用したが、一方に在来語形を保存しつつ、他方標準語形の力を借りて、事態が解消しかかっているもの。5677.28(「とかげ」は TOKAKE と KAMAG[ŋ]ICCYO と、「かまきり」は TOKAKE と KAMAKIRI との併用)。5645.89(「とかげ」は TOKAG[g]E と KAMAG[g]ICCYO, 「かまきり」は TOKAKE との併用)。

以上は、わずかな例であり、地域もばらばらである、このようなさまざまな状態が各地に点在することは、同音衝突がかなりの広範囲におこり、各地でそれぞれ独特な方向への動きが生起していることを示している。そしていうまでもないが、一方、一見問題のない、めだたない方向への解決も、数多くみられるのである。そして、たとえば東京西部などにまとまってみら

れるかまきりを TOKAG[ŋ]E という一見奇妙な現象は、もと両者を KAG[ŋ]AMICCYO などという同音衝突の状態があり、そこに TOKAG[ŋ]E が侵入してくるに際して、誤ってとかげではなくかまきりの位置に新形(標準語)をとりこんだもの、これに対して、たとえば 5659.46 などでは誤らずとりこんだ、6635.20 などでは誤りない解決の方向が成功しかかっている、と解釈できる。

さらに精細・綿密な調査資料によって、個別的な問題が、いっそう明確になるであろうことは、いうまでもない。

## 226. へび(蛇)

### 227. へび(蛇)——へビ類の音声詳細図

へびに関しては、228 図に「まむし」の地図がある。また、224 図「とかげ」225 図「かなへび」にもカナへビなどの語形があるので、地図・解説とも相互に参照されたい。

なお、この 226 図では各種の表現をとりまぜて図示したが、227 図では、226 図に草の符号を与えたへビ類を中心としてその音声的な詳細を示した。この 227 図では、226 図で〈併用処理〉したり、総称でないとの注記のため図に載せなかったものも、へびに関連のあると思われる表現はすべて図示してあるので、注意されたい。すなわち、227 図に語形があって 226 図には対応する語形のみえない地点や、227 図に存在して 226 図に対応のない見出しがある。

さて、226 図をみると、草の符号で示したへビの類が圧倒的に多く、これについて、紺で示したクチナワの類が、近畿以西にかなりの勢力でひろがっているほかは、赤や茶で示したムシ・ナガムシの類などがわずかにまつまっている程度で、比較的単純な地図と言えよう。なお、226 図について〈併用処理〉した語形はへビであって、主としてクチナワの領域内に約 140 地点ほどみられたものである。このうち 6453.59 では〈クチナワは普通の大きさのもの、へびは見世物にするような大きいもの〉との注記があった。

226 図と 227 図との関係を次に示そう。

HEBI は 227 図で [hebi, hebi, hēbi, hebī, hēbī, he<sup>m</sup>bi, hē<sup>m</sup>bi, he<sup>m</sup>bī, xebi, xēbi, xēbī, xe<sup>m</sup>bī] と

したものである。これらの中にはさらにそれぞれそれ以下の音声の変種が含まれているが、それについては、後述の 227 図の説明をみられたい。

以下、大文字で 226 図の見出しを、音声記号でそれに対応する 227 図の見出しを示す。

HEBIME : [hebime, hēbime]

HEBIMEE : [hebime:]

HENME : [hemme]

HEBII : [hebi:]

HEEBI : [he:bi, hē:bi, he:bī, xe:bi, xe:bī]

HENBI : [hembi]

HEENBI : [he:mbi]

HEBBI : [hebbi]

HEPPI : [heppi]

HEB : [heb]

HEP : [hep]

HEEP : [he:p]

HET : [het]

HYEBI : [çebi, çebi, çēbi, çebī, çēbī, çe<sup>m</sup>bi, çe<sup>m</sup>bī, çe<sup>m</sup>bī, çebi, çēbi, çēbī]

HYENME : [çemmé]

HYEEBI : [çe:bi, çē:bi]

HYENBI : [çembi, çembī, çēmbī, çembī, çēmbī]

HYEB : [çeb]

HYET : [çet]

HWEBI : [Φebi, Φēbi, Φebī, Φe<sup>m</sup>bi, Φē<sup>m</sup>bi, Φe<sup>m</sup>bī]

HWENBI : [Φembī, Φēmbī]

SEBI : [sebi]

SENBI : [sembī]

HEBU : [hebu]

HEBUME : [hebume]

HEEBU : [he:bu]

HYEBU : [çeb<sup>u</sup>]

HYEEBU : [çe:bu]

HENBO : [hembo]

HIBI : [çibi, çībi, çībī]

HIIBI : [çi:bi]

HINBI : [çimbi]

HIPPI : [çippi]

HWIBI : [Φi<sup>m</sup>bī]

HIBU : [çibu]

HEBE : [hebe, he<sup>m</sup>be, xehe]

HEEBE : [he:be]

HENBE : [hembe]

HEBBE : [hebbe]

HEPPE : [heppe]

HYEBE : [ɕebe, ɕeɕe, ɕebé, ɕe<sup>m</sup>be]

HYENBE : [ɕembé]

HIBE : [ɕi<sup>m</sup>bé]HWIBE : [Φi<sup>m</sup>bé]

HEMI : [hemi, hemĩ]

HEEMI : [hermi, he:mĩ]

HENMI : [hemmi]

HYEEMI : [ɕe:mi]

HEEMU : [he:mu]

HWIIHWAA : [Φi:Φa:]

HABU : [habu]

HAU : [hau]

PABU : [pabu]

PAU : [pau]

POO : [poo]

PAN : [paN]

PAKU : [paku]

なお、227 図の見出しのうち次のものは、226 図に対応するものがない。これらは、これらが総称ではないとの注記があったため、226 図では無回答なみに扱ったからである。

26 番の [he:bu:]

85 番の [ɕi:bu]

86 番の [ɕi:ba:]

87 番の [ɕi:Φa]

90 番の [Φi:ba:]

106 番の [Φabu]

108 番の [pabu:]

226 図の紺の類の中では、広く使われる KUCINAWA がその分布から古そうに思われ、近畿を中心としその東南西南および隠岐にみられる KUCINA は、その変化であろう。淡路から紀伊半島南岸・四国東南岸にひろがる GUCINA は、KUCINA の変種であろう。G ではじまる諸語形の音変種をみると、[ˈg]もあるがそのほか[n]ではじまるものが徳島にみられ、和歌山(6591.57, 7500.24, 7510.18)にもあって興味深い。233 図「くも」にも関連する現象がみらる。

長い三角の符号で示したものは広島を中心とし、その

西北と東南にみられ、京都にもわずかにみられる。第3集106図「かお」にみられるカオを KAWA という地域と無関係とは思われず、この付近に(～)AWA, (～)A(W)O という音連続について、特殊な音韻法則があり、それが標準語の影響下にあっているいろいろの姿をとって現われているように思われる。顔における～AWA の分布が狭いことから、これが誤った回帰なのではなかろうかと考えられる。なお、6482.52 では(この島では縄のことを nao と言う)と注記があった。

KUCINAWA の語原は、分布からはまったくわからないが、「朽縄」または「口縄」であるとする意識は現在かなり普遍的なものであろうと推測される。6564.33 の注記に「縄に口があるから」との語原説明があった。なお、この KUCI の部分については、228 図「まむし」の図に KUCI を含む語形が多く現われて関連して考えるべきことを思わせる。

香川におもにみられる NAGO の類は NAO がさらに(多分長いなどの連想から)変化したものと思われる。

歴史的に考えれば、草の類がもっとも古く、ある時代以降、紺の類が近畿から主として西日本へ伝播し、一方、これも主として西日本においてであるが、赤の類や茶の類のうちムシの類が、中国西北岸、対馬・壱岐・五島、薩摩半島南端・奄美大島南岸の各地で、おそらく忌み詞としての用法から一般用法に転じ、その勢力を扶植する地域が生じたということなのであろう。

茶のもののうちでは、三河湾沿岸の GOOMARI, 近畿地方を中心として散在する MII(SAN), 四国東北岸の YADO(O)SI がややめだつが、主として併用であり、特殊な表現なのであろう。GOOMARI, YADO(O)SI, AONUGYA は青大将をさすにふさわしい名のように思われる。特定の蛇の名が一般称に転化したのか、元来一般称であったものが特定の蛇の名に転化して現在わずかに痕跡をとどめているのか、分布状態からは不明といわざるをえないが、ここでは、GOOMARI, YADO(O)SI, AONUGYA が特定の蛇の生態などによる命名のように思われるので、特定の蛇の名がたまたまここに現われたもの、とみる。0276.50 では「もと青大将の意味だったが総称となった」とある。

地図に反映されていない(語形)注記を通覧してみる。

まず、蛇がいなくとする地点があった。0724.12, 0724.58, 0724.95, 6667.81, 6697.39, 6697.49, 6697.59, 6698.61。このうち6667.81は、もとはいったそうである。

クチナワについてはいったいに〈古〉とする注記が多いが、6397.62で〈大きな蛇のことを言う〉、7373.92で〈大きなものを言うようだが確信はない〉、8300.25で〈青大将のこと〉、8352.92〈白いもの〉、6428.26で〈養蚕時〉、6501.92〈女のことは〉、6546.73〈昔でも身分の高いものはへびを使っていた〉との注記があった。

マムシについては、6358.43、6367.09に無毒のものを言う、と注記があった。

ナガムシについても、いったいに〈古〉とする注記が多かったが、2793.00、4716.20で〈信仰にむすびついて〉、3795.86、4750.32、5548.35、5635.48、5636.74で〈養蚕の時期に使う〉、2793.51〈炭焼きで山に行くとき〉、2795.66〈漁業用語〉、5666.10〈女のことは〉、6267.68、6287.42、6287.71で〈特別の蛇をさす(のかかもしれない)〉、2783.48で〈子どもを恐ろしがらせるため使う〉などがあった。

ナガモノについては、5589.30に〈諸〉とあった。6534.37では〈宗教的なにおいが感じられる〉、6419.50には〈石の間や軒にかくれたのを追出す時に〉とあった。

ナガスケについては5597.78に〈諸〉とあった。

ミイ(サン)については6534.37、6572.04に〈宗教的・信仰関係の用語〉の注記があった。

ヤド(オ)ンについては6487.66、6497.77で〈大きいもの〉との注記があった。なお、6497.77では〈ただし種類の区別ではない〉とする。

これらの注記は、以上のべた概観に対して矛盾するところはないし、むしろそれを支持する点があるように思われる。

なお、6484.78では〈このクチナゴの中に蝮は含まれない〉とあり、6485.82では〈このクチナゴの中に蝮(ハミ)も含まれている〉、6487.43では〈ヘビイ・グチナゴの中に蝮(ハミ)も含まれている〉とあった。「かえる」の中に「ひきかえる」が含まれるかどうかなどと同様興味ある注記であるが、〈総称がない〉との関係はあるにしても、この種の具体的な注記はこの香川の3地点のみであって、利用しにくい。

この226図で〈併用処理〉によって除いた語形は、標準語形としては、ヘビであるが、特殊なものとしては、0894.61、2617.63のアオノロシ、4689.86のナメラヘビ、5548.35のタスキ〈いみことは〉、5557.48のジャ〈古〉、

6534.37のヌシ、6553.83のヌルヌル〈子〉、7391.94のネズミトリ、7418.07のヒノメメズ、0247.31のウトゥルシャムン、があった。忌詞的なもの、幼児語、特殊な蛇の名の混入などであろう。

227図は、すでに述べたように226図で草の符号を与えたものを音声的に詳細に示したものであるが、これに、226図では〈併用処理〉によって割愛したものを復活し、さらに〈総称がない〉との注記のため226図で語形を示さなかったものについても、ヘビ類と関係あると思われるものをとりあげて示した。

〈総称がない〉との注記のあった地点はすべて琉球列島であるが、まず、ここで特にとりあげた語形についての注記を示そう。〈毒蛇〉をさすとあったもの1156.89、1211.69、1223.91、1231.72、1232.29、1232.75、1233.61、1241.05、1241.49、1241.96、1242.00、1242.22、1250.59、1251.73、1251.98、1260.78、1260.87、1261.16、1261.32、1261.80、1270.26。〈無毒の蛇(の一種)〉をさすとあったもの1221.47。〈蛇の一種―毒蛇なのかどうか不明〉などとあったもの1242.26、1242.72、1251.04、1251.27、1261.01、1261.70、2067.52、〈ハブは毒蛇、ヒイバアは青大将〉とあったもの1270.29、1271.20。概して例のハブにあたるものと思われるが、その他のものもいくらかある。

なお、224図、225図、228図の中にヘビおよびそれに準ずる語形があり、それらを総合的に研究する余地のあることはすでに述べたが、ここでも念のためもう一度ふれておく。

227図を大観すると、東北・関東・中部、九州に特殊な語形が多く、近畿・中国・四国は単純であるとまとめられよう。いったいにこの地図の音声の変種の区別は、調査者の表記上の個人差にまで立ち入っている可能性がある。利用の際注意すべき点であるが、その中で、個人差をのりこえた大きな傾向をつかむことも可能と考えられる。

符号は、完全にそうになっているわけではないが語頭の音節の区別を色で、その他の部分の特徴を形で示すことになっているので、語頭については、一見したその概略をつかむことができよう。なお語頭の音節については、第1集所収の11図「ひがし」、12図「ひげ」の地図が多少参考になる。

[he~, hé~] はほぼ全国的であるが、空の符号の大部分のほか、本土部の紺および桃の大部分をあわせてみ

必要がある。青森・秋田・山形にはほとんどみられない。

[xe~, xé~] は、色をたどってさがし出すことはむずかしい。桃の符号の中にも [xe~] がある。全国で 26 地点、うち 20 地点は北海道でほかに青森、福島、東京、富山、大分にみられる。

[çe~, çé~] は草と赤の符号をたどればよい。ただし草の符号の中には [çe~, çé~] でないものも含まれていることに注意しなければならない。

[ge~, gé~] には草が与えられているが、色をたどるだけではさがしにくい。全国で 14 地点。青森・岩手、福島、千葉にみられる。

[se~] は青森(下北)、山形(飛鳥)のみである。

[Φe~, Φé~] は緑の符号をたどればよい。地域性がみとめられる。

[çi~, çī~] は橙, [Φi~] は茶の符号をたどればよい。[çi~] は橙の大部分, [çī~] は茨城と新潟に各 1 地点である。

[habu] 以下のものは全部琉球列島であるから、そこをみればよい。

[hé~, xé~, çé~, çé~, Φé~] など第 1 音節 母音のやや狭いものがあらわれるのは、東北から北関東にかけての地域に加えて、埼玉・千葉・新潟・富山・長野、島根・山口などであるが、まとまった地域といったものは認めにくいようである。

[he<sup>m</sup>bi, Φe<sup>m</sup>bi] などの [~b~] のまえに鼻音の挿入されるものは各色を通じて、尾のはえた正方形、矢印の符号をたどるべきであるが、東北地方に多くみられ、福井・岐阜、愛媛にわずかにある。

[hembi, hembe] など第 1 音節の末尾に鼻音拍がつくものは小刀形の符号を中心にたどればよい。岐阜およびその周辺に集中的にみられるが、新潟、青森、伊豆大島に及ぶ。[hemme][çemmé] などには別形の符号を与えた。[hemme] が [hebime] などの変種ということが考えうるからであった。しかし、たとえば、この地点は接尾語の「メ」のよくでる所であるが、石川(白峯)の [hemme] などとは、その北の [hemmi] に準じて [heme] の [he~] のあとに鼻音拍がついたものとも考えうる。逆に、[hemmi] の [~mi] の中に、接尾語の「メ」と関係のあるものが含まれている可能性もある。

第 1 音節の末尾が長音となるものには、大型の符号が与えられている。岩手および西南関東から中部地方を中

心として多くみられ、兵庫、愛媛・高知、熊本・鹿児島・琉球列島にかけても点在する。なお、岐阜に [heimbī] がある。

[hebbi, heppe] のように、いわゆる促音のみられるものには、蝶の型の符号を与えた。新潟中部に集中的にあらわれるほか、滋賀にもみられる。

第 2 音節の子音は [~b~] がほとんどである。

[~h~] となるものは大分のみ。

[~m~] となるものには紺の符号を与えてあるが、新潟の西端から福井にかけて集中している。茨城・栃木、石川(白峯)にあらわれる空の [hemme], 草の [çemmé] については第 1 音節の末尾が撥音になるものところで述べたように、ここでは [hebime, çebime] の変種とみて符号を与えたが、疑わしいものもある。

[~Φ~] のあらわれるものは奄美・沖縄のみ。

子音のないもの [pau] およびその変種と思われる [poo] は沖縄・宮古にみられる。[paN] [paku] は、はたしてへびの類としていかどうかわからないが、ともに八重山にみられる。

なお、末尾の音節の母音が弱まるもの消えるものは、熊本・大分、五島、鹿児島・奄美にみられる。

[hebi] のように末尾の母音が [~i] となるものは各色を通じて斜の符号をたどればよい。北海道・東北・北関東のほか、北陸、山梨、滋賀、鳥取・島根にわずかにみられる。

[hebe] のように末尾の母音が [~e, ~é] となるものは、大略桃・赤の符号をたどればよいわけであるが、青森にみられる橙の [çi<sup>m</sup>bé], 秋田にみられる茶の [Φi<sup>m</sup>bé] を加え、すでにふれた空の [hemme], 草の [çemmé] を考慮に入れる必要がある。

[hebu] のように末尾の母音が [~u] となるものは主として十字形である。北陸 3 県、天草、甕島、奄美、沖縄にみられる。沖縄の宮古には [pau], その変種の [poo] および [pabu:] があり、八丈に [hebume] がある。

末尾の母音が [~o] になる [hembo] は、長野に 1 地点である。平行四辺形の符号を与えた。

橙と茶の [çi:Φa] [çi:ba:] [Φi:ba:] [Φi:Φa:] は奄美(喜界)、沖縄にみられるもので、[çi:bu, Φi:bu] などに何か接尾辞のついたものであろう。

[paN] はすでに述べたように、八重山(黒島)のみである。



語末に[~me, ~me:]を添加するものは, [hebime, hebime:, h bime, hebume] であり, 三角の符号が与えられ, 茨城や八丈にみられる。茨城・栃木, 石川の[hemme, g mm ] (後者は草) も同類とみて符号が与えてある。

すでに述べたようにへビの変種については, 特に228図「まむし」の中に考慮すべきものが多い。HABI, HAMI, HAME, KUCIHABI, KUCIHAMI, KUCIHAME などが多量にあらわれている。語形へビの歴史については, 当然これらを含めて考察する必要があるわけであるが, 類似する形式間の言語地理学はかなりむづかしく, また, 意味の変化があったと考えられ, 現在深く立ちいることは, まことに困難といわざるをえない。

## 228. まむし(蝮)

226図が「へび」の一般称・総称の地図であるから, 地図・解説ともに参照されたい。この地図で<併用処理>した語形はマムシであり, 全国で約90個ほどであった。

なお, 念のためその他のもので地図にのせなかったものを記す。1942.03 カラスへビ<見たことがない>, 3737.95 ヒナガ<赤色, 猛毒>, 4643.47 ヒトクレエ<希>, 4730.45 エグナス<よくないやつの意味>, 5574.42 モガサ, 5645.89 カナワ, 5732.17 クソへビ<こういう人もいる>, 6413.43 ジェニガタ<古・希>, 6419.50 ドクジャ<希>, 6458.91 ヒトクライ<古>, 6629.24 ヒトックレエ, 7355.81 イラタカ<雄>である。ヒトクライは3地点あるから地図にのせてもよかったかもしれない。

まむしは全国的に棲息しているわけではないようである。<いない><見たことがない>の注記のあったのは以下の地点であった。0724.12, 0724.58, 0747.70, 0861.48, 1719.17, 1773.27, 1848.24, 1859.84, 1942.03, 2608.90, 2617.68, 4619.23, 4657.64, 4676.60, 4736.63, 5667.41, 5667.81, 5678.59, 5679.31, 6482.04, 6494.21, 6536.39, 6609.02, 6635.44, 6667.81, 6677.41, 6677.70, 6686.75, 6697.39, 6697.49, 9310.27, 0249.17, 0256.76, 0294.66, 0294.93, 0340.00, 1156.89, 1167.01, 1213.76, 1231.72, 1231.88, 1261.70, 1271.05, 1271.20, 2067.52, 2068.08, 2072.20, 2085.69, 2095.60, 2141.61, 2141.71。

いうまでもないが, ここに示されない地点でも, 棲息

しない・見かけないなどの場合があろうと考えられる。北海道, 伊豆諸島などの島嶼, 喜界島・沖永良部島以南の琉球列島の島々にはいないようにみえるが, まったくいないわけではなさそうである。0747.70<いるそうだが>, 0779.03<昔いた>, 7659.31<島にはマムシしかいない>などの注記もある。以上の51地点のうち, ほとんど(34地点)は無回答であるが, 他はマムシ(16地点), マムシへビ(4676.60のみ)であり, これは全国でマムシが標準語形と認められている証拠とも考えうる。しかし, マムシ自体の分布が広く, 他語形が現われてよさそうでマムシと答えたのは伊豆諸島6677.41, 6677.70, 喜界島0340.00ぐらいのものであるから, そううまい結論を出すことはできない。

全国を大観すると, 赤で示したマムシ類が北海道・青森と, 山形・福島西部・西関東・中部・近畿北東部から中国北部にかけてと, 鹿児島島の3領域を占め, 現在かなり強力であることがわかる。

次の, 橙で示したマへビの類は九州東岸のほか福島, 埼玉西部にみられる。この橙で示したものはマへを共有する点でマムシに通ずるところがある。一方, 次の草で示したへビ・ハビなどの類とも通じている。

草で示したものは, 西南近畿から中国・四国にかけて広くみられるほか, 八丈にもみられる。

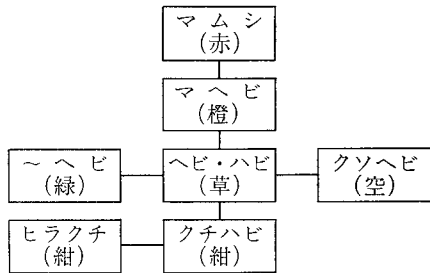
緑で示したへへビの類は, 草の領域付近に多く, その他岩手, 山形, 千葉, 石川・福井, 熊本・大分にみられる。

空の符号を与えたものは, へビなどにクソへを冠したものである。北奥, 福島東半のほか, 静岡西半, 伊豆大島にみられる。

紺で示したもののうち線符号を与えたものは, へビなどにクチへを冠したとみられるもので, 岩手南半から宮城にかけてと, 関東東半, 中国(2か所), 四国西南部に領域がある。このクチへという要素は, もうひとつの紺符号を与えた九州西北部にみられるヒラクチに広くあらわれる。そして琉球列島にはまた別の類が分布している, ということになる。

以上述べた各々の語形から考えられる相互関係を, 簡略図に示そう。

しかし地理的にみると, 北海道・青森のマムシがマへビと接していないこと, 東北から東関東にかけてのクソへビ・クチハビが草の類と接していないこと, むしろクソへビとクチハビが接していること, 九州西北のヒラ



クチとクチハビとが接していないことなどから、以上の想定があたっていないか、十分でないか、あるいは歴史的にさらに複雑な事情があったと考えざるをえない。

各類の見出しをさらに詳しくみていこう。

**MAMUSI** [mamusi, mamusi, mamusū] のほか、4684.77[mami:ji], 5604.28の[mami:ji], 5557.85の[mammufi], 3735.50の[mammusu], 8229.96の[mamu:ji], 6577.86の[ma:mufi], 4653.47, 5631.75, 5661.89, 5691.37の[manufi, manufi], 5623.42と5632.28の[ma:ufi], 6339.37, 6404.83の[namufi], 5623.85, 5633.45の[ma:ji], 5623.85の[ma:ji]を含んでいる。

**MAMOSI** 富山・石川および島根に多いが、他にもある。[mamosi, mamosu]などを含む。

**MABUSI** 北陸地方から滋賀・三重にかけて、およびその周辺(新潟、岐阜)にみられる。

**MABUSIME** 石川に1地点である。

〜**MAMUSI** 北海道(クロマムシ), 山形・福島(ともにアカマムシ), 群馬(ジネマムシ), 長野(オトコマムシ)の各1地点である。

**MAMUSIHEBI** 新潟と福井である。

**MAMUSIHEEBI** 静岡のみ。

**MAMUSIHENBI** 新潟のみ。

〜**MUSI** その内容はドクムシで、岐阜と熊本に各1地点であった。マムシ類にいれるべきものかどうか不明ながら、マムシ自体を〜ムシと考えて(226図「へび」でもそう考えてある)赤の符号を与えた。

**MAHEBI** 福島(東部), 埼玉(西部), 熊本・大分・宮崎, 種子島。

**MAHEEBI** 種子島に1地点(227図などとの比較のため出した)。

**MAHYEBI** 福島に2地点, 大分・宮崎に4地点。

**MAHEBE** 大分。

**MAHYEBE** 大分。

**MAHYEBU** 熊本に1地点(227図などとの比較のため出した)。

**HEBI** 近畿地方に4地点。6590.08では、(普通の蛇はクチナワだから区別できる)との注記があった。

**HEBII** 兵庫に2地点。

**HEBIME** 八丈島に3地点。7659.31には「島にはマムシしかいない」との注記があった。

**HEBUME** 八丈島に1地点。

**HABI** 南近畿。

**HANBI** 南近畿(熊野灘沿岸)。

**HANBIN** 奈良南部に1地点。

**HAMI** 中国・四国に多く、近畿にもわずかある。6575.40に[ha<sup>m</sup>mi]。

**HABE** 大阪南部に1地点。

**HAME** 近畿から四国にかけて広く分布する。

**HAMEE** 兵庫。

**HABU** 和歌山南部に1地点。

**HABUSOO** 福岡北部に1地点。

**HAMU** 兵庫, 広島, 福岡に各地点。

〜**HEBI** 内容はドクヘビ, アカヘビ, クロヘビ, カラスヘビ, ゼニガタヘビ, ニガヘビ, ツツノコヘビ, コロコロヘビ, ヒトクイヘビである。各地に点在するが、岩手南部にクロヘビが6地点まとまり、これは、別見出しとすることも可能であった。北と東に分布するクソヘビと関係があらう。

〜**HEEBI** 熊本南部に1地点。ドクヘビ。

〜**HWEBI** 山形北部に1地点。ドクヘビ。

〜**HAME** 岡山南東部に1地点。ドクヘビ。

**KUSOHEBI** 岩手, 福島(東部)に、広くその周辺にもみられる。静岡にもある。

**KUSSOHEBI** 山形に1地点。

**NMANOGUSOHEBI** 青森に1地点。

**KUSOHEEBI** 岩手に1地点。

**KUCOHEEBI** 岩手に1地点。

**KUSOHYEBI** 東北地方に16地点。

**KUSOHWEBI** 秋田と山形にみられる。

**KUSOHEBE** 秋田に1地点。

**KUSOHENBI** 静岡と伊豆大島。

**KUSOHYENBI** 青森。

**KUSOHWENBI** 青森。

**KUSOHENBE** 伊豆大島に1地点。

**KUSOHYENBE** 青森に1地点。

KUSOhibi 栃木に1地点。  
 KUSOHwibi 秋田に1地点。  
 KUSOHwibe 秋田に1地点。  
 KUSOSEbi 山形(飛鳥)に1地点。  
 KUSURIHEbi 新潟北部に1地点。分布から、クソヘビと同類として、まちがいあるまい。  
 HUCIHEbi 栃木に1地点。  
 HUCYAHEbi 茨城に1地点。  
 KUCIHABI 茨城・栃木に多く、岩手南部・宮城にもある。[kutsihābi, kutsūhābi, kudzihabi] などを含む。  
 KUIHABI 岩手に1地点。上のものに含めてもよかった。  
 KUCISABI 宮城。第2音節は[~tsi~, ~tsū~, ~dzi~]のみであった。  
 KUCUABI 岩手と宮城。クズアビ、クツアビと表記されている。  
 KUCYUHABI 宮城南部に1地点。  
 KUCCYABI 宮城・山形、茨城。  
 KUCCABI 宮城・山形。  
 KUSSABI 岩手・宮城。  
 KUCYABI 宮城・山形。  
 KUCIHAMI 岩手、千葉、岡山。  
 KUCIBAMI 広島。  
 KUCINAMI 広島に1地点。  
 KUCIYAMI 鳥取に1地点。  
 KUCCYAMI 栃木、千葉。  
 KUTTAMI 千葉南部に1地点。  
 KUCYAMI 千葉。  
 KUCIHAME 利根川河口付近、兵庫・鳥取・岡山県境付近。  
 KUCIBAME 広島北部に1地点。  
 KUCIMAME 広島。  
 KUCIBABE 広島。  
 KUCYAHAME 千葉(東端)に1地点。  
 KUCI(Y)AME 鳥取・岡山。  
 KUCYAAME 岡山。  
 KUCCYAME 千葉。  
 KUCYAME 千葉。  
 KUCINAWA 茨城と熊本。226図と比較すると、両地域ともこれらの語形のあらわれてよさそうな地域である。

KUCINA 茨城、兵庫、高知。兵庫の場合は226図と区別がない。

KUCIME 高知西南端に集中的にあらわれる。KUCIHAME などと関係があるかもしれないが、地域がはなれている。7461.23では「へび」もクチメという。

HIRAKUCI 以下 HYERAKUT までは、すべて九州北西部にあらわれ、その他にみられない。

KUHWAZYARAKA 以下 HWIRUMIKKWA までは、琉球列島にみられるものである。KUHWAZYARAKA には[kupadaraka]を含む。KUHWAZYARAKU は[ku:ɸadɕarak, k'uhadɕarak'u, k'u-haɕirja'k, kowaɕarako]をまとめたもの。KWAAZYARAKU には[kwa:darak, 'kwa:dɕarap]を含む。KOOZYARAKU は[ko:zaraku, k'o:dɕirak, k'udɕarak'u, hottɕarago]をまとめたもの。KWAAZYARO は[kwa:dɕaro]のほか['kwa:darɔ, 'kwa-dzɔro]を含む。HUPAA は[ɸupai, ɸuppa]をまとめたものである。

その他としたものは4618.49の[jamakaɕadzɪ], 4654.52の[ɕitokurɪ], 5678.71の[tsutɕimɯguri], 6636.05の[jamakaɲaɲi], 6710.70の[ɕitokure]であった。〈併用処理〉の一環として省いた語形については、すでに述べた。

次に地図に反映されていない注記を概観して述べる。

クソヘビの類とマムシの類とを併用する場合、クソヘビを黒いもの・マムシを赤いものとするものが8地点(3699.55, 3702.81, 3747.45, 3754.37, 3777.86, 3778.00, 4619.29, 4710.55)あった。ほかにクソヘビが大きいものとする地点が3地点(2783.06, 3767.22, 5793.74)あった。もっともクソヘビが赤くマムシが黒いとする地点も1地点(3746.76)あった。これらの区別は、クソヘビの領域に、マムシが侵入して生じたもの、と思われる。4722.40では元来はクソヘビであったが、現在黒いのをクソヘビ、赤いのをマムシと言う、とあったことが参考となる。

マムシ類と他語が併用され、いずれかが新しいとする場合は、一般にマムシ類が新しいのであるが、4761.07, 6428.76, 6430.53, 7383.98, 8303.70では、マムシ類のほうを在来形とする注があった。これらは、各種の表現が、現在まだかなりの勢力を持っていることを示すのであろう。マムシ類以外の2語が併用される場合は、6441.71

クチバミ<古>, ハミ<新>, 6593.30 ハンビ<女が使う>, 7334.44 ではマヒエベを<新>, 7354.23 ではマヘビを<新>, 7513.15 ではハブを<古>としてある。

語原解釈にふれたものとしては, 3746.09 でクソヘビは<臭い>, 3778.00 クソヘビは<黒くて糞のような>, 4712.16 クチサビ<喰いつくから>, 4713.45 クチハビ<喰いつくから>, 6657.54 でクソヘンベは<とぐろを巻いた形が糞に似ている>から, 7218.58 でヒラクチが<広口の意>, 7382.01 でヒラクッが<平口なり>とする程度であった。

その他興味深い注記として, 次のようなものがあった。4698.15 アカマムシ<マムシとだけは言わない>。5629.23 クチハビは<秋のころのマムシを言う>。6408.88 マムシ<昔の人がハムと言っていたことを覚えている>。6418.75 ハム<小>, マムシ<大>。7342.72 ヒラクチ<ハブのこと>(蝮の標準語形をハブと思っているのか)。

この地図についてもっとも興味深いのは, ヘビおよびヘビに準ずるハビ・ハミ・ハメなどの表現が, マムシをあらわす表現として, またはその構成要素としてかなり多くあらわれる点である。そしてこれは 226 図の蛇をあらわすヘビ類のことと一致するところもあり, また不一致のところも多い点がある。さらにいえば, この地図における近畿西南部から中国(山陰を除く)・四国にかけてのハビ・ハメ・ハミなどの分布は, 226 図の蛇をあらわすクチナワの領域から, 蝮においてヒラクチを使う地域を除いた地域にほぼ似ている点である。

この地図にあらわれる(〜)ヘビおよび(〜)ハビ・ハミ・ハメなどの出現する地域は東北地方(青森はまばら, 山形南半・福島西半にはない), 東関東, 近畿西南部(滋賀, 三重のほとんど全域, 京都・兵庫の北部を除く)・中国(鳥取大部分・島根東部を除く)・四国・九州東半の大領域で, その他新潟, 埼玉, 伊豆諸島, 静岡, 石川・福井, 熊本などに点在している。

これらのうち 226 図にあらわれる語形と一致しないもののあらわれるのは, 次のパラグラフで示す 3 地域であって, よくまとまっている。他は, 地点ごとに対照するといくらか差はあるにしても, 226 図と大差はない。たとえば, 228 図には秋田に KUSOHWEBI が広くあらわれるが, 226 図をみると, そこが HWEBI の地域であることがわかる。大分西北部に MAHEBE がみられるが, 226 図をみると, そこは HEBE の地域である。

226 図にあらわれる語形と一致しないもののあらわれ

る 3 地域とは次のとおりである。(1)宮城を中心として山形・岩手にかけて。主として 228 図でハビ(2 地点ハミがある)の地域。(2)茨城・栃木・千葉にかけて。228 図で北半はハビ(1 地点ハミ), 南半はハメ(7 地点ハミがある)。(3)近畿・中国・四国にかけて。228 図で南近畿はハビ(奈良から三重にかけて 3 地点ハブがある)。奈良北東部から三重にかけて 8 地点ハミがかたまっている。北近畿から淡路, 岡山北東部にかけてはハメ(ハメーを含む。淡路, 鳥取にハミが各 1 地点)。中国は大部分ハミ(広島山間部にハメ 10 地点。関門付近にハブソオとハム)。四国は香川・徳島東南岸から高知にかけてハミ, 徳島北部・愛媛・高知山間部にハメ(このハメは近畿北部のハメに鳴門海峡をはさんで連続しているようにもみえる)である。

3 地域にあらわれる語形のほとんどは上記のようにハビ・ハミ・ハメである。226 図ではこれらの第 1 音節に [-a-] のあらわれる語形は琉球列島にしかみられないものであった。同様に第 2 音節に [-m-] のあらわれる語形は, 226 図では北陸地方にしかみられないものであった。

これらが「へび」の図・「まむし」の図にあらわれるヘビ類の表現全体の中で, どのような歴史的関係によってむすびつくものなのかについては, 音形式が相互に関連するためもあるが, 地理的分布だけでは現在残念ながらはっきりしない。また意味の変遷(たとえば毒蛇をさす名だったものが一般称になったとか, あるいはその逆であるとか)も考慮する必要がある。今後の問題とせねばなるまい。また, ここでは語形の類似だけを根拠としてこれらを同類とみなしているが, 厳密にどこまで許されるかも考えてみる必要がある。

この地図で注目すべきもうひとつの点は, クチという要素である。

この要素はクチヘビ, クチハビ, クチハミなどにあらわれるほか, ヒラクチにもあらわれる。クチのあらわれる地域はすでにふれる所があったが, これらのうち, 中国・九州のものは, 226 図にあらわれるクチナワとの関係をも考慮せねばなるまい。

すなわち, たとえば九州西北部では「へび」のことはクチナワといい「まむし」のことはヒラクチといっている。この例などは, まむしがヒラクチナワの下略形ではないかということを思わせる。また中国(たとえば兵庫・鳥取・岡山の県境付近)では, 蛇はクチナワ, まむしはク

チハメといっていることになるが、これなどは古くは蛇の一般称はクチ(〜)であり、無毒のものを特に言うときがナワ(あるいはそれに類した形)といい、有毒のものを特に言うときがハメ(あるいはそれに類した形)としていたのではないか、ということをおもわせる。クチ(〜)が古い蛇の一般称ではないか、とする考え方は、西北九州のものにも適用できるかもしれない。

しかし、ひるがえって考えると、226図においてクチナワはそう古いものでなさそうにみえるし、この図においてクチという要素があらわれる地域は、蛇にクチナワのあらわれる地域以外にもある点も考えねばならない。

この図におけるクチの歴史については、226図のクチとの関係をも考慮しつつ、また、クソ(この地図で空の符号を与えてある)との関係も勘案しつつ、やはり今後の問題とせざるをえない。

## 229. かまきり(蟺螂)——一般的な名称

## 230. かまきり(蟺螂)——特殊な名称

かまきりをあらわす表現の種類は、かなり多かった。そこで、一般的な名称と、地域的にかたよりのある特殊な名称とを、2枚の地図にわけて示すことにした。もっとも、この一般的な名称と特殊な名称との境界は、はっきりしたものではない。すなわち、2枚にわけたのは、いわば便宜的な処置であるから、そのつもりでみていただきたい。

また、この地図では見出しが非常に多くなるのを避けて、かなりの変種をまとめ、ひとつの見出しとして示してある。たとえば KAMAKIRI には、[kamakiri, kamagiri, kamakit, kamaki:, kamakīrī] などのほか [kamacīrī, ka:makiri, kamairi, kamaki, kamari] などが含まれている。したがって各地点からの報告の詳細は『日本言語地図資料』にあたねばならない。

なお、このかまきりの地図と、224図「とかげ」225図「かなへび」の地図とは関係するところがあるので、解説ともども参照されたい。231図「とんぼ」などにも関連するところがある。

かまきりが<いない>とする地点があったので、まず記しておく。無回答となっている地点もあるし、カマキリなどと答えた地点もある。0737.94, 0840.33, 1708.05,

1745.54, 1754.16, 1859.84, 2763.22, 2771.83, 3736.58, 3756.40, 4736.63。<いるかもしれないが(たまに見るようだ)が>注意したことがない>とした地点は、0747.70, 1898.10, 2761.77, 3755.32, 3764.92, 5628.23 であった。これらのような注がなく「無回答」または思いがけない(ような)回答(1755.53のバッタ, 1862.48のアシナガトンボ, 3757.32カタツムリなど)をした地点のなかにも、「いない」ないしは「無関心」の地点が含まれている可能性がある。

なお、<併用処理>した語形はカマキリおよび 7353.51のカマキリサンであった。<併用処理>されたカマキリは145地点ほどで、全国に散在しているが、北関東から中部地方にかけてややめだっているようである。

地図を大観することにして。

229図で草の符号を与えたのは、カマキリおよびそれに類するカマを持つ表現である。東北、九州(琉球)には少ないが、ほぼ全国で使われている。ただし、いろいろなものが含まれている。KAMAKIRIGO は 6349.80, 6452.83 の2地点にみられるが、6349.80の注記には<キリゴはバッタ>とあった。つまり、キリ部分が「切り」ではない(と意識されている)ことを示している。これは意外にカマキリ全体についてキリの部分が切りでなく、キリギリスのキリなどと関連のあるものかもしれないことを暗示する。これに加えて KAMAGISU, OKAMAGISU, KAMAGIRISU など KAMAKIRIGO と発想の通ずる語形があるが、資料が十分ないので、これ以上深入りしない。

KAMAITACI は神奈川、新潟、石川、滋賀にみられるが、福井に2地点の KAMATACI との関連が十分につかめない。

草の中では全国的にカマキリが多いが、地域的にやや目立つのは茨城北部の KAMAGARIMUSI、茨城・栃木などの KAMAG[g]ICCYO, KAMAKAKKIRI、静岡から伊豆諸島にかけての KAMAKKIRI、能登北端の KAMAGIRISU、福井、岡山・広島の3地域の KAMATATE, KAMAUTTATE, KAMATACI、山陰の KAMAKAKE、福岡の KAMAKICCYO などであろうか。

空の符号を与えたものは全体でわずか5地点にすぎないが、224(225)図との関連を考えて別の色を与えたものである。KAG[η]AMICCYO, KAG[η]AMECCYO は地理的に草の KAMAG[η]ICCYO の近くにあるとい

えるが、KAG[η]ABICCYO は山梨にやや離れてみられる。一見 KAMAGICCYO などの音位転倒形式のように思われる。

緑で示したものは、草の類に含めなかった、しかしそれと関連のありそうな表現である。

KANACYOORAI, KANCYOORAI, KANCY-ORO(ME)は宮崎にみられるものであるが、草の符号を与えた KAMAKIRICYOORINBOO, KAMAKIR-IGICCYON, KAMAGICCYO, KAMAKICCYO などと関連があるかもしれない。もっとも、これらは主として北九州にみられ、宮崎県内には KAMAG-[g]ICCYO がわずかに2地点みられるのみである。橙のCYOORO(ME)やCYOORAI~CYOOREE, 茶のOGANCYORO, OGAMECYO(O)RO(O), OGAMANCYORO などとの関係は、いうまでもあるまい。

KANKIRIMUSI, KAMIKIRI(MUSI)は全国に散在するがそれほど多くなく、房総半島、敦賀付近、兵庫南半、室戸岬付近にややまとまってみられる程度である。

KIRIGO(6349.23)はすでに述べた6349.80のKAMAKIRIGOと関連があるものと思われる。KAMAの部分脱落したというより、KIRIGO自体がバッタなどこれに類する虫の総称であり、230図で橙の符号を与えたもののうち、BATTAT, TORABO, GISU, KIRIGIRISU, HATAHATA, HATTAGIなどと、通ずるものと考えられる。したがってむしろ、229図から230図に移すべきものなのかもしれない。

INEKARIMUSI以下NOKOGIRIMUSIまでは、語形というより命名の発想が、この虫のもっている録に関連があらうと思われるものである。あまり多くなく、NATAKIRI(MUSI)が京都・兵庫の北部に、CYOONAKATAGIが広島と足摺岬付近に、ややまとまってみられる程度である。

赤で示したTOKAG[η]E以下TOKAKIREまでは224(225)図との関連を考えて当該図と比較できるような符号を与えた。関東および山梨にまとまっているが、遠く8315.42にTOKAKEが、7357.69にTOKAKIREがみられ注目される。なお、この地図には記載されていないが、7421.62でHENBOと答えた(230図に搭載)ときの説明として、(TOKAKEと言いかけたが訂正)という注記—杉山正世調査—があり、あわせて考えるべきものと思われる。また、5791.68では<イボができた

ときこの虫にくわせるがそのときトカゲにくわせると言う>とあり、興味深い。

茶の符号を与えたものは、OGAMI, OGAMEおよびそれに類する表現である。関東・静岡にわずかにみられ、近畿の周辺、四国西南部から九州にかけて多い。

OGAMICCYOは、草のKAMAGICCYOや空のKAGAMICCYOに、OGANCYOORAIやOGAMECYOORAIは、緑のKANACYOORAI・KANCYOORAI(橙で示したCYOORAI~CYOOREE)などと関係があるので、形の似た符号を与えておいた。

OGAMAGIME 7382.01のGIMEは、7258.82(230図)にみえるもので、注記によれば「いなごやばったの総称」であるという。KAMASU(8331.12)は、(オンガマスの転訛なるべし)との注によってここに入れた。

これらの類はこの虫の前足の動作を拝む動作に見立てての命名と考えられ、事実そうした語原意識を報告したところが多い。5588.81, 6573.71, 6583.45, 6584.90, 6586.27, 6593.30, 6632.15, 7246.45, 7320.95, 7342.12, 7342.72, 7430.15, 7503.48。

しかし、OGAN~の類と緑を与えたKAN~の類、OGAMA~の類と草を与えたKAMA~の類とが、すくなくとも現在無関係であるかどうかについては、態度を保留しておきたい。たとえば7395.25ではKANCYOROとOGANCYOROが併用されているし、6507.48, 7324.96, 7523.05ではKAMAKIRIとOGAMAが併用されている。また、6573.17のOGAMANOTONOSANには<OGAMAの部分が「お鎌」か「拝ま」かはっきりしない>とあった。

茶の類の中を概観すると、OGAMI(~)の類、OGAN~の類、OGAME(~)の類、OGAMA(~)の類、OGAMO, OGAMUの類その他にわけられよう。関東のものがOGAMI(~)の類で統一されているほかは、岐阜から北陸・滋賀にかけてのもの、近畿西北部のもの、南近畿のもの、四国西南部から九州にかけてのもののすべてが各種混在状態であるが(広島はOGAMI(~)のみ)、しかし、それぞれの地域内で、それぞれの類がまとまって分布する傾向がみられる。たとえば大分西部にOGAMO, 福岡南部はOGAMA(~), 熊本を主としてOGAME(~), 長崎南部はOGAMI(~)というように。

橙を与えたものは、すでに(草や)緑や茶で示した類の中に、その部分として関係のありそうな表現があらわれ

たものである。たとえば TOOROO は OGAMETO-OROO や OGAMATOOROO などに, CYOORAI ~ CYOOREE は KANCYORAI や OGANCY-ORAI などに, SYOOROO(MUSI)は OGAMIS-OROO などと共通性がある。

TOOROO(MUSI)から TOOROGÉ までは中国・九州にもあらわれるが、西関東から山梨・長野にかけてみられる。蟻螂の字音とも考えられるが、中には、OGAMANYATOOSAN などの TOO, KAGAM-ICCYO・KAMAKICCYO などの CYO などと関係のあるものがあるかもしれない。TAKEDOOROO 6603.82 の語原は <竹蟻螂>だという。

CYOORO(ME) 以下 SYOROUA までは九州にみられるもので、それぞれまとまった領域をもっている。

CYOORAI には頂礼, SYOROUA には精霊馬が、特に指摘はなかったがその語原意識として働いているのではあるまいかと思われる。

凡例で次にならべた紺を与えたものは、仏教関係のもの、馬に見立てたものを橙の SYOROUA の連想でまとめた。HOTOKEUMA は峯岐にもある。TON-NOUMA については 7208.97, 7218.58 に <鳥の うちで馬の形をしている>という不思議な注があった。DONDOMUSI(5680,34)の注記には <ドンドは幼児語で馬のこと>とあった。

IBOMUSI 以下の桃を与えたものはイボを含むと考えられる表現で、東北地方に多く、関東周辺、長野・北陸のほか、隠岐、広島南部、見島、高知(周辺)にみられ、また遠く鹿児島県の口永良部に IMOMEZIRI がみられる。230 図で空の符号を与えた MAAMINAIIBUU もこの類に含めるとすれば(『沖縄語辞典』には ?iibuuz-iiraa という語も出ている)、さらに領域がひろがる。

IBOMUSIRI は 5791.68 1 地点のみであるが、古語との関係を考えさせる類である。ENBOOZIRI, ENBOOZI のみは語頭を E としたが、I としたものの中にも E としていいものが(たとえば、IBOMUSI の中に [ebomufi] が)含まれているので、注意されたい。つまり、ENBOOZI(RI) を INBOOZI(RI) としてもよかったわけである。KENBERABOCCI(4639.10)はこの類かどうか疑わしいが、IBOBOCCI が付近に多いのでここにおいた。IBOKUIHATTAGI (2773.13) の HATTAGI は、3733.18 や 3737.95 の HATTAGI の注

にあるように <いなご・ばった・かまきりの総称>である。

GENZAIBO から DENGABO までは、岩手・秋田、富山・石川にみられるもので、230 図にみられる紺を与えた GEN~・DEN~の類との関係が考えられる。3760.58, 3775.83 の注記には、地図には登載しなかったが、<デンガエボ、デンガボオは水中にいる似た虫>とあった。近接した意味分野に、まだこの種のことがひそんでいることを思わせる。

3767.22 の AZAHORI, 3714.27 の KUBOKIRI は、IBO をまったく含まないが、分布と、(KUBO が瘤と関係するかどうか不明だが) AZA がほくろを意味することから、ここに加えた。

この桃の類は、この虫が疣を喰い切る(など)からの命名と考えられている場合が多く、3746.09, 4713.45, 4715.33, 4716.20, 4735.37, 4781.48, 4792.43, 5639.80, 5791.68 などの注記が、それを示している。しかし、4659.01 <怒ったことをイボンダという>, 4685.88 <怒ることをイボルという>, 4742.37 <怒ることをエブクルという>, 5606.83 <怒ることをエボクルという>などの注記もあり、4628.28 のように <卵がイボのように丸いから>という注記もあった。4751.42 の TAKARIBABA (220 図・草) の注記には <卵をエバエムシノスというが蟻螂をエバエムシとは言わぬ>とあり、また 7412.26 では <かまきりの巣はエンボオジリ>とあった。

以下 230 図について概観する。

赤の符号を与えたものは、ハエトリの類である。東北地方(主として日本海岸)、西北関東、富山・石川、島根・広島および高知の南端にみられる。

HAETORIGENBEE, HAETORIGENZI, HAETORIGENZAIBO の後部分は、この図で紺を与えた GEN~, DEN~の類や、229 図で桃を与えたもののうちの GEN~, DEN~の類と関係がありそうである。ただし島根・広島 の HAETORIGENBEE と HAETORIGENZI は、地理的に孤立している。HAETORIGOOZI の GOOZI は <蛆のこと>という。ABUTORI(MUSI) 3774.44 は、蟻ではなく虻であるがここに含めた。なお、紺を与えた 2765.71 の ANBUTAKA には <アンプのような形でタカのように虫をとる>とあった。5621.43 の INAGOTORI も ABUTORI(MUSI)に準じてここに入れたが、はたして適当で

あったかどうかわからない。7470.72 の SAITORI-MUSI, 5613.26 の HAKUTORIMUSI にも同様の懸念がある。ことに SAITORIMUSI については、分布の上からも問題がありそうである。ハイトリムシの語原については、＜蠅をとるから＞とするものが 4713.60, 4731.42 にみとめられた。

草の符号を与えたものは、恐ろしいもの、怒るものといった発想のものを集めた。すでに 229 図に示した桃の符号を与えたものの中にも怒るものと考えられている表現があった(宮城・山形・新潟)ことを想起されたい。ME-MERIMUSI 以下 OYAMIMIRI までは富山にみられるもので、5538.63 では＜親にらみ＞と語原解釈をしている。OYANEGIRI は五島であるが、語形も似ており、九州でネギルを睨む意味で使うので、ここにおいた。4751.42 の TAKARIBABA には＜怒り婆＞の注記があった。HARATACIGENGO から HATACIG-ONBE(E) までは、229 図の桃や 230 図の赤、さらにこの地図で紺を与えた GEN~などの類と比較すべきものである。HARACIGICCYO (5614.62) は立腹とあまり関係がないかもしれないが(腹千切?), 分布と語形の類似からここにおいた。ONIMUSI 以下 HARACIGICCYO までは、いろいろのものが含まれているが、山形・福島、西関東(千葉を含む、神奈川を除く)、新潟・長野にしかみられないことは注目してよからう。

紺を与えたもののうち HARIGANEMUSI (5646.12), MOTTOIMUSI (京都・兵庫, 大分) は、元来は蟻螂の臍物(寄生虫?)の名ではあるまいか。HARACIGICCYO が腹千切ではないかといった連想でここにならべたが、あまり根拠はない。

HOORIDONO 以下 ZATTONBOO までは、この虫の前足の動作を神主や盲人の動作などに見立てたものである。229 図で茶を与えた類と、発想が通じる。ICI-YANEGIDONOTA IKOTATAKI (5671.94) はこの世のものとも思えぬ長大な表現であるが、注記に＜「～がいたぞ」と言う＞とある。TAIKOHATAKI は東北(太平洋岸)と長野にみられる。同様に TAIKONBUCI も東北(山形)と長野にある。ZAT(T)OO(MUSI), ZATTONBOO は近畿西北部にかたまっているが、岩手にもある。琉球の IS(Y)ATUU(空)などもあるいはこれらと関係があるのかもしれない。もっとも、琉球で Z のあらわれるのは 0248.00 の IIZATOHANNYA, MAAMIIS(Y)AATUU のうち 1241.05 (この地点の

実際の音声は[mamiʒa:t'u:])の2地点でしかない。

橙で示したものは、はたしてこの虫を示すものかどうかははっきりしないもの、すくなくとも他の虫をもあらわすことのあるものをまとめた。HENBO, KAMAKI-RIHENBO (7421.38), HENBOOKAKE (7441.63), ENMA (7417.27, 7418.07) は四国にあらわれるが、ヘンボは西北九州で蜻蛉(本集 231 図)をさす表現である。1862.48 に ASINAGATONBO, 4704.96 AKEZUMUSI があって、蟻螂と蜻蛉の交渉を思わせる。しかし、地理的には 229 図に桃で示した ENBOOZI, ENBO-OZIRI, IBO, IBO(O)ZI などとの関連を考えるべきものであろう。TORABO は『全国方言辞典』に、青森・秋田で「いなご・ばった」とある。HATTAGI も『全国方言辞典』に、青森・岩手・宮城・秋田・会津で「いなご・ばった」とあるものである。(GASI) KATA については、2086.03 の注に＜ガシは鎌, カタはばった＞とあった。EERUUGAATAA の GAATAA も「ばった」であらう。『採訪南島語彙稿』にも [ga:ta:] は「ばった」として出ている。EERUU はよくわからないが色をいっているのではあるまいか。KIME(KKO)MUSI は、福島・新潟にみられるものである。7258.82 の GIME の注に＜いなご・ばったの総称＞とあったのでそれと関連させてここにおいたが、5712.70 の注に第三者がこの虫をキミコモチと答え(キメルはむくれるの意)とあったことに注目して(『全国方言辞典』にも「きめる」を山形・仙台・福島・越後でむつがる、すねるの意とする), むしろこの図の草の類とすべきものであった。まさに草の類としてあらわれて自然な地域である。

紺で示した GENMUSI 以下のものは、すでにくりかえし述べたように、229 図桃の中の GEN~, DEN~の類(岩手・秋田, 富山・石川), この地図の赤の中の HAETORIGENBEE(秋田, 島根・広島), 草の中の HARATACIGENBEE(埼玉・千葉・東京)などと関連させるべきものである。岩手・秋田の領域付近には 4714.22 の GONBOMUSI があリ、富山・石川の領域付近には、5548.58 GENMUSI, 5549.55 の GENTAROO(MUSI), 5558.67 や 5559.51 の GENDA があらわれ、関東には 5688.86, 5698.19, 5699.42, 6721.31 の GONBEE があらわれ、まことにもっともと思われる。しかし、島根・広島のは孤立している。そのほかこの類のあらわれるのは、八丈に GENBEEME, 新潟に GENZYOO と GENTAROO(MUSI), 長野に



DENBO (5641.99) と NENBOMUSI (5632.83) であって、これらの類が、まばらではあるが能登、八丈を結ぶ線以東、男鹿半島、陸中海岸を結ぶ線以南に散在し、島根・広島県境に孤立して分布していることがわかる。NENBOMUSI をこの類とすべきかどうかは実ははっきりしないが、分布の上からここにおいた。

これらの類は 231 図「とんぼ」で北関東に関連するものがあられ、『全国方言辞典』によればさらに

げんじ かぶと虫。三重県阿山郡・奈良・京都・神戸。

げんじき げじげじ。静岡県志太郡・佐賀。

あぶら虫。静岡県志太郡。

げんじむし むかで。岩手県九戸郡。

げんたろー 源五郎虫。静岡県安倍郡。

ごんちゅー 毛虫。京都。

などがあり、今回の調査では、特に注記としての語原解釈はなかったが、いやな虫、強そうな虫、目や前足に特徴のある虫に与えられることばのように思われる。

空を与えたものは、琉球列島にあらわれる種々のものを示した。いろいろの音変種がまとめられている。たとえば IS(Y)ATUU には [ʔisatu:, ifatu:] のほか [if-a:ʔtu:, ifat'o:, isato:, ifatu, ifato, issaʔtu, ifata:, itʃatta:] が、IS(Y)ATUUMAI には [ifʃatamai, ifato:maiʃa, isatumi, issatobai, ifato:me:, isotomai, issot'omai, isutobai, ju:sutamai, ifit'oban, ifit'o:ban] が含まれているといった状態である。詳細は、『日本言語地図資料』をみななければならない。

IS(Y)ATUU 以下 MAAMINAI SATUU までは、相互になんらかの関連がありそうで、先島にはすくないが、全域にみられる。本土の ZATOO(MUSI), ZATTONOBOO との関連を考えてみたことはすでに述べたが、思いつきにすぎない。ISYANCYURUMYAA (2095.60—[ifantʃurumja:]) の後部分は、地域は離れているがこの地図で紺を与えた CURUME~CUKUME(千葉)と関係があるろうか。

MAAMINAIIBUU 1231.88 の後半は、229 図で桃を与えた類と関係があるろうか。『沖縄語辞典』には、かまきりをあらわすことばとして ʔiibuuziraa, ʔisjatuu, sjoorooʔNma, ʔusjoorooʔunma, ziramii を挙げているが、ʔiibuuziraa もその類であろう。

SAARU(U) 以下 TUBIZYAARUU までは、沖縄と宮古にみられるもので、この虫を猿に見立てたものと思われる。SAARU(U)~の内容は、[sa:ru:gwa:, sa:-

ru:ge:, sa:ruka, sa:ru:ga:kʃi, sa:rukamu:ta] であった。

YAMATOOIZA(宮古)は「大和(日本本土)はどこ」、YAAMAIDA(多良間)は「八重山はどこ」の意と注記にあった。この虫の首をのぼしてあたりをみまわす動作からの命名である。IS(Y)ATUU などの IS(Y)A との関係は不明である。MAAGAYAA 2141.71 は「どこだろう」の意である。

MANTUNTEN 以下の空符号は、みなはっきりしないものである。しかし相互になにか関連のありそうなものである。KUNKYA 2076.98 には<クンキヤは癩病。この虫にかまれてそれになるという俗信からか。あるいは前足の形からか>との注があった。別種かもしれない。

以下の紺を与えたものは、各地に孤立的にあらわれるもので、下に示すもの以外はすべて1地点にしかあらわれない孤立語形であった。BII(YA)(MUSI) 3776.97, 3777.32. CURUME~CUKUME 6700.48, 6710.70. DOKUMUSI 5686.67, 6506.03. KAMINARIDON 6267.68, 8239.31. SIRAMEHAGI 6267.16, 6277.62. TABAKOMUSI 4733.35, 4742.95, 4743.61, 4744.32, 4761.07.

ANBUTAKA (2765.71) には<アンプのような形でタカのように虫をとる>との注記があった。BAKABAKA(MUSI) (5686.31) には<人を嘲るときバカバカと言いながら人差指を屈伸する。鎌の運動をそれに見立てた>との注記があった。CURUME~CUKUME については 2095.60 の ISYANCYURUMYAA (230 図・空) と関連があるかもしれないこと、すでに述べた。KAMINARIDON は TAIKOHATAKI, TAIKONBUCI (230 図・紺) と関係があるかと思って似た符号を与えたが、地域が違う。KASYEZIME(SINKI-CIME, TOPPAMEME, および、すでに示した GENBEEME) は八丈島にあらわれ、これらの~ME は、接尾語である。NABEKASI (2793.00) には<鍋こわし?>という注があった。OMANBAKU (5687.86) はすでに示した BAKABAKA(MUSI) と通ずるものであろう。SIRAMEHAGI については、虱が観音にたとえられることから、229 図で紺を与えた KWA-NNONMUSI との関係を考えてみたが、地域があまりにもはなれている。ハイトリムシの類とも地域が違う。TABAKOMUSI については 4743.61 で<たばこでいぶすと出てくる>という語原解釈があった。TOP-

PAMEME(7659.31)には<いなごもそういう>との注記があった。語尾の ME が接尾語と考えられることは、すでに述べた。あとは、ほとんどわからないものばかりである。無回答は、全国で 34 地点であった。

最後に、2 枚の地図を通じて概略的に歴史的な流れを考えてみよう。

全国域に広くみられるのは 229 図のカマキリ(草)の類と、イボ～(桃)の類とである。このうちカマキリ類が国の両端にすくなく、どちらかといえば中央で多用されるのに対して、逆に、イボ～類は、領域が分散し、西日本にはすくないがそれでも隠岐、見島、口永良部などの周辺にみられ、沖縄にも痕跡が認められ、東北地方には多く認められることから、前者が新しく、後者が古いものと考えられることができる。

カマキリ類は、標準語形(に近いもの)として現在活力をもって全国にひろがったのに対して、イボ～類は、最も古いものの残存として位置づけることができよう。

イボ類の勢力の及ばなかった(かもしれない)と思われる地域は、北海道・青森北部、三宅以南の伊豆諸島、九州北西部の離島、琉球列島(沖縄島を除く)であるが、この類が北海道・青森北部にすくないのは、虫がすくないため、あるいは日本語の勢力の浸透の歴史が浅いためではないか、などの理由で説明できよう。三宅島や九州の五島列島のことはよくわからないが、それ以外の地域については、八丈、壱岐、対馬、琉球列島の島々すべてについて、他にみられない特殊な表現が見出され、イボ～類が全国にひろがる以前は各種の表現が各地で行なわれていたのではないかと、いうことを思わせる。もっとも、(琉球ではイボ～類が中央にあるようだ。それを例外として)、これらの周辺地域では、中央語の拘束力が弱いいため、各地で独自の表現が新しく発生したのだとも言える。

次に、カマキリ類とイボ～類について領域が広く、しかも領域が分断されているものとしては、主として東日本にみられる 230 図のハエトリ(赤)類と、主として西日本にみられる 229 図のオガミ(茶)類とがある。

両者とも命名の理由についての意識があって、分断されたようにみえる地域で、それぞれ独自に発生したかとも思われるが、例えば近畿地方では、オガミ類はもと中央部にも存在していたと推定したほうがよさそうな分布状況である。ハエトリ類にしても、東北地方において、日本海岸のものと岩手のものとは、もと、連続していたのではあるまいか、と思われる。そこで、ここでは両類

とも過去においていっそう広い領域をもっていたのではないかと、考えて論を進めてみることにする。

オガミ類は、西日本において(九州西北部はよくわからないが)イボ～類にとりかこまれた地域内に見出されるので、イボ～類に次ぐ古い表現だったと思われる。関東のオガミ類も、イボ～類に包囲されているようにみえる。しかし、関東のものはすでに述べたように OGAMI(～)、OGAN～、OGAME(～)、OGAMA(～)など各種ある西日本のもののうち、OGAMI(～)に限られていることから、OGAMI(～)が盛んだったころの上方から輸入されたものではなからうかと考えることができる。もしそうなら、関東の OGAMI(～)類の中には、上方にみられない OGAMICCYO や OGAMIZYOROO や OZYOOGAMI がみられるが、これらは関東に OGAMI(～)が輸入された後、KAMAGICCYO、KAGAMICCYO などとの混交で生まれたものとなろう。結局、オガミ類は、イボ～類について上方で盛んだった表現らしい、ということになる。それに続く上方ことばとしては、北部では 230 図の MOTTOIMUSI、南部では 229 図の HOTOKEUMA などが候補にのぼるが、どうであろうか。

ハエトリ類については、よくわからない。東北地方では秋田・山形ではイボ～類より新しいもののようにみえる分布状況であるのに対し、青森・岩手ではそれがはつきりしないからである。しかし、関東でも、北陸でも、あるいは中国地方でも、イボ～類より内側にあって新しいもののようにみえることから、イボ～類より相対的に新しいものと位置づけることが許されよう。ではオガミ類との関係はどうか。関東、北陸、中国で両者は関連しているが、どちらかといえば、オガミ類より古く、それが領域をひろげる前に、主として日本海岸よりで使われていたもののようにみえる。関東のものは越後方向からイボ～類の領域を分断して侵入したものであろうか。それとも、この類がオガミ類発生以前に上方で使われており、それが輸入されたものであろうか。もし後者だとすれば、上方でのこの虫をあらわす表現の歴史はイボ～類>ハエトリ類>オガミ類>ホトケウマ・モットイムシということになって面白いのであるが、あまりにも複雑すぎるかもしれない。

イボ～類の最も古い表現は伊比保牟志利であり、これとハエトリとを比較すると、両表現はともに前後の部分にわかれ、後部分は意味的に通ずるところがあり、前部

分は形は違いが(iΦiΦo と ΦaΦe は似ているか)ともに後部分の動作の対象と考えられ、両者の間になにか関連があるようにも思われるが、よくわからないといわざるをえない。

上方における序列に準じて考えれば、東京を中心としてもイボ〜類>ハエトリ類>オガミ類の順ということになる。ハエトリ類もオガミ類も、もし、上方からの輸入とすれば、かなり複雑な状況が考えられ、トカゲなどの不思議な表現の発生の一因を見出すことができそうな気がする(トカゲ類などについては224図、225図の解説参照)。このほか琉球列島における各種の表現の歴史、九州における各種のオガミ類の相互関係、四国におけるイボ〜類とヘンボ(230図・橙)との関係、中国におけるカマキリ類の中の問題、いったいにカマキリ類はどこでどのように発生したのかといった問題など、まだまだ論ずべき点が多い。しかし、ここでは以上述べた大きな流れを素描する程度でとどめておく。限られた地域における、そのかわり綿密な資料集めと分析とが、問題をひとつひとつ解いていくのであろう。

### 231. とんぼ(蜻蛉)

後期調査で加えた項目ゆえ、地点数がすくない。なお、〈併用処理〉の原則を適用したのは TONBO である。

この項目ではとんぼの総称を求めた。したがって総称とともに種名を挙げたものは、地図上に採用しなかった。例：6567.86、尾の黒いものを [medo]、尾の赤いものを [waka]。総称がないとする地点では次のようなものを示した。①1語形しかないものはそれをとりあげる。例：6649.55、総称はない [tombo] は小型のもの。②2語形以上のものは、一般的な語形を拾って地図上に示した。例：3781.21 [tombo] 中型、[goni] 小型。

地図を大観すると、琉球列島を除く本土部に空で示したトンボ類が広く分布し、西北九州に緑のヘンボ類、東北地方および南九州から琉球列島にかけて赤のアケズ類、鹿児島を中心として茶のボイ類、および紺で示したその他が分布する、ということになる。

まず、分布領域の広い空のトンボ類をやゝ詳しくみれば、次の通りである。第1音節の子音がDとなるものは、東北から関東・中部をへて、山陰地方にみられる。東日本に多い。第1音節の母音がAとなるものは、高知にもあることはあるが、これも東日本に多い。第1音節の末尾

が促音になるものは、長野と広島に各1地点である。おそらくそれぞれの地点で個別に発生したものであろう。第2音節の子音がPとなるものは、長野を中心とするTONPOが代表的で、ついでTONPUが多く、TOPPO、DONPO、DONPU、RANPUはそれぞれ1地点のみである。第2音節の母音がOOと長くなるものは、地点数は多くないが、新潟、兵庫、広島、香川、熊本というように散在している。第2音節の母音がAとなるものは、山形、茨城、新潟、能登、京都、山陰と、これも地点数は多くないが、各地にみられる。第2音節の母音がUとなるものは、北奥にみられるRIを従えるものが大部分であるが、鹿児島、宮崎にもある。

これらの諸語形のうちどれが古いか、分布から推定することは、いま困難である。ただし、イ)RIなどを従える語形は、そう古くないのではなかろうか。ロ)TONBOの中に4695.33の[tombo]、TONBOOの中に4686.02、5605.70の[tombo:]、DONBOの中に4638.43、4695.87、4695.33の[dombo]、5615.78の[dombo:]が含まれ、DONBOOは3地点とも[dombo:]である——以上すべて新潟——ことから、〜バウが考えられ、TONBO、DONBOとTONBA、DONBAとは関係があろう、などぐらひは、言えないこともない。もっとも、ロ)については、第2音節の母音がUとなるものが辺境にあり、これも〜バウに由来するものと言えるかどうか疑わしく、あまりはっきりしない。

緑で示した類については、北部にEN〜の類、中部にH(Y)EN〜の類、南部にS(Y)EN〜の類が分布していると言えよう。和名抄にみえる「恵无波」と関係があろう。第2音節の母音については、Oが熊本を中心として、Uがそれを取り巻き、Aがさらにその外周にあるように見えるが、どうであろうか。和名抄と通ずる語形がもっとも外周にあるわけである。『全国方言辞典』では『常陸方言』を引き常陸にエンバがあるとし、『古事類苑』所引の『東雅』には「東国の方言には今もエンバといい」とあるが、すくなくとも総称を求めたこの地図には見られない。空の類と緑の類とは〜NB〜を共有する故に何らかの関係があったのではないかと、とも思えるが、よくわからない。229図、230図かまきりには愛媛から高知にかけてHENBO、ENBOOZI、ENBOOZIRI、234図「くものす」、235図「くものい」とに、山口、愛媛、福岡、大分にENBA(RI)、HENBA(RI)が分布し、この図の緑の類との関係を思わせるが、深い意味については、

理解できない。なお、「かまきり」には岩手南部にみられる AKEZUMUSI などがある。さきほど引いた『東雅』に、「童部のヤンマなどいふものエンパの転ぜし也」とあるのは一考に値するが、地図にしなかった項目番号 285 の「やんま」の調査では、ヤンマとともにヤマが多いので、なんともいえない。

赤の類は、古語「あきづ」に関係のあるものと思われるが、第2音節母音は E がほとんどである。なお、第2音節子音を G としたものは、すべて [ɾ] である。KEZYOO (飜島) をここに含めたのは、奄美大島に見られる ĒĒ-DA, ĒNDA, EEZAN, HWĒĒZA, HWĒĒDA, HWĒZA とともに、A(K)~ が脱落したものと見たからである。栃木の KENZO などと関係があるかもしれない。この KENZO が赤なのかもしれない。奄美大島の Ē(~ĒĒ) は本土方言の E(~EE) にそのまま対応するものとは思えないが(『琉球方言の総合的研究』をみてもよくわからない)、分布上、赤の類とすることが誤りとは思えない。宮城、山形を中心とする AKEEPOPO 以下については(AKEEKOO のみは種子島)、たとえば AKETONBO などを見れば「あきづ」と無関係かとも思われるが、分布の上からは、当然 AKEZU などと関連がある。なお、原則によって地図には示さなかったが、8303.70, 8303.84 の両地点では [akezu(tombo)] という青い(所のある)特殊なとんぼがいるという。

茶で示したものについては、はたして一類になりうるものかどうか、よくわからないといわざるをえない。しかし BABU, BABUTA は BOI に接しているので、まったく無関係とも思えない。徳之島の BĪITO については分布領域もはなれているし、よくわからないが、B を共有するので、かりにここにおいた。BOI などと空の類、緑の類とは、領域を接し、BO を共有している点で通ずるところがあるが、其の意味は、不明である。

赤の類と茶の類との関係は分布の上から、前者のほうが古いものと考えていいであろう。

なお、「やんま」(項目番号 285—地図に作らない)の資料をみると、たとえば次のような関係が発見される。

	とんぼ	やんま
8324.83	BOIBOI	BABUCYA
8343.74	BABUTA	KATNABABU
8353.68	BOI	BABOTA

これらをみると、単に「とんぼ」の総称を調べただけでは

分布地図の真の意味はわからない、関連して各種のとんぼの種名を平行的にしらべておく必要があることがわかる。

紺の類については、星印で示したものが北関東に集中していること、北九州の YONBANSAN が、もしかすると緑の類と関係がある(ENBA と TONBO の混交?)かもしれないことを指摘するにとどめよう。

## 232. はえ(蠅)

後期調査項目なので地点数がすくない。「はえ」「はい」にあたる、あるいはそれに~BO, ~KO などが接尾する形式がほとんどを占め、紺で示したその他の語形は、極めてすくない。そこで「はえ」「はい」にあたる部分を、音声的にかなり詳しく示してみた。もっとも HAE(~)としたものの中には、[hae] と共に [haē, haɛ, haé, hæé] などが含まれ、HAI(~)としたものの中には、[hai] と共に [haĩ, hau] などが含まれているから、非常に厳密なものとはいいがたい。言うまでもないが、以上の説明からもわかるように、HAE と HAI の境界は、聴覚的に非常に接近している。また、「い」にあたる音と「え」にあたる音とを、それぞれの地点でどのように区別しているか、また、区別していないかについてはまったく考慮しないで作図してあることにも注意されたい。

以下、緑符号の類の分布を概観する。HAE(~)はどちらかというと東日本に多く、中国地方には点々と見られるが、四国では愛媛に1地点みられるのみであり、九州では福岡にしか見られない。HAI(~)は、全国的に見られるが、どちらかというと西日本に比重がかかるようである。

以下、HAĪ は北海道、青森、島根、HAYA は青森、HEI は岐阜、HEE(~)[he:] は南関東、中部(除新潟)、島根、九州、沖縄、HEE(~)[he:] は東北・茨城・新潟、兵庫、隠岐、九州、沖縄、HEE[hæ:] は宮城、HEE[hɜ:] は沖縄、HEE(~)[hæ:] は岩手・宮城・福島、神奈川・静岡・愛知、島根、岡山、熊本・宮崎、HYEE(~)[çe:] は福島・茨城・千葉、佐渡、長野、大分、鹿児島、HYEE(~)[çe:] は岩手、東京、佐渡、長崎・天草、HYEE[çæ:] は兵庫、長崎、HYEE(~)[çæ:] は八丈、佐渡、静岡、鳥取・広島、熊本、HE[he] は鹿児島、(~)HE(~)[he] は青森・岩手・秋田、新潟、岐阜、HE[hæ] は青森・秋田、HYE[çæ]

は秋田, HYAAI は東京, HYAA[ça:] は群馬, 八丈, 佐賀・長崎・熊本, 甌島, HAA は種子島にみられる。AI にあたる部分の音変種については, たとえば 28 図「あかい」などと比較できよう。

接尾する ~BO や ~KO などの分布を (HWEKKO, BEBO を含めて) 概観すれば次の通り。

~BO は福島, 千葉, 島根・山口(大島), 宮崎にもみられるが, 富山・石川・岐阜・長野にめだっている。~BOO は岐阜, 山口(大島)であり, ~BOBO は富山・石川のみ。~BU は岐阜, ~BA は石川である。~BO-NBO, ~BUNBU はともに島根である。~(NO)(K)KO は, 青森・岩手・秋田である。~ME は, 茨城, 八丈, 福井にみられるほか HAIME が和歌山に 1 地点みられるのは珍しい。~MUSI は岐阜と奈良である。

これらのうち, ~BO と ~BOBO については, 富山・石川における分布の姿から ~BO が古く, ~BOBO が新しいものと思われる。何ものかを接尾するうらには種類を区別しようとする意識のほかに, 「灰」などとの同音衝突をさけようとする意識が働いているかもしれない。5507.66 で HAIBOBO は<新>, 5633.96 で HENBO <大きいもの>, 5792.18 HYEEO <古いことば>, また, 5642.67 では, 地図には示さなかったが<アブの小さいものは hembo と言う>と注記があった。

橙で示したものは, 頭子音が両唇摩擦音であるものである。東北地方と九州, 沖縄にのみみられる。HWAE は岩手, HWEI[Φei] は大分・宮崎, HWEI[Φëi] は奄美大島, HWEE[Φe:] は, 秋田・山形, 大分・宮崎, 沖縄島, HWEE[Φe:] は岩手・宮城・秋田・山形, 宮崎, 沖縄島にみられる。HWEKKO[Φekko] は岩手, HWEN[ΦeN], HWEE[Φæ:] はともに宮城, HWEKKO[Φækko] は秋田, HWI[Φi] は山形, HWE[Φe] は宮崎, HWE[Φë] は奄美大島, HWE[Φe] は山形, 宮崎, HWE[Φæ] は秋田・山形, HWYAA[Φja:] は長崎, 宮崎にみられる。

赤で示したものは頭子音が両唇無声破裂音になるもので, 奄美大島北端, 沖縄島北部および, 先島にみられる。0228.96, 1241.49, 1242.00, 1242.22 では, 頭子音は有気音として表記されている。

茶で示したものは頭子音が両唇有声破裂音になるもので, 長野, 三重・滋賀・奈良・和歌山にみられる。緑の類の中に AOBÉ, KUSOBÉ があるが, このように

いったんなにかが接頭して後にとれたか, あるいは羽音などを連想しての民間語原による変化か, いずれかによるものであろう。5690.12 の BEBO は<大きいもの>との注記があった。7503.48, 7522.48 の BAI は<古い言い方>だという。以上, 頭子音について H~/HW~/P~/B~ の区別を示したが, この点についてはたとえば 113 図「はな」, 227 図「へび」音声の詳細図などと比較することができる。

紺で示したものは, 福井にみられる BUNBU のみが単用であり, 他はすべて他との併用である。中では, 岩手に集中して現われる ABU, ANBU が注目される。このうち, 2765.66, 3753.88, 3754.76, 3763.17 では, これが<古い言い方>であるといい, 3733.88, 3743.49, 3753.85 では<大型のもの>, 3764.92 では<小型のもの>, 3765.03 では<魚などにつくもの(ハエはごはんなどにつくもの)>, という注記があった。

そのほか, 紺の類に対する注記としては, 5566.51, BUNBU は<銀色のもの>, 6429.65, 7403.86 の BU-IBUI は<(銀蠅など)大型のもの>, 6642.85 の BUNBURAMUSI は<大きいもの>, 6422.77 の HAEBUNBU や 6457.18 の BUNBUN には<子どもに対することば>があった。

結局, 古語「はへ」の子孫が, 広く全国に現在も分布している, ということになる。

### 233. くも(蜘蛛)

この項目は, 埼玉・千葉・東京・神奈川・山梨・静岡, 鳥取・岡山・広島・山口の各都県で, 後期調査計画から調査を打ち切った。つまり 2400 地点全部での調査結果ではないことになる。

この項目の質問では, くもの総称を求めた。したがって, ある特別の種類にくものにのみ言いと注記のある語形は, 地図に載せなかった。ただし除いた語はあまり多くない。詳細については『日本言語地図資料』に記録されている。なお, 7239.24, 8300.87, 8351.07, 8393.69, 9303.88, 9313.55, 0275.97 の各地点で併用として示されている各語形は, それぞれ種類の別を示すという注記のあるものであるが, 各地点ともこれらを統括する総称が報告されていないので, これらを地図に載せた。

全国を大観すると, 諸語形はまず 2 つの大きな類に分けられよう。クモ, グモなど, 第 2 音節子音が M とな

るものと、クボ、コブなど、Bを持つものとである。

クモ、グモの類は、日本の中央部に連続した広大な分布領域を持ち、東北南部、北海道にも広い分布を持っている。これらのうち最も広い分布を示すものは KUMO である。HUMU は八重山に見られる。KUMOME は茨城に1地点ある。この末尾の ME は関東東部、八丈などに見られる小動物の名称の末尾によく付けられる「メ」であろう。メの付くものはこのほか、KUBOME が茨城に、KUBONAME, TENGOME が八丈に見られる。ただし、KUBONAME は KUBO と NAME に分割も考えられ、TENGOME は TEN で切ってみると、GOME がクモにあたる形とも考えうる（ただし多分「メ」が接尾語であることは、他の地図と比較することによって間違いない）。HATAORIGUMO (6622.69), ZYOROGUMO (7502.89) は、ある種類の「くも」の名称かとも思われるが、何の注記もないので採用した。KUMONZYOO は 6450.45 にある。

凡例で GUMO から GON までは語頭に有声音を持つものである。GUMO, GUMOO がそのおもしろいもので、長野南端・岐阜東南端・愛知、近畿南半、四国、九州東北半に分布する。GUN は八重山に、GOMO は 8343.97 に、GON は 7393.62 にそれぞれ見られる。G[ŋ]UMO と G[ŋ]OMO とは、和歌山、徳島に見られる。あるいは、第2音節子音の m に引かれて鼻音化したものかもしれないが、226 図の GUCINAWA にも似たようなことがあった。実際の音声は [ŋ] とでもいうべきものかもしれない。

クモ、グモなどに対立する、クボ、コブなど、第2音節子音が b となるものは、以下数種の類に分けられる。

まず、KUBO, KUBOO, など、第1・第2音節の母音がそれぞれ U—O となるクボの類である。北海道南部、東北地方のほとんど、関東北部、佐渡、北陸、中国東部にそれぞれ領域を持って分布するほか、山梨・静岡、八丈などにも数地点みられる。これらのうち、KUBO が大部分を占める。KUNBO は、青森に見られる。この N は、あるいは音韻論的には東北地方によく見られるいりわたりの鼻音に近いものかとも思われるが、いちおう音声に従ってこう表記した。KUWO は 5548.35 にある。b の破裂音が弱まって生じたものだろうか。KUPO は 3737.95 と 3767.87 に、HUBO は 4628.61 にそれぞれみられる。GUBO は岩手、福島南部、兵庫西部にみられる。語頭の有声音という観点からは、さ

きの GUMO 等の分布と合わせて考えるべきであろう。UBO は 6428.91, KUBOME は茨城に、KUBONAME, YAMAKUBU は八丈に見られる。GUBONDANI は八重山にある。

KOBU, KOObU, KOHU など、母音が O—U の順となるコブの類は対馬・佐賀・福岡南部・熊本・宮崎より南の九州に分布する。その大部分は KOBU である。KONBU は 7256.64, 7383.98 に、KONBUU は 7268.87 にそれぞれみられる。KOHU は 8311.63, 8320.59, 8320.98 にある。KOPU は 7350.96, KOT は鹿児島を中心に広く分布する。これは KOBU の変種であると断定はできないものであるが、分布上からここに入れた。助詞をつけてみればさらに確実なことがいえようが、このままでも間違いはない。KOB0 は 6408.72 にあるが、この類に入れるべきかどうか地理的にも、語の形からも、決めがたい。あるいは、クボの類とするべきかもしれないが、第一音節に注目して一応ここに置いた。KOB1 (8373.08) は KOT からの誤れる回帰か。YAMAKOBU は 7239.24, 7269.51, 8341.12 に、YAMAKOObU は 7390.75, YAMAKOT は 8331.98, 8341.12 にそれぞれ見られる。TENKOBU は 7279.65, 7371.54, 7380.26 に、ZYENKOBU は 8239.31 にある。TEN と ZYEN とは関連を持つかどうか不明だが、音の類似から併置しておいた。YORUKOBU は 7361.82, YOROKOBU は 7239.24 に見られる。YOROKOBU には「晩に出てくる」という注が見られた。YORUKOBU とともに「夜」と関係があらう。ZYOROKOBU は 6277.62, ZYORAKUT は 7284.16, ZYORORO は 7432.44, ZYORO は 7423.77 に、それぞれ見られる。「女郎蜘蛛」の女郎に縁のある語形と考えられるのでここにひとまとめにしておいた。このうち ZYORAKUT は、クボなどの類と考えるべきかもしれないが、一応、「女郎」の類としてここに置いた。YOMEZYOKOBU と YADDEKOBU は 8300.87 に見られる。YANEKOBU, YANEKOHU は、それぞれ 8311.41 と 8311.59 にある。この YANE は「くものす」「くものい」とを表わすヤネ (234 図, 235 図参照) と関連があると考えられる。NUSUDOKOBU は 7381.47 にある。「盗人」と縁があらうか。

凡例で、KUBU 以下 GOOHU までは、岩手、長野の3地点に見られる KUBU を除いて、すべて琉球に分布する。これらのうちの多くは、音韻法則的には本土

のクボ、コブの両方に対応させうるが、地理的分布としては、九州に見られるコブの類につながっているものと見られる。コブに対応すると考えるのが自然であろう。KUBU, KUUBU, KUUBUU は、沖縄本島には見られず、むしろ、周辺の島々、奄美、先島などに多く見られる。HUBU は 0228.96, 1213.76, 1231.88, 1271.05 に見られる。KUBU の語頭の K が H に変化したものであろう。『日本言語地図第3集』113 図「はな」によると、これら4地点では、PANA, PANAA となっていることが注目される。日本語の歴史の中で一般に言われる、P>H の変化がこれらの地点では起こらず、P が保存され、したがって K が H に変化する余地があったと考えられようか。あるいは、逆に K>H がおこったので P>H の変化にブレーキがかかったとも考えうる。KUU は先島に見られる、KUBU の B が、摩擦音化し、さらに弱まって、KUU となったものであろう。KUBUGASI から HUHHUGAASII までは、KU-BU, HUH 等、クモにあたると考えられる部分のほかに、GASI, GAASI 等、「糸」を意味すると考えられる部分を含む形を含んでいる(カシについては『日本言語地図第4集』157 図「はたい」と参照)。このような構成を持った語形は、KUBAGASI, HIBUGASI など他にもいくつか見られるが、これらの語は、その構成の上からは、むしろ、次図 234 図「くものい」とあるいは 235 図「くものす」に現われる諸語形と類似する。これらガシを含む語形などをめぐる琉球の分布は、235 図「くものい」と、あるいは、236 図「くものす」の分布と各地点対照させて考えることによって、さまざまな興味ある結果をもたらすものと思われる。今後の課題とする。KUUB-AA から KOOBAA までは、沖縄本島及びその周辺に見られる。末尾の母音が、これまでのものと異なるが、何かが接尾したクブの変種と考えここに置いた。KOOBAA はつぎの KOOBUI, KOOGUU, GOOHU などとともに、~OO~ の部分がこれまでのものと異なる。対応関係からは、KAU あるいは、KAO などにあたるものと考えられ、KUUBAA などの KUU とは別物と考えられるが、一応ここに並べておいた。

KIMO から HIBUGASI までは、第1音節母音が、I または E となる点に注目したものである。このうち、KEEBU まではみな北陸に見られ、HIBU 以下は琉球にある。これらは、2つの地域に分かれて分布するが、古いものの残存であるか、あるいは、それぞれの地域で

独自に生じたものであるかはよくわからない。227 図「へび—音声詳細図」と比較すると、たとえば沖永良部では、蛇 HIBU, 蜘蛛 HIBUGASI となっていて、相互に何らかの関係を思わせる。

HABU 1242.00, HAABUI 1242.22 も、第1音節母音がこれまでのクブの類のものと異なる。どのような歴史的变化をとげてこのような形になったか不明である。さきに、KOOBAA 等が語頭に KAU または KAO などという音を持っていたかもしれないとしたことに、何か関係があろう。

MANKUBU から AMAN まで、みな奄美に見られる。クモにあたると思われる部分を含むものもあるが、ここでは MAN という部分に注目してここに集めた。235 図の「くものい」との図にも、MAN あるいは -MAN (このハイフンについては 234・235 図の解説参照)が見られる。さらに、この図の MAN を含むものの分布と、235 図の MAN, -MAN の分布とが重なっていないことも注目すべき点である。さきのカシを含む類の場合同様、両図を詳しく対照させて考えてみる必要があるであろう。

KUUBUNUUMA, PYAAUMAGAMA (ともに、宮古)は、ともに「蜘蛛」を「馬」に見たてたものであろうか。

AMIHAYA 1232.29, KASIHAYANUMUSI 2140.49 はともに HAYA——「張る」という動詞の変化と考えられる——を持つものである。「網張り」,「糸張り虫」という意味であろうか。

SIHUKU 2095.60 以下の諸語形は、意味のよくわからないものが多い。以下その位置を示す。KOTTARA 2086.03, YABANBA 5471.59, TENGOME (八丈), SEMITORI 5666.22, KINKOO 7275.24, YAMAN-KEN 8351.07, YANKAI (種子)。

はじめにも述べたように、この地図の分布は、大きく分けて、第2音節子音が m となるいわば m 類と、b を持ついわば b 類とにまず分けられる。m 類の分布はほぼ連続しているのに対して、b 類はいくつかの地域に分かれている点が注目される。この分布から、b 類が古くは広く連続して広がっていたところへ、あとから新しく m 類が広がってこれを分断したと考えられる。語頭に有声音を持つグモの類は m 類の分布の中にあり、b 類の分布とは接していない。b 類よりは新しいものであろう。b 類はさらに、本州のクボ類と九州のコブ類と、琉球のク

ブ類とに分けられる。コブとクブとは、対応関係からも、また、分布の連続からも同類と考えられ、歴史的に連続していると考えられる。クボとコブについては、クボのほうが国の中央に近く分布しており、コブよりは新しい広がりであったと考えられる。古くは、既存のクボ領域の西端兵庫と九州との間のどこかでクボとコブとが対峙していたときがあったと考えられる。柳田国男は、『西はどっち』(昭和25年甲文社刊)の中で、この問題を取りあげている。その「蜘蛛及び蜘蛛の巣」の三(202ページ)で柳田は「私の想像では、クボは兎に角に所謂裏日本の方面に於て、久しく九州のコブと手を繋いで居たらしいのである……」と言っている。この図の分布からも上の「想像」は当を得ていたと言いきべきであろう。なお、7354.23はクモの領域内であるが、「ヨロコブのように複合形ではコブを使う」という注記が見られ、コブがクモに追われて退き、複合形としてからも残存していることを示していると思われる。

もし琉球のクブをクボの変種と考え、東北などのクボとともにもっとも古いものと考えれば、九州では音位転倒によってコブが生まれ、国の中央ではB>Mの変化によってクモが生まれたということになる。前段の推定といずれを採るべきかは、はっきりしない。もはや好みの問題といえるかもしれない。

## 234. くものす(蜘蛛の巣)

## 235. くものいと(蜘蛛の糸)

地図の左下に示した質問文にもあるとおり、234図「くものす」では、巣全体を指す方言形を求め、235図「くものいと」では、くもの尻から出る「糸」そのものについて質問した。両項目とも、後期調査計画で調査を打ち切ったため地点数が少ない。

さて、「くものす」「くものいと」の両図に現われる語形やその分布には共通の点が多いので、符号の色や形については、できるだけ両図に共通なものを使った。以下の凡例の説明、分布の解釈などは両図合わせて述べることにする。

まず、見出し語形の示しかたについて説明する。両項目とも、得られた方言形には、「くものす」「くものいと」の「くもの」にあたる語形を含むものが大部分であった。そのうち琉球を除く本土では、「くも」にあたる部分の語

形の分布が、233図「くも」に現われる語形の分布とほぼ一致する。したがって、この図の見出し語形としては、「くものす」「くものいと」にあたる方言形から、「くも」にあたる部分と格助詞「の」にあたる部分とを除いて示した。「す」「いと」にあたる語形の前にハイフンを付けたものは、これら「くもの」にあたる部分を除いたことを示している。一方、KUMOSU, KUBOITOのように、格助詞「の」にあたる部分を介さず、「くも」にあたる語形と「す」「いと」にあたる語形とを直接結合しているものが多少見られた。これらについては、全語形を示してある。凡例の中で、SU, ITO, EBA などのように、ハイフンの付いていないものは、「くもの」にあたる部分の見られなかった方言形である。なお琉球に分布する諸語形については、233図「くも」の説明にも触れたように、「くもの」にあたる部分と「す」「いと」にあたる部分との関係が複雑である。したがって、「くものす」「くものいと」両図と、233図「くも」とを各地点対照し、「くもの」にあたる部分の抽出できるものについては、本土の場合と同じく、これを除き、「す」「いと」にあたる部分にハイフンを付けて示した。たとえば、1233.61の地点では、「くも」を[çibugaʃi]と言い、「くものいと」を[çibugaʃinuʔ-itʃu:]と言う。この場合の[çibugaʃinuʔ-itʃu:]は「くもの」にあたるものとして除き、「くものいと」の図では、-ICYUUとして示した。これに対して、1221.47では、「くものす」のことを[Φu:Φu:ga:ʃinuʃi:]と言い、[Φu:Φu:ga:ʃi:]があたかも「くも」にあたるかのごとく見えるが、「くも」の図ではこの地点は、[Φu:Φugaʃi:](見出しではHUU-HUGASIとした)であって、母音の長短にわずかの相違があり、「くものす」の図の[Φu:Φu:ga:ʃi:]をそのまま「くも」にあたる部分と見なすことには問題がある。そこで、このような場合は、[Φu:Φu:ga:ʃinuʃi:]の全体をHUUHUUGAASINUSIIとして、見出しに示した。そのほか、KUBUGASI, KUUBAASII, などのように、格助詞「の」にあたる部分の見られないものについては、「くも」の図からKUBU, KUUBAAが「くも」にあたると思われる場合でも、語形全体を見出しとして示したのは、本土の場合と同様である。

両図に現われる語形をいくつかの語類に分けると、個々の見出し語形には、両図の間で多少の出入りがあるにしても、全体的には同じ類のものに分けられる。各類のうち、両図の間で分布領域が大いに異なるものは、紺で示したスの類と、空で示したイトの類とである。その他



の類は、分布の密度の大きい異なるものはあるが、分布の領域には両図の間で共通点の見られるものが多い。

スの類は、当然のことながら、「くものす」の図に広く分布する。ほぼ全国と言ってもよく、後述する他類の語の分布領域内にも標準語としての分布と思われるものが点々と見られる。このスの類は「くものいと」の図にも散在するが、とりたてて言うほどの分布は認められない。「くものす」の図のス類のうち、-SUKAKI から SIGAKI まではいずれも青森・秋田に見られるもので、KAKI, GAKI の部分は、後述する桃で示した -EGAKI, IGAKI などに含まれるそれと、分布が連続している。当然関連があろう。

空で示したイトの類は、本土では「くものいと」の図に広く分布する。とくに、近畿地方より東の地域に広い領域を持つ。西の地域にはきわだった分布は見られない。空で示したもののうち、「くものす」の図の KOBUGASI から KASIPALĪ までと、「くものいと」の図の -ITU から KASIIPALĪ までとは、それぞれ琉球に分布する語形である。これらのうち、「くものいと」の -ITU から -IICYU までの語形は、それぞれ、イトにあたると考えられる部分を含んでいるが、そのほかの語形には直接イトにあたる形は含まれてない。ほとんどが、KASI, GASI など、カシにあたる部分を含むものである。『日本言語地図第4集』153図以下一連の「いと」に関する地図にも現われるように、このカシは「いと」に関連のある形と考えられるので、これらカシを含む語形には、空を与えた。琉球におけるイト類の分布は、本土部の分布と異なり、「くものす」「くものいと」の両方の図に現われることが特徴的である。「くものいと」の図には無回答が多く、「くものす」の図にはイト類以外の語も見られるので、各地点対照してみなければ厳密なことは言えないが、これらの地域では、「くものす」「くものいと」の区別に関して、あまり関心が高くないようである。この傾向は、後述するように、中国・四国・九州において、両図の分布に似ている点の多いことと共通していると考えられる。

両図の凡例で赤・茶・橙・桃・緑で示した-I から EGARA あるいは IGARAMI までの諸語形は、相互に関連のある部分が多く含まれている。

まず、赤で示したものは、イ、エ、あるいは、それに類似した形をもつ一類である。古語に現われる「い」の残存と考えてよからう。円形のぬき符号で示したイは、両

図ともに四国東南端と、中国西部とに分かれて分布するほか、「くものす」の図には、鳥取西部に1地点はなれて分布する。「くものいと」の方が分布域が広い。エは同じく円形のべた符号で示した。中部・近畿周辺部・中国・四国・九州に分布が見られる。

茶で示したものは、エバ、エバリを中心とするものとへバ、へバリを中心とするものとの2類である。凡例で、-EBA から -IBARA, あるいは -YOBARE までのエバ、エバリの類は、語の構造の上からは、赤で示した、エに、バあるいはバリなどの接尾要素が付いたものと考えられる。中国西部・四国西北半・九州東北部の一領域と、三重、静岡、千葉とに分布し、赤のイ、エなどのそばに分布する。1音節のエ、イでは、着着きが悪く、これらの接尾要素が付いたものだろうか。エ(餌)がエサとなるなどの現象と、並行的なものではなからうか。-HENBA から HENBARI まで、-HEBA から -HABA までの各語形は、語頭にHを持つことが特徴的で、その他の部分は上のエバ、エバリの類と類似する。分布も、上のエバ、エバリの類の間に点々とし、三重・和歌山にも分布する。

橙で示したものは、ネバ、ネバリ、ヤネなど、NE という形態素を含む類である。これらのうち、ネバ、ネバリは、上のエバ、エバリあるいは、へバ、へバリと、形の上で類似する。分布も、エバとネバとは混じり合い、両類が、密接な関係にあることを示している。ネバに関しては、『日本言語地図第4集』159図「まわた」に現われるネバとの関連を見なければならぬ。「まわた」の図のネバの領域は、中国西部から九州東半にかけてかなり広く、「くものす」「くものいと」両図のネバの分布は、「まわた」の図のネバの領域内に含まれる。ネバが、元来「まわた」を意味したか、あるいは「くものす」「くものいと」を意味したものか決めがたいが、いずれも、虫の体から吐き出される糸状のものという点では共通するものであり、歴史的に大いに関連があると言えよう。そのほか「まわた」の図に多く見られるネバシが「くものす」「くものいと」には見られないこと、「まわた」の図にエバという語形の見られることなど、「まわた」と「くものす」「くものいと」との間の関係についてはさらに検討すべき点が少ない。ネ、ヤガネ、ヤネ、は九州西南半を主な領域とし、ほかに、新潟に2地点、ヤネ、ヤニが見られる。ヤガネ、エガネのガは、格助詞と考えてよからう。「ヤガネ」すなわち「ヤ(の)ネ」とすれば、さらに

「ヤネ」へとつながる。この場合の「ヤ」は何であろうか。まず、新潟を中心に広く分布する桃で示したヤズ、ヤジなどのヤとの関連が考えられる。さらにヤズ、ヤジのヤとエとの関係が問題となる。しかし、ここでは、関係の可能性を指摘するにとどめ、これ以上深入りしないでおかねばならない。また、新潟の2地点を以って、この橙、とくに、ヤネを周囲論的な残存の分布と決めるのは躊躇される。九州西南部の分布を見ると、ヤネの外側を赤のエがとりまくように分布し、ヤネより、エのほうが古いように考えられ、ヤネはこの地方独自の発生とも考えられるからである。またヤニ、ヤネは「脂(やに)」との関連なども考えられよう。

桃で示したものは、隠岐の数地点を除いて、みな東日本に分布する。同じ桃で示しはしたが、これらはさらにいくつかの類に区別される。

ひとつは大きい円形符号で示した -EGAKI, EGAKI から -IKAKE までである。東北地方に分布するほか、隠岐にも見られるものである。これらの語の構成は赤で示したイ、エと、カキとのふたつの部分から成ると考えられよう。カキは、「描き」であろうか。秋田の男鹿半島に見られるイカケのカケは「掛け」かもしれない。

次は、円形符号を与えた -EZU から KUMONEZU までの一類である。東日本、とくに、上のエガキよりはやや南の地域に分布する。これらも、赤で示した、イ、エと関連があらうと考えた。ズ部分は「図」にあたるものであろうか。あるいは、「巢」そのものかもしれない。次の -YAZI などのジの部分との関係は、ズが群馬などにもある点からはっきりしない。

最後に -YAZI 以下の類をひとまとめにして考える。山形・新潟・長野北部、関東、八丈に分布がみられるものである。YA, A の前部分は、赤で示したイ、エと必ずしも近い形ではないが、エズ、ヤズと並置すれば両者の間に語形の上で関連のあることは否定できない。ただし、符号の形は、イ、エに与えた円形符号とは異なる三角形のものを与えた。ハズ、ハズレも、アズとの関連からここに置いた。エバに対するヘバの関係に似ている。

緑で示したものも、さらにいくつかの類に下位区分される。

-IGI から -GIGI, あるいは、KUMOHEGI までは、赤で示した、イ、エに、GI, GE の付いたと考えられるもの、およびそれに類似するものである。近畿西部から中国中部にかけて、とくに「くものい」との図で、

広い領域を持ち、九州中部にも数地点見られる。-IGI, -EGI と -EZI, -EZU などさらには -YAZI などとはいかなる関係にあるのだろうか。

-IGA から EGA までは九州中部に数地点見られる。上のイギ、イゲ類のギ、ゲに対して、ガが付加されているのが特徴である。

-IGARE 以下の緑で示したものは、ひとまとめにできよう。ほとんどは九州中・南部に見られるが、青森、茨城、岐阜にも数地点見られる。「くものい」との図の -IGARAMI は秋田の男鹿半島にある。

紺で示したのものには、いろいろなものが含まれる。MEE あるいは、-MAYU から MAN までは、「まゆ」に関連した語形と考えられる。九州西・南部から奄美にかけて点在する。-KEN, KEN は九州に見られる。「くものい」との図では、-KIN 以下、「きぬ」と関連があると考えられるものも一応合わせてここにのべた。その他の紺で示したものの分布は個別的なもので特に言及すべきものはない。無回答は、「くものい」との方に多いが、これは、「くものい」が「くものす」より先に質問されているので、質問の順序によるものではないと考えられる。

両図の作図に際しては、イト、ス、その他の類は別として、古語として文献にも見られるイ、エの類を中心に、エバ、ヘバ、ネバ、エガキ、エズ、ヤズ、イギ、エギ等々の各類を、イ、エとの関連でとらえ、赤・茶・橙・桃・緑などを投入し、符号を与えた。エバ、ネバ、エガキなどの下位区分間の相互関係は別として、全体的にみると、関東以北と、中国以西とに、これら、イ、エを含む語の分布が見られ、それに対して、紺で示したスの類あるいは、空のイト類がそれを分断するように分布していることから、イ、エを含む語は、古い表現の残存と見ることができよう。

また、「す」「いと」両者の区別という点に関しては、国の中央部で、ス、イト両語形で両者を区別する傾向が強く、国の両端では両図共通の語形が分布し、両者を区別しない傾向が強い。さらに、琉球でも、イト類のところで述べたように「いと」の方に無回答が多く見られ、「くものい」という概念が確立していない状態を想像させるにせよ、両者をはっきり区別していないという点で、九州などに通ずるものと考えられる。このように見ると、古くは、「す」「いと」の両者を語形の上で区別することなく、イ、エ、あるいは、それから派生した語で表わ

していたと考えられ、両者を区別し、ス、イトという別な語で区別するようになったのは、新しい現象であるということが言えよう。

以上、凡例分布の説明、全体的解釈をごくおおまかに記した。上で述べたイ、エをめぐる各類相互間の関係、琉球における「くも」の図との関係、さらに、「まわた」の図のネバ等との関係などについて、より詳しい解釈が今後に期待される。

### 236. かたつむり(蝸牛)―その 1

### 237. かたつむり(蝸牛)―その 2

### 238. かたつむり(蝸牛)―その 3

この項目は「なめくじ」と関連するところがあるので、239 図「なめくじ」も併せて参照されたい。

「かたつむり」にあたる方言形は非常に多く、1 枚の地図に示すことはむずかしい。そこで、今回は、3 枚の図に分けて載せた。

音声変種なども大幅にまとめた。重要と思われるものは解説の途中でそのつどふれるが、詳細にわたっては『日本言語地図資料』を参照しなければならない。

次に、各地点からの回答を、3 枚の地図にわけるときの基本原則について述べる。237 図「かたつむり―その 2」、238 図「かたつむり―その 3」では、単に各方言形の分布を示しただけであるが、236 図「かたつむり―その 1」では、紺で示したナメクジ類および孤立的な各語形の分布のほかに、237 図、238 図の両図に現われる語形をいくつかの語類にまとめ、それぞれに符号を与えて示し、全体を概観しやすいように工夫してみた。236 図の凡例の最後に、赤、茶、橙、空、緑、草、桃の 7 色を以って示したものがそれである。これら 7 つの符号は、237、238 両図の各色の符号全体にそれぞれ対応している。

このうち、赤、茶、橙、空の 4 色で示したものは、237 図に載せたものである。各色の内容をまず概観すると、赤の符号を与えた類は、マイマイ、および、マイマイと関連する語形を含むものを一類としたものである。マイマイツプロ、メンメンタバクロ、メメカタツムリは語中にツプロ、タバクロ、カタツムリなどを含むが、ここではマイマイの類として赤を与えた。茶の類は、ツムリ、ツブリ、ツブ、ツプロ、ツグラメ等を中心

とする一連のものである。橙の類は、タマクラを中心とするものである。空で示した類は、カタツムリ、カサツブリ、カタカタ、カサツパチ等、カタ、カサという形態素を含むものをまとめたものである。

緑、草、桃の 3 色で示したものは 238 図に載せたものである。緑の類は、デンデンムシを中心とし、デンデン、デデ、デンデ等の形態素を含む一連のものである。草の類は、デエロ、ダイロを中心とする一連のものである。桃の符号で示した類は、ツノダセ、ツノダシ、ツノデロ等、ツノという語形を含むもの、および、それに類するものを一類としてまとめたものである。

各図の凡例の末尾に「注」として示したように、凡例に示された見出しの右肩に付けた符号は、同じ回答が、重複して他の図にも載せられていることを示す。たとえば、237 図の DENDENMAAME は、マアメの部分に注目することによって、マイマイ類との関連が考えられ、赤の符号を与えてある。この回答は、一方、デンデンの部分に注目すると、緑(238 図)のデンデン類との関連が考えられる。そこで、238 図にも緑の符号を与えて載せることにした。このような場合、236 図に概略を示すときには、デンデン類とマイマイ類との併用という形で示してある。たとえば、鳥取の 6415.23 では、実際には、MAAME と DENDENMAAME とが併用されている。これを、237 図では MAAME と DENDENMAAME の併用で示し、238 図では、DENDENMAAME を再び示し、236 図では赤のマイマイ類の符号と緑のデンデン類の符号の併用で示してある。

なお、これらの地図作成にあたっては、KATACUMURI、DENDENMUSI の両方を標準語形と認め〈併用処理〉をした。関東・中部地方に、DENDENMUSI が多く、新潟・長野北部、近畿には KATACUMURI が多かった。

この項目を扱うにあたっては、柳田国男『蝸牛考』を考慮に入れざるを得ない。作図にあたっては、各類のまとめかたの基準として、さまざまなものが考えられる。いろいろと試みてはみたが、結局のところ『蝸牛考』の類(系)のたてかたと大差ない結果となった。つまり、この 236 図、237 図、238 図の「かたつむり」の図と、『蝸牛考』のなかで述べられている「蝸牛」の方言形の扱いとは、大綱においては差異はない。また、後に述べるような、本図から考えられる「かたつむり」をあらわす諸表現の歴史的な変遷の考察も、根本においては『蝸牛考』と矛盾しな

いと言いうことができよう。しかし、個々の方言形やその分布については、両者の間にはかなりの相違が見られる。創元社版の『蝸牛考』(昭和18年、改定版)をもとに、方言形の索引を作り、この図のものと比較したが、むしろ、語形とその分布とが、本図のものときれいに一致するものの方が少ないとさえ言うことができよう。語形はこの図にも現われるが、その分布を見ると相違の見られるものもかなりあった。また、どちらか一方にしか語形の現われないものも少なくなかった。このことは、両者の広い意味での調査方法の違いなどからくるものと思われる。本図の資料はある短い期間内に、面接調査で、すべて直接回答を聞いたのに対して、『蝸牛考』の資料には直接現地でも耳にしたもの、地方出身の人から聞いたものなどのほか、各地方の古い方言集などから採集したものも少なくない。本図と比べて、時間的な開きは大きいと言いうことができよう。また、地理的な密度も本図に比して高くない。いわば「点」の資料であるのに対して、本図「面」的な資料と言いうことができよう。本図と、『蝸牛考』の間の資料の違いについては、ここでは詳しくはふれない。両者の詳細なつき合わせは、興味ある課題として今後の研究に待ちたい。

237 図から説明したい。

赤の類はいくつかの地域に分かれて分布する。関東南半から中部地方南部海岸よりの地域、北陸、中国地方中部、九州北部の各地域にそれぞれ独立した広い領域を持つほか、青森・岩手・秋田・山形・福島、佐渡、福井、紀伊半島南部、愛媛西南端、山口、奄美、沖縄本島にも点在する。中心的な語形は **MAIMAI**, **MEEMEE** である。この類については、連母音アイの各地での変化との関連を考慮すべきであろう。この図では変種を比較的詳しく示したので、他図と対比してみる道がひらけている。**MAAMAA** は島根に2地点、**MAAME** は鳥取に8地点見られる。**DENDENMAAME** は鳥取に1地点見られる。**DENDENMAMUSI** は同じく鳥取に1地点見られる。**DAIDAIMAMUSI** も鳥取に2地点見られる。これら3つは前部分デンデン、ダイダイに注目して238図のデンデン類のところにも載せてある。**MEENMEEN** は山梨に見られる。**MEMENDAIRO** は長野に1地点見られる。ダイロの部分に注目して238図にも載せた。**MEEMENGEERO**, **MANMANGEERO** はともに長野に見られる。ゲエロの部分にデエロとの関連を考えて、238図のデエロ類のところにも

示した。**MENME** は島根に1地点見られる。**MAI-MAIKO** は山口・広島、愛知に計6地点見られる。**MEEMENKO** は愛知に1地点見られる。**MAMAN-KO** は三宅に1地点、**MEEMEESA(MA)** は愛知に2地点見られる。うち6640.34では **MEEMEESAMA** であった。**MAIMAIIDON**, **MEEMEEDON** はともに静岡にある。**MEMEDO** は愛媛西南部に見られる。末尾のドは、近くに見られる **KATA(N)DO**, **KAT(T)-AIDO** のドと関連があらうか。**MAMADE** は三重南端に1地点見られる。デの部分には、近くに分布する緑の **DEBO**, **SIMADEBO** 等のデとの関連を考えて、238図の緑の類にも重複して示したがどうであらう。**MAI-MAIZU** から **GANNAMOZU** までの語形の間には、相互に関連が認められよう。福島と石川に各1地点見られるほか、埼玉・東京西部、伊豆大島に見られる。福島の **DAIRODAIROMEMEZU** は、前部に注目して238図の草の類でも示した。**MAIMAIMUSI** は静岡に、**MEMEMUSI** は広島に見られる。**MAIMAI SI** は山口に、**ZINOMAIMAI** は福岡にそれぞれ見られる。**HANAMEEMEE** は鳥取に見られる。**MEEMEE-GARA** は愛知に見られる。**MEEMEEKUZI** から **MEEMEEKUZIRO** までは、236図に紺で示したナメクジの類との関連が考えられ、そちらの図にも重複して載せた。茨城、神奈川・山梨、岐阜、広島に計9地点見られる。**MEMEZIKKO** は神奈川に1地点見られる。この後部分ジッコは、すぐ西隣の **MEEMEEKOOZI** の後部分コオジと関連があらうか。**MAIMAICYOO**, **ME(E)MECYO**, **ME(E)MENZYUO** は末尾部分に共通点が見られるが、分布は必ずしも近くない。**MAIMAICYOO** は山口、**ME(E)MECYO** のうち **ME-MECYO** は山形に5地点、**MEEMECYO** は千葉に1地点見られる。**ME(E)MENZYUO** のうち **MEEME-NZYUO** は千葉に3地点、**MEMENZYUO** は山梨に3地点見られる。**MEMENZYURU**, **MAMENZYUURU**, **MAMENZYORO**, **MAMENZIRO** は、三宅に各1地点ずつ見られる。**MAIMAIKANZYUUROO** は広島に1地点見られる。**MAIMAIGONZYUO(O)** は福岡に2地点見られる。うち **MAIMAIGONZYOO** は7332.27である。**MAIMAIGONGO** は石川に、**MAI-MAIKONZYUO** は7320.95にある。**MEEMEEKONZYUO(O)** は愛知に2地点見られ、うち6569.12では **MEEMEEKONZYOO** であった。**MANZYUGOO-**

NA は愛知に見られる。ゴオナの部分は、238 図の緑類のなかで、三重、瀬戸内海沿岸に多く見られるデンデンゴ(オ)ナなどの後部分と、関連が考えられる。また、236 図に紺で示した GOONA が対馬に見られる。地域は離れているが、語形の上では関係があろう。このゴオナは『枕草子』などに出てくる「がうな」と関連があろう。MEEMEEKANKA, MEEMENKANKA は、ともに千葉に見られる。YAMAMEE は岡山に 1 地点ある。ヤマ・メエと切るべきか、ヤ・マメエと切るべきかよくわからないところがある。

MINMI から IESYOIBIBII までは、マイマイにあたると考えた部分が、語形としてマイマイ、メエメエなどからはかなりのへだたりのあるものであるが、周囲の分布の状況から、赤の類として示した。MINMI は島根に 1 地点、MIIMINGE は千葉に 1 地点それぞれ見られる。MIMIZUKU は福岡に 1 地点見られる。この地点には後で述べるようにさらに CUMUZI という語も見られる。単なる誤解ではないと考えたいが、不思議な表現をする地点ではある。MOIMOI は島根に 6 地点、長崎島原に 2 地点見られる。MYOOMYOO は佐渡に 2 地点見られる。ANAMOI は沖縄本島に 1 地点見られる。赤の類かどうかについては問題があるかもしれないが、上のものとの語形の類似から一応ここに置いた。MOOYA は島根に 1 地点見られる。MORI は兵庫北端に、MOOMORIKO, MOROMORO はともに島根に各 2 地点見られる。これらモリ、モロという形が、マイマイとどう係わるかよくわからないが、周囲の状況から一応ここに置いた。BAIBAIMOMOSI は鳥取に 1 地点見られる。前部分のバイバイはマイマイと似ていると言えよう。また、「貝」の字音に由来するものとも思われるが、ある種の「貝」の意味で各地にバイという語もあるようで(『全国方言辞典』によれば、島根県で「貝のふた」のことをバイというようである)、このバイバイについては、それらとの関係も考慮すべきであろう。後部分のモモシは近くに見られる DENDENMAMUSI のムムシと音の類似が認められる。関連があろう。BYAA-BYAA も鳥取に 1 地点見られる。上のバイバイと関連のある語と思われる。OSSYABYOBYOO は福井北部に、BOOBOO は岐阜に、SENNENBUUBUU は広島に、それぞれ 1 地点見られる。いずれも、バイバイとの関連を考えるべきであろう。IESYOIBIBII は静岡に 1 地点見られる。

MAIMAICUMURI 以下の赤の類は、マイマイ(あるいはその音変種)と、茶以下の各色で示した類とが結合したと考えられるものを中心としてならべた。MAIMAICUMURI から MENMENKAI BUCU までは、ツムリ、ツブリ、ツプロ、ツブ等の語形を含むものである。茶で示したものととの関係は、符号の形によってできるだけ示した。MAIMAI CUMURI は神奈川にある。MAI MAI CUBURI は茨城、東京、静岡、岐阜、広島に計 5 地点見られる。このうち、静岡と岐阜のものは MAI MAI CUBURE であった。MAI MAI CUBURO は関東周辺、九州北部に計 15 地点見られる。このうち、5669.19 では MAIMAICUBORO であり、7303.29 では MAIMAICYUBURO であった。ME(E)ME(E)CUBURO は関東、大分・熊本に計 10 地点見られる。このうち 5792.02 では MEEMECUBURO, 5792.62 では MEMECUBURO, 5772.00 では MEE-MEECUBORO であり、その他はすべて MEEMEE-CUBURO であった。MENME(N)CUBURO は、5699.42 の MENMECUBURO と、6608.22, 6608.69 の MENMENCUBURO とをまとめたものである。MEEMEECYABURO は千葉に 2 地点見られる。MAIMAICUMUGI は広島に 1 地点見られる。MAIMAICUBU は茨城・千葉、広島に計 3 地点見られる。ME(E)MECUBU は、5698.19, 5781.65, 5791.68, 6702.21 の MEMECUBU, 6639.43, 6730.33 の MEE-MECUBU をまとめたものである。MAIMAICUNBO は静岡西部に 1 地点見られる。MEEMEECUBO は神奈川西南端に 1 地点見られる。ME(E)ME(E)-TACUBO は 6710.02 の MEMETACUBO と、6700.98, 6711.12 の MEEMEETACUBO とをまとめたものである。利根川河口に見られる草で示した KAICUBO と関連があろう。MAIMAICAIBUCU, MENMENKAICUBO, MENMENKAIBUCU は、ともに北陸に見られる。付近に分布する茶の KAICUBU, KAICUBURI 等と関連があろう。

MAIBORO から NEEBOROCUBURO までの一連のものは、相互に関連のある一類とみなすことができよう。いずれも関東東部に集中して分布する。このうち、NAIBORO 以下の 4 語形は、語頭に m ではなく n が現われる点が特徴的である。これらは、マイボロ、メエボロとの関連から見るとマイマイ類的と言えるが、一方、238 図に緑で示したデエボロと対比すると、頭子

音の調音点が同じという点、さらに、分布領域がとなりあっているという点で、デエボロとの関連が考えられる。したがってこれら4語形は238図の緑の類の中にも重複して示してある。

MEEMEECUGURA から CINMYAA までは、すべて九州、琉球に分布するもので、茶で示したもののうち、CUGURAME 以下の各語形と関連のある部分を含む一類である。このうち、ME(E)ME(E)CUGURO は、7344.99 の MEEMEECUGURO と 7323.02 の MEMECUGURO とをまとめたものである。CUGURA(N)MEE のうち CUGURANMEE となるものは、7269.51 の1地点であった。

MENMENTABAKURO と HEBITAKAMEE は宮城と青森に1地点ずつ見られる。橙で示したタバクロなどと関連があらう。

MEMEKATACUMURI から KATAKATABAI までは、空で示した類と関連を持つと考えられる一連のものを集めた。MEMEKATACUMURI は佐渡に見られる。KA(A)SANMAI のうち、KAASANMAI となるのは 6645.62, 6646.74 の2地点であった。KA(A)SANME(E)としたもののうち、6646.23 の KAASANMEE, 6616.79, 6655.87, 6665.01 の KAASANME 以外は、みな KASANMEE であった。カアサンメはメの部分の短く、マイ、メエの類かどうか問題のあるところだが、周囲の分布から赤の類に属するものと考え、ここに置いた。KASAMEME は秋田に、KASANBEE, KASAPPACIMAIMAI は伊豆半島に各1地点見られる。これらはいずれも、周辺に分布するカサツブリ、カサンド(オ)、カサツパチなどのカサと関連があるものと考えられる。KATAKATAMAI, KATAKATABAI は、ともに紀伊半島南部に見られる。周囲のカタカタなどと関連するものと考えられる。カタクタバイのバイは、マイと音が類似すること、分布が近いことから、この類と認めた。

MAIMAICUNODASE 以下の赤で示したものは、238図に桃で示したものと関連を持つ類である。いずれも、238図の桃のところに再び示してある。MAIMAI-CUNODASE は福岡に見られるが、238図には近くに桃の類の分布は見られない。KAIKAICUNODASE, MINMINCUNODASE, NYUUNYUUCUNODASE は、ともに富山に見られる。238図には周囲に桃の符号が見られ、これらとの関連が考えられる。これらの

語形のうち、カイカイについては、マイマイとの関連を考えて赤の符号を与えた。ニュウニュウは、「角を出す」ことの擬態語とも考えられるが、同時に、音の上でマイマイとの類似点が考えられよう。MEEMEECUNO, CUNOMEEMEE は、千葉、富山、岡山に計3地点見られる。

茶で示したものには、いくつかの類が含まれる。相互に関連が深く、一線を画しては類別し難いものが多い。しいて類別すれば、ツムリ、ツブリ、ツブ等を含む類、ツグリ、ツグラ、ツグロ等を含む類、凡例の CUDDAME 以下琉球を中心に分布する一連のもの、ということになろうか。九州から琉球にかけて広い領域を持ち、北陸・岐阜、近畿北縁にわたる地域にも、やや多く分布する。その他の地域には、わずかにしか見られない。CU(N)MURI は、6500.22, 6507.79 の CUMURI, 6508.06 の CUNMURI をまとめたものである。CUNMORI は岐阜に1地点見られる。CU(N)BURI は岐阜と愛媛に計3地点見られる。うち、CUBURI は 6529.15 の1地点であった。CUNBORI は岐阜、奈良に2地点見られる。CUNBURIMUSI は京都北部に1地点見られる。愛知に見られる CUNGURI は、興味のある語形である。これは、分布からは北側のツブリに近いと考えられるが、語形の上からは九州に見られる一連のものの中の、ツングリを含むものと関連がある。これらが歴史的にどう関連するかは、九州のツグラを含む類と橙のタマクラ類との関係を考える上で、重要な問題となってくる。今後の課題であらう。CUMUZI は福岡にある。CUBU は北海道、岩手、福井に計4地点見られる。DENDENCUBO は愛知に1地点見られる。デンデンに注目して238図の緑類にも重複して示した。CUNODASICUBU は北海道に1地点見られる。ツノダシに注目して238図の桃類のところにも示した。BEKOCUBU は北海道に1地点見られる。238図に桃で示したベコの類と関連があらう。そちらにも示してある。TACUBO は千葉銚子、YAMACUBO は岐阜北部にそれぞれ見られる。KAICUMURI は、富山、福井に計3地点、KAICUMORI は、富山に1地点、KAICUBURI は、富山・石川・岐阜に計3地点、それぞれ見られる。KEEKEECUNBURI は兵庫・京都県境に1地点に見られる。分布からはやや疑問もあるが、KAIKAICUNODASE と同様、赤で示してもよかった。KAICUBURO は大分に見られる。付近に見られる赤

で示したツプロを含む類と関連があろう。KAICUBU は石川に1地点見られる。

CUBURAME 以下 CURUGAMEZYUO までは、語形が相互に類似するという点のほか、すべて九州に分布するという点にも特徴が認められよう。また、ほとんどが末尾にメを持つという点でも共通点が認められる。これら末尾のメは赤のマイマイのマイとの関連が考えられる。事実、九州北部には、メエメエツプロ、ズグラメエ等、マイマイ類と結合したものがいくつか見られた。こう考えると、九州はもとより、琉球先島に至るまで、赤のマイマイ(に關係する表現)が連続して分布することになる。しかし、メをマイとは無縁の別のものとする立場も否定できない。したがって、この図では短いメを持つものは一応マイとは別とし、赤の類からはずして示した。ただし、赤類との類縁關係を否定したわけではないことをことわっておく。CUBURAME は壱岐、宮崎・鹿児島に計6地点認められる。円形の符号を与えたツブリ、ツプロ等と語形の上でつながりが認められる。鹿児島に1地点見られる CUBOKURAME も、第2音節に b を持つことから、ツブリ、ツプロ等との関連を否定することはできない。また語中にクラを持つ点では、下に述べるツグラ等との関連が考えられる。CUGURAME から CUNGURIMA まではツグラ、ツングリ等第2音節子音に g が現われる点に特徴がある。ほとんどがツグラ、ツングラである。これらについて、『蝸牛考』では、橙で示したタマクラ等のクラと関連ありとしている。この図では、符号の色と形によって、両者の關係を示しておいた。『全国方言辞典』によれば九州などで、「蝸牛のから」を「つー」と言うようである。ツグラのツと關係があろうか。CUNOGARAME は、グラという要素を含んではないが、分布から一応ここに置いた。このうちのツノは、ツングラ、ツングリのツンと關係があろうか。さらに、ツグラのツと「つの」との關係はないだろうか。DEKURAME は鹿児島西部に2地点ある。クラの部分に注目してここに置いた。また、デの部分に注目して238図にも重複して載せた。CURUMAME, CURUMAMEZYUO は、マメの部分に赤のマイマイの類と考えることも可能であろうが、ツブラメの音位転倒から生じたとも考えて、一応ここに置いた。CURUGAMEZYUO も、語形の類似から一応ここに置いた。CUDDAME から CUNAME までは、岩手に1地点見られる CUNAME 以外、みな九州に

点在する。ナメクジのナメとの関連も考えられるが、ここではツングラメなどから音変化して生じた形と考えた。ツンナメ等は、つぎの CUNNAMI 以下琉球に分布する諸語形の多くと、語形の上で相通ずる。とくに、沖縄本島を中心にツンナミ、チンナミ等対応するものが多い。凡例では、CUNNAMI 以下、NNAMI までと言えようか。CUDAMI 以下は、『蝸牛考』にツダミを古語の「しただみ」と關係ありとしている。ここではツンナミ等と分布が近いこと、語形の上でも、多少離れてはいるが、無縁とするほどの違いではないことなどから、ツンナミ等と似た形の符号を与えここに置いた。

橙で示した類は、タマクラ、タバクラ等である。語中にクラを持つという点で、九州に見られる茶で示したツグラメ等と、つながりが認められる。ほとんど、岩手・宮城を中心に分布し、ほかは山梨に1地点見られるだけである。TA(N)MAKURA のうちの多くは TAMAKURA で、TANMAKURA となるものは、4712.16, 4713.45, 4736.63 であり、4745.27 では TANMAKURAMUSI であった。TA(N)BAKURA のうち、4704.96, 4732.18 の2地点では TANBAKURA であった。KAMAKURA, CUBAKURA は、クラを持つこと、分布が近いこと、語形全体がタマクラに似ていることなどを合わせ考えて、ここに置いた。CUBAKURA は、茶で示した九州のツボクラメ等と語形の類似が見られる。何らかの類縁關係が考えられようか。さらに、ツバクラからタバクラへの変化ということも、可能性として否定できない問題である。HEBITAMAKURI は、クラではなくクリを語中に持ち、分布も岩手にだけ見られるが、宮城に見られる HEBITAMAKURA との關係を考えると、この類とした。HEBITAMA は、クラを持たないが、上の HEBITAMAKURI との關係を考えるとここに置いた。HEBINOMAKURA は、タマクラ等と比べると、タを持たないが、語形の類似からここに置いた。宮城に2地点見られるものは、この類と考えるのに問題はないが、山梨の1地点はどうであろうか。「蛇の枕」という民間語原解釈によって、山梨で偶然生じたということも考えられなくはない。宮城などのものと歴史的に關係があるとしたら、これら橙のものは、かなり古いもの、少なくとも、空のカタツムリ類よりは古いものということになろう(なお、244図「つくし」に山梨ではないが、長野に HEBINOMAKURA が現われる。『全国方言辞典』に

は、埼玉県北葛飾郡・群馬県山田郡で「蛇苺」を「へびのまくら」と言うことある。また、これら橙の類と、茶で示した九州のツグラメなどとの関係を考えるとき、この山梨のへびノマクラは、その現われる地点が秘境といわれる奈良田であることから、重要なかぎとなる語形かもしれない。さらに検討を要しよう。

空で示した類は、カタツムリ、カサツムリ、カタカタ、カサツパチ等のように、カタ、カサを語中に含むもの、あるいは、それに関連のあるものである。ただし、カ(ア)サンマイのように、マイマイ類の語形と結びついたものは赤の類に含めてある。

次に、空で示したものを考察しよう。これらのうち、KATACUMURI から KAGAACUNMURI までは、ひとつのまとまりと考えられよう。ともに、ツムリ、ツブリ、ツプロ、ツブ等、茶で示した一連のものを含む点で共通すると言っている。琉球を除くほぼ全国に分布している。東北北部、福島・新潟・関東東北半にかけての地域、近畿・中国・四国北半・九州北半にかけての地域には分布が希薄である。このうち、KATACUMURI が最も多い。KATACUMORI は北陸、大分に多少多く見られるほか、まとまった分布は見られない。KATACUMURA は佐渡に1地点見られる。KATTAICU(N)MURI は奈良、高知に計7地点見られる。つぎに述べるカタカタ等との関連が考えられる。KATATACUMURI は宮城に1地点見られる。前部分のカタタは和歌山、四国に見られる KATATA(N)と共通するが、分布はやや離れすぎている。KATACU(N)BURI は東北、北陸、四国にやや多いが、その他の地域にも点在する。このうち、KATACUNBURI となるものは、4663.49, 4663.92, 5565.55, 6508.74 の4地点であった。KATACUBORI は能登半島先端に1地点見られる。KATASUBURI は山形西部に1地点見られる。KATACUBURO は大分に1地点見られる。KATTAICUBURI は高知に1地点見られる。KATTAICU(N)MURI との関係はもちろんであるが、付近の KAT(T)AIDO などと関連がある。福島に1地点見られる KATACUMUSI は、カタツムシかカタツムシか迷うところであるが、一応ここに置いておいた。KATACUMU は青森、岐阜に計2地点見られる。ツムの部分はツムリのリが脱落したとも考えられるが、ツブ、ツボなどとの関連を考える方がよからう。KASACUMURI, KASACUBU-

RI, KASACUBU は、ともに秋田・山形・新潟北部に集中的に分布し、北海道にも見られる。KASACUMURI は山梨にも1地点見られる。これらのカサとカタツムリ等のカタとの関係はどうであろうか。『蝸牛考』では、カサは「笠」と解しているが、カサとカタとの関係については、あまり積極的な発言はない。また、空の類の最後に置いた、静岡を中心に分布する KASANDO(O), KASAPPACI のカサ、あるいは、赤で示したカ(ア)サンマイ等のカサと、これら東北地方のカサとの歴史的関係はどうであろうか。山梨に1地点見られる KASACUMURI は、東北のものとはつながっていたと言えようか。カサの類の発展の後、238図に見られるように、デエロ、ダイロ等が広がり、カサ類を南北に分断したと考えられようか。KANACUMURI, KANACUBURI は、山形・秋田にそれぞれ分布する。カナとカタ・カサとの関係は不明だが、語形や分布の類似から一応ここに置いた。KAGAACUNMURI は京都西北部に1地点見られる。他との関連は不明であるが語形の類似からここに置いた。

KATAKATA 以下 KATAROMUSI までは、相互に関係のある一類と見ることができよう。いずれも、紀伊半島南半、四国西南部にだけ分布するものである。KATATA(N)のうち、KATATAN となるのは、7430.15, 7430.75, 7431.13 の3地点であった。これらは、カタという要素が、ツムリ、ツブリ等と結びついていない点、同時に、カタ単独では見られない点などが注目される。この点では、静岡に分布する KASANDO(O), KASAPPACI などとも共通し、相互関係について考慮すべき点がある。カタとカサとの類似以外に KATATO, KATA(N)DO, KAT(T)AIDO, と KASANDO(O)とは、ともにド(あるいはト)を持つ点でも共通性がある。これらカタカタ類とカサツパチ、カサンドとの関係、さらには、東北のカサツブリ類、さらにカタツムリ類などを合わせ考えて総合的な考察を加える必要がある。

つぎに、238図を説明しよう。

緑を与えたデンデンの類の分布は、かなり明瞭な特徴をもっている。とくに、DENDENMUSI は、近畿地方を中心に、中国東半・四国北半の瀬戸内海沿岸地域・九州北西部にかけて広く分布している。とりわけ、近畿周辺では分布の密度も非常に高いことが注目される。他方、北陸・中部地方以東の地域、紀伊半島南端、四国南



半, 山陰, 中国西半, 九州南半では希薄であり, 琉球には全く見られない点も注目に値する。DENDENMUSIMUSI は, 特に分布が見られず, 各地に計 11 地点点するのみである。ZENZENMUSI は中国地方と大分に計 9 地点見られる。RENRENMUSI は広島に 1 地点, TENTENMUSI は鹿児島に 1 地点, DENDENMUHIT は長崎五島に 1 地点, DENDENMOSI は富山, 島根に計 2 地点, DENDENBUSI は山形に 1 地点それぞれ見られる。DENDENMAMUSI, DENDENMAAME はともに鳥取に見られる。後部分に注目して, 237 図の赤類にも載せてあることはすでに述べた。DENDEMUSI は岩手・宮城, 和歌山, 徳島, 大分に計 7 地点見られる。地図では, 岩手南部の 3795.86 の地点が DENDENMUSI となっているが, これは DENDEMUSI の誤りである。訂正する。DENDEKOMUSI は青森西部に 1 地点見られる。ZENMUSI は福岡に 1 地点見られる。NOODEN は神奈川に 1 地点見られる。DENDEN は近畿, 岡山, 四国に計 11 地点見られる。DENDE は和歌山に 1 地点見られる。付近の DENDEMUSI とつながりがある。DENDENKO から ZEZENGO まではみな瀬戸内海沿岸地域に見られる。DENDENGORA は愛媛に, DENDENGORO は三重に各 1 地点見られる。このふたつは, 後のデンデンゴオナなどの後部分と関連があるろうか。DENDENGARABO, DENDENGARAMO(N), DENDENKARAMUSI はみな能登半島で, 計 5 地点見られる。語中のガラ, カラは「殻」と関係があるろうか。DENDENGOKA は香川に 1 地点見られる。すぐ南の DENDENGONA と後部分に類似が見られる。DENDENCUBO は愛知に 1 地点見られる。ツボの部分に注目して 237 図にも重複して示してある。DENDENGAI は奈良に 1 地点見られる。DENDENBO は千葉に, DEDENBO は島根に, DENDENBU, DENDENMU は三重に各 1 地点ずつ見られる。これら四つの語形は後部分に類似点が認められるが, 分布の上では, つながりが薄い。DENDENGO(O)NA から DEGOMA までは三重と瀬戸内海地方とに見られるもので, 後部分に共通性が認められよう。237 図の赤類のうち MANZYUGOONA の後部分との関連が認められる。

これまでの DENDENMUSI から DENGOMA までは, いずれも, デンあるいはデンデンという形態素

を中に含む語を集めたが, DEDEGONA 以下 DAI-SANBO までは, これに対して, デ(エ), あるいは, デデという形態素をもとにして造られているものをならべた。『蝸牛考』の中で重要な位置を占めるデエデエ(ムシ)という語形は, この図には 1 地点も現われなかった。このデ(エ), デデという特徴を持つものは, 近畿周辺・中国・四国に多少多く, 岩手・秋田, 群馬・新潟・北陸, 鹿児島にも数地点見られる。なお, DAIKOZIRU という見出しの右肩に付けた符号は, 桃の CUNGOC-UNGONAMEKUZI とともに, 236 図のナメクジの類との関係を考え, この回答が 236 図にも重複して示されていることを示す。

DENDERAMUSI, DENDERAGUCI, DENDERAKO は, 石川・福井, 大分に計 4 地点見られる。神奈川の DENBERAKO は, この DENDERAKO と形の上では類似するが, 分布は離れている。ただし, 関連があるろう。BERADON は大分に見られ, DENDERAKO との関係が考えられる。DENBEROKO は茨城に 1 地点見られ, 神奈川の DENBERAKO と語形の上で類似点が認められる。DENBORO は千葉東端に見られ, 上の DENBEROKO と語形の上で類似点が見られる。これら DENDERAMUSI から DENBORO までの語中に含まれているデラ, ベラ, ペロ, ボロという要素は, 形の上で相互に関連が見られる。また, DENBORO は, つぎの DE(E)BORO 以下のいくつかの語形と, ボロの部分で共通点を持つ。さらに, 上のデラは, 草で示したデエロ等とも類似点が認められる。ただし, デンペロコ, デンボロと, デ(エ)ボロ, ネエボロ等との関係は認められるとしても, これらとデエロ等との関係についてはいまのところ何とも言えない。さらに検討が必要であらう。DE(E)BORO から NAIBOROCUBURI までは, いずれも関東中部に見られる。このうち, NEEBORO 以下の 4 語形は, 赤のマイボロ, メエボロ等との関係を考え 237 図の赤類のところにも示してある。237 図と 238 図を比較すると, NAIBORO の西に DAIBORO, 東に MAIBORO の領域が接し, NAIBORO が, ちょうど三者の中間に存在していることがわかる(さらに, 西に進むと DAIRONBO, DAIRO が続き, DAIRONBO が, 遠く MAIBORO と関係があるのではないか, ということをおぼせる)。なお, デエ, ネエの部分に [e] が現われることはなかった。

草で示した類は、デエロ、ダイロなど、およびそれらと関連のあるものを、ひとつの類としたものである。福島・新潟・関東北部・長野を中心とした大きな領域を持ち、三重、大分、対馬、佐賀、鹿児島にも数地点見られる。緑のデンデンムシとの関係は、『蝸牛考』に言うほど画然とは分かれていないにしても、やはり北陸から中部地方にかけての帯状の地域では、両類の分布がとぎれていて、と見ることができよう。DEERO(O), DAIRO(O)がこの類の中心的語形であり、もっとも広い領域を持つ。三重、対馬にも飛地を持つ DEERO(O) のエエの部分には、広いエはあまり多くなく、4675.45, 4688.45, 4694.95, 4698.21, 4780.64, 4791.12, 5685.37, 5712.88, 5722.37, 5723.60, 5732.17, 6277.62, 6287.71 の計 13 地点だけに見られた。

ほかの見出しのデエロ、あるいはデロ部分の第1音節母音が広いエとなっているものを拾っておくと、山形・福島・新潟県境付近に6地点見られる DEERODE-(E)RO(このうち、4782.04の1地点のみ DEERODE-RO [de:rodero]) は、すべて前後両部分とも広いエであった。4761.93の DEERODEEROMUSI は両方とも広いエであった。

DEERYOO は対馬に2地点見られる。『蝸牛考』では対馬に「ダイリョウ」があるとされているが、この図ではデエリョオであった。DEEROMUSI から MEME-NDAIRO までは、いずれも、関東などの広い領域内に見られる。DEERODE(E)RO 以下 IENDEREBORO までもみな上の領域内に見られる。DEERAKUDON は大分に1地点、DEKURAME は鹿児島に2地点見られる。このふたつは、分布も孤立的であり、草の類に入れるべきかどうかは問題であるが、ここに置いた。また、DEKURAME は、237図の茶類のツグラメなどとの関係も強いと考えられよう。CINNYAN-DEERA, CINMYANDERA は、奄美徳之島に見られる。前部分は237図の茶類に示したもののうち、琉球に見られる一連のものと関連があろう。福島、長野に見られる GEERUGO, MEEMENGEERO, MANMANGEERO は、「かえる」にあたると考えられる形を含むものであるが、デエロとの関係が考えられ、ここに置いた。

『蝸牛考』では、デエロを「出ろ」という命令形から生じたものとし、ダイロをそれからの「誤った回帰」として説明している。分布を見ると、たしかに、ダイロは新潟を

中心に比較的まとまった分布を見せ、デエロはやや外側に分布すると見ることができる。また、福島・新潟などに広いエを持つデエロが分布することからも、ダイロはデエロから生じたと考えることの妥当性はある。しかし、ダイロの分布する地域のうち、中越地方から福島にかけては、エの広狭の別のある地域である。『蝸牛考』に言うように、命令形の「出ろ」にあたる形がもととすれば、その場合のエは狭いエであったと考えるのがふつうであろう。それに対して、ダイロと回帰するためには、広いエを持ったデエロでなくてはならない理屈である。デロ(出ろ) > デエロ > ダイロ という変化を言うためには、この音韻論上の矛盾をうまく説明しなければなるまい。音韻論的な規則だけから言えば、むしろ、ダイロ > デエロ という変化の方が合理的である。しかし、そのダイロはどうして生じたかとなると、いまのところわからないと言うほかはない。

桃で示した類は、ツノダセ、ツノデ(エ)ロ、ツンケ(エ)等、「かたつむり」の姿を写したと思われるツノという要素を含むもの、および、それに類するものを一類としてまとめたものである。東北部、関東中部にまとまった分布領域を持つほか、北海道、福島、千葉、北陸、三重、岡山・広島、福岡、鹿児島にも点々で見られる。CUNO(KO)DASI のうち、2764.28, 2785.31, 2785.74 は CUNOKODASI であった。福岡の MAI-MAICUNODASE は、マイマイ類との関連を考え、237図の赤類のところに示した。同じく、富山の KAI-KAICUNODASE, MINMINCUNODASE, NY-UUNYUUCUNODASI も、237図の赤類の中に示し、カイカイ、ミンミン、ニュウニュウの部分にマイマイ類との関連を考えた。青森・岩手県境に見られる CUNODASIKAI, CUNODASIKEE はともに、後部分に「貝」にあたると考えられる形を持つ。あとのツンケ(エ)などとの関連が考えられる。北海道の CUNOD-ASICUBU も、上の「貝」と関連があろう。ツブに注目して、237図にも示した。群馬の CUNODASIGAE-RO の後部分は、群馬・長野県境付近の CUNONGA-ERU, CUNONGEERU, あるいは、草の GEERUGO 等とともに、後部分に「かえる」にあたると考えられる語形を含むが、草のゲエルゴのところでも述べたように、デエロとの関係も考慮する必要がある。群馬の CUNOGARADAISI, 鹿児島の CUNOGARAME は語形の上では共通する点があるが、分布は速く離れて

いる。能登のデンデンガラモン等とも形の上ではつながりがあるが、分布は離れている。鹿児島のは、茶のツブラメ等との関連を考え、237 図にも示した。CUNOGARADAISI のダイシはツノ(角)との関連で「出し」とのつながりが考えられるが、緑で示したものにいくつか見られたダイシとの関連も考えられる。3725.12 の CUNODEESI, 3727.81 の MOKKODEESI, 3726.25 の MOKKODEE のエエの部分は、表記の上からは広いエに属するものである。上のダイシと同じ事情にある語かもしれない。あるいは、「角大師」などに引かれて生まれた語ということも考えられよう。CUNODEERO から CUNONDAIRO までは、岩手の CUNODEERO 1 地点、鹿児島の CUNODERE 2 地点を除いて、みな、関東に見られるものである。つぎの CUNONGA-ERU, CUNONGEERO も含めて、いずれも、草のデエロとの関係が考えられるものである。

関東の分布だけを見ると、草のデエロ、ダイロの方が領域が広く、これら桃のものを取り囲むように分布している。桃のツノデエロなどが、新しく草の領域の中から生まれたと考えるのがふつうであろう。しかし、岩手、鹿児島のもの分布は、これだけでは説明できない。単に独自に発生したと片付けてしまっているものかどうかはわからない。

CUNKE(E), CUNKEEMANKEE, CUNKE-(E)MAGOSIRO, CUNKEMAGOSO はいずれも青森・秋田に見られる。エエの部分はほとんどが広いエであり、3721.71, 3741.16 の 2 地点のみで狭いエであった。いずれも、ツノカイ(角貝)にあたるものと考えられる。CUNOKO は青森に 1 地点見られる。上に述べたようにすぐ南に見られる CUNOKODASI と関連があると考えてよからう。CUNGOCUNGOMAMEKUZI は福岡に 1 地点見られる。ナメクジとの関連を考えて 236 図にも示した。この場合、ツングは、「角」ではなく、「殻」を表わすツウのほうに関連があるのかもしれない。CUNODANKO は秋田北部に、CUNOKUZI-RO は青森に、CUNOMUSI は三重、鹿児島に計 2 地点それぞれ見られる。MEEMEECUNO, CUNO-MEEMEE は、千葉、石川、岡山に計 3 地点見られる。マイマイ類との関連を考えて 237 図にも示してある。CUNOBEKO 以下は、「牛」を表わすベコと関連のあると考えられるものである。蝸牛の「角」を「牛の角」と見たてて与えた名であろう。したがって、桃のツノ

類のうちに加え、ここに置いた。北海道・東北北部・茨城に見られる。北海道の BEKOCUBU は、ツブの部分に注目して 237 図にも示してある。岩手の CUNO-BOKKO のボッコはベコの類ではないかもしれないが、形の類似からここに置いた。なお、ベコについては、本集、206 図から 209 図までの「牛」に関する一連の図を参照されたい。

ここで、たちもどって、236 図を説明しよう。

この図は、はじめにも述べたように、ふたつの性格をそなえている。紺で示した各語形の分布と、赤以下の 7 色で示した、237・238 両図の中の各類の分布の両方が示されている。

237 図、238 図の各類ほどは相互の関係を持たない、比較的孤立的なものをこの図に示し、紺の符号を与えた。このうち、NAMEKUZI から IKUZI までは、239 図「なめくじ」とも関係する、ナメクジ、ナメクジラ、ナメクジリ等の類、あるいは、それらと関係の認められるものをまとめたものである。239 図「なめくじ」に現われる語形と同形のものは符号の形を共通にした。分布は、道南、東北北半、福島から関東にかけて、佐渡、伊豆諸島、北陸・長野南部・岐阜、隠岐・山陰西部、四国南半、九州にややまとまって分布する。とくに、東北地方と九州との分布があつた。これらのうち、MEEME-EKUZI などは、地図凡例の注(1)で示したように、マイマイ類との関係を考え、237 図の赤類のところにも示した。CUNGOCUNGOMAMEKUZI 等の注(2)としたものも同様で、238 図との関係を示すため、そちらの図にも示してある。

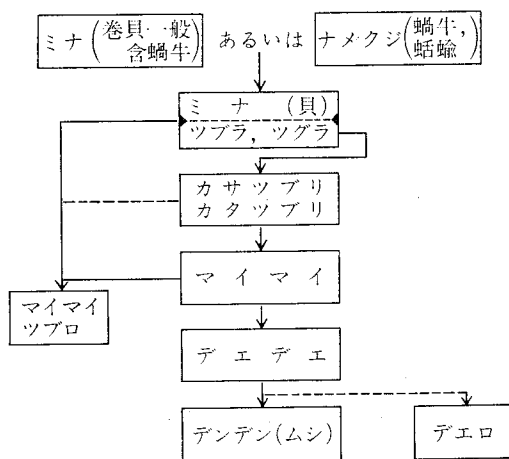
SAIKOOZI 以下は、全国的な規模の分布を示すものではない。この中にも、上のナメクジ類と同じく、239 図「なめくじ」とつながりを持つものが見られる。SAIKOOZI から SYAKUZIRO までは、いずれも岐阜に見られるもので、地点には多少のずれが見られるが、「なめくじ」の図にも現われる語形である。IEKARU-NAMEKUZI から KARASYOINAMEKUZI までは、埼玉の 1 地点を除き、みな九州東半に見られるものである。いずれも、ナメクジ類の語に「かたつむり」の形態に由来する限定詞が付加されたものである。IEKAZUKI から KAIKAZUKI までも、上と同じく「かたつむり」の「殻」に由来する命名と考えられる。「なめくじ」に対して、「かたつむり」は「家」を持っている、という発想からくることは言うまでもない。「なめくじ」の図

中のハダカ〜、イエナシ〜の類と逆ではあるが、命名の発想は同じである。これらは北陸、静岡、滋賀の数地点のほか、みな九州東半に分布し、イエカルイナメクジ等と混在する。うち、九州の IEKARI は、あるいは、「家借り」にあたるものかとも考えられるが、イエカルイと同類とみなしここに置いた。福井・岐阜の IENASI は上の一連のものと逆になっている。「殻」を持つ「かたつむり」の方を「家無し」というのはいささかおかしいが、いずれにしても、「なめくじ」とのかかわりで生じた語という点に関しては疑いがなかろう。岐阜のものは「なめくじ」の図が無回答となっている。福井のものは「なめくじ」が MAMEKUZIRI となっているが、両地点とも 236 図で併用になっており、単なるその場での誤答ではないことがわかる。KAIMUSI から HEBITAKEE までは、ともに、「貝」にあたる形を語中を含む。東北北部、北陸、香川に見られる。うち、東北北部の HEBIGAI, HEBIKEEKO, HEBITAKEE は、237 図で岩手に見られるヘビタマクリ等のヘビを含むものとなりがあろう。HEBIN'OBASYO は大分にあり、上のヘビを含むものとは遠く離れている。また千葉の OBA も離れている。ZITTOBATTOO は山梨にある。KAEZIKERO は青森に、KEERENZI は奈良に各 1 地点見られる。「貝」とつながりがありそうに見えるが、よくわからない。KYAANAMEKUSI は佐賀に見られる。「貝なめくじ」の意味であろう。

NNA から MINANAMEKUSI までは、「蝸」に関係があると考えられる(形を持つ)ものを集めた。いずれも、愛媛西南端、長崎・熊本・大分・鹿児島のほか琉球宮古に分布する。このうち、MINAKUSI から MINANAMEKUSI までの 4 語形は、ナメクジ類と語形の上でつながりを持つ。

GOONA は対馬に 1 地点見られる。ゴオナを含むものは 238 図の緑類、および、237 図の赤類の中に見られたが、いずれも、三重、瀬戸内海沿岸であって対馬のものとは分布が離れる。「やどかり」を意味した古語の「がうな」と関係があろうが、どのような意味の変遷の歴史があったか、はっきりしない。GONGORA は島根に 1 地点見られる。YAMASAZAE から MISOSAZAE までは、青森、隠岐、山口に計 4 地点見られる。「栄螺」と関連があるのであろうか。ZINZIRAMUSI から SYUZYUMUSI までは、広島、香川、宮崎・鹿児島に計 8 地点見られる。「かたつむり」の「殻」の螺旋を

写した一種の擬態語に由来するものではないかと考えられる。第 3 集 102 図「つむじ」を見ると、分布地域は必ずしも一致していないが、同類の語形が見られる。GEGEPPPO は千葉に 1 地点見られる。この地点は「なめくじ」では IENASIGEGEPPPO であった。GAMADA は福井に、NEBA は富山に、NYUUDOOMUSI は淡路に各 1 地点見られる。KAGYU(U)は埼玉と岡山に計 2 地点見られる。文章語であろうか。ZYOONENGO は岡山に見られる。OGAME, OGAMEZYORO, ZYORO はみな、福井西端の 1 地点で、KATACUMURI, DENDENMUSI と併用されている。したがって、229 図「かまきり」で、すぐ近くに現われるオガメ等の誤記とは考えられない。「かまきり」とどう関連するのであろうか。230 図「かまきり」に DEERO や KATACUMURI が現われることと、関係させねばならない。INBOSUI は伊豆諸島新島に見られる。「かまきり」の図を見ると、この地点は INBOSUI となっていて驚かされる。「かたつむり」のほうは、カタツブリと併用であるから誤解しているとは考えられないが、調査中の誤りということも考えられなくもない。さらに詳しい考察が必要であろう。SISIMETANKON は宮崎西南部にある。カタツムリと併用されているので誤解があったとは考えられないが、何のことかわからない。YAMASITADAMI は八丈に 1 地点見られる。ヤマという限定詞は付いているが、古語の「しただみ」と同形である。この 1 地点をもって、『蝸牛考』に言う古形の残存とは断じ難いが、魅力的な報告である。無回答はごくわずかで、計 8 地点しかなかった。



この図全体から「かたつむり」の呼称の歴史をたどるとき、はじめにも述べたように、『蝸牛考』との関係を問題とせざるをえない。『蝸牛考』の内容は、著者自身も「余りに複雑した論証」と認めているように、複雑であって、簡単に要約することは容易でなく、また、いまさら改めて内容を紹介する必要もないと思われるが、創元社版の171ページ「方言周圖論」以下あたりから、うのような簡単な図表を作ってみた。

もっとも新しい形はデンデン(ムシ)ということである。本図の分布からも、近畿を中心にまとまった領域を持って広がる緑で示したデンデン類、とりわけ、デンデンムシがもっとも新しい広がりであることは、確実に言えよう。『蝸牛考』では、デンデンを生む母胎となったものは「出よ」を意味したデエデエであると言うが、この図にはデエデエという形は現われなかった。これに類似するデデ(ムシ)等、デ、デエという要素を持つものを拾ってみると、量は多くないが、緑の領域の各地にちらばっている。したがって、デ、デエは緑の類の中では、やはり、デンデンよりは古いものと言えよう。デエロ、ダイロとデエデエとの関係は、『蝸牛考』の中でも明確な記述は見られない。緑のデ、デエの分布は草のデエロ、ダイロの周囲にはほとんどなく、分布からは、デ、デエがデエロ、ダイロを生んだということを積極的に裏付けるものはない。創元社版24ページに、「……デンデンムシは東部の諸國に進出するにつれて、やがてダイロウとなるべき傾向を具へて居たのであった。……」とあるが、デンデンとデエロとの分布は連続しているとは言い難く、デンデンがデエロの生誕に直接かかわっていたかどうかはなお疑問の点である。同じく33ページ以下の「二種の蝸牛の唄」にあるような、「唄」のほうが名称とは別な経路、速さで広がり、それを基に「出ろ」という命令形が命名に際して用いられた、という事情があったということも想像され、西方のデンデン等とは直接には関係なく生じたという考えかたも可能である。いずれにしても、草の類は、空で示したカタツムリの類を南と北に分断する形で分布することから、この地域では新しい広がりということとは言ってよいと思われる。

赤のマイマイ類と空のカタツムリの類との先後関係はどうであろうか。どの地域の分布も両者の分布は相接していて、どちらが先に広がったにせよ、両者は歴史的にはほぼ連続していたものと考えられる。空のカタツムリ類は、東北のカサツブリがかなりまとまった領域を占め

る以外は、とくに専有地域は見られない。むしろ、他の種類の語によって各地で侵食されていると言ってよからう。言いかえれば、カタツムリはかなり古い時代に今の広がりを得たものという考え方が可能である。また、マイマイ類の分布と比べると、東北地方ではマイマイよりはるかに広い領域を持ち、関東・中部でも、内陸部にカタツムリが多く、マイマイは太平洋側の帯状の地域に見られる。中国地方のマイマイも、岡山にカタツムリが多少あるとしても、すぐ東から緑のデンデンムシに追われている様子がうかがえる。九州では南半にまでカタツムリが進出しているのに比べ、マイマイは北半にとどまっている。これらのことを合わせて考えると、マイマイ類はカタツムリ類よりは新しく広がったものということが考えられ、『蝸牛考』の結論と軌を一にすることになる。この際、先にもふれたように、九州南半に見られる茶で示したツグラメ等の末尾のメをどう考えるかという問題とも絡んでくるが、むしろ、上のマイマイ、カタツムリとの関係から逆に、このメはマイマイとは無縁であると考えられることもできよう。九州南半から琉球にかけての地域に赤を与えると、他の地域の赤・空の関係を説明できなくなるからである。

九州南半に分布する茶で示したツグラメ等のグラ、クラと、東北地方に見られる橙のタマクラ等のクラとは、もとは連絡していたものであろうか。『蝸牛考』に言うように、クラは、「円いもの」を意味する形態素であったとすれば、両者の間には何らかの関係があると言うことができよう。分布を見ると、西のものは琉球にまで広がり空や赤などより古いもののように見える。北のものは、カタツムリなどと比較して、どちらが古いとも決めがたいが、空の類と接して分布することから、カタツムリあるいはカサツブリ等とは歴史的に連続的な関係にあったと言うことができよう。

『蝸牛考』では、もと、巻貝一般と蝸牛とを包含する名称としてミナという形があって、それが貝を意味するミナと蝸牛を意味するツグラ、ツブラとに分化したという考えを示しているが、ナメクジに関してはあまり詳しい論述は見られない。この図と239図「なめくじ」の図とを比較すると、この図にナメクジ類の現われる地域では、「かたつむり」と「なめくじ」とが同形であり両者を語形の上で区別していない地点がかなり見られる。また、この図で、イエカルイナメクジ等の見られる地域、あるいは、「なめくじ」の図にハダカ〜、イエナシ〜の現われる

地域では、ナメトに対してハダカナメト、ダイロに対してハダカダイロ、イエカルイナメクジに対してナメクジなどのように、基本的には「かたつむり」「なめくじ」を同一物とみなしていると考えられる地点も少なくない。分布を見ると、道南から東北北部にかけての地域、関東北辺、伊豆諸島、岐阜、四国南半、隠岐、山陰西部、九州にやや多く見られる。分布から見て、このような傾向はかなり古いもののように見える。結局、これらは緑、草、赤の各類よりは古いであろう。空のカタツムリよりも古いものと考えられようか。茶のツグラメ等との関係はどうであろう。「なめくじ」の図で琉球を見ると、先島には無回答が多い。多分棲息しないのであろう。奄美、沖縄島周辺にはしかるべき語形が見られる。この地域に古くから「なめくじ」が棲息していたかどうかの生物学的な問題は検討する必要があるが、見られる語形は個別のなもので、本土のものと比べてさらに古いものが分布しているとは言えそうもないようである。つまり、琉球では「かたつむり」と「なめくじ」とは、一見語形の上で区別されているようだが、これは、古くからの傾向ではなく、むしろ新しいものとも考えることもできよう。このように考えると、上で述べた、「かたつむり」「なめくじ」を語形の上で区別しない傾向はかなり古いものと言うことができよう。

ミナという語形を介しての「かたつむり」と「蛸」の相互の関係は、この図を見るかぎり、『蝸牛考』で言うほど積極的に言うことはできない。上で述べた「かたつむり」「なめくじ」の両方を表わすナメクジという表現と、このミナとの関係もわからない。また、ミナからツプロ、ツブリあるいはツグロ、ツグラ等へ変化する過程についても、カサツブリのカサやマイマイ類との関係を考慮しながらさらに検討を加える必要がある。はじめにも述べたように、『蝸牛考』の詳細にわたった検討、それとこの図とのつき合わせは、この解説ではほとんどしなかった。個々の事実にあたった詳しい考察は、ひとつひとつとり上げれば限りなくあろうし、細部にわたっては、『蝸牛考』にもいろいろと問題がありそうである。さらに、「かたつむり」にまつわる幼児の「唄」、あるいは「なめくじ」にとどまらず、「貝」「蛸」等の隣接する意味分野の諸語形に関する資料などを得た上で、さらに詳しい検討を加えることが、今後の課題として期待される。

## 239. なめくじ(蛸)

この項目は「かたつむり」と関連するところが少なからずあるので、236図、237図、238図にわたって分載した「かたつむり」の地図も同時に参照されたい。

この図の分布のほとんどを占めるものは、橙で示したナメクジ、赤で示したナメクジラ、茶を与えたナメクジリの各類である。これらは、ナメにあたる前部分と、クジ、クジラ、クジリ等の後部分とに分割できると思われる。したがって、作図にあたっては、これらのふたつの部分のそれぞれの分布にまず注目した。前部分にはナメ、ナベ、マメ等が見られる。これらは、符号にぬき・べた・中点等の特徴を持たせて表わした。とくに、ナメ対マメ等、頭子音のnとmとの対立は、べた符号とぬき符号の対立で示した。mを持つものは北関東・中部・北陸、近畿周辺、九州などにややまとまって分布する。色の違いをもって示したのは、クジ、クジラ、クジリなど後部分の違いである。すなわち、クジの類には橙を、クジラの類には赤を、クジリの類には茶をそれぞれ与えた。なお、音声的変種はおおはばにまとめた。詳しくは『日本言語地図資料』に記録してある。参照されたい。

凡例で、NAMEKUZI から MAMEKUZYUO までが橙(すなわち後半にクジ等を持つ)で示したものである。これらのうちもっとも広く分布するものは、NAMEKUZI である。専用地域を見ると、宮城・福島東半の地域、新潟西半から長野にかけての地域、鳥取・岡山、四国の大部分にわたる地域、山口から九州にかけての地域などである。関東、近畿には、他の類の分布と混在しつつ分布が見られる。そのほかの地域にも、点々としている。NAMEKUZI は標準語形として登録されているにもかかわらず、関東にも近畿にも専用地域を持たないことは興味ある点である。東京周辺に多少まとまっているが、これが標準語となった背景であろうか。あるいは、標準語となったため、東京周辺に広がりを持ったのであろうか。ナメクジについては、東北地方でクの子音の有声化するものが多かった。これらは規則的なものと考えて、みな、NAMEKUZI として示した。以下のものについても、いくつかの例外を除いて、そのように処理した。高知・愛媛に3地点見られる NAMEGUZI がその例外のひとつである。すなわち、この地域では子音の有声化は見られないとされているので、別見出しとし

て立てた。個別的な連濁の現象かもしれないが、周辺に見られる紺で示した GUZI との関連も考え、このように示した。NAMEGUSI (8312.75), NAMEGUCI (74 51.22), MAMEGUZI (7323.02) と示したものも同様の理由による。NAMEKUSI は九州西半に 17 地点見られる。末尾音節が SI となるものは、このほか MAMEKUSI があり、同じく九州西半にかなり分布する。NAMEGUSI (8312.75) もこの類に入れられる。この地域で語末の高い母音が弱まり無声化したりすることと関係があるかもしれない。一方、古辞書のたぐいには、「奈女久知」など末尾音節が「チ」として記録されている。青森南部、九州西部に計 9 地点見られる NAMEKUCI は、この、古辞書に登録されたものと同形である。このほか、7451.22 の NAMEGUCI や 6571.68, 6591.81 の MAMEKUCI も、末尾音節にチを持っている。形式の末尾がシカチかという観点と関連して、橙で示した類の後部分クジの末尾音節がジにあたるものであるかザにあたるものであるかを、四つ仮名の別のあると言われている高知、大分などで見ると、ほとんどがジにあたる音声で報告されていることがわかる。つまり、上代の「奈女久知」と現在のナメクジ(すくなくとも四つ仮名地域のナメクジ)とは、うまく連絡しないということになる。同じく、赤で示したクジラのジについても、高知などのものはみなジにあたる音声を示し、ザにあたるものは見られない。したがって、クジラが「鯨」にあたるという説には多少疑問があるということになる。NAMEKOZI は 6577.86 に見られる。この後部分 KOZI は、伊豆諸島の赤で示した NAMERAKOOZI、岐阜の紺で示した SAIKOOZI などの KOOZI との関連が考えられよう。7523.27 の MAMEKOZI についても同様である。なお 209 図「こうし」に KOUZI, KOOZI が現われる。参照されたい。地域は MAMEKOZI 以外あまり関係がなさそうである。NABEKUZI は第 2 音節が「ベ」となる点の特徴である。前部分にナベ・ネベを持つものは、5577.06, 6369.37, 6490.30, 6551.52, 7303.75 の各地点と、八丈、甕、奄美大島に見られる。さらに、5557.85 の NEBESUKE も類似の特徴を持つものである。兵庫東端のものは別として、概して、辺境に分布すると言える。古いものの残存と考えることもできる。NAMEKUSI は中国西部に計 9 地点見られる。NAMEKURI, NAMAKURI, NUMEKURI は岐阜、香川、広島に計 8 地点見られる。後部分が多少他と異なる。「よ

だれくり」のくりとの関係が考えられ、あるいはクジラのジが脱落したものとも考えられるが、ここではクジの音声の変種と考えて橙で示した。岩手に 2 地点見られる NAMEKURA (MUSI) も、クジラとの関連が考えられるが、KURI との類似を考え、一応、ここに置いた。MEMEKUZI, MEEMEKUZI は岐阜南部から愛知にかけてかなりの分布が見られ、福岡南部にも 1 地点 MEMEKUZI がある。MAIMAIKUZI は茨城にある。この前部分の MEEMEE, MAI MAI は、「かたつむり」の図に見られる、マイマイ (237 図に赤い符号で示した) との関連が考えられる。MEME もマイマイとの関係を考慮する必要がある。NAMEKUZYUO 7349.86, NAMEKUDO 6429.30, 6444.62, MAMEKUZYUO 7239.82 は、NAMEKUZIRO などとの関係がありそうで、この類に入れるのは多少問題があるかもしれないが、分布の観点も考慮し、後部分にクジとのつながりがあると考えて一応ここに置いた。

赤で示したものは、後部分にクジラをもつ類、および、それと関連の認められるいくつかのものである。北海道、東北地方の東半分、関東から山梨・静岡にかけて、近畿・中国東部・四国東南部に、それぞれ地域的広がりを持って分布し、その他の地域にも点在する。NAMEKUZIRA から MAIMAIKUZIRA までは、後部分にクジラを持っているものである。NAMERAKUZI 以下の大きい三角形符号で示したものは、上のものと性質が異なる。クジラのラがナメのつぎに来ている点である。ナメラという単位が、クジラのラとは無関係にナメから派生し、それとクジとが結合して生じた語形とも考えられようが、分布を見ると、種子のものはやや孤立しているとしても、みなナメクジラの領域内に分布している点を考慮して、ナメクジラの一種の音位転倒と考えて、ナメクジラと同色の符号を与えた。群馬の NAMERACCYO, 種子の NAMERAMUSI, 関東周辺、福岡、鹿児島、NAMERA は、上記のようにして生じた NAMERAKUZI から、KUZI が切れたもの、あるいはそれをもとにして新たに生まれたものと考えた。MEMEKUZIRA 7321.87, 7331.27, MAIMAIKUZIRA 7321.87 は、前部分について、「かたつむり」の図に現われるマイマイ (237 図の赤い符号) との関連を考慮する必要があることは、先ほどの MAIMAIKUZI の場合と同様である。

茶で示したものは後部分にクジリを持つ類、および、

それと関連の認められるものである。東北部、北陸・近畿北部、中国中部にまとまった分布領域が見られ、そのほかの地域にも点在する。四国東部、福岡、対馬、五島、鹿児島西半、奄美大島などにも小領域が認められる。中心的な語形は NAMEKUZIRI, MAMEKUZIRI である。NAMEKUZIRI, MAMAKUZIRI, NAMAKUZIRO, NAMAKOZIRI, MAMAKOZIRI など、前部分が NAMA, MAMA となるものが、広島を中心として分布し、とくに注目される。第3集182図「とうもろこし」を見ると、緑を与えたナンバン類のなかでマンマンキビなど、語頭に、他では n が多いのに m が現われるものが広島に分布する。また、本集228図「まむし」に、クチャミという語形が広島に見られる。このあたりには、何か m の出やすい傾向があるのであろうか。NAMAOKO 5690.96, 6471.59 は広島で、NAMAKOZIRI 等、語中に KO を持つもののそばにあるので、それらとの関連でここに置いた。NAMEZUKURI, MAMEZUKURI は道南と秋田に見られる。これらも、ナメクジのクとジとの音位転倒から生じた形と考えてここに置いたが、ZUKURI とした部分は、あるいは、「かたつむり」の図に現われるツグリなど(237図茶など)との関連も、考慮すべきかもしれない。

後部分がさまざまで前部分にナメなどの要素を持つ類を、桃で示した。岩手のナメト以外、ほとんどまとまった分布領域を持つものは見られない。NAMEKUZINA, MAMEKUZINA は、ともに青森・岩手に計8地点見られる。これらは、NAMEKUZIRA や MAMEKUZIRA と似ている。MAMEKUZYAKU は福岡に、NAMEKUZIWU は福井北部にそれぞれ1地点見られる。福井のものは NAMEKUZIRO と似ているが、どうであろうか。NAMEZU, NAMAZU は、佐渡、能登、広島・山口に見られる。NAMACUKUZI から NAMETAKUZI までは、みな山口に見られる。NANTAKUZIRA は、奄美徳之島に2地点ある。山口に1地点見られる NAMETA と前部分で類似点が見られるが、琉球列島には、他に NAME-TA(〜)の類がみられず、歴史的関係があるかどうかはわからない。これも、地理的には歴史的関係は薄いと考えられるが、NAMETA と形の上で類似が見られるものには、ほかに、岩手にかなり広く分布する NAME-TO, 緑で示した HADAKANAMETO がある。

この地域には「かたつむり」の図(236図)にもナメトが見られ、注目される。NABEKOCIKI から NABEKOZIKI までは八丈に、NABEKOSAGI は餌に、NEBESUKE は岐阜北端に見られる。NAME 以下は地域だけを示しておく。NAME(青森), NAMESI(茨城), NAMEKI(秋田), NAMIMUSYAA(沖縄本島), NAMEKOMUSI(青森), NAMEMUSI(山口), NAMEHIKI(静岡), MAMEYOSI(静岡), NAMEDARA(静岡), MAMEKUAI(福岡), NAMEMIAMIDAA(沖縄本島)。

緑で示した類は、236~238図「かたつむり」の地図に表われる語形にハダカ、イエナシという要素の付加されたもの、およびそれに類するものである。これらの名称は、「かたつむり」は殻を持っているが、「なめくじ」は殻を持っていない、すなわち、「裸」である、あるいは「家無し」であるという発想から生まれたものと言えよう。「かたつむり」(236図)に表われる イエカルイナメクジ、カラシイナメクジなどと表裏をなす表現である。言いかえれば、これら緑の符号の分布する地域では「かたつむり」と「なめくじ」とは元来同じ物であって、「なめくじ」は「かたつむり」の殻がとれたものという認識がなされていると考えてよからう。HADAKANAMEKUZI から HADAKANAMETO までは、青森・岩手・秋田、福島・栃木・茨城、山口、熊本・宮崎に分布し、これらの地点では、「かたつむり」をナメクジ類の語で表わしているようである。HADAKADEERO から IENASI までは、関東、および、岐阜にかなりの領域を持って分布し、道南、福島、三宅、山口、沖縄にも見られる。これらについては、次に紺で示す、デエロ、マイマイ等、「なめくじ」を「かたつむり」に広く現われる語で表わす地点などとともに、「かたつむり」「なめくじ」を語形の上でどう区別するか、あるいは、しないかという観点から、さらに詳しい検討が必要である。

紺で示したものにはさまざまなものが含まれる。MAIBORO から SYAKUZIRO までは「かたつむり」の図にも現われる語形である。青森、福島・新潟・関東、八丈、岐阜・愛知、熊本・大分に見られる。各地点細かく対照しなければ確実なところは言えないが、これらの地域では、「かたつむり」「なめくじ」を語形の上で区別していないようである。

YANEKUZIRO 以下は「かたつむり」には現われないもので、「なめくじ」専用の名称のようである。YA-



NEKUZIRO から YANEHUKI までは、紀伊半島南部に数地点見られるほか、徳島に1地点ある。これらに共通に含まれるヤネ・ヤニは、「くものい」とを現わすヤネ、あるいは、「脂」のヤニと関連する語かと思われる。なめくじの通ったあとには、ねばねばした「やに」のようなものが見られるからである。YANEHUKI となるとあるいは「屋根葺き」という語原意識があるのかもしれない。茨城の NOROHiki は、上の類と、ヒキで共通する。ノロは『全国方言辞典』によれば、千葉で「海中の砂や泥のぬるぬるしている所」、福島で「やにのこと」とある。HANATAREMUSI (滋賀) も、命名の発想は上のヤネヒキ、ノロヒキなどと似ている。いささか汚らしいが、通ったあとに残る粘液質のものを鼻汁と見たてたものと思われる。沖縄を中心に奄美にも見られる YUDARIPAKYA から YUDEEMUSI までも、上のものと同じ発想による命名と思われる。各語形は「よだれはき」「よだれむし」などにあたるものと考えられ、鼻汁の代わりに、ヨダレを連想したものであろう(第3集 119 図「よだれ」参照)。OHIMESAMA (静岡)、HIMECYO (静岡)、YAMAHIME (福井) は、ヒメという部分で共通している。ヒメは「姫」にあたるものであろうか。見た目にあまり愉快とは言えない「なめくじ」に「お姫様」という美称を与えたことの背景は、何かそれにまつわる「昔話」あるいは、タブーなどがありそうである。OZYOROSAMA, OZYOORO (ともに福岡) を「女郎」と関わりがあるとすると、オヒメサマと発想が似ていると言えよう。昔の農村の人々にとっては「女郎」も美しいもののひとつであったのであろうか。または「上臈」の語原意識もあろうか。第3集 112 図「ものもらい」にもオヒメサンが現われる。『総合日本民俗語彙』には、「斑紋を衣服にたとえたものか、あるいは長短二つの触角をかんざしと見たてたものかもしれない」とある。HIRU から SIMAPLII までは、青森・岩手、静岡、和歌山、奄美大島、宮古に計8地点見られる。いずれも「蛭」にあたる語形を含むものと言えよう。NANBURUMUSI, NANDURUMUSI, NANBOMUSI は、奄美本島、沖縄本島に見られる。NANBURUMUSI の BURU の部分に「蛭」とつながりがあるかと考え似た符号を与えたが、どうであろうか。GUZI, UZI は、四国南部に見られる。近くに、NAMEGUZI が分布し、後部分にこの GUZI と共通する部分を持つ。関連があらう。ABURAMUSI, ANDAMUSI は沖縄本

島およびその周辺に計5地点見られる。ANDAMUSI もアブラムシの変種と考えられる。AMIPUIANDAA も、ANDAA 部分が上の ANDAMUSI と共通する。以下、残りの見出しについてその地域を挙げておく。IMOKUZI (愛知)、GEZI (愛知)、GEZIGEZI (長野)、GAGOZIRI (滋賀)、CINGUMUSI 以下 PAMI まではともに琉球に見られる。琉球先島に無回答が多い。棲息しないのであろうか。

近畿地方を見ると、赤のナメクジラが中心部に分布し、もっとも新しい広がりのように考えられる。すぐ北の北陸に見られるナメクジリが、ナメクジラと接してつぎに古いように見える。しかし、全国を見渡すと、この図の解釈はかならずしも容易ではない。西日本ではナメクジがもっぱらで、近畿などのものに比して古そうに見えるが、九州西岸のナメクジリの方がさらに古そうにも見える。東日本のナメクジとナメクジラとの関係は、どちらが古いとも決めがたい。新潟西半・長野・愛知に分布するナメクジの位置づけはどうであろうか。関東北部から宮城にかけてあるナメクジと、もとはつながっていたものが、関東南部のナメクジラによって分断されたと思われることもできる。しかし、宮城・福島のナメクジは、仙台などを中心に広がった新しい広がりで見られなくもない。東北北半のナメクジリは、新しく日本海を海路運ばれたものであろうか。佐渡、秋田南部に数地点見られるナメクジリは、それが途中でこぼれたものとすることもできる。そうすると、このナメクジリと東南北半に広がるナメクジラとの関係はどうか。近畿地方ではナメクジラよりナメクジリが古いとすると、一旦、ナメクジリが海路北上したのち、再び、ナメクジラが新しい勢力として海路北上し、山形あたりへ上陸し、広い領域を占めるに至ったと考えられようか。このナメクジラと、関東南半のナメクジラとは直接のつながりはないのだろうか。つながるにすれば、関東北部のもっとも人里からはなれた山中でつながることになって不自然である。関東のものが西から陸路伝来したものとすると、その道筋はどれであろうか。中仙道、東海道、ともにナメクジによって分断されていて、近畿のナメクジラとは地理的な連続性が見られない。

上に述べたように、これら3類の歴史的先後関係は、なかなか容易には推論できないが、これらナメクジ、ナメクジラ、ナメクジリの3類は、大きく見れば、相互に近い関係にあり、これらをさらに全体として一類とまと

めて見ることもできる。そう見たとき、これら3類内部の先後関係もさることながら、「なめくじ」「かたつむり」を合わせて考えたときの両者の相互関係、および、それらから導かれる歴史的関係も重要な問題となってくる。「かたつむり」の図の詳しい検討と合わせて、さらに詳細な考察を加えることが必要であろう。『国語学』32の長尾勇「蛞蝓考」などが参考となろう。

## 240. すみれ(堇)

質問文は草の名を求めることになっているが、草の名と花の名とがはっきり区別されない場合が多いためか、回答の中には、花の名らしくも思われるもののがかなりある。しかし、回答されたものは、＜併用処理の原則＞を適用した SUMIRE(67地点)を除き、すべて採用することにした。別に、この植物を知らない・見掛けない・非常に少ないとする地点(以下の19地点)がある。2755.76, 2761.77, 3726.25, 3776.51, 4644.10, 4659.85, 4712.16, 5586.70, 6547.67, 6595.32, 6643.72, 6655.51, 6662.38, 7311.68, 7339.27, 0246.48, 0249.17, 0256.76, 0256.89。これらは注記のあった地点であるが、一方注記のない無回答の中にも、同様のものが含まれているかもしれない。他方以上の19地点の中には、現実には存在するが被調査者の注意にのぼらないため、知らない・見掛けないなどとした地点も含まれていよう。なお、調査に際して使用した絵は、すみれ(いろいろ種類多い中での一般称)をさすことばを調べるのに、かならずしも適当でなかった点があったかもしれない。

さらに注記を手掛りすると、質問にあたるものかどうかははっきりしない(被調査者・調査者が疑いを持つ)回答がいくつかあった。これらも採用してある。5595.20の YAMAGONBO(調査時にはっきりしなかった)、5611.81の TONBOGUSA(被調査者が自信なさそうにつぶやいた)、7342.72の HUUZOOBANA(この語月見草や彼岸花をさすこともあり、調査者としてこの回答はあやしいと思う)である。また、「すみれ」とは少し違うという注記のあるものがいくつかあった。これらも採用してある。6697.59の SUMOOTORIBANA(葉の厚さが薄く、花の色も薄いという)、7341.47の DODOU-MAKACIKACI(すみれより大きい)、7373.23の GEGENMA と併用で SUMIRE<スミレの花は白く根が抜けやすい>、0275.97の AACYABANA(いわゆ

る「すみれ」ではないがその一種)。

なお、この調査項目は後期調査で割愛したので地点数が少ない。見出し数は112であるが、多くの地点(10地点以上)にみられるのは、そのうち、SUMIRE, SUMOOTORI, SUMOOTORIBANA, SUMOOTORIGUSA, ZIZIBABA, ZIRO(BO)TARO(BO)の6種にすぎない。それ以下は6地点のもの GEGENMA の1種, 4地点のもの TONOUMA(KACIKACI), KANKO(BANA)の2種, 3地点のもの SUMOOTORIBANAKO, SUMOOGUSA, UMAKACI, GENGE, KUBIKIRIBANA, (YAMA)KESI の6種, 2地点のもの SUMIRESOO, (O)ZIIGACI, BAGACI, DODOUMAKACIKACI, HINKACIBANA, HINKAKKA, HOKEKYOOBANA, AMEHURIBANAKO, DOCCYOIBANA, RENGGE, TONBOGUSA の11種で、つまり、残りの86種の見出しは、すべて1地点にしか現われないもの、ということになる。

橙の符号を与えたスミレ類は、さすがに上代からのことばだけあって、全国的に分布している。SUMIREの中にはかなりの音変種が含まれている。7377.27の [jumi-re], 5508.16の [sumiri], 3699.55, 4659.50, 6411.66, 6412.48の [jimire] など。SUMIRA は 7238.90, SUMIRO は 6408.15, SUMIRO は 5612.22 であった。なお、7374.75, 7352.61, 7392.33 でスミラという草が別にあり、畑に生えている、花は咲かない、食用になる、この図とは違う、という注記があった。あるいは7238.90の SUMIRA もこれであるかもしれない。

草の符号で示したスモオトリの類は、主として新潟・関東から西の地域にみられるが、北海道・東北にもないことはない。また新潟・関東以西でも、栃木、福井、長野、滋賀・京都・大阪・奈良・兵庫北部、熊本北部・鹿児島には比較的少なく、沖縄にはまったくない。SUMOOTORIBANAには、[sumontoribana] 6437.94, 6449.19, 6449.20, 6479.26, 6479.51, 6550.13; [sumottoribana] 4685.88; [jimitoribana] 6401.89, 6410.77, 6411.33, 6411.66, 6412.48, 6420.34, 6421.26, 6422.16, 6422.93 などを含む。SIMATOOBANA は [jimato:bana] 6413.10 であったが、注記に(jima: は相撲のこと)とある。SUMOOTORIGUSAには [sumotokgusa] 7284.16; [jimotorigusa] 6402.94, 6403.60, 6412.12; [sumotoigusa] 7360.47, 8229.96, 8343.97 を含む。SUMOOTORI-

RENGE は 6397.24, SUMOOTORIGENGE は 7431.82, SUMOOTORIGENGECI は 7309.37 であるが、単独の RENGGE 1736.84, 2800.52 ; GENGE 1736.84, 1756.32, 1793.14 がすべて北海道であることから、すぐには結びつけにくい。むしろ熊本を中心とする GEGENMA(赤)との関係を考えるべきかもしれない。相撲とするのは、花をひっかけて引き合う遊びに由来する命名と思われ、1862.48, 5681.47, 5686.31, 6466.16, 6625.66, 6662.01, 7404.56, 7411.61, 7432.95 にその注記があるが、花の形が力士のまげの形に似ている(沖縄の YAMATUNCYUUBANA も同様の発想である)と、理解している所(5686.31, 5688.01, 6491.65)もある。スマレの語頭部分、スモオトリバナの語頭部分との関係はよくわからない。4686.52, 4695.21, 6546.73, 6548.26, 6641.43 では、このスモオ～表現を、少年時代に用いた語とする注記があったが、古い時代のことばというわけではなく、子供の世界で使うことばと理解すべきかもしれない。その他単に古い表現とした注記は多くあったが、その中にも同じ意味のものが含まれている可能性がある。子供の世界で使われはじめたことばなのであろう。もっとも、子どもの世界のことばには、それなりの歴史のあることは当然である。子供のことばや子供に対することばとする注記は下記の地点で認められた。4784.41, 5625.32, 5667.24, 5688.01, 5742.65, 6296.27, 6491.49, 6494.55, 6527.22, 6527.44, 7427.90, 7430.75。

なお、5781.65 ではスモオトリグサは「オオバコ」のこと、7533.11 ではスモトリ(クサ)は「ミチシバ(細い糸のようなイ草)」のこと、という注記があった。『全国方言辞典』にも、スモオトリグサ、スモトリグサを「メヒシバ」「オヒシバ」「チカラシバ」、スモオトリバナ、スモトリバナを「オオバコ」のこととする地域が出ています。

緑の符号で示したものは、対立を爺・婆や太郎・次郎などの人になぞらえるもの、およびその破片と思われるものである。東海、岐阜、奈良を中心にみられるほか、八丈島にあり、中国・九州にわずかにある。この中で八丈の CHICHIIBA には「<これの蜜を吸った>との注記があって、何か擬音語のようにも思われるが、周辺との関係でここに入れた。6584.90 の「<首引きさせる>」、7659.40 の「<ひっかけっこをして遊んだ>」、8372.47 「<子供の時こんな掛声で首をひっかけあい、すみれの名としても使った>」などの注記から、やはり、草の類と同じ遊戯行為が命名の基礎にあったことと思われる。6563.58 には、

「<子供のころ使った>との注記があった。なお、ジジババが春蘭やあけびの花の方言として使われることはよく知られているが、『総合日本民俗語彙』に示すように、これも童言葉に由来するものと思われ、6482.52 には「<葉の間に二つ三つの花が咲いている状態が爺婆が向きあっているように見えるから言うのではあるまいか>という注記があり、これら「すみれ」をあらわす表現も、すべての地点でひっかけ遊びに由来するとは考えられていないことを示す。ジジババの類とジロ(ボ)タロ(ボ)の類をとともに緑としたことは、両者が人間になぞらえた共通点にもよるが、他方ジジババのジとジロ(ボ)タロ(ボ)のジとが、語形の上でも全く無縁ではあるまいと考えたからである。

赤の符号で示したものは、馬(牛)に縁があると考えられる類である。TONOSANKACIKACI, TONKACIBANA は特に馬との関係はないが、TONOUMA(KACIKACI)を介して連絡がつく。また、HINKACIBANA から HINKAKKA までも疑わしいが、UMAHINKAKKA を介してここに入れた。牛に関係があるとするのは山口と奄美にみられるものだけであるが、それを除けばほとんどが九州であり、もうひとつ飛騨に孤立するものが認められる。KOMAGAKAKKA-DAUMAGAKAKKA (8363.64 — KOMA は牡馬, DAUMA は牝馬—) が示すように、これも首引きをさせる遊びとの関係が考えられる。7341.47 DODOUMAKACIKACI について「<ひっかけて遊ぶ>」、8333.03 HINKAT について「<ひっかけるから> (これは「ひっかけ」というような語形に関係があるかもしれない)」、8345.24 UMAKACIKACI について「<引き合う>」などの注記を得、また、8316.20 には「<子供の時のことば>との注記があった。馬になぞらえる根拠は、花の茎のまがった姿が馬の首に似ていることではなかろうか。ぴったりする注記はないが、8300.25 KOMAUMANHANA に「<花の首のまがった部分を komammanotjimpō という>との注があった。なお、213 「せきれい」の図をみると、宮崎東部海岸に HI(N)KOCI があり、そのやや西部に、この図の HINKACI(〜)がみられ、何かおもしろい問題を内包している可能性がある。

以下、紺で示したものは孤立的なものである。SUZUMEBANA から SIZIMIKATANKO までは語形の類似、UGUISUBANA と HOKEYOUBANA は鶯に関係があり(3760.58 「鶯の鳴くころ咲く」という注記

があった), TUINUKOOKOOBANA も, TURI-KWAKUSA (＜鳥草の意。花がとさかに似ている＞との注記があった)も, やはり鳥に関係があると考えられるのでここに並べた。KOKEKKWA, KOKEKKWAKKWAT は手掛りがないが, 何か鶉の鳴声に似ている。5635.65 の HOPPYOO には＜花を吸うといくらか甘味がある＞と注があるが, HOKEKYOOBANA と関係があるかもしれない。地点も近い。SOMBANA 以下 INKIBANA までは, 染めるということと何がしかの関係を持つと考えられるものを並べた。AACYABANA 以下は孤立的なものである。しかし, (甲)のものは, 疑わしいものはあるにしても, 首引きと関係があろうし, (乙)のものには, 命名の根拠を知る手掛りになりそうな注記がある。

(甲) AGOKAKEBANA 4667.76, KAGIBANA 4763.45, KAGIHIKIBANA 3765.74, KAKEBANA 8248.18, KANKO (BANA) 3723.21, 3768.50, 4648.42, 4679.65, KUBIKIRI 6650.70, KUBIKIRIBANA 5588.78, 6650.70, 7503.11, KUBIKIRIGUSA 6701.46, KUBITTORI 6621.94, MIMIHIBANA 7394.14, SESENPIKI 8303.70, SISINPIKI 8303.47。

(乙) AMEHURIBANA (KO) 3730.43, 3762.42, 3780.65, 「この花をとると雨が降る」。HUZOOBANA 7342.76 「疱瘡花」。KISIRIBANA 0237.84 「きせるの先に形が似ているから」。NEKOZURAKO 2772.74 「猫面」。

その他, GEERUPPA は, SUMOOTORIGUSA がオオバコをさすことと関係づけて考えるべきであろう。

さて, 歴史関係であるが, この地図からは, はっきりとしたことは言いにくいと思われる。子供の遊びによる命名の段階と, スミレ (これが大人のことばに由来するかどうかは不明) の段階とを, 同一平面に並べて考えていいかどうか, はっきりしないことがそのひとつの理由である。一方が他方を駆逐するという単純なものではあるまい。では, この図の草や緑や赤を与えた, いわば, 同一レベルと考えられる語形同志の関係はどうであろうか。まず, 同色の中で考えてみると, 草の中での SUMOOTORIBANA と SUMOOTORIGUSA との関係は, 分布上からも, 語形上の性質からもどちらが古いともいいがたい。緑の中のジジババ類とジロ(ボ)

タロ(ボ)類との関係もよくわからない。静岡と岐阜と入丈とのジジババにはさまれた愛知, 奈良のジロ(ボ)タロ(ボ)は, 地理的に新しそうにも思われ, 語形の上からもそうではないかと思われる。ただし, ジロ(ボ)タロ(ボ)類が別に飛騨北部や広島西部にもあること, いったいにこの緑の類が点在していることは, 単純な解釈がどの程度の妥当性を持つかを疑わせる。すでにのべたように, ジジババの発想は他の植物について他地域にあり, それらとの関係が十分明らかでないことから, 結論は出しにくい。赤の類の中では, GEGENMA がややまとまって分布して, 新しい発生を思わせる。また, HINKACIBANA 以下 UMAHINKAKKA までのヒン類に地域性が認められ, この部分の新しい発生を思わせる。いったいこの赤の類は, 地図上九州に多く, 地域性が認められるが, 飛騨に KOMABIKI があることから, 簡単には結論できない。この地図にはないが, 『全国方言辞典』に愛知県北設楽郡のコマカケバナ, 神奈川県中郡, 静岡のチンチノコマ, 相模(『大日本国誌』)のチンチンコマドリが引用され, さらに精査が望ましいということになる。緑の類の説明でふれたことと関係があるが, 爺・婆や馬への「みたて」は各地で別個にもおこりうるし, 結局この地図についての歴史的説明はひかえざるをえない, ということになる。しかし, 小地域の詳細な地図からは, なにがしかの結論をひきだす可能性があるから, それらをつみかさね, ふたたび全国図にもどって考える日もあろう。文献にあらわれる語史や, 子どもの遊戯の分布などとの対比が, 問題を解くかぎになるかもしれないことは, 言うまでもない。

## 241. たんぽぽ(蒲公英)

誰にも親しまれている草のように思われがちであるが, 全国すみずみにまであるとは限らず, 種類も1種ではないらしい。花の色も黄のもの白のものがある。この植物が自生せず, あるいは希であるという積極的な報告のあった地点は全国約70地点ほどで, 同県内に2地点以上そういう報告のある県名をあげれば石川, 静岡, 三重・奈良, 山口, 愛媛, 福岡・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄ということになる。また, 無回答の地点が130ほどあった。いったいに西日本にそういうところが多いようである。

質問では草の名を尋ねているが, 回答は, 草の名なの

か花の名なのか、花を持った場合の草の名なのか、かならずしも明確ではないようである。この点については、後にふれるところがある。なお、〈併用処理の原則〉を適用したのは TANPOPO である。

全国的にみると、東日本に各種の表現がみられ、西日本は変種がすくないようである。これは、あるいはこの植物が西日本であまり多くない（西日本に、その草のない所が多いらしい）ことと関係があるかもしれない。

各種の表現があるようにみえるが、橙でタンポポ類、赤でチャンポポ類、パンポコ類、茶でテデッポ類を示した。そして緑でニガナ類、クジナ類を示し、紺でその他の表現をまとめた。

橙のタンポポ類の中では TANPOPO がもっとも広く分布しており、ほかは関東を中心とする TANPO、関東・中部・中国・四国にみられる TANPOKO がやや目立つということであろうか。その他の語形の中では、TANPONA が5地点、TANBOBO、TANPOPOPO、TANBOKO が3地点、TAPPOPOPO、TANPONPON、TATANBO、TANPOKONA が2地点のほか、1地点ずつしか見られない語形ばかりである。

赤のチャンポポ類の中でも、CYANPOPO(点在)、CYACYAPPO(群馬から中部地方)、CYANPOKO(点在)のほかは、CYANPO、CYACYAPPOKO が各2地点あるのみで、残りはすべて1地点ずつしかみられない語形である。すべてタンポポ類からの変形とみることができよう。

茶で示したテデッポ類については、岩手を中心として北奥にみられるほか、岐阜に TETEPPOPPO が1地点みられることが興味深い。いずれは擬声語としてのタンポポとの間に関係のある表現であろうが、両地域で、平行的に発生したものであろうか。岐阜の被調査者は TETEPPOPPO を TANPOPO に対して〈昔〉の表現と説明している。橙とした富山の TENPOPO などが、関係をもつものかもしれない。

茶の中では TEDEPPO、TEDEPPOPPO、TEDEPOPO、TEDEPPOPO、DEDEKOKE、TETEPPOPPO の順で優勢であり、他は1地点ずつしかみあたらない。

緑で示したもののうちニガナの類は、千葉にのみみられる。それに対してクジナの類は、福井以东にかなり多くみられる。この類の中で KUZIRA、KUZIRANA

はともに岐阜に1地点、KUZIRAGUSA は青森に1地点、KUZIKUENA は、岩手に2地点である。この草の古名布知奈(『本草和名』)と関係があるか。『本草和名』にはもうひとつ多奈をあげるが、これはあるいはタンポポの一部にその形を残しているのかもしれない。なおこのクジナの類については、〈花が咲いてもそういう〉という地点が長野 5633.96, 5651.95, 5684.11, 5684.26にわずかあるほか、宮城・山形・福島、東京、長野の、計25地点ほどで、〈花の咲かないうち〉〈食用にするとき〉〈葉の部分〉〈うさぎに食わせるとき〉などの注記があった。ニガナ類については、わずかに 5791.68 に〈草のこと〉という注記があるのみであった。5623.27 で KUZINA は〈苦いからそういう〉という注記があったが、十分に理解できない。

紺の類のうち2地点以上にみられるものは CICI-GUSA(3)、GANBOOZI(11)、MANGO(3)、MOCIBANA(3)、SIIBIBI(2)、UMAGOYASI(2)のみで、他はすべて1地点のみである。相互に関係のありそうなものはいくつかあり、できるだけ符号の形を似せておいた。注記のあるものを示すと次の通り。BEROROOKARAROO 6649.55〈花が終わってなくなり息で飛ばせるようになったときの名〉、BIBIGA 3724.20〈こどもが茎を笛にして鳴らすから〉、CIGUSA 7381.47〈花の咲いていないとき〉、DANBUNOCICI 3760.58〈茎を折れば白い汁が出るから。ダンブは蜻蛉〉、GANBOOZI 5682.37〈花の咲くまえの呼び名〉、GARASUNA 0256.89〈タンポポの一種〉、ME(E)KURABANA 8300.11〈種子が目に入ると盲目になるから〉、TEKUSAREBANA 6287.71〈白汁が出るので有毒だと思ってつけた名らしい〉、TUIYU 1213.76〈タンポポの一種らしい〉、UMAGOYASI 7411.61〈この草をくわしたら馬がよく肥える。このごろはクローバーをウマゴヤシという〉、UNBAKAKO 6621.57〈葉の名、TANPOPO は花の名〉。

以上を総合すると、子どもの遊びに関するもの(笛にしてならず。白い汁に注目する。白い毛になってからなど)、食料としてのもの、亜種の名、ということになるか。よくわからないものも多いが、以上の範疇におちるものが多いのではなからうかと思われる。橙の類、赤の類に関するものとしても、CYAACYAPPO 5680.34〈茎を吹く遊びあり〉、TANPOPO 4644.10〈茎をもいで外に一日干し、子どもが吹いて鳴らして遊ぶ〉、

CYANPONPON 5695.61 <昔、遊びの中で使った>、  
TANPOKO 6652.77 <花と茎を塩漬にして叩き合っ  
て首をおとす遊びを tampokowtji とやった>など、こ  
の植物が子どもに親しまれたことを示す注記がある。

たんぽぽの語原を、柳田国男は『野草雑記』の中で鼓の  
音と関連させている(『重修本草綱目啓蒙』にこの植物を  
越中の国でツヅミグサと言うとあること、歌物語の中に、  
摂津の鼓の滝で「津の国の鼓の滝に来てみれば川べに咲  
けりたんぽぽの花」という歌を作ったという話があり鼓  
とたんぽぽがとりあわせになっていること、を引いてい  
る)。この説は、すでに『東雅』にみえ「或人の説に、此菜  
一名を白鼓丁ともいへば(『和爾雅』などにあるらしい  
——『古事類苑』——)、タンホ、の名あり。タンホ、と  
は、鼓声をまなびいふなりといふ」とある。さらに続け  
て「如何にやあるべき、タンホ、は、此と彼とにして、  
呼ぶ所を合せ云ふに似たり。タンとはタナの転語也。  
ホ、とは此物一名また字々丁(『和爾雅』などにあるらしい  
——『古事類苑』——)といふなり」とある。『大日本国  
語辞典』『広辞苑』には、すみれをさす「つづみぐさ」や、  
「つづみこぐさ」の見出しがある(出典はない)。しかし、  
どうもたんぽぽをいくらがめても、鼓(の音)と関係づ  
けることはむずかしく思われる。古い何らかの名があっ  
てそれが、次第に鼓(の音)との間で類音牽引がおりこ  
むずびついたのであるまいか。『東雅』に「タンとはタ  
ナの転語也」とあるのは、柳田が「タナの方は今は痕跡  
も無いが」というにしても、一考に価するものと思われ  
る。

## 242. どくだみ(葎菜)

「どくだみ」は、琉球に本来自生せず、そのためであろ  
う「無回答」の地点がほとんどである。それ以外の地域で  
も「無回答」の地点があちこちに点在していて、同じよ  
うに、実物がないことを示しているようである。

全国に分布している語についてみると、空色で示した  
ドクダミ類、桃色で示したジュウヤク類、茶色で示した  
ニュウドオ類などのように病氣・医療に関すると思われ  
るものと、それ以外のものとに大別されるようである。  
これらの分布を大観すると、既刊の『日本語語地図』の多  
くの項目と同じように、東日本が比較的単純な分布であ  
るのに対して西日本、特に中国・九州はかなり複雑な分  
布様相を呈している。

全国にもっとも広く分布しているのが空の符号を与え  
たドクダミ類である。このなかの DOKUDAMI に、  
<併用処理の原則>を適用した。ドクダミは「毒を矯む」  
または「毒を止む」であるとする考えがあるが、その説明  
がドクダミ類のすべての語形と必ずしも結びつくとは言  
えないようで、小地域ごとのこまかい変種がかなり多  
い。DOKUDAMI のように語尾の母音が I となる  
語形は全国に広く分布しているが、DOKUDAME,  
DOKUDABE, DOKUDANE のように最後の母  
音が E となる語形は、東日本よりも西日本に多く分布  
している。また、DOKUDABI が秋田・山形およ  
びその周辺に、DOKUTABI が岐阜に、DOKU-  
DABE が岐阜およびその周辺などに、そして DOK-  
UDANI はほとんどが新潟に、それぞれほぼまとま  
って分布している。凡例の DOKUDAN から DODDA-  
NSU までは、主として九州に分布するが、そのうちの  
円形べた符号で示した DOKUDAN は、新潟にもひと  
つのまとまりをもっている。6505.60(滋賀)の ZYUKU-  
NABE, 6484.43(香川)の ZYUUNA(GUSA),  
6481.56(広島)の ZYUUNANSOO は、それぞれ次  
に説明するジュウヤク類に接した地点に見られるところ  
から、それとの混交形と考え、符号の形を共通にした。

桃の符号を与えたのがジュウヤク類である。この中に  
は、凡例の YAKUYOOGUSA から DEBOKUSA  
までのように、語形としては直接ジュウヤクとつなが  
らないものがある。これは、ジュウヤクが「葎菜」の音読と  
も、また 10 種の効用があるための「十薬」とも説明され  
ることがあり、そのことと関連させて種々の病気の治療薬  
としての意味をもつと考えられるものをこの類に含めた  
ためである。この類は近畿・島根・広島、四国、大分など  
に連続した分布がみられ、また東京およびその周辺と対  
馬にそれぞれ小さなまとまりがみられるほか北海道から  
琉球まで 1, 2 地点ずつ点在しているが、全国的にその  
ほとんどの語形が ZYUUYAKU であって、それ以外で  
は三重に ZIN'YAKU, ZINNYAKU が、関東、対馬  
に ZYU UWAKU が多少まとまってみられる程度であ  
る。6462.52 の YAKUYOOGUSA と 6442.80, 6451.79,  
6452.83 の YAKUBYOOGUSA とは、地点が接近し  
ているので相互に関連があらうし、6452.83 の YAKU-  
DAMISOO はその近くにドクダミ類の DOKUDA-  
ME(KUSA), DOKUDANISOO があるのでそれと  
の混交形と考えられる。6511.49 の HYAKUYAKU

は、ジュウヤクを「十葉」とする意識からの転成語であろう。5584.57の YAITOGUSA は「灸につかう草」であろうし、6581.52の DEBOKUSA については、＜できもの(デンボという)をなま焼きのこの植物で吸い出すから＞という注があった。

赤の符号を与えたのがジゴク類である。『総合日本民俗語彙』に、ジゴクソバについて「この草の根が深く、地獄のそばから生えてくるからとも言われている」とある。ジゴク(地獄)との関連で大分の6地点と6452.98, 6472.05, 7343.14, 8315.89にみられる SIBITOGUSA をこの類に含めた。この類のうち福島・茨城・栃木・千葉にまとまって分布し、青森・秋田・岩手のそれぞれの一部にもみられるものは、ほとんどが ZIGOKUSOBA であるが、この語の後部分の SOBA は、おそらく「どくだみ」が「蕎麦」の形状にやや類似していることからつけられたものであろう。

橙の符号は、「河童」と「蛙」の意味を含むものに与えたが、「河童」と思われる意味を含む GARAPPAKUSA から GAWAROOKUSA までは、ほとんど鹿児島にまとまっている。「この花が咲く頃にガラッパ(河童)が海から上り、小雨の夜陰に渡る」(『総合日本民俗語彙』)という言い伝えが、この地域に古くからあるらしい。「蛙」の意味を含むものとして、千葉に KAEROPPA, GERUPPA, ANGOPPA が、静岡に KAEROPPA, GAEROPPA が、福岡に WAKUDOGUSA が、それぞれ小さくまとまって分布している。そのほかに、5538.50(富山)に GYAWAZUGUSA, 6413.29(鳥取)に GEEKOKUSA, 6450.45(広島)に KAARUGUSA, 7356.55(大分)に BAKUDOGUSA, 8310.87(鹿児島)に DONKOGUSA などがみられる。6643.15に＜蛙を殺してその上にかけると生き返る＞という注があったが、同じようなことは、主として東日本地域で、カエルッパなどの語を「おおばこ」の意味に使う際言われているらしいので、その関係に興味が引かれる。なお、「かえる」については218図を参照されたい。

紺の符号は、さほど広い分布領域をもっていないものに与えた。このうちで、一類としてまとめることができそうなものとして HEBIKUSA から ZYAKO(KUSA)までのものがある。福島から茨城にかけてみられる HEBIKUSA, HEBISU については、5712.88に＜蛇の頭にその葉の形が似ているのでこういふ＞とある。参考になろう。八丈の KUZINAKUSA, 7461.23

(高知)の KUCINAITADORI は、「蛇」の異名クチナワとの関連でこの類に含めたが、八丈では「蛇」の意味のクチナワを使っていないので問題はあろう。なお『全国方言辞典』をみるとクチナオバナが「ひるがお」の意味として島根で、クチナゴオロが「彼岸花」の意味として山口で、クチナワノシタマガリが「彼岸花」の意味として鳥取で使われている。また、241図「たんぼぼ」にクジナなどが信州を中心に分布している。何か関係があるろうか。熊本・大分・宮崎・鹿児島に凡例の ZYAKOROSI から ZYAKO(KUSA)までが分布しているが、8332.59の Z(Y)AKUSA に＜薬草(やっくさ)の詠り＞と書ききされてるように、桃の符号の類の語形と関連するものもあろうか。

茶の符号を与えた類は、「癩病」など皮膚病と思われる意味を含むものである。『総合日本民俗語彙』に、ニュウドグサについて「この地方でニュウドウは癩のこと。彼岸花もニュウドウハナといい、臭い疣もニュウドウイボというから、この草が悪臭を持っているところからの命名らしい」とある。あるいは、この植物に触れると皮膚病になる感じがする、ということかもしれない。凡例の NYUUDO(O)GUSA から TEKUSARE(BANA)までが「癩病」に係る語であり、このうち、もっとも広い分布領域をもつものが中国西部から九州にかけて連続し、愛媛(7401.60)にもある NYUUDO(O)GUSA である。それ以外の語形と地点を示すと次の通りである。MUUDOOGUSA 7311.68, BOOZUGUSA 6567.86, 6656.31, 7420.91, KATTAE(GUSA) 5462.29, 5463.12, 5463.64, 5463.73, DOSUNKUSA 4741.92, 4751.42, NARIPPOOGUSA 6471.59, 6471.99, KANZINGUSA 7386.55, KOZIKIKUSA 7335.34, KOZIKKOROSI 7335.93, TEKUSARE(BANA) 6436.60, 6455.88, 6551.20, 6609.05。『全国方言辞典』によれば、テクサリ(グサ)、テクサレ(バナ)が、近畿から中国にかけての地域で「彼岸花」の意味として用いられている。なお『らい俚言考』(長島愛生園)という文献があり、「癩病」を意味する諸種の方言が載せられている。参考になろう。6458.40の HIZENGUSA のヒゼンは、皮膚病の一種の「皮癬」であろうが、『全国方言辞典』では、愛媛で「やえむぐら」の意味で使われているという。関連があるろうか。

草の符号を与えたものは、次の緑の符号の類とともに「悪臭を発するもの」の意味を含む語と考えられる類であ

る。この類は、全国のかかなり広い地域に分布しており、しかも、ひとつの語形が、必ずしもある地域にまとまって分布してはいない。このうち比較的まとまった分布をもっているものは、青森から秋田にかけての INUNOHE であるが、遠く、岡山・広島、長崎・熊本などにもみられる。KUSAIKUSA から KUSABERA までは、「臭い」の意味のクサイまたはクサを語形に含むとしたもので、青森から沖縄までの広い地域に点在しているが、必ずしも全国的に連続していたものの残存ではなく、各地域で独自に成立したものもあろう。ただ 6538.46 の KUSARI は、茶の符号の類との関連も、ありそうである。しかし、KUSAIBO や KUSAGI(NA) に接した地点なので、この類に含めた。6454.88, 6464.23 の WAGOGUSA のワゴは「腋臭」であろうし、凡例の HEPPIRIGUSA から ITACIGUSA までは「屁」に関連するものであろう。このなかで 6433.34 の INUNOKAKEBANA と 6547.24 の USINOHUTAE は正確な意味が不明であるが、分布などからこの類に入れた。

緑の符号を与えた類は「悪臭を発するもの」のうち「尻拭い」あるいはそれと関連ある意味をもつとしたものである。草の類が全国に散在しているのに対して、この類は、ほとんど中国西部・四国西部・九州東北部にまとまっている。大分の (O)SYOOYA(DON)NOSIRINUGUI の (O)SYOOYA(DON) は「庄屋」と考えられ、7356.06 の OSYADONNOSIRINUGUI も同類とみることができようが、＜オシャドンはホシャドン(祝人)だろう＞という注も参考になろう。6379.74(広島)の ZYORONOSIRINUGUI に接して、ZYO(O)RO(O)GUSA が広島・山口にまとまって分布し、また KEESEEGUSA が 6379.67(広島)、6379.74(広島)にみられるので、これらを「女郎」「傾城」と並べてみることでできよう。とすれば 7365.25(大分)の KEESEEGUSA に接してまとまってみられる KIISII(GUSA)も、「傾城」と考えてよかろう。7357.64 の GOZYENOSIRINUGUI は「盲女」と関連があろうし、7333.75 の ETTANOSIRINUGUI は「いやしい階層の人間」を意味するエタ、7343.17, 7344.30 の BIKITANSIRINUGUI は「蛙」の意味のビキタンを含むものであろう。

以上述べた類以外のものを紺で示したが、そのうちあるまとまった分布をもっているもの、あるいは何らかの説明が可能なものについて触れてみる。GANEGUSA、

GANIGUSA が埼玉、岡山・広島、高知に点在している。『らい俚言考』によれば「癩病」の意味でガンニャが長崎で、ガネが鹿児島で使われているし、『全国方言辞典』ではカニが長崎で「嬰兒の吹出物」の意味で使われている。いずれも地域が異なるので直接のつながりを見るのはむずかしからう。TOBERA(GUSA)は九州北部および南部に分布領域をもっているが、別種の植物をもさしうる表現である。そのほか他の植物となんらかのつながりをもっていると思われるものとしては、「甘藷」の葉との類似で、7370.16 の KICUNEBACIRI(狐入里)、7301.67, 7302.71, 7413.29 の IMOGUSA, 7257.94 の IMONOH, 7346.58, 7413.89, 7415.85, 7423.12 の KAIRAIMOGUSA 7361.17, 7363.85 の IN(I)GARAIMO などがある。ただ『全国方言辞典』でイモが「あばた」として用いられている地域があるので、この草が病氣・癩病などと関係するところから、それとの関係も、考慮すべきかもしれない。また、「いたどり」をタジナと言う地域の 6481.94 に INUTAZINA がある。薬草名とつながりがあるものとしては、1761.74, 5678.59, 7312.69, 7333.51 の GENNOSYOOKO, 2712.33 の SENHURI, 7318.04 の MIKOSIGUSA(げんのしょうこ)がある。鹿児島の TOKOKUSA, TOKUMUSIGUSA は「南京虫」と、7400.15, 7410.57 の NOMITORIGUSA は「蚤」と、0294.66 の HYAANUMIKUSA は「南京虫」と、0265.96 の SIRANUNKUSA は「虱」と、それぞれ関連すると思われるが、除虫剤としての用途を示すのであろう。なお 6377.11 の GOZESOO は、緑の符号で示した大分の GOZYENOSIRINUGUI と関連するものであろうか。

その他語形としたものの地点および語形は、次の通りである。[pi:pi:kusa]0256.89, [guso:gusa]1233.61, [hotaru:gusa]4653.02, [kutsugusa]6480.91, [hoppugusa]6482.52, [tanara:i]6532.93, [tabakogusa]6571.15, [mmakuwazu]7470.72, [gamejiro:gusa]8248.18。

以上概観した語の分布からみると、ドクダミ類が全国に広く分布したあと、主として西日本にニュウドウ類、ジュウヤク類が、主として東日本にジゴク類が分布したように思われる。文献でみると、『和名抄』『蜻蛉日記』にはシブキが出ていて、それが古い語と見られるが、地図にはこの語はまったくみられないので既に消滅してしまったとも考えられる。ただ、ジュウヤク類とシリヌグイ



類が、音の多少の類似からあるいはシブキと無関係ではないかもしれない。シリフキがあればいっそう近づくが、それはない。言語の地理的分布と文献にあらわれる語史との関係、あるいは地域社会の生活と「どくだみ」との結びつきなど、さらに多面的な考究が必要であろう。

### 243. すぎな(杉菜)

本図と 244 図「つくし」とは相互に関連があるので、地図・解説ともに参照されたい。語類のまとめかた、符号の色や形の与えかたについても、両項目を統一した原則で処理してある。なお、両図ともに見出しの数が多くなったので、音声的変種は、かなり大まかにまとめた。また、243 図では SUGINA に、244 図では CUKUSI に＜併用処理の原則＞を適用した。

音声的変種や語形のまとめかたについて、243 図・244 図を通じての原則を述べておこう。

まず、語中語尾の [g] などの扱いについて。語中語尾のカ行子音が規則的に有声化したために生じたと認められる [g] は、これを見出し語形として K と表示することを大原則とした。ただし、243 図・244 図において空を与えたツクシ類の中には、その由来・語原が必ずしも明白でない語形が多く、そのために見出しを K、G のいずれにすべきか判断に苦しむ場合が多かった。そこで、それぞれの語類、語形ごとに、その音声的内容やその分布などを考慮して分類原則を立て、特に、スギナ類とツクシ類とは異なる処理原則を適用した。すなわち、スギナ類については、[g] [ɣ] [ŋ] [ˈg] [ˈɣ] [ŋg] [ŋŋ] などを、地域にかかわらずこれらをまとめて G で表示した。たとえば、[sɯgina], [sɯɣina], [sɯŋina], [sɯrgina], [sɯɾina], [sɯŋŋina] などは、すべて SUGINA に含めた。スギナの語原が「杉菜」であるとするれば、東北などにおけるスギ～の G 部分の音声は概して [ŋ] であるはずである(1 図・2 図参照)。ところが、243 図について秋田・山形・宮城などに [sɯgiː] のような [g] のものが若干認められた。しかし、[sɯkina], [sɯkɪna] のような [k], [k] の語形は全国的に報告されていないので、上記の [g] 音は、有声化現象とは別の性格のものとして扱った。このほか、243 図についてみると、秋田・山形に [sɪgina] 3733.22, [sɪŋina] 3792.96, [sɪgina] 4701.14 のような音声がみられる。これらは、この地図では G としてあるが、西日本の、たとえば高知の入りわ

たり鼻音を伴う [ŋ] のように、共通語などの [g] に規則的に対応するものとは違う性質を持つものかもしれない。以上の スギ～の語形の G 部分の子音が東北の一部で [g] や [ŋ] となる理由については、なお検討を要しよう。この問題は、スギナなどスギ～の語形の語原を考える場合にも考慮すべき対象であると思われる。なお、秋田には [sɪŋina] など、[ŋ] の前の母音が鼻音化しているものも多数あった。

そのほか、長野に [suina], [suinaː] が集中的に分布する。これらは [sɯŋina] に隣接しており、音声的にも両者は近いとみられるので、[suina] は SUGINA に含め、[suinaː] は SUGINA～に(たとえば [suinaːmbo]) は SUGINANBO(O) に含めた。

空を与えたツクシ類における CUK～, ZUK～, CUG～などの見出し語形の K、G 部分の内容について述べると、原則的に、東北や関東の一部など、語中語尾のカ行子音が有声化する地域の [g] [k] は、K と表示し、それ以外の地域の [g] は G と表示した。また、[ŋ] [ˈŋ] [ˈŋg] [ŋg] などは、地域にかかわらず、これらをまとめて、G と表示した。たとえば、東北の [tsɯgɯji] は CUKUSI に含め、[tsɯŋɪkusa] [tsɯŋɪkusa] などは、地域にかかわらず CUGIGUSA に(GUSA 部分のまとめかたについては後述する)、[tsɯŋginoko] は CUGINO-KO に含めた。北海道および関東の有声化地域と非有声化地域との境界付近の地点における語中語尾の [g] については、28 図「あかい」などを参考にして処理した。

ただし、次に掲げる地点の [g] は、分布その他を考慮して、上に述べた原則を適用しなかった。まず、243 図における宮城の 4735.42 の内容は ツギクサ、山形の 4639.69 の内容は [tsɯgimatsɯ] であった。これらは、原則的には、それぞれ、CUKIGUSA, CUKIMACU とすべきところであるが、分布から判断して両者の [g] を、[k] の有声化と認めず、それぞれ、CUGIGUSA, CUGIMACU とした。また、244 図における長野の 5623.85 の内容は [dzɯgɯjimbo] であったが、付近に分布するものは [dzɯkɯjimbo] [dzɯkɯjimbo:] などであり、[dzɯgɯjimbo] は上の 1 地点のみであって、しかも、長野北部には語中語尾のカ行音などの有声化現象がみられるといわれるので、これを ZUKUSI(N)BO(O) に含めた。さらに、244 図における福岡の 7351.09 の [zɯgibonsan], 7351.68 の [zɯgibo:n] も、これを G として分出せず、両者とも ZUKI(N)BO(O) に含めた。

福岡における [g] は、地域的有声化現象と無関係であろうが、隣接する ZUKU(N)BO(O) などとの関係を考慮し、さらに、全体の見出し数の制約もあって、この処置を採ったのである。

次に、スギナ類の SU の部分の内容には、[suw][sũ][sī][jī][jī][jī] などを含めた。ただし、[ji:na][jina][sī:na][sīna]、スナ、スナは、これらをまとめて SI-(I)NA とし、同様に、[ji:na~] などは SIINA~(243 図の SIINABOTABOTA, 244 図の SIINABOOZU など) とした。これらは、原則的には SU(U)NA, SU-UNA~ などとすべきであったかもしれないが、内容の多くが [ji:na][jina][sī:na][sīna] などであり、スナ、スナなどは比較的少数であったためである。以上の処置に準じて、[suwna(~)][šinna(~)] などは、まとめて SINNA(~) とした。ツクシ類のシの部分の音声にも、[jī][jī][sī][sī][sũ] などが認められた。これらは、まとめて SI と表示した。

次に、空の符号を与えたツクシ類の見出し語形の CU の部分、および、ZU の部分 (ZUKUSI, ZUKU~, ZU-KI~ などの) の内容についてのべる。CU には、[tsu][tsũ][tsī][tsi][tsi][tsi][tjī][tjī][tjī][tjū][tjũ][tjū] 等を、ZU には [dzī][dzī][dzū][du] 等を含めた。244 図について、それぞれの内容の分布を述べると、[tsu][tsũ] や [dzū][dzũ][zu][zũ] などが、内容の大部分を占めつつ、ほぼ全国に分布するほか、[tsī][dzī] などが、北海道(0737.94)、青森(多)、秋田・宮城・山形、福島(4773.15)、新潟、富山(5538.63)、島根(6421.82)に、[tsi] が富山(5548.58)に、[tjū] が青森に、[tjī] が富山(5549.55)に、[tjī][dzī] が秋田(3760.93)、山形(4609.54)に、[tjī][dzī] などが北海道(0840.33)、岩手(3767.18)、山形、千葉(5699.89)、長野(6600.97)、静岡(6640.29)、富山・石川、福井(5574.68)、岐阜(5568.22)、島根、熊本(7374.75)、鹿児島に、[tjū][tjũ][dzū] が宮城(4743.95)、滋賀、福岡に、[tjū][tjū][tjū][tjū][tjū][du] などが大分・福岡、高知に集中するほか、宮崎(8335.11)、愛媛(7460.30)、徳島、奈良(6563.84)、滋賀(6505.60)、石川(5566.95)、山梨・静岡、伊豆の利島(6667.81)と三宅島(6698.20)、北海道(1708.05, 1778.45, 2703.18) にそれぞれ見られる(地点番号を記さなかった県は、その県に当該内容が2地点以上分布するものである)。

また、ツクツクシ、ツクズクシ、ズクズクシなど、語

中に反復形を含む語形に関しては、後部分について、〜ツクと〜ズクなど、無声音と有声音とを分出せず、たとえば、ツクツクシとツクズクシとはこれをまとめて1つの見出しとして、CUKUCUKUSI~CUKUZUKUSI のように表示した。内容が無声音のみの語形の場合は、たとえば、CUKUCUKU のように、内容が有声音のみの場合は、たとえば、ZUKUZUKUSI のように表示した。なお、語中の Z の内容には、[dz] などの有声音のほか、[ts] などの有声化した音や、[~dz][~dz̥] などの鼻音化した有声音を含めた。

この処置に対して、たとえば、東北など語中語尾のズなどが規則的に鼻音化する地域の [~dz][~dz̥] などは、[dz] などとまとめて Z と表示し、語中語尾のツなどが規則的に有声化する地域の [dz] などは、[ts] などとまとめて C と表示する方法や、[ts] と [dz] と [~dz], [~dz̥] を、それぞれ、C, Z, ~Z のように分類する方法なども考えられるが、全体の見出し数に制約があるため、上記の処置を採った。[ts] と [dz] と [~dz], [~dz̥] のそれぞれの分布については、244 図の解説で触れる。

なお、243 図と244 図とは、それぞれの内容に応じて見出しを決めた。したがって、たとえば、243 図は CU-KUCUKUBOOSI, 244 図は CUKUCUKUBO(O)SI~CUKUZUKUBOOSI と表示してあるが、これは前者の内容がツクツクボオシ的なもののみであるのに対し、後者は、ツクツクボシ、ツクツクボオシ、ツクズクボオシなどをまとめたものであることを示す。

次に、243 図、244 図の見出し語形には、CUGIGUSA などのように、後部分に ~GUSA を表示した語形と、SUGINA などのように、~GUSA を表示していない語形とがあることについて述べる。すなわち、この2枚の地図について、内容にグサ(クサ)をもたない語形がかなり含まれている場合には見出しに ~GUSA を表示せず、内容の大部分が ~グサ(〜クサ)の語形の場合には、見出しを ~GUSA とした。たとえば、243 図の CUGIGUSA は35地点に見られるが、4773.15 の [tsī~gī] を除いて、他の地点は、すべて ~グサまたは ~クサを接尾しているのに対して、243 図で全国に広く分布する SUGINA は、ほとんどが ~グサ(〜クサ)を接尾せず、~グサ・~クサが接尾するものは計61地点「スギナまたはスギナグサ(スギナまたはスギナクサ)」などとカードに記入してあるもの、3地点を含む—にすぎなかった。なお、たとえば、~グサ(〜クサ)をもつ語形

ともたない語形がそれぞれ1地点ずつの場合には、見出しに～GUSAを表示していない。また、内容が～クサのみの場合にも、見出しは～GUSAとしてある（たとえば、243図のMACUNEGUSAは8341.46の1地点であり、その内容は[matsunekusa]であった）。

以上、243図・244図を通じて、語形のまとめかたに關する原則のうち、主なものについて述べた。なお、それぞれの見出し語形に含まれる諸語形、音声的変種の具体的内容について詳しく知るためには『日本言語地図資料』を見なければならない。

次に、243図について、それぞれの語類および語形の分布をみよう。

全体を見渡すと、かなり明瞭な分布が見られる。赤を与えたスギナ類、緑を与えたマツ(バ)グサ類、空を与えたツクシ類、香川とその周辺に分布する茶を与えたホオシ類、紺で示した語形のうち、四国から東九州にかけて比較的勢力のあるトオナ類が目立つものであり、ほかに、紺で示した比較的勢力の小さい諸語形が全国に点在する。なお、HIGANBOSINOTAKETANO 7440.72は、244図で橙を与えたヒガン類であるが、243図では1地点にしかみられないので、色の節約のため、紺を与えておいた。

赤を与えたスギナ類は、語頭にスギをもつ語形を中心に、それらと関連がある語形をまとめたものである。スギナ類の中では、SUGINAの勢力が大部分を占めるが、そのほかに比較的まとまった分布を示すものとして、SUINAおよびSI(I)NAがあり、両者は相互に関連をもちつつ、青森東部から岩手東部にかけて集中するほか、新潟西部・長野北部・岐阜北部・福井北部などの本州中央部にややまとまりがみられ、その他の地点にも散在する。これらSUINAおよびSI(I)NAは、隣接して分布するSUGINAの中の[suɲina], [suɲina]（後者が長野に集中することは、すでに述べた）などと密接な関係をもつものと考えられる。

スギナには、一般に、「杉菜」の漢字をあてており、その語原に關して、東北地方に[sugina]や[sūgina]などが現われることがあるにしても、特に異を唱えるべき確証はない。ただし、全国に散在する空の符号を与えたツギ～の語形は、スギナなどのスギ～の部分と通ずる所があり、両者が歴史的になんらかの交渉をもっているのではないかと疑われる。分布からははっきりとは言いにくい、もし、ツギ～がスギ～よりも古いとすれば、ツギ～が

一種の類音牽引、あるいは民間語原によりスギ～に変化したとする想像も可能である。この点については今後の検討をまちたい。また、SUGINAE, SUGINAEBOOSI, SUGINAEGUSAKOのような「杉苗」にもとづくとと思われる語形が、秋田・山形・宮城・新潟、山梨・静岡、石川・福井・滋賀・京都・大阪・奈良・三重・和歌山、広島、宮崎の各地に散在し、どちらかといえば辺地に分布する傾向が見られることから、あるいはスギナエがスギナよりも古いのではないかという感じもする。しかし、この植物を杉の苗と見立てる現象は、ことにスギナを基礎とすれば、各地で独自に起こる可能性も強い。6358.87のSUGINE, 3762.85のSUGINEKOはスギナエから変化した語形であろうか。

緑の符号を与えたマツ(バ)グサ類は、語頭にマツをもつ語形をまとめたものである。これらは近畿北西部から四国南部・九州にかけて広がっているほか、やや離れて紀伊半島東部と隠岐に、さらに、北海道の1848.24, 1893.10, 青森の2790.41にも見られる。中国地方のスギナ類は、マツ(バ)グサ類にかこまれている。このことは、あるいは、かつての中国でのマツ(バ)グサ類の分布は現在よりも広がったことを意味するのではないかと考えられる。また、紀伊半島東部と近畿西部のマツ(バ)グサ類は、かつては連続していた可能性もある。もしそうであるとすれば、スギナ類とマツ(バ)グサ類との歴史的関係については、かつては、大まかには、東日本にスギナ類、西日本にマツ(バ)グサ類が分布していたが、その後、次第に前者が後者を侵略して現在に至ったという仮説が成り立つ。しかし、中国地方のスギナ類の内部にマツ(バ)グサ類がまったく見られない点や、隠岐にあるマツブキの伝播経路については別に考究すべきであることなど、なお、検討すべき点があろう。紀伊半島東部のものも、あるいは、四国から伝播したもので、近畿西部のものとは直接には関係がないのかもしれない。北海道の1848.24のMACU(BA)GUSAは、被調査者の父親の出身地が大分県南海部郡、母親の出身地が香川県三豊郡であることと、また1893.10のMACUNAは被調査者の両親ともに徳島の出身であることと関係がある。前者については、南海部郡にも三豊郡にも地図上にはマツ(バ)グサ類が見られないが、このことは、あるいは一昔前にはマツ(バ)グサ類の領域が現在よりも広がったことを意味するのかもしれない。青森の2790.41のMACU-BOは内容が[maɖziɓo]であったため、一応この類とし

たが、被調査者の両親とも同地点生まれであり、被調査者によその土地で生活した経歴もないので、この語と西日本のマツ(バ)グサ類との関係の有無については判然としない。なお、この地点は、244 図も同じ語形である。

マツ(バ)グサ類の中では MACU(BA)GUSA の領域が最も広く、ほかに、MACUNA が SUGINA と、MACUNOTO(O) が TOONA と、それぞれ隣接して一定の領域を占め、また、MACUBUKI が兵庫・岡山と隠岐に見られる。MACU(BA)GUSA は、主としてマツバグサとマツグサとをまとめたものであるが、マツバグサの勢力のほうが強く、マツグサは兵庫、高知西部にまとまっているほかは、マツバグサの領域中に散在するにすぎない。MACUNA および MACUNOTO(O) は、それぞれ、MACU(BA)GUSA と SUGINA または TOONA との混交によって生まれたものと思われるが、そのうち MACUNOTO(O) については後に述べるところがある。

空を与えたツクシ類は、ツクシの語形を中心として、ツク・ツキ・ズク・ズキ、およびツギ・ツゲなどを内部にもつ語形、およびそれらに関連があると認めた語形をまとめたものである。244 図と比較すると、この 243 図では、ツクシ類の勢力が著しく弱い、中で、南奥羽・新潟・関東、近畿などに、CUGIGUSA, CUGICUGI, CUGINOKO, CUGINANBO(O) など、CUGI~ の語形が広く分布していることが目立つ。このツギは、この地図がスギ(ナ)の地図であることと関連して、多く見られるのであろうか。おそらく「継ぎ」にもとづく語形で、子どもがこの草を切ったり継いだりして遊ぶことに由来しよう。「この草を継ぎ合わせて遊ぶから」「継いで、どこからつないであつたか当てる遊びをする」などの注記も各地で見られる。大きな円形符号を与えた、CUG-IHO(DOKKO), CUGIMADOOKKO, DOKO(DOKO)CUIDA, DOKKO, CUGICUGIDOOKO, DOKOCUIDANOKI などのドッコ、ドオッコ、ドコ、ドオコも、「何処」にもとづくものであろう。6720.23, 6721.33 の CUITACUITA, 6541.52 の OTTAKACUITAKA, 4731.15, 4762.90 の CUNAGIGUSA, 6662.38 の CUUNAGI, 5750.30 の CUNAGINBOO も、同様の発想にもとづく語形と思われる。また、CUGE(N)GUSA, CUGECUGE など CUGE~ を持つ語形も、分布からみて CUGI~ の変化形であろう。736 2.42 の CUGUNA も、これらの仲間と考えて良から

う。6385.98 の ZUGIGUSA については、周囲に Z で始まる語形が見当たらないが、これは、CUGIGUSA などの語形と、244 図の福岡などに見られる ZUKU(N)-BO(O) の両方に縁のある語形かもしれない。6519.67 の ZUGINA は、その周囲の SUGINA・CUGINA、および 244 図で同地域に分布する ZUKU(N)BO(O)SI などの Z~ と関係がある語形であろう。5629.23, 5760.24 の CUKINANBO は、分布からみて隣接する CUGINANBO(O) と関係があると思われる。6480.41 の CUKINBOO のツキは、隣接する CUGIGUSA のツギとも関係があろう。以上に述べた CUGI~・CUGE~ など「継ぐ」という動詞に由来すると考えられる諸語形は、CUKUSI など、それ以外のツクシ類と、別類のものとすべきだとする考え方もあろう。しかし、244 図に見られるように、両者は語形・分布ともに近接しており、相互に密接な関係があると思われるので、これらをひとつの類にまとめた。

243 図と 244 図とを比較すると、244 図では CUGI~, CUGE~ などの語形が著しく少なく、また、244 図で CUGI~・CUGE~ などの語形が見られる地点では、243 図も同じ語形を使っている(すなわち、「つくし」と「すぎな」とを区別しない)場合が多く、注目される。このことは、CUGI~, CUGE~ などの語形は、本来「すぎな」を呼ぶものとして広がったものであることを意味するのではないかと考えられる。しかし、一方、注記を見ると、この草を継いで遊ぶ風習は「すぎな」だけではなく、「つくし」についても行なわれており、さらに、後に述べるように、古くは「つくし」と「すぎな」を区別していなかったことも考えられるから、命名の当初、「つくし」「すぎな」のいずれを CUGI~・CUGE~ などと呼びはじめたか、などについては、断定を避けるべきであらう。

ツクシ類のうち、CUGI~・CUGE~ など以外の諸語形については、243 図では分布がまばらである。これらは、「つくし」を意味する語形として広まったのではないかと考えられるが、すでに CUGI~ の類について述べたように、これらについても、元来「つくし」「すぎな」のうちいずれの名であったかについては、断定を避けた。そのうち、CUKUSI, CUKUZUKUSI, CUKUSINBO(O), ZUKUZUKUSI, CUKUCUKUBOO, CUKIBO(O)SI, CUKUCUKUYOSI, ZUKIZUKIGUSA, ZUKU(N)BO(O), ZUKIBO,

ZUKUZUKUBOO, ZUKUZUKUBOOSI, ZUK-(K)UBE の諸語形については、それらが分布する地点の多くは 243 図と 244 図とが同語形である。すなわち、これらの地点では、「すぎな」と「つくし」とを区別せず、これら空で表示したツクシ類の語形を用いていることになる。なお、7341.47 および 7342.76 では、243 図・244 図ともに ZUKU(N)BO(O) で、見出しの上では同形であるが、それぞれの内容を見ると 7341.47 では 243 図が [dzukubo:gusa], 244 図が [dzukubo:], 7342.76 では 243 図が [zukuwbogusa], 244 図が [zukuwbo] であって、実際には「すぎな」に～グサを付けて「すぎな」と「つくし」とを区別していることがわかる。すでに述べたように、内容に～グサを持つものと持たないものの両形を含む場合には、見出しの～GUSA を表記していない場合が多いので、このような結果になった。

また、次に掲げる諸語形は、本質的には、「すぎな」と「つくし」とを区別せず、ツクシ類の語形を用いている地点と類似の性格のものであるが、両者を区別しようとした結果、ツクシ類の語形に補足的要素を付加したものといえる。これらは、「つくし」と「すぎな」の 2 項目を続けて質問した(「つくし」を先に質問している)ために、被調査者が無理に区別しようとして回答した、個人的・臨時的な性格の強いものかもしれない。以下、語形と地点番号を列挙する。

CUKUSINOKO 2734.05, CUKUSINOKI 7313.68, CUKUZUKUSINOKI 5620.16, CUKUSINOKI 6489.27, CUKUCUKUSINONA 5529.77, CUKUSINOOBASAN 6458.08, 6533.31, 6542.58, 6553.83, 6563.43, CUKUZUKUSINOHUUKETAMON 4663.06, OKKICUKUSI 1761.74, ZUKUSINOZII 4653.02, ZUKUZUKUSINOKI 6552.71, CUKUCUKUNOEDA 6566.51, CUKUCUKUBOOSINOKI 6552.03, CUKUCUKUNOOBASAN 6563.84, 6572.97, CUKUCUKUBOOSINOOYA 6510.65, ZUKUBONOKI 7351.06, ZUKUBONOKI 7332.46, ZUKUBO(O)NOOYA 7320.59, 7342.12, ZUKUNBOSINOTAKEN 6552.46。

上記の地点では、たとえば、2734.05 では、244 図が CUKUSI, 6566.51 では 244 図が CUKUCUKU である。これらに準ずるものであるが、5538.50 では「すぎな」を ZUNBENOOYA, 「つくし」を ZUNBENOKO と区別して呼んでいる。なお、先に述べたことであ

るが、243 図と 244 図との各地点の語形が実際には同じ形であっても、両図の見出しがやや異なった形になっている場合があるので注意されたい(逆に、両図を通じて同一見出しとなっているが、具体的内容の異なる場合のあることも、すでに述べた)。たとえば、5620.16 の見出し語形を見ると、243 図が CUKUZUKUSINOKI, 244 図が CUKUCUSI~CUKUZUKUSI であるが、その内容は、前者が [tsukuzukufinoki], 後者が [tsukuzukufi] である。また、7332.46 では、243 図が ZUKUBONOKI, 244 図が ZUKU(N)BO(O) であるが、それぞれの内容は、[dzukubonoki] と [dzukubo:] である。CUKUCUKUSI~CUKUZUKUSI はツクツクシとツクズクシなどを、ZUKU(N)BO(O)は、ズクンボオ・ズクンボ・ズクボオ・ズクボなどをまとめたもので、その見出しとなっている。

次に掲げる地点では、243 図・244 図とも ツクシ類の語形を用いており、しかも～ノコ・～ノキなどの補足的要素によらずに「すぎな」と「つくし」とを区別しているものである。これらも、「つくし」と「すぎな」の区別を無理に聞き出そうとした結果生じた、いわば個人的・臨時的な区別で、「つくし」「すぎな」の両方、もしくはいずれか一方の意味に、2 語形が併用されている場合に近い性格を持つものかもしれない。以下に、地点と、それぞれの図における語形を記す。

地点番号	243図(すぎな)	244図(つくし)
3689.38	CUKUSINBO(O)	その他。その内容は [sũmĩre]
4665.87	CUKUSA	CUKUSI(N)BO(O)
6438.33	CUKUSI	CUKUSI(N)BO(O)
6526.04	CUNCUN	ZUKU(N)BO(O)
6540.52	CUNCUN	CUKU(N)BO(O)SI
7352.61	CUKICUKIGUSA	ZUKIBOOSI
7374.75	CUKUBO	CUKUSIBOOSI

なお、CUNCUN は、6540.52 のツンツンと 6526.04 のチュンチュングサとをまとめたものであるが、これらは、244 図で上記地点の周辺に見られる CUKUCUKU~の語形の変化形と思われる。244 図における 6514.25, 6525.05, 6525.75 の CUKUCUKUBO(O)SI~CUKUZUKUBOOSI の内容を見ると、それぞれ、6514.25 が [tʃukutʃukubɔji], 他の 2 地点が [tʃukutʃukubɔ:] であるから、6526.04 のチュンチュングサのチュはこれらの [tʃu] とつながるものであろう。7352.61 の

CUKICUKIGUSA は、あるいは、先に述べた CUG-I~ の語形の方と関係が深いかもしれないが、分布からは何とも言えない。

さらに、次の地点では、243図がツクシ類の語形、244図が、主として243図に分布するスギナ類またはマツ(バ)グサ類の語形であって、いわば、「すぎな」と「つくし」の呼び方が一般と逆になっている例であるが、これらも、もともと、「すぎな」と「つくし」とを区別していない地点に、各種の語形が進出した結果、一種の混乱が生じたものとみられる。

地点番号	243 図(すぎな)	244 図(つくし)
3772.73	ZUK(K)UBE	SUGINA(NO)KO
6359.62	CUKUSIBOO-	SUGINA
	ZU	
6520.50	CUKUCUKU-	MACU(BA)GUSA
	BOOSI	

このうち 3772.73 の SUGINA(NO)KO の内容は [sũŋinakko] であるが、これは、「つくし」を「すぎな」の子と見たての命名らしいので、他の2地点の例とは、やや性格が異なる。

4618.49 では243図「すぎな」が CUKUZUKUSI, 244図「つくし」が「無回答」であるが、これは、「すぎな」と「つくし」を区別せず、同語形で呼ぶ地点に準ずる性格のものと言える。なお、「無回答」の性格については、244図の解説で触れるところがある。

以上、ツクシ類のうちのいくつかの語類・語形について説明したが、凡例のツクシ類の最後に並べた CUNEGUSA, CINNAGUSA, CUNKIIZYOO の各語形は、ツクシ類とすることにやや疑問があるものである。このうち、3771.29 の CUNEGUSA はツゲグサの変形かもしれない。8355.23 の CINNAGUSA は、周辺に分布する MACUNA と、244図で同地域に見られる CUKU~・CUKI~ の語形との混交形から変化した形であろうか。7350.44 の CUNKIIZYOO の KII は、244図でその地点に隣接する BOOZUBOKKII, BON-ANBOKKII の KII と関係があろう。これらの KII は、7351.06 の ZUKUBONOKI の KI と同様に「木」であるかもしれない。ZYOO は敬称の「さん」にあたるものであろう。

茶を与えたホオシ類は、「法師」にもとづくと考えられるホオシを中心として、それと関連がある語形をまとめたものである。詳しくは244図の解説を参照されたい。

これらは、香川に比較的多く見られるほか、兵庫・鳥取・岡山・広島、愛媛、大分に点在し、また、新潟の 5615.74、北海道の 1719.38 にも見られる。ホオシ類は244図に広く見られるものであり、ツクシ類の場合と同様の事情で、その一部が243図にも現われているとみられる。すなわち、243図のホオシ類のうち、HOOSI, HOOSO, HOOSIKO, GEPPUSI の各語形は、それが分布する地点の大部分が244図も同形であり、HOOSINOKI, HOOSINOOYA, HOOSIKONOH, HOOSIKONOOBA(SAN), HOOSIKONOOYA, HOSIKOBONNOOYA, HOSIKOBONNOTAKETAN, KOOBOSI の各語形については、244図では、おおむね、上記語形の下線部分が現われていると言ってよい。

次に掲げる各地点では、見出しの上では243図と244図とが同形のように見えるが、具体的内容を見ると、「すぎな」の方に〜クサ・〜グサを付けることによって「すぎな」と「つくし」とを区別している(ツクシ類についても同様の例が見られることはすでに述べた)。

地点番号	243 図(すぎな)	244 図(つくし)
6472.58	ホオシノクサ	ホオシ
6474.03	ホオシグサ	ホオシ
6494.08	ホオシコグサ	ホオシコ
7402.42	ho:jikoguusa	ho:jiko

新潟の 5615.74 の GEPPUSI は、244図を見ると GIPPOSI と隣接しており、POSI・PUSI の部分がホオシと関係があるのではないかと考えてこれをホオシ類としたが、分布からみて、中国・四国のものと直接結びつくものではなからう。なお、5625.32 では244図が GISIGISI, 243図が GISIGISINOH であるが、GEPPUSI・GIPPOSI の G は、この GISIGISI の G と関係があるのではないと思われる。ギシギシは別の植物「羊蹄」の和名であるが、それが「杉菜」の名に転用されたのであろうか。北海道の 1719.38 の HOOS-IKONOOYA — 244図は HO(O)SI(NO)KO — は、被調査者の両親が愛媛県宇摩郡の出身であることによる。

最後に、紺を与えた語形のうち、主なものについて説明しよう。

まず、トオナ類(TOONA・CYOONAGUSA)が九州北東から四国東部にかけて分布する。福岡から大分西部などにかけて見られる MACUNOTO(O)・SUGI-

NOTOO のトオも、TOONA に連続するものである。

トオナのトオは「蔭のとう」など、植物の花茎を指す「莖(塔)」にもとづくものと思われるが、現在では「唐」を意識する者があるかもしれない。トオが「莖(塔)」に由来するものとすれば、トオナが「すぎな」を意味する語形として、命名の当初から存在したとするのは不自然であるが、244 図を見ると、新潟・福島・栃木に SUGINA(BOKO-BOKO)NOTOO, 福島に SUGITOO, 岐阜に SUINANOTOO, 熊本に MACUNOTOO, 徳島、対馬に MACUNANOTOO, 熊本に MACUNAEN-TOO というように～ノトオの語形が全国に点在し、このことは、～ノトオが「つくし」を意味する語形として各地で生まれ得ることを示していると考えられる。このことから、現在 TOONA が分布する地域のどこかで、おそらく「つくし」を意味する語形として～ノトオが(トオナより先に)生まれ、それに対するものとして「すぎな」をトオナと命名したと考えたい。243 図で九州北部に見られる MACUNOTO(O)・SUGINOTOO は、TOONA を生んだ原形(に準ずるもの)とも考えられるが、分布から見て、逆に、これらを TOONA とマツ(バ)グサ類、もしくはスギナ類との混交によって後に生まれたものとも考えることもできる。

トオナ類は、分布から見て、マツ(バ)グサ類の後に広がったのではないかと考えられるが、それが一定の勢力をもつに至った背景には、スギナ類とマツ(バ)グサ類の衝突があり、それが両類以外の語形であるトオナを広げた、と言えるかもしれない。

BONBONGUSA 以下は、比較的少数地点に分布する語形である。その中でやや分布地点が多い語形をあげると、HO(O)TARUGUSA が石川、静岡、島根・広島・山口の各地に散在し、MANOSATO, SATOGUSA, UMAGUSA, UMANO(O)KOWA(MESI), TONEKO(N)GUSA のような「馬」に関係のある語形、またはそれとつながりのある語形が、青森の3地点のほか、山形、栃木、神奈川、山梨の各地に、UDONGUSA, SO(O)MEN が秋田、福島、岐阜、奈良に、ZIGOKUGUSA, ZIGOKUNOKAGICURUSI, ZIGOKUNOKANE CURUSI, ZIGOKUNOKAGECUBUSI のような「地獄」に関係のある語形が、九州南部に集中するほか、石川、愛知、静岡、神津島、千葉、栃木、岩手の各地にそれぞれ見られる。ホタルグサ(螢草)は「露草」の別称であり、これが「杉菜」の名称に用

いられる事情は判然としないが、文献によると「露草」の古名はツキクサであったというから、「杉菜」「土筆」の名称にツキ～の語形が用いられていることとの間に、何等かの関係がありそうである。静岡の 6650.12 および 6650.94 の注記に「螢籠につめる」とあったが、これは一種の民間語原であろう。「馬」に関係のある語形は、杉菜(土筆)が馬の好物であることにもとづくようで、青森の 2784.63 では SATOGUSA について「馬にとって美味だからこう言う」、山梨の 6605.84 では UMANO(O)-KOWA(MESI)について「馬の赤飯の意」の注記があった。TONEKO(N)GUSA のトネコは、「子馬」の意であると思われる。204 図を参照されたい。高知の 7441.19 の KOMACUNAGIGUSA には隣接する MACUNA との関係を考慮して符号を与えたが、202 図「おうま」を見ると、この付近に KOMA が見られるから、KOMACUNAGIGUSA も、コマ(牡馬)・ツナギグサ(繫ぎ草)と現在意識されているだろう。SO(O)MEN については、奈良の 6573.17 に「継ぐとそうめんのように細長くなるから」の注記があった。参考になろう。ジゴク～の語形は、杉菜の長い地下茎に着目した命名と思われる。ジゴク～は 244 図にも少し見られるが、244 図における岩手の 3746.09 の ZIGOKUNOKAGICUKE についての注記には「地獄のような深い所から出て来る自在かぎ」とあった。なお、ジゴク～の語形は 242 図「どくだみ」にも見られるので参照されたい。『全国方言辞典』によれば、宮崎県延岡で落花生をジゴクマメと言うが、これも杉菜の場合と類似の発想による命名であろう。

ところで、ウマ的語形、ウドン・ソオメン、ジゴク～などの比喩的語形は、共通の発想基盤を有する地域内では各地で独自に生まれうると考えられる。しかし、一方、この地図上には点々としか見られなくても、児童語・卑語・俗語のような別のレベルで調べれば、連続して現われる場合もあると思われる。栃木の 5648.96 で ZIGOKUNOKAGICURUSI について「悪く言う時の言い方」との注記があったことが参考になろう。方言資料収集について、いろいろな問題を提起している。

## 244. つくし(土筆)

本図と 243 図「すぎな」とは相互に関連があるので、地図・解説ともに参照されたい。音声的変種や語形のまとめかたについての主な方針は、243 図の解説で触れた。

全国的な分布は、一見して明瞭であるとは言いがたい。その理由は、ひとつには、空を与えたツクシ類の中で各種の語形が混在する傾向を示すことによるが、その中で、CUKUSI(N)BO(O), CUKUCUKUBO(O)-SI~CUKUZUKUBOOSI, CUKUCUKUBOOZ-U, ZUKU(N)BO(O), ZUKU(N)BO(O)SI, ZUK(K)UBE などは、比較的まとまった領域をもっている。

ツクシ類は、分布から見て、茶を与えたホオシ類や、橙を与えたヒガン類よりも、古いと考えられる。文献の上ではツクツクシ(ツクズクシ)が古いと言われており、一方、小林好日は「土筆の系譜」の中で、東北における分布などから、ツクシのほうがツクツクシ(ツクズクシ)よりも古いと考えているが、本図の分布からは、両者の新古は判然としない。しかし、一般的には、ツクツクシのような反復形はツクシなどをもとにして後にできた形と考えた方が自然のように思われる。もっとも、CUKUCUKUSI~CUKUZUKUSI は、CUKUSI の領域内に混在する傾向が認められるから、両者は改まった表現とくだけた表現、あるいは大人の表現と子供の表現のような、異なったレベルのものとして併用されつつ広がった可能性もある。また、現在分布する、CUKUSI の中には、現代標準語として新たに広がったものが相当数含まれている可能性のあることにも、注意しなければならない。すなわち、古くから使われて衰弱しかけていたツクシが、標準語としてのツクシの応援を得て息をふきかえた場合もありえよう。CUKUSI と他の語形との併用地点で、CUKUSI に「共」「新」「希」「上」などの注記がある地点も、全国に約60地点見られたが、それらは＜併用処理の原則＞を適用して本図から削除してある。北海道は、大部分が CUKUSI であるが、これなどは、いわゆる北海道共通語の一例と言えよう。

ツクシの語原については定説がない。『大言海』には、「つくづくし」について、「突くヲ重ス、突出ノ意」とあり、柳田国男は『野草雑記』で「みをつくし(澤標)」に語原を求め、小林好日は「土筆の系譜」の中で、ツクシはトクサ(木賊)と語原が同一であろうとしている。これらのうち、小林の「とくさ」説は、杉菜がとくさ料の植物で形態も類似していること、ツクシとトクサとは子音部分が同一であって語形が類似していること、橋正一『全国植物方言集』によると、杉菜を愛媛でトクサと呼び、一方、木賊を大分でツギクサ、山口でツクシ・ツ

クシンボと呼ぶなど、杉菜と木賊の呼称が各地で混同されているらしいことなどの点から、魅力的な説のように思われるが、この問題に関しては、なお検討を要する。『日本言語地図』には、243 図・244 図を通じてトクサの語形は登載されていないが、北海道の 0873.94 では、質問番号 194 (土筆)の質問文に対して「トクサですか」の反応があった旨注記があった。このトクサはその性格が不明なので本図に採用していないが、この地点は 243 図でも「無回答」であり、この地点で杉菜・土筆・木賊の3者を区別せずトクサと呼んでいるのかもしれない。なお、この地点の被調査者の両親の出身地は、父親が「新潟県磐船郡磐舟町」、母親が「函館市相生町」とある。

243 図の解説でも触れたが、CUKUCUKUSI~CUKUZUKUSI は、①[tsukurtsukufji]などのように第3音節の子音が無声音のもの、②[tsukurdzukunftji]などのように第3音節の子音が有声音(非鼻音化)のもの、③[tsukur~dzukunftji]などのように第3音節の子音が鼻音化した有声音のもの、以上の3者をまとめたものであるが、それぞれのタイプの分布を見ると、東北各地には①②③が混在し、その他の地域には①と②が見られる。仮に CUKUCUKUSI を非連濁形、CUKUZUKUSI を連濁形と呼ぶと、東北における②のタイプは、そのいずれであるかが必ずしも判然としない(東北などでは語中語尾の「ツ」などは規則的に有声化するはずであるが、語彙的あるいは個人的に例外がありうる)。また、東北以外の地域でも、連濁形の②と非連濁形の①が混在する傾向が認められる。ただし、CUKUCUKUBO(O)SI~CUKUZUKUBOOSI の語形は、第3音節の子音が有声音[dz][z]の地点となる 0990.97, 6408.72, 6620.53(この地点は[ts]と[dz]との併用)の3地点のみで、他の地点ではすべて無声音であった。なお、凡例を見ると、ZUKUZUKUSI, ZUKUZUKUBO(O), ZUKUZUKUBO(O)SI などのような Z ではじまる反復語形はすべて連濁形であって、ズクツクシ・ズクツクボオ・ズクツクボオシのような形は 243 図・244 図を通じて全く見られないことが注目される。

ツクシ類は、語頭が C の語形と Z の語形とに大別でき、243 図・244 図を通じて、若干の例外はあるが、C の語形には、線符号のうち直線的符号、面符号の小符号、Z の語形には、線符号のうち鉤形符号、面符号の大符号を与えて、両者を区別するよう努めた。また、CUKUSI・ZUKUSI, および CUKUSI・ZUKUSI を語中



に含む語形には、原則として単純な直線および鉤形符号もしくはぬき(的)符号を与え、それ以外の語形には、飾りのある直線の符号および鉤形符号もしくはべた(的)符号を与えた。また、CUGIGUSA など CUG~を含む語形およびそれらと関連があると認めた語形には円形符号を与えてある。

語頭が C の語形全体と、語頭が Z の語形全体との間には、全国的に見て、一定の境界があるとは言えない。ZUKUSI は CUKUSI と、ZUKUZUKUSI は CUKUCUKUSI~CUKUZUKUSI と、それぞれ混在する傾向が認められる。ただし、ZUKU(N)BO(O), ZUK(K)UBE など、個々の語形の中には、一定の領域をもつものが存在する。また、大まかには、愛知から岐阜・長野北部・新潟、佐渡、山形北部・秋田南部にかけての地域に、各種の Z~の語形が比較的多いと言えそうである。これら Z~の語形が生まれる要因の一つとして、ツクズクシのような連濁形の存在が考えられる。すなわち、ツクズクシのツクが脱落してズクシが生まれ、それが他の C~の語形に影響を及ぼした場合があると考えるわけである。

ツクシ類の中で、CUKUSI(N)BO(O), CUKUCUKUBO(O)SI~CUKUZUKUBOOSI, ZUKU(N)BO(O)などの語形に含まれる後部分 ~ボ(オ)と ~ボ(オ)シとの関係についてみよう。243 図・244 図を通じて、~ボ(オ)シの語形、および茶を与えたホ(オ)シ・ホ(オ)シ(ノ)コなどには三角形、~ボ(オ)の語形には尻尾のついた三角形の符号を与えてあるが、~ボ(オ)シの語形は、近畿とその周辺地域に大きなまとまりを見せるほか、福島東部から宮城南部にかけ、岡山から鳥取西部にかけて、山口西部、熊本などに一定の領域が見られる。これらのうち、熊本のものは主として CUKIBO(O)SI であり、その他の地域のものは主として CUKUCUKUBO(O)SI~CUKUZUKUBOOSI である。なお、愛知から岐阜にかけて、ZUKU(N)BO(O)SI がややまとまって分布している。また、~ボ(オ)の語形は、岐阜から関東にかけての地域と九州の北寄りに集中するほか、全国に散在する。これらのうち、九州北西部と岐阜・愛知のものには ZUKU(N)BO(O)が多く、その他の地域のものは、大部分が CUKUSI(N)BO(O)である。

以上の分布から、~ボ(オ)シと ~ボ(オ)との歴史的関係について決定的な判断を下すことは困難である。こ

では、ふたつの考え方を示しておこう。

ひとつは、ツクツクボオシなどのシが脱落してツクツクボオが生まれ、さらに、ツクツクボオとツクシなどとの混交によってツクシンボオなどが生まれたとする考え方である。後部分について言えば、~ボ(オ)シのシが脱落して~ボ(オ)が生まれたことになる。この場合、近畿以東の分布についてみると、近畿の~ボ(オ)シと関東などの~ボ(オ)との中間地域である岐阜・静岡西部・長野・愛知などで、~ボ(オ)シと~ボ(オ)が混在すること、具体的な語形について見ると、福島、富山・石川・長野・岐阜・滋賀、和歌山、福岡・大分・宮崎に見られる CUKUCUKU(N)BO(O)は、いずれもツクツクボオシ・ツクシンボオ・ツクシの3者にほぼ隣接していること、さらに、愛知では ZUKU(N)BO(O)SI と ZUKU(N)BO(O) とが隣接していることなどが、その論拠になりえよう。なお、ツクシ類以外の語形については、四国西部などに HIGA(N)BO(O)SI がややまとまって分布しており、その周辺に HIGANBO(O)が見られることが参考になる。この HIGANBO(O)も、高知や宮崎などの CUKUSI(N)BO(O)を生む母体の一つと考えられる。

これに対して、もうひとつの仮説は、CUKUSI(N)BO(O) など~ボ(オ)の語形は、~ボ(オ)シの語形と無関係に、たとえば CUKUSI(N)BO(O) の場合はツクシにボ(オ)を加えて生まれたとする考え方である。この場合のボ(オ)は、「さくらんぼ(う)」「おこりんぼ(う)」「けちんぼ(う)」などのボ(オ)や、さらに、202 図「おうま」・203 図「めうま」・204 図「こうま」・206 図「うし」・207 図「おうし」・208 図「めうし」・209 図「こうし」などに見られる(~)BO(O)(~)とも関係があるかもしれない。この考え方に従えば、各地に見られる CUKUCUKU(N)BO(O)の中には、ツクツクボオシとツクシンボオとの混交によって生まれたものがありうるとしなくてはならない。

以上に述べたふたつの仮説は、結論としていずれか一方を選ばねばならぬというものではないかもしれない。おそらく、これらの語形の歴史的関係は、地域によって異なるのではないと思われる。たとえば、ツクシから直接ツクシンボオが生まれたとする後者の仮説は、関東などでは、あるいはありうることかもしれないが、全国的に見て、ツクシンボオはおおむねツクツクボオシなどに隣接する傾向が認められることから、地域によっては

両者もまた密接な関係にあるとみななければならない。また、上記ふたつの仮説はあくまでも例であって、詳細に検討すれば、地域的には、さらに多くの別のケースがありえよう。たとえば、主として近畿の CUKUCUKUB-O(O)SI ~ CUKUZUKUBOOSI の領域中に見られる CUKU(N)BO(O)SI などが音位転倒によって CUK-  
USI(N)BO(O)に変化した場合がありうるし、ツクツクボオシ > ツクツクボオ > ツクシンボオの過程を経ずに、ツクシとツクツクボオシとの直接の混交、あるいは中国・四国などでは、ツクシとホオシもしくはヒガンボオズなどとの直接の混交によってツクシンボオが生まれることもないとは言えない。

ツクツクボオシと茶を与えたホオシとの関係については、ホオシが先に生まれて、それとツクツクシなどとの混交によりツクツクボオシが生まれたものか、あるいは、ツクツクボオシからホオシが生まれたものかが問題になる。分布からは、ホオシはツクツクボオシを分断する形でまわっているから、ホオシの方が新しいと言える。ツクツクボオシのボオシは「法師」にもとづくと思われるが、あるいは「帽子」などとの関係も考慮すべきかもしれないし、さらに、次に述べるように、蟬の一種である「つくつくぼうし」との関係も考えられる。小林の「土筆の系譜」によれば、古くはこの蟬は「くつくつぼうし(くつくつぼうし)」と呼ばれており、それが土筆のツクツクボウシ、あるいはツクツクボに引かれて語形変化を起こしたとしているが、あるいは土筆の呼称と蟬の呼称とが相互に影響し合い、蟬のクツクツホウシが土筆のツクツクシなどに引かれてツクツクホウシに変化すると並行的に、蟬の～ホウシの影響で土筆のツクツクシからツクツクホウシ(ツクツクボウシ)が生まれたのかもしれない(その場合、擬声語とはいえ蟬の～ホウシの民間語原があらためて問題になろう)。

茶を与えたホオシ類は、「法師」にもとづくと考えられる HO(O)SI を中心に、それと関連があると認めた語形をまとめたものである。ボオズ・ボンサマなども、ホオシとの意味上のつながりからこの類に含めた。後部分に～ボオシ・～ボオズを含む語形も、ツクシ類・スギナ類・ヒガン類・トオナ類に含めたもの以外は、この類に含めた。また、SUUDENBOO 6610.77 は、DE(N)-BO(O)SI (岡山に3地点)と、GIBOO 2750.43 は GI-BOOSI 6419.69 との語形の類似からここに含めておいた。HO(O)SI はホオシとホシなどをまとめたもので

あるが、6403.62 の [hofi] 以外はすべてホオシ的なものであった。なお、[ɸu:ji] 7346.63, 7355.81, 7365.51 も HO(O)SI に含めてある。また、HO(O)SI(NO)KO は、ホオシコ・ホシコ・オホシノコなどをまとめたものであるが、ホシコが7地点あり、それ以外は大部分がホオシコであった。

なお、ボオズ・～ボオズなどの語形は全国に点在するが、これらの中には、ツクツクボオシなど～ボオシの語形との関連で生まれたものも、含まれていよう。

橙を与えたヒガン類は、四国西部の HIGA(N)BO-(O)SI を除いて、大部分が HIGANBO(O)ZU である。これらはホオシまたは～ボオシなどをボオズと言い換えることによって生まれたのではないかと思われる。ヒガンは土筆の伸びる時節に関係があろう。なお 7430.80 の HEEKANBO は、語形および分布からこの類に含めてある。茶を与えた 6613.97 の GANBOOZI は、ヒガンボオズと語形が似ているが、分布がかけ離れているので、ヒガン類から除いた。241 図「たんぽぽ」に、地点は違いますが、GANBOOZI が現われる。

ホオシ類とヒガン類との歴史的関係は分布からは判然としないが、愛媛付近では、一時代前には HIGANBO-(O)ZU であったところに、HO(O)SI(NO)KO があとかから侵入したように見える。もっとも、四国西部に見られるものは、ヒガンボオシコではなくてヒガンボオシであるから、この地域に侵入した語形は実はホオシであって、ホオシとヒガンボオズが衝突した結果、一方ではヒガンボオシが、他方ではホオシコが生まれ、そのホオシコが広がって現在の分布を示すに至ったのかもしれない。なお、大分北部に CUKUCUKUBOOZU がまわって分布し、それに隣接する 7354.23 に HIGANBO-(O)ZU が見られるが、このことは、ヒガンボオズの勢力がその付近まで及んでいたことを示すものと思われる。

赤を与えたスギナ類、緑を与えたマツ(バ)グサ類、紺を与えた語形のうちのトオナ類は、本図では分布がまばらであって、これらは 243 図にツクシ類の語形が散在することと同じ事情によって、本来は「すぎな」を意味すべき語形の一部が本図に現われているとみるべきであろう。ただし、243 図の解説で述べたように、これらの語形が分布する地点の多くは「つくし」と「すぎな」を区別せず同一名称で呼んでおり、また語形の上でなんらかの区別をしていても、それは本質的には両者を区別しない地点

と類似の性格をもつと考えられるが、分布から判断して、古くは「つくし」と「すぎな」とを区別しない地域が現在よりも広がったのではないかと思われる。さらに、東北部や九州南部などでは、「つくし」と「すぎな」を区別しない地域と「無回答」の地域が重なる傾向が見られるが、このような分布は、「つくし」や「すぎな」自体に無関心な地域に、各種の語形が、「つくし」「すぎな」のいずれを指すか不明瞭のまま伝播した結果かもしれない。青森の 2773.13 ではツクシを「新」とし、「古くは特に名がなかった」との注記があった。岩手の 3777.48, 3777.86 の両地点でも、ツクシを「新」としているから、これも同様の性格のものかもしれない。なお、注記によれば琉球には、この植物自体が分布しないらしい。

最後に、凡例の BO(N)BO(NKO) 以下の語形のうち、243 図の解説で触れなかった語形の中から、比較的まとまった分布を示すものについて述べよう。BO(N)-BO(NKO) は、ボボ 4666.99, ボンボ 3763.17, ボンボン 5604.28, ボボコサマ 4667.33 の 4 者をまとめたものである。長野の中部に見られる HEBINOMAKURA, MEMEZUNOMAKURA は、秋田・岩手、富山、徳島の計 6 地点に見られる HUDE(KO), 長野北部の KAMINARINOHESO, 富山の KICUNENOROOSOKU や石川の ROOSOKU, 新潟中部の NEKONOCYONBO などとともに、「つくし」の形状からの連想による命名と言えよう。キツネ～の語形は青森東部に KICUNEBIN が、またネコを含む語形は、青森に NEKOKI KO, 岩手西部に NEKOSUNCUKO, 島根東部に NENNEKO がある。なお島根の NENNEKO を答えた地点は 4 語形併用であり、CUKUSI 以外はいずれも珍しい語形である。幼児語・児童語・卑語などレベルを変えて調査すれば、より広い地域に現われるものが含まれている可能性がある。なお、HEBINOMAKURA は 237 図「かたつむり—その 2」にも見られるので参照されたい。また、『全国方言辞典』には、「蛇苺」をヘビノマクラという地域があげてある。秋田の 3689.75 の ZIZIKOBI の内容は [dzidzikōbi] であり、「乳首の意という」の注記があったが、付近に分布するツクシ類に含めた ZUK(K)UBE との関係を考慮して符号を与えた。民間語原により語形が変化した例であろう。

凡例に見られるように「つくし」「すぎな」をあらわす表現は多様であり、ここでは、そのごく一部についてしか触れることができなかった。一々の語形の検討について

は後日の課題としたい。

なお、「その他」に含めた語形は次の 11 種である。  
[berobero] 2781.58, [sūmire] 3689.38, テデッポボ 3795.19, [uzuruki] 4666.51, [to:ginoke:po] 4735.37, [dobodobo] 5606.83, ヤコノポッポ 7248.99, [ta<sup>m</sup>popo] 7339.27, [takambo] 7417.22, マンロク 7501.14, [mertatji] 1261.01。

このうち、岩手のテデッポボは、「土筆の系譜」で、フデ～の語形からフデッポのような形が生まれ、それと山鳩の鳴き声の呼称との類音牽引によって生まれたと推定している。同書によれば、「つくし」の呼称として青森にデデボボ・テデアバの語形もあるという。このテデアバについては、本図の ZI(ZI)BABA (2772.74 のジババと 6626.06 のジジババとをまとめたもの) などとの関連も考えられよう。なお、2772.74 のものには「こどもがこれを使ってする遊び」との注記があったが、遊びの内容は不明である。なお、240 図「すみれ」に ZIZIBABA などが、241 図「たんぽぽ」に TEDEPPPOPO などが見られるが、このことと、本図にスミレ・タンポポなどの語形が現われることとは関係があろう。また、212 図「ふくろう」にも TETEP(P)OPPO(O), DOTEPPPO の語形が見られる。

## 245. きのこ(茸・蕈)

地図の左下欄の質問文からもわかるとおり、この項目では食用茸と毒茸(以下、実際に「毒」はなくても、食用にしないものは一応「毒茸」としてまとめた)とを含めた、いわば「きのこ」の総称を求めた。ところが、地域によっては、必ずしもそのような「総称」の得られないところがあった。したがって、それら総称のないものについては、特別な符号をもって示した。凡例の最後に示した符号がそれである。以下それを説明しよう。

紺を与えられた小さな円形のべた符号の示された地点には、食用茸のほとんど、あるいは毒茸をも含めた茸のほとんどを包括する名称があるにもかかわらず、なおその全体称に含まれない特殊な茸の個別称があった。そこで、上で述べた全体称との併用という形で、そのほかにそのような個別称があるということを小円形符号をもって示した。具体的に、それがシイタケであるかマツタケであるかという点までは、考慮に入れていない。たとえば、香川の 6485.14 では、ハツタケという回答に、「た

だし、この場合マツタケだけは含まれない」という注があった。この場合のマツタケを、総称に含まれない個別称があるとして、ハツタケとの併用で示したわけである。

紺の小三角形の符号の示されている地点では、茸全体に対する総称も食用茸に対する総称もなく、毒茸に対するものがあるだけで、食用茸については、すべてそれぞれの種類の個別称を用いるという報告があった。そこで、それらの地点では、あとで説明する毒茸に対する総称との併用という形で、すべての食用茸は個別称で呼ばれるということを示した。具体的な名称が何であるかという点までは、考慮に入っていない。出雲・紀伊半島南部に多く見られるほか、宮城、九州、琉球などにも点存在する。

小十字形(ダガー)の符号はそれぞれの語形を表わす符号の右肩に付けて、その語形が毒茸だけの総称であることを示す。凡例では便宜上紺で示したが、地図ではそれぞれの符号と同色で示してある。たとえば、和歌山の7500.24では「総称なし<食用になるものはマツタケやシメジなど個別の名を用いる>、クサビラ<食用にならないものの総称>」という回答が得られた。そこで、クサビラに「毒茸の総称」という紺のダガー符号を付し、さらに、「食用茸についてはそれぞれの個別称を用いる」という紺の小三角形符号との併用として示した。

さらに、地点によっては、ふたつ以上の語形が併用され、それぞれの語形に、食用、毒の別が注記されているものがあった。それらについては、それらを各々の総称として採用し、毒茸の総称にはダガーを付けた。なお、併用の一方に毒茸という注があっても、片方に何の注もなかったり、あるいは総称という注のあるものについては、毒茸という注のあるほうを削除し地図には載せなかった。すなわち、無注のものも茸類の総称と認め(それを求めたのであるから——この認定が適切であったかどうかは別として——)、総称のみを採用したことになる。

この図は、第3集105図「ふけ」、131図「あか」、本集217図「うろこ」および、つぎの246図「コケの意味」の各図と関連するところが多いので、それらも同時に参照されたい。

この図に現われる方言形は、いくつかの類に分けられる。空で示したキノコの類、草で示したタケの類、橙のナバ類、緑のコケ類、それに紺で示したその他のものである。

空を与えたキノコの類は、おもに東日本に広い分布領

域を持つ。それ以外の地域では、近畿地方、中国山地、四国、九州南部にそれぞれ小さい分布領域を持つのみで、ほとんどまとまった分布を示さない。琉球には2地点見られるのみである。KINOGO、CUNOGOなど第3音節子音をGとして示したものの実際の音声は、ほとんど[g]であった。みな、キノコに対応するものと考えてさしつかえあるまい。なお、本集215図「とさか」にキノコの分布する地域がある。道南、青森・秋田などである。これらの地域では「きのこ」と「とさか」とが同音衝突を起こしているものと思われる。「とさか」の図にはまた、富山五箇山、九州五木などにもコケラ、ナバ等、「きのこ」に関連する語形が見られる。「きのこ」と「とさか」との間に歴史的に何らかの関連があったのであろうか。

草を与えたタケの類は、東海、近畿、中国東半、山陰、四国東半にかなりまとまった分布領域を持つほか、関東などのキノコの領域内、八丈、福島、富山東部、愛媛西南、大分・熊本などにも多少見られる。ほぼ日本の中央部にあると言える。『和名抄』など古い文献にさかんに見られるようであるが、分布としてはかなり新しい広がりを見ることができよう。DAKEは四国に見られる。DAGEは高知東端に1地点見られる。カードの表記は[daʔe]であった。この地域はガ行子音に[ŋ]の現われる地域だから、この[kɛ]は、ケにあたるものかもしれないが、一応このように表記しておいた。ちなみに、248図「たけ」の図ではこの地域はダゲではなくタケである。この地図でTAKEの分布する地域で考えられる「茸」と「竹」の同音衝突を回避する、ひとつの例であろうか。ハツタケは愛知に多く見られ、マツタケは近畿地方に多い。元来、個別の種類を指していた語が、総称として用いられていると考えられよう。各地方の特産種と関係があろうか。DOKUTAKEからMAGOSOMATTAKEまでは、みな毒茸の名と考えられる。始めに述べたような事情からここに載せたものであるが、何の注記もないものもある。

橙を与えたナバは、中国、四国の中部から西の地域に広く分布する。語形の変種は少なく、琉球にいくつかの変種が見られるだけである。琉球はほぼ全域ナバであるが、宮古にだけは見られない。第3集131図「あか」を見ると、この地域にナバが分布する。「あか」と「きのこ」との間に何らかの関係があることを示して。

緑を与えたコケは、岐阜・北陸・新潟にかけての地域

に連続した分布領域を持つほか、北海道にも数地点分布する。この項目の質問は、項目番号 079 であるが、これに先立って 077 では「こけというものはどんなもののことですか」、また 078 では「まつたけやしいたけなどこういうものをひっくるめて「こけ」と言うことはありませんか」という質問をそれぞれしている。これらに対して、この図で緑のあらわれる地域内では「茸のことである」、「言う」という回答が得られた。したがって、これらの地域では、この 079 の項目の質問に対しては、同じ回答が重なるので無回答としている地点がかなりあった。そこで、作図にあたって、特にコケについては、これら項目番号 077, 078 の回答をも加えて作図した。077 から採用した地点を挙げると、5517.78, 5536.99, 5538.50, 5538.88, 5539.43, 5547.96, 5559.51, 5564.76, 5565.12, 5566.95, 5567.46, 5568.57, 5574.42, 5574.79, 5575.55, 5575.93, 5576.60, 5577.88, 5578.27, 5579.10, 5584.22, 5584.57, 5585.09, 5585.63, 5586.56, 5586.70, 5587.74, 5588.78, 5588.81, 5589.30, 5594.37, 5595.89, 5597.78, 5598.53, 5598.67, 5599.41, 5599.75, 5620.80, 6503.66, 6504.01, 6506.55, 6507.48, 6508.36, 6509.38, 6509.43, 6516.15, 6517.31, 6517.65, 6518.30, 6518.87, 6519.43 である。078 のカードから採用したものは、6548.82 である。ただし、078 を質問するのは、「077 できのこのことだと言わなかったら」という条件があり、この地点の回答は誘導質問の色がかなり濃く、分布もコケの連続した分布領域から多少はなれて孤立している。興味ある点である。なお、コケ類に関しては 246 図「コケの意味」を参照されたい。

紺で示したもののうち、MIMI から MIMIGUI までは一類と考えられる。三宅、佐渡、能登、岐阜、兵庫北部、琉球に分布する。数地域に分かれて分布することから、古いものの残存とも考えられるが、きのこの形と人の耳の形とを同一視した表現であろうから（「茸」の字にも耳がついているが、その事情はよくわからない）、各地で独自に発生したとも考えられる。それぞれの地域における分布密度は、かなり高い。

次に、KUSABIRA から KUSABIRO までは一類と考えることができよう。SIBAHARI(兵庫)をこの類に加えてよいかどうか、明確でないが、語形の上に多少の類似点を認められ、クサビラの地域も近いので、凡例で KUSABIRO の次に置いた。クサビラは近畿地方を中心に分布する。タケ類と入りまじって分布する地域

もあるが、タケはクサビラよりは外側にも広く分布する（じつは島根西南端にクサビラが 1 地点あるが）ので、タケよりは新しい広がりと言うことができる。

近畿地方には、茸類一般の総称がなく、毒茸をまとめた総称はあっても（はじめに述べたように、地図上に小十字形を付して示したもの）、食用は個個に名を言うという地点がかなりある。また無回答という地点も多い。これら無回答のカードには、「総称はない」という被調査者のコメントの加えられたものも多く見られた。このことは、この地域では「きのこ」を総括する名称が存立しにくいことを示している。近畿地方に点々と見られるキノコも、総称のないことを補うために標準語を借用したことの現われかもしれない。地理的分布から見ると、この地域の、総称を持たず、毒茸の総称と、食用茸の総称あるいは個別称とに分けるという傾向は、新しく始まったものと考えられよう。クサビラは、文献によれば、元来「きのこ」一般を指していたと考えられるが（それ以前の「青物一般」というのは、ここでは一応措いておく）、それが、近畿地方でしだいに毒茸の方へ追いやられたものと考えられる。このとき食用の方を受け持ったのがタケ類、とくに、マツタケである。そのことが、近畿中央部にもタケ類が分布することの理由と考えられる。

SIMEZI 以下は個別的な分布である。シメジは、草で示したハツタケ、マツタケなどと同様に、個別名が、クサビラの場合とは逆に、総称として用いられるようになったものであろう。モダシは東南北部に見られる。～モダシとして複合語の中でも用いられるようである。ZAZ-ANBO, DOBOO, DOBU は山陰地方に見られる。KIINUBOOZĪ は八重山に見られる。KIN, KINR-UI は兵庫東部、徳島に見られる。無理に総称を答えようとして出した文章語であろうか。三重の KABI についても、同じようなことが考えられる。KAKKO は長野に見られる。大阪の DOKUSOO, 琉球の MANK-USU は毒茸という注のあったものである。

全体的にみて、タケ、クサビラは近畿を中心に広がったものと言うことができるが、ナバがかつて近畿にも分布していたかどうかについては、この図からは何とも言えない。キノコについても、中国・四国・九州などに見られるものが古いものの残存であるか、あるいは、標準語的なものを取り込んだものか、あるいは、タケとナバといった 2 つの類の接触による混乱を收拾するために採用されたものなのか、決め難いところがある。南九州

のキノコは、ちょっとみると残存かもしれないとも思われるが、琉球列島がナバ類であるから、古いものではないらしい。

## 246. コケの意味—第105, 131, 217,

### 245 図の総合図

この図は『日本言語地図』第3集 105 図「ふけ」、131 図「あか」、本集 217 図「うろこ」、245 図「きのこ」の4図に現われたコケ類の語(各図で緑の符号で示したもの)をとりだして1枚の総合図としたものである。コケおよびそれに類する諸語形が、どこで、どのような意味で用いられるかを地図に示したことになる。

凡例は、たて軸に各語形をとり、よこ軸に4つの意味をとった。「ふけ」、「あか」、「うろこ」、「きのこ」の順である。各語形には共通した形の符号を与え、各意味にはぬき、べた等の共通した特徴を持たせた。たとえば、KOKE という語形は円形符号で示し、「ふけ」の意味で用いられる場合には肉太の大きい円形、「あか」のときには中点のある大円、「うろこ」の意味で用いられるときにはぬき符号、「きのこ」のときにはべたの円というぐあいである。

それぞれの分布については、もとの4枚の図の緑類の分布と全く同じなのでここで改めてふれることはしない。各図を参照されたい。

さて、日本言語地図作成のための調査にあたっては、ここで「コケの意味」として図示した4つの項目を求める質問のほかに、じつは、作図はしなかったが、もう1項目「コケ」に関する質問をした。質問番号077の「こけというものはどんなものですか」という質問である(詳しくは、第1集付録『日本言語地図解説—方法』109ページを参照)。これによると、北陸などの茸をコケと言う地域および琉球を除く、ほぼ全国に、「苔」であるという回答が広く分布している。東日本には「うろこ」、西日本には「あか」、「ふけ」が見られ、その分布領域は本図などで示されているものと大差はない。このほか、東北、関東北辺、福井北半、高知東部などに、「低駄、ばか、うすのろ、たぬき」といった、一連の関連した意味を示すコケも見られたが、これらはもともとアクセントの異なる別語とも考えられるので、ここでは考慮に入れる必要はあるまい。琉球には、「コケという語はない」という回答がほとんどであった。「苔」は、『沖縄語辞典』で nuuri,

『八重山語彙』でヌーリィとあり、本土の「海苔」にあたる語が用いられているようである。「海苔」にあたる語を求めると、『沖縄語辞典』には Taasa に「海草の一種」という説明があり、『八重山語彙』には アーサとある。さらに、『沖縄語辞典』には moo?aaasa という語が見られ、「きのこの一種」という説明がある。ここでは、「海苔」と「きのこ」との間に何かつながりがあるということになる。これらのわずかの資料から、琉球全体がどのような語彙構造を持っているかどうかはわからないが、一応、琉球には「コケという語形はない」と考えてよいように思われる。北陸では、「苔」の意味でコケを用いるかどうかこの質問からはわからない。回答にまず「茸」が出てきてしまったからである。「苔」の意味でのコケの使用がわかるような質問を用意すべきであったかもしれない。なお、『全国方言辞典』によれば、「苔」をあらわす表現として、あおさ(千葉県君津郡清川)、こけら(岩手県気仙郡・秋田・山形・宮城・新潟県中魚沼郡・富山・石川県金沢・長野県上田・愛知・大阪府南河内郡・淡路島)、どけ(大分県南海部郡)、もく(富山・石川県江沼郡)もけ(京都・但馬)、やまやま(北飛驒)があるという。

以上がこの図に示した「コケの意味」、および、その他の資料のおおまかな説明である。これらの資料から、「コケの意味」の変遷のあとをたどろうとすると、なお、さまざまな問題、疑問点が生じ、積極的な結論へ到達することは容易ではない。

この図を一見すると、近畿地方には分布が見られず、東西に分布が分断され、あたかも、周囲論的分布のように見える。しかし、東側の多くは、「うろこ」あるいは「きのこ」を意味し、西側は「ふけ」あるいは「あか」を示すコケが大部分である。コケはたしかに東西に分断された形で分布するが、すぐさまこれを周囲論的分布とすることはできない。たしかに、「あか」を意味するコケは東側の「うろこ」の領域内にもいくつかの地域に分かれて分布し、西にはかなりまとまった領域を持つ。これなどは周囲論的分布と考えてよさそうであるが、一方、それぞれの地域で独自に他の意味から分化して生じたとする考え方も可能である。語形の変化、それもまったく新しい語形の採用については地理的分布もかなりの発言力があるが、意味の変化については、その効力にかなりの限界があると考えられるからである。さらに、この図の上に、「苔」を意味するコケの分布も重ねて考えなければならぬ。この図で何も分布しないように見える地域で

も、琉球を除いては、じつは、「苔」の意味でコケがかなり広く分布している(可能性がある)からである。

さらに、これら4つの意味を担うのは、コケ類の語ばかりではなく、その他の類の語も参加しているということを考慮しなければならない。たとえば、217図「うろこ」のところでも述べたように、九州南部から琉球にかけての地域では、「ふけ」と「うろこ」とを、どちらも、イコ、イリコ、イリキ、イイチなどと言い、語形の上で両方を区別しない傾向が強い。

このほか、217図「うろこ」の解説にもふれたように、これら4つの意味および「苔」に関連して、さらに「木片(コケラ)」、「屋根ふき用の板——こけら」などに関する資料も関係してくる。それらの資料を総合的に検討してはじめて、本格的に、コケをめぐる語彙の変遷のあとをたどることが可能となるのであろう。

## 247. まつかさ(松毬)

あらわれる諸表現を、前部分にマツを持つものと、持たないものの2つに大別することもできるが、凡例に示すように、ここでは主としてマツを除いた部分の語形や意味に注目して、類をまとめ、符号の色を与えた。方言量が多いので、かなり大まかにまとめ、しかも見出し語形に( )を多用した。

地図で、それぞれの色ごとに分類した各語類の分布を見ると、各地域にまとまりをもちつつ、しかも、ほとんどの語類が全国的にかなり広く分布している。

空の符号を与えたカサ類は、北海道から九州、沖縄までの全国に、広く分布している。このうち、MACU(NO)-KASA が、現代標準語形だからでもあろう、もっとも広い分布領域をもっている。この見出し語形の内容は [matsukasa, maʃʊkasa, madzūkasa, matsugasa, matsūnasa, mazukasa(4688.45, 4770.62), mazugasa, matsungasa, matsukkasa, ma:tsukasa(7266.34), mangasa(6357.74, 6356.98, 6394.43), makkasa, malkasa, matsunokasa, matsunogasa(4643.47)] などである。MA(A)CIKA(A)SA(A)に含めたもののおもな内容と分布地域とを示すと、[matsikasa, matʰikasa, maʃʊkasa, madzikasa, madʒinasa, madʒikasa]などが東北・新潟に、[matjikasa, matʃikasa, matsikasa, matʃigasa]が主として出雲に、[matʃikasa:, matʃikasa:, matʃikʰasa:, matʃinʃikʰa:-

sa:, matʃinukʰa:sa:, matʃigasa:]が沖縄にみられる。凡例 KAC(C)YA から MACIKAC(C)YA まででは、MACU(NO)KASA の分布に連続した東北部に、まとまって分布しているので、その単なる音変種ともみられるが、3721.37(秋田)の MACUKASIRA, 青森西部にまとまってみられる MACIKASIRA や、別の意味であるが、『全国方言辞典』に採録されている、秋田県鹿角郡・岩手県九戸郡などで使われる「稲の殻」の意味のカッチャなどとも、あるいはつながりがあるだろうか。1・2地点のみにみられるもののなかで、4609.54の KASACIBORI は、秋田・山形・福島などでカサツブリが「かたつむり」としても使われていることと、無縁ではなかろう。形状に類似がある。6616.93の MACUKASO, 6506.03, 7325.84の MACUKASE, 8361.28の MACUKOSA, 8352.29, 8361.31の MACUKESA, 7470.29の MACUKUSA などは、ほぼ MACUKASA の分布のなかに孤立してみられる。このうち、6506.03の MACUKASE には<マツカサではない>という注があったが、標準語形進出以前の地方的変種が採録された可能性があると同時に、なにかカサと区別しようという個人的意識が働いて、新しくできたものもあるかもしれない。

赤の符号を与えたものは、BO, BON を含む語形、またはその変種と考えたものを主としているが、そのほか、意味的にこれらと関連がありそうなものも、この類に含めてある。東北から九州まで、まばらではあるが広く分布しているのが、MACU(NO)BO(N)BO(N)である。[matsubobo, maʃʊbobo<sup>m</sup>, matsunobobo, matsunobomboN, matsubombo, matsūbombo, maʃʊbombo, madzūnobombo, madzūbombo, matsubomboN, matsumbobo]などの変種が含まれている。この BO(N)BO(N)については、4644.10の<ボボとは蕾のこと>, 4711.41の<ボンボは球形のもの>という注や、『全国方言辞典』の「丸いもの。たま。木の実。岩手・佐渡・富山・山形。」「木の実。茨城県行方郡・岐阜県養老郡。」「つぼみ。千葉県山武郡。」などと通じるものを見出すことができそうである。また、7440.69の MACUNOBABO についての<どんぐりのように丸々とした木の実を ba<sup>m</sup>bo という>という注、6422.93の MACIBANBAKO についての<パンバは球状のもの>, 岩手・宮城・福島・新潟などに分布している MACU(NO)BO(N)KO のうちの 4762.44

の〈松の実のひらかないもの〉などの注や、『全国方言辞典』にみられるボンコが福島で「たま」の意味、徳島で「蕾」の意味などに使われている事実も、参考になろう。マツカサ類が開いたもの、マツボボ類がまだ開いていないもの、といった区別も想定できるが、実物について中間的なものがあることなどから、結局、命名者、あるいは表現の使用者の対象のとらえ方が、具体的表現をきめる、ということになろう。なお、ボボ、ボコ、オボコなどの表現は、主として東日本のかなり広い地域で「赤ん坊」の意味で使われている。5695.47 と、熊本・大分・宮崎にまとまっている MACUBOOZU, MACUKASABO-OZU は、「坊主」につながるものであり、6531.53 の MACUNOBONCIKO の BONCIKO も、「坊主子」であろう。6646.74 の MACUKO(N)DOO は、語形に BO, BOO をもたないが、KO(N)DOO は「小僧」にあたりと考えると、意味の上からこの類に含めた。佐賀・長崎にまとまっている KONZUU, MACU(N)KONZU(U), MACU(N)KOOZUU についても、僧の字音がソウであることから(中平解の「松ぼっくり」『民間伝承 234』)にヒザコーズーが佐賀県鹿島市で「膝がしら」の意味で使われているとある)、「小僧」に通じる語形と認めた。なお、『全国方言辞典』によれば、コーズーが、大分・福岡・長崎・対馬などで「亀」の意味で使われている。なんらかのつながりがあるか。7360.92 の MACUNGO, 5668.51 の MACUKKO も意味的な関連から、この類とした。[matsukobofi, matsukkombofi] を内容とする MACUK(K)O(N)BOSI および MACUKO-BUSI が埼玉、福岡・熊本・大分に、MACUKOBO-RI が山形に、[matsukobo, madzūkobo, matsūno-kobo, madzūnokobo, madzūnokōbo, matsukombo, mat<sup>s</sup>ukombo, matsukombo:, mattsuykombo:] の変種を含む MACU(NO)KO(N)BO(O) が、秋田のほか、三宅、三重、山口、佐賀、熊本に、[matsukobu, madzūkōbū, matsūnokobū, matsunokombu] を含む MACU(NO)KO(N)BU が、岩手・秋田、八丈、福井、岡山・広島、大分に、MACUKOBE が滋賀に、MACUNOKIKONBO が八丈に、MACUNOKIKO-NBU が八丈に、[matsubufi, matsumbufi] を内容とする MACU(N)BUSI が新潟と利島に、それぞれかなり散在的に分布している。これらは、MACU(N)-BUSI を除いて、いずれも語形に KO(N)BO、または KO(N)BU, KOBE を含むこと、九州中北部でこ

れらの語形のいくつかが混在していること、伊豆諸島には MACUNOKIKONBO, MACUNOKIKONBU とともに MACU(N)BUSI があることなど、相互に関連性がみられるので、同類と考え同形符号を与えた。これらの中には、「拳」、「瘤」、「小法師」などにもとづくものがあるかもしれない。

茶の符号を与えたものは DANPO, TANKO, DANGO, TAMA など語形に含むものである。ほとんどが小数地点にみられるものであるが、MACU(NO)-DANGO のみが関東を中心に、福島、長野に広がりをもっている。山形に MACUDANPO が、島根に MACUKASADANBO, MACUNOKIDANBOO が、新潟に MACUNODENBO が、滋賀に TANKORO が、埼玉に MACUTANKO が、広島に MACUNOTONKO が、長野に MACUNOKINODANGO が、栃木、千葉に MACUNOTAMA, MACUNOTAMAKKO が、それぞれみられる。このうち、5698.91 では MACU(NO)DANGO を〈松の団子〉と理解しており、また、『全国方言辞典』によれば、ダンボが島根で「球状のもの」、千葉で「蕾」、デンボが茨城で「蕾」、静岡、三重で「椿の実」、タンコロが岐阜、奈良で「おたまじゃくし」の意味で使われているというので、「まつかさ」をあらわす表現がこれらと関連があるとすれば、赤の符号を与えた類と、類似した発想をみることができよう。

橙の符号を与えたものは、フグリ類である。形の類似から、「鰐丸」にみたてた命名である。そのほか、音形式がそれに通ずるものを含む。カサ類に次いで広い分布領域をもっているが、かなり、地域ごとのまとまりがみられる。東北中部、山形西部、福島中部、関東、岐阜およびその周辺、滋賀、中国東部、広島、四国中東部、九州北部などに分布しているほか、各地に点在している。[ɸu:guri, ɸuŋguri, ɸuŋguri, ɸuŋguri, ɸuŋguri, ɸūŋguri, ɸūŋguri, ɸuŋguri, ɸūŋguri] といったものを内容に含む HU(N)GURI, [hoguri, ɕo:guri, ho:guri, ho:guri, honŋuri, honguri, ɕonguri, ɕonguri] を含む HO(O)(N)GURI は、主として、岐阜・滋賀、中国東部、広島、徳島、愛媛東部、大分東部などに分布している。語頭子音が P になる PU(N)-GURI, PONGURI, PENGURI, PONGURA は、宮城と福島北部にみられるが、古音 [p] の残存ではなく、MACU(NO)PU(N)GURI, MACUPO(N)-GURI の分布に近接しているので、MACU と HU-





1つを [mat<sup>s</sup>ukasa], 1つを [mat<sup>s</sup>unomi] としているなど、この類の語についていくつかの注記がみられ、それぞれなにかしらの意味がありそうである。なお、質問文の中では、「松の実」ということばが使われている。MACU(NO)MO(N)MO(N)は、三重から和歌山にかけての海岸沿いに連続しているほか、福島・栃木、四国にも点在している。モモは「果実」の意味で全国でかなり広く用いられているので、それであろうが、語形としては赤の符号の BOBO にも近いものである。

緑の符号を与えたものは、一応カッコオ類とするが、さまざまなものが含まれている。この類は、東北から沖縄まで散在している。このうち、長野に KAKKO(O), MACU(NO)KAKKO(O), MACU(NO)KANKO が、京都に KANKORO が、兵庫に KAPPOO が、広島に KANKANMACU, MACU(NO)KAKA(A), MACU(NO)KAPPO(O), KONGARASU などが、山口に KAK(K)E(E)RO(O), KOK(K)-ERA が、佐賀・長崎に MACUKOKKO(O), MACU(NO)KOPPOO が、沖縄に MAACINUKUUKUU, MACINAIKUUKUU がそれぞれ小さなまとまりをもっているほか、各地に点在している。島根・広島における「ありじごく」としてのカッポオと、形状などの類似からあるいは関連があらうかとも思われるし、凡例 KE-KERA から KOK(K)ERA までについては、中平解は「松ぼっくり」(『民間伝承246』)で「コッケラはコケラ、すなわちウロコのこと、松かさかウロコを重ねたように見えるところから来た名称であらう。……フランス語では魚のウロコは *écaille* というが、松かさなどのような硬果の果鱗も *écaille* という語で表わされる。」と述べているように、217 図「うろこ(鱗)」の地図が参考になりそうだし、主として西日本にみられる「木の削りくず」の意味のコケラともつながるものがある。

紺の符号を与えたものは、以上述べた類以外の、さまざまな語である。OGOSYO が新潟にみられ、それに接して [matsuwo(k)ofi] を内容とする MACUOKOSI がみられるし、また長野北部に MACUOKO がみられるので、それぞれつながりがある。佐賀・長崎に1地点ずつみられる MACUOKOSI は、[matsuwo(k)ofi, matsuoko:fi] を内容としている。凡例 CYOOZ-YA から CYOOZYAKKORO までは千葉にまとまっている。MIDORI, MACUNOMIDORI は、4725.92, 5597.78, 6494.08 の3地点にみられるもので、6494.08で

は「老人はミドリヒロイニイカンカなどと言った」という注があった。『全国方言辞典』にミドリは琉球で「新芽」、神奈川で「松の新芽」とあるが、これを誤答とすることはできない。近畿南部に TAWARA がみられる。このうち 6575.82 には「米俵に似ているから」という注があった。6613.97 (山梨), 6623.28 (山梨), 6623.53 (静岡) の KI-(N)ZIN(O)KO の内容は [kidʒinʲko, kinʲikko, kinʲ-inoko] であるが、静岡で使われている「人形遊び」の意味のキンジロゴトと関連があるとすれば、子どもの遊び具として用いられた「まつかさ」についての名称であらう。

地図を大観すると、いくつかの大きな語類のうち、桃の符号のチンチロ類以外は、全国的なひろがりをもって分布している。せまい地域では、たとえば長野では茶のマツダング類のほうが緑の符号のカッコオ類より分布の上から古そうだと見える。また、橙のフグリ類と草の「実」の意味をもつ類とは、全国的に分布の接している地域が多いので、関連がありそうだとみられる。しかし、全国的に広い領域をもつ大きな2つの語類、すなわちカサ類とフグリ類だけをとり出してみると、その歴史的関係は単純にはきめがたい。文献ではマツカサが『拾遺和歌集』にすでにみられるのに対して、マツフグリは『書言字考節用集』、『醒睡笑』など比較的新しくあらわれるようである。しかし、それがただちにこの2つの語類の新旧をきめる有力な手がかりとなるかどうか疑わしい。マツカサが文章語であるのに対して、マツフグリはフグリの庶民的な発想から、古くからの口語的地位にあったという考えもありうるからである。今後、このような文語と口語との関係、マツカサのカサの語原意識、フグリなどの意味範囲とその歴史、カサ類・フグリ類をとりまくそれ以外の語類の歴史など、地域ごとにさらにくわしく調査してみることが必要であらう。

## 248. たけ(竹)

非常に単純な地図なので紺一色で示した。なお、この項目は後期調査にあたって打ち切ったので、調査地点はややすくない。

凡例で、TAKE から DĒĒ まではタケの音変種、または、その派生形であるから、まったく別種の語形は凡例最後の SASA のみということになる。

この、SASA は兵庫、広島、香川・愛媛、福岡・佐賀にみられるものであるが、単用は広島の1地点のみで

あって、他はすべて TAKE との併用である。このうち、注記のあるものを示せば次の通り。

6473.65<葉のついた物はササ、葉を落としたら竹>、6485.82(同席者は絵を見て、「葉のついたままならばササであり、ササヤブなどとも言う。また、葉枝を取ったものがタケである」と答えた。しかし、孟宗、真竹のような大きなものについては言わないと思う)、6487.66<ササは細い竹の葉のあるままのものである>、6489.27<葉がついているのは高さ3間もあってもササ>、6494.08<タケは全体または幹だけ、ササは枝葉だけ>、7239.85、7249.35、7249.95、7331.41、7341.47、7350.21はすべて<ササは小さいもの、小さい竹>とあった。7420.91<ササは葉がついていたら。タケは切りとって葉をのけたもの一棒状のもの>。そのほか、地図上には示されていないが、6492.11に<ササヤブという言い方がある>、7404.12<細いものはササといい、その生えている所はササヤブという>などという注記もあった。

ササという一般に、熊笹のようなものを思い浮かべやすいが、七夕のものも笹だろうし、大高源吾の売るものも笹である。また、『総合日本民俗語彙』のササガミの挿図も、日本語地図の付図に似ているといえいえる。そしてそのササが、関西以西にしかみられないことには、詳しいことはわからないが、ちょっと興味がある。

タケの類のうち、派生形は、MACUTAKE 7382.58、KARADAGE 3733.22、4773.15のみであるが、注記がなく、よくわからない。総称を求めたのであるが、付図に影響されて種名が出たのかもしれない。

タケの音変種の分布地点を示せば、TAHE は千葉と大島に各1。TAGE は、北海道南部から新潟北部・関東東北部まで、信越国境付近、信飛国境(信州側)、福井・京都北部、薩摩半島南部にみられる。このうち1793.14、3777.86、5628.23、5782.79、5790.39では[taŋe]、5608.51では[taŋe]であったという。

TAKI は宮古・八重山諸島、TAI も2086.03(八重山)、TAGI も2072.20(八重山)にみられる。

DAKI は沖縄島およびその周辺(1231.88は[dak-i:]、RAKI は沖縄島に5地点みられる。DAHI は1233.61、DAI は1213.76の各1地点である。

DEHĒ は奄美大島およびその周辺に5地点(0237.84は[dehĒ:]、DĒHĒ は同所に3地点みられる。DE-E は奄美諸島に点々と5地点、DEĒ は奄美大島・徳之島に計7地点みられる。

総合すれば、タケのケの子音に変化してタへまたはタエになるのは、千葉、大島、琉球列島ということになり、これが有声化するの、いわゆる有声化地帯ということになる。また、ケの母音がIとなるのは与論島・沖縄島以西の琉球列島、タの子音がDとなるのは奄美諸島・沖縄島およびその付近に限られる。

タの子音がDとなる現象は、その地理的状況から、そう古いものではなさそうに思われる。

DEHĒ, DĒHĒ, DEE, DĒĒ は、奄美諸島のみにみられるものであるが、\*DAKĪ, \*DAHĪ, \*DAĪなどから変化したものであろう。このうち、DEHĒ, DĒHĒ は、むしろDĒĒ などから回帰した形かもしれない。

このタケ類の諸語形と、「竹」という文字の字音との関係については、論ずることをひかえたい。

なお、無回答は7659.53(八丈島)、0265.96、0276.50(徳之島)のみである。このうち八丈島のカードは白紙であり、もしかすると記入洩れかもしれない。徳之島のものは、あとでも記すように、総称がないのである。ほかに、その土地に竹が実在しないという注記のあった地点が3か所あった。3752.53、5644.24、5680.34。

また、<山竹しかない>4697.92、<ふつうの真竹、孟宗はなく、このタケは地竹をさしている>5617.85、<山竹がある>5624.85、<これは一付図のものは一つぼにわに植えるような竹だ>5636.49、<立派な竹なし>5671.68、などという注記があった。

さらに<付図はシノかな、孟宗にも見える>5679.86、<総称がない。gara とか de: とかの種類別の名はあるが。gara は大きい竹の方、de: は雑竹をいう>0265.96、0276.50などもあったことを付記しておこう。いったいに被調査者にとって、この付図はあまり評判がよくなかった。

## 249. とげ(裂片)一指にささる木や竹の細片—

## 250. とげ(刺・棘)—いばら・さんしょうなどのとげ—

249図、250図は関連する項目である。本解説ではまとめて述べることにする。

両図に共通したり類似した語形がかなり多くまた広く分布しているので、語形の分類も同じ基準によって行な

い、与えた符号の色・形を一貫させてある。なお、＜併用処理の原則＞はトゲに適用した。

両図を比較してみて、249図のほうが方言量が多く、したがって分布もやや複雑であるのに対して、250図は語種が少なく、語類ごとの分布領域もかなり明瞭であるといえよう。

符号に赤を与えたのがトゲ類である。この類は、両図ともきわめて類似した分布を示し、ほぼ東日本全域をおっており、さらに近畿以西の西日本にも散在している。ただ、249図で広く分布のみられる山梨・静岡・愛知に、250図ではその分布がきわめてまばらである。トゲ類のうちもっとも広い分布領域をもっている TOGE は、[toge, toʔe, toɡé, to<sup>h</sup>ge, tōge, toʔe, toɡé, toŋe, toŋé, toŋe, to<sup>h</sup>ŋe, to<sup>h</sup>ŋé] などの変種を含み、また、TOGI は[togi, toʔi, toʔi, toɡi, toɡi, tōgi, toʔi, tōgi, toŋi, toŋi, toŋ<sup>h</sup>i, toŋi, to<sup>h</sup>ŋi, tōŋi] などの変種を含んでいる。この TOGI は、TOGE と混在している地域が多いが、249図、250図を通して比較的まとまって分布している地域として、東北北部、新潟南部・群馬・長野などを指摘できる。249図の6453.31(広島)、250図の6413.10(鳥取)、6357.38(島根)の TOGA は、緑の符号を与えた IGA の分布に接しているので、それとのつながりがある。TUGYA は249図、250図両図の宮古諸島にみられるが、琉球でトゲ類がみられるのは、両図を通じこの地域のみである。249図6410.45(島根)の TOGUI, 6488.85(徳島)の TOGUSI は、その近くにクイ類が分布していることから、これとの関連が考えられるが、同形または類似形の、249図5569.99(岐阜)、6538.46(愛知)の TOGUSI, 6575.17(三重)の TOGISU, 6576.93(三重)の TOGISI, 4710.18(山形)の TOGAKUSU, 250図5588.02(岐阜)の TOGUSI などについては、それぞれの地点に近接してクイ類がみられないし、形態素がクシであるので、その関連については不明である。249図4609.25(山形)の TOGIBARI は、TOGI と SUGABARI の地点に接しているのでその混交形であろうし、250図 TOGEBARA から IBARANOTOGÉ までは、いずれもイバラ類の分布地域にあるので当然それらの混交形であろう。249図青森・秋田に数地点みられる KAC(C)YOGÉ, KAC-YOGI, KICCYOGI は、TOGI の分布にかこまれているので、TOGI の前部分に KAC(<カキ?), または KIC(<キリ?)をもつ語形かと思われるが、『全国

方言辞典』に採録されている、秋田県鹿角郡、岩手県九戸郡における「稲の殻。栗のいが。」のカッチャも参考になろう。249図5569.02(岐阜)の TOGERA は、SOGERA, SYOGERA の分布に接しているのでその類音牽引であろうか。

橙で示したソゲ類は、249図では、新潟・富山・石川・福井・岐阜・近畿北部・中国東部・四国・九州など主として西日本に広く分布しているが、250図では、SOGÉ が5538.33(富山)、6458.26(兵庫)、6465.07(岡山)、6508.36(岐阜)、6511.33(京都)、6511.49(京都)、6512.02(福井)、6516.85(岐阜)、6521.94(京都)、6542.32(京都)、6551.52(兵庫)に、SONGUI が7367.49(大分)に、SONKUI が7365.51(大分)にそれぞれ点在しているにすぎない。ソゲ類は、249図でみるとクイ類(桃)の分布とかなり重なっている。中にはSONGUI, SONKUI などのように、クイ類と関連をもつものもあろう。また、凡例 SOGERA から SOGGIRI までのなかには、空で示したイバラ類と相互に関連しあっているものもあろう。249図 SUGI が1867.15(北海道)に1地点みられるが、被調査者の両親が空の符号の SUGIBARI のみられる秋田出身なので、それに由来するものであろう。

桃で示したクイ類は、249図で富山・石川、兵庫・鳥取・島根、四国、九州中東部など、主として西日本に比較的まばらに分布しているほか、佐渡(4644.10)、三宅(6697.49)、八丈(7659.51)等にもみられる。それに対して、250図では、中国東部・四国北部・九州東南部などにかなりまとまって分布しているほか、奄美(0228.96)、沖縄本島(1241.49, 1241.96, 1242.72)にもみられる。クイ類のうち両図を通じてもっとも広い分布を示す KUI は「杭」と同原の表現と考えられるが、単独または語末に KI, GI をもつ語形は、あるいは「木」に通じるものも含まれているかもしれない。249図の KUGI 7342.76 は、ソゲ類の SONKUGI 7365.25 とともに、「釘」の類推もあろうか。250図の KUIDARA 6422.16, KUUTARA 6421.79 は、それに接して KATARA, KATARI があることから、それらとの関連が考えられよう。249図の KUIDORO 7396.16 も、語形の類似からは同類のように思われるが、分布上地点が離れているところに問題があろう。

空を与えたイバラ類には、さまざまな変種が含まれているし、他の語類となんらかの関連があろうと思われるもの——たとえば、ソゲ類の SOGERA や、紺で示し

た SOPPERA とイバラ類の SOBERA —— なども含まれているが、符号の形によってその近似性を示していた。この類は、結局、語の後部分に BARA, BARI, BERA およびその変種を含むものである。249 図でみると、いくつかのまとまりを示す分布がみられる。秋田およびその周辺に SUGABARI, SUGIBARI, KIBARI が、富山・石川およびその周辺に KIBARI, HARI などが、福井南部から滋賀にかけて SUIBARA が、南近畿に SAKUBARI, S(Y)AKUBA などが、中国西部から九州北部につながるまとまりに SUBARI, SI(I)BARI, SU(I)BARI, SOBERA などが、そして四国南部に BARA が、長崎・対馬のまとまりに SI(I)BARI, SU(I)BARI が、それぞれまとまって分布しているし、また、静岡、三宅・八丈にも BARA の小分布がみられる。それに対して 250 図では、長野南部を除く中部・近畿・四国、それに伊豆諸島を含む広い領域と、秋田沿岸部を中心にした地域の小さな領域との 2 つのまとまった分布がみられるほか、北海道、関東、中国、九州に点在している。このうち、IBARA が近畿から北陸にかけて、BARA が秋田と中部と四国に、HARI が IBARA の分布と重なりながら、それよりも広い範囲の近畿から北陸にかけて、それぞれ分布している。つまり、この類では、「薔薇」と「針」とを同根のもの、すくなくとも密接な関係のあるものと考え、まとめたことになる。

茶で示したササクレ類には、さまざまなものが含まれている。250 図では SASIRA が 4704.45 (岩手) に 1 地点みられるだけであるのに対して、249 図にいくつかの分布のまとまりがみられる。宮城・秋田・山形・福島に SASAKURE, SOSOKURE などが、高知に SOSORA, SOSORO, SOSERA などが、佐賀・長崎・熊本に SYAARA, SYE(E)RA, HERA などが、それぞれまとまって分布している(最後の HERA などは、イバラ類の中の ~BERA と非常に近い)。それ以外の地域にも点在しているが、概して東日本には SASAKURE, SOSOKURE, およびその類形が、西日本には SASARA, SOSORA, SYE(E)RA, およびその類形が分布している。8305.73(宮崎)の SUIRA は SASARA, SASERA などの分布に近接しているためにササラ類としたが、イバラ類の SUIBARI, SI(I)BARI にも接しているのでこれらとも関連がありそうである。

緑で示したイゲ類は、249 図で IGE, HEGE, HEDA などが福岡・佐賀・長崎・熊本に、また、琉球に IZYA(A), IDA(A), INGI, GII, NZI, NGI などがそれぞれまとまって分布している。ただ HEDA などは、HERA (茶)と関係させるほうがよかったかもしれない。それ以外の地域では、IGA が 6436.33 (岡山)に、HEGE が 4703.18 (岩手), 4762.56 (宮城), 5791.23 (千葉), 8362.81 (鹿児島)に、HIGE が 5677.85 (埼玉), 9310.27 (口永良部)に、HEGO が 6626.71 (神奈川)に、HEGESO が 6576.56 (三重)に、EGOSO が 5537.99 (富山)に、それぞれみられる。250 図では、IGA が中国・九州東部に、IGI が中国西部に、IGE が九州中西部に、それぞれ分布しているし、NIGI(I)が奄美に、INGI, NZI が沖縄に、CI(I)GI, CHIZI などが琉球の宮古に、NGI が主として八重山にそれぞれまとまって分布している。

紺を与えたものは、以上述べた類以外のものであるが、そのうち、249 図の凡例のイバラ類につづけた SOPPERA から SO(O)SI までは、主として岩手・宮城、茨城・千葉に分布しているものである。この語類は、空で示したイバラ類に語形がきわめて類似しており、ことにこれらの語形の後部分の PERA はイバラ類のペラと同類とも考えられるので符号の形を似せた。しかし、イバラ類の SO~ は、中国における分布でみるように SU~, SUI~ に接しているのでそれと関連があると考えられるのに対して、SOPPERA などの SO~ は、茶符号で示したササクレ類の SASA~ または SOSO~ に隣接した地域に分布していて、それとの関連が考えられるので、この語類に紺を与え、ササクレ類ともつながる位置に凡例を置いた。

その他、紺で示したもので、あるひろがりをもって分布していたり、なんらかの説明が可能だと思われる語を特出してみる。249 図でみると、8304.66 (宮崎)の HUKKE, 6622.69 (静岡)の IRAKKAA, 6631.05 (静岡)の UROKO は、105 図「ふけ(雲脂)」, 217 図「うろこ(鱗)」との関連が考えられそうなのである。3619.58 (秋田), 3648.28 (秋田), 3760.33 (秋田)の KAK(K)URI, 5652.81 (長野)の KAKKUSI, 3774.61 (岩手)の KAKUSU は、『全国方言辞典』によればカクシが長野・新潟で「木の切株」の意味に使われているのでそれと関連があろうか。トゲ類にみられる KAC(C)YOGGE などの前部分と、同じくトゲ類の中のクシ(グシ)との混交ということ

も考えられる。MONO が愛知から三重にかけてと和歌山にそれぞれまとまって分布しているほか、北海道、富山・石川などかなり広く分布している。

250 図では、CIKKA(A)から ZIKAZIKA までは、6369.37, 6450.45, 6472.05, 6548.82, 6560.22, 7341.47, 7364.34 の西日本の 7 地点にみられるもので、あるいは擬態語であろうか。CUNO が愛知にまとまって 7 地点分布しているほか、北海道にも 1 地点 (1867.15) みられる。突起物としての「つの(角)」と関係あろうか。ERA, IRA が隠岐に 7 地点まとまっているが、105 図「ふけ(雲脂)」, 217 図「うろこ(鱗)」にみられる IRA と同類であろうし、これと関連して、249 図の茶で示した SE-(E)RA, HERA とのつながりもみるべきかもしれない。ITAITA は、近畿に 9 地点分布しているほか島根に 2 地点 (6339.86, 6411.66) みられる。ささったときの感覚であろうか。愛知 (6547.09, 6547.79) の GANTACI については、『全国方言辞典』によれば三重で「さるとりばら」の意味に使われているという。KEN, KENKEN が石川、大阪・兵庫・鳥取、中国・四国の瀬戸内海沿岸、大分・宮崎・鹿児島など主として海岸沿いにかなり広く分布しているし、KATARA が島根に 6 地点まとまっているほか KATARI が隠岐に 1 地点みられる。

以上、分布の概略を述べたが、この分布からそれぞれの語類の歴史をさぐることはかなりむずかしい。それはひとつには、語形の分類の仕方にいろいろの問題があることに起因しよう。もうひとつ、両図の間で、相互に関連しながらしかも意味内容において違いをもっているからである。

いま、2 枚の地図を重ね合わせてみると、東日本のほぼ全域、四国南部、九州北西部および沖縄・八重山で両図同語形が分布していること、東日本にトゲ類が、西日本のうちの国の中央部からもっとも離れた地域にイゲ類が分布していることが注目される。このことから、両図の「とげ」を区別せず同一の語を用いていた状態が古くあり、主として東日本でトゲが、西日本でイゲが用いられていたとも考えることができそうである。そして、そのあとにイバラ類などが分布し、次第に両図を区別する傾向が国の中央から行なわれはじめ、まったく異なった語を用いる地域、同語類のなかで両図を区別する語を用いる地域などが出てきたという大まかな見方をすることができかもしれない。さらに詳しい解釈、ソゲ類、クイ類、ササクレ類などを含めた各語類の歴史的関係、あるいは各表現相互の関連をみるためには、地域ごとの、また語類ごとの精密な両図の対比・検討が必要となる。

日本語地図⑤別冊

昭和47年3月©

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14

電話：(03) 900-3111(代)

Introduction  
to  
The Linguistic Atlas of Japan

— Interpretation of the Maps —

Vol. 5

The National Language Research Institute

TOKYO

1 9 7 2